THE CENTRAL REVIEW

中央公論

7-1919

七月號

第三十四年第七號　第三百六十一號

大正八年七月一日發行（毎月一回一日發行）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



ノベル賞金を得たる白耳義文豪
マーテルリンク著 文學士 栗原古城譯

十二版出來

死後は如何

附錄『交靈術とは何ぞや』

四六判總洋布製 全一冊
正價壹圓五十錢 郵稅十錢

人間の死後は絕滅か、永生か、將た『醒むる無きの睡眠』か、既成宗教は其權威を失し、近代化學は之に就て何等の說く所なし。而も闇黑の中一道の光明あり。果して如何。

泰西の新科學は既に靈魂の不滅を實證し、將に輪廻轉生の眞理を說かんとす

現代第一の文豪にして思想家たるマーテルリンクは、深く此不可思議なる心靈の現象に動かされ其神秘的冥想と、聰明なる理智との高潮に乘じて、此大問題を解決せんとしたる者卽ち此書也。譯者は將來世界を震撼すべき心靈運動の曉鐘として、本書を提供するものと云へり。附錄とせる『交靈術とは何ぞや』に至りては、眞に人界靈界に亙る一大驚異を說ける者にして、物質萬能の現代社會は之を讀んで將に大なる戰慄と畏怖とを禁じ得ざるべき也。

忽ち再版

ノベル賞金を得たる白耳義文豪
マーテルリンク著
文學士 栗原古城譯

靈智と運命

四六判總洋布製 全一冊
正價壹圓五拾錢
郵稅十錢

東京本郷片町 玄黃社
電話小石川一三九番
振替東京七九九五番

三十餘年の研鑽學界近時の一大偉觀！

フランス大革命史

文學博士 箕作元八先生著

全二卷前編發行

菊判天金七百頁挿畫三色版一、二色版二、光澤寫眞版十八、カット六十、地圖五葉

定價四圓五拾錢

送料 内地十八錢、臺樺四十錢 鮮支五十五錢

フランス大革命に胚胎せる世界改造の大精神は今や慘憺たる曠古の大戰を經て其總決算期に遶せり。戰後の世界到處に勃興し來れる民衆的運動の歷史的背景たり思想的基礎たるものはフランス大革命史也。自由、平等、博愛の三標語の新しき意義を以て叫ばるゝのみならず、かの民主主義といひ民族主義といひ將た文化主義、國家主義、軍國主義及社會主義、共產主義、無政府主義といふ、其他現今流行せる一切の思想一として根本を大革命に發せざるなく、大革命の史實に溯る事なくして戰後の新時代思想を諒解せんとするは徒らに影を追うて形を捉へんとするに等し。

箕作文學博士は當代史學の最高權威にして就中其大革命史及ナポレオン時代史に至りては實に畢生の努力を傾注せる最大得意の題目たり。之を帝國大學に講ずる事既に二十餘年、又屢〻外遊して親しく實地の討査を重ね、博士が一切の研究は畢竟一部の大革命史を完成する準備なりきといふを妨げず。博士今や其積年研究の全部を擧げて國民の前に提供し、此世界に亘れる生活と思想空前の一大變轉時代に際し、的確にして徹底せる知識と判斷の資料たらしめんとす。若夫れ絢爛にして明快、情理並到れる博士獨得の史筆は此歷史ありて以來最も光彩に富み波瀾重疊せる一大戲曲を描いて情景活躍、宛ら巧妙なる傳奇小說を讀むの思あらしむ。蓋し學界近時の一大偉觀にして、職業と階級の如何に係らず、近時最も意義ある國民的讀物として普く之を推奬するに憚らざるなり。

東京神田 冨山房 振替一〇五



中央公論第卅四年七月號目次

▼公論

▼說苑



新舊東京府知事と現東京市長

▼時論

《創作》


ONOTO
ORION
ALBION



CONCERT AUX TUILERIES,

BY E. MANET.

漢文註釋全書

東京帝國大學助教授文學士 鹽谷溫先生著 ■最新刊■

第六篇

唐詩三百首

定價 壹圓九拾錢 送料金拾貳錢

△四六判新形七百五十頁總クロース天金函入美本寫眞版口繪及挿畫入▽

『唐詩三百首』は乾隆中蘅塘退士の撰する所にして、神韻格調兩ら偏癈せず、加ふるに初唐・中唐・晩唐に亘り、遍く名篇傑作を網羅して遺す所なく、實に**支那文學の精華**、東洋第一の詩篇たり。併も那人の習慣『唐詩選』を偏重して、此書の價値を知るもの少し。著者玆に慨あり之を釋義講解せらる。叙說五十餘頁、先づ支那語の特質を說いて唐の詩風に及び、次に本文に入り、**字義・大意・講義・餘論**の四項を分ちて三百首を講述すること最懇切、加ふるに卷頭に**蘇州寒山寺碑石文**、**文晁筆摩詰彈琴圖**を口繪とし、卷中には、本文に關係ある故蹟名勝の寫眞數十個を收めたれば、本文と相俟ちて無限の興趣を呼ぶに足るべく、實に愛詩家無上の伴侶たり。綠蔭淸風の裡、此の好詩集を繙かれよ。

三島博士著 **論語講義** 一圓五拾錢（送料八錢）

岡田、佐久兩教授著 **本朝名家詩文** 一圓五拾錢（送料八錢）

土屋教授著 **蘇詩選詳解** 一圓拾錢（送料八錢）

細田教授著 **文章軌範詳說** 貳圓（送料十二錢）

林博士著 **書經講義** 貳圓五拾錢（送料十二錢）

小柳教授著 **韓非子講義** 近刊

（前付二の二）

發兌 東京市神田區西小川町 **明治出版社** 電話本局三七八〇番 振替東京二五七〇番

醫學博士 額田豐先生新著

安價節約 新生活法

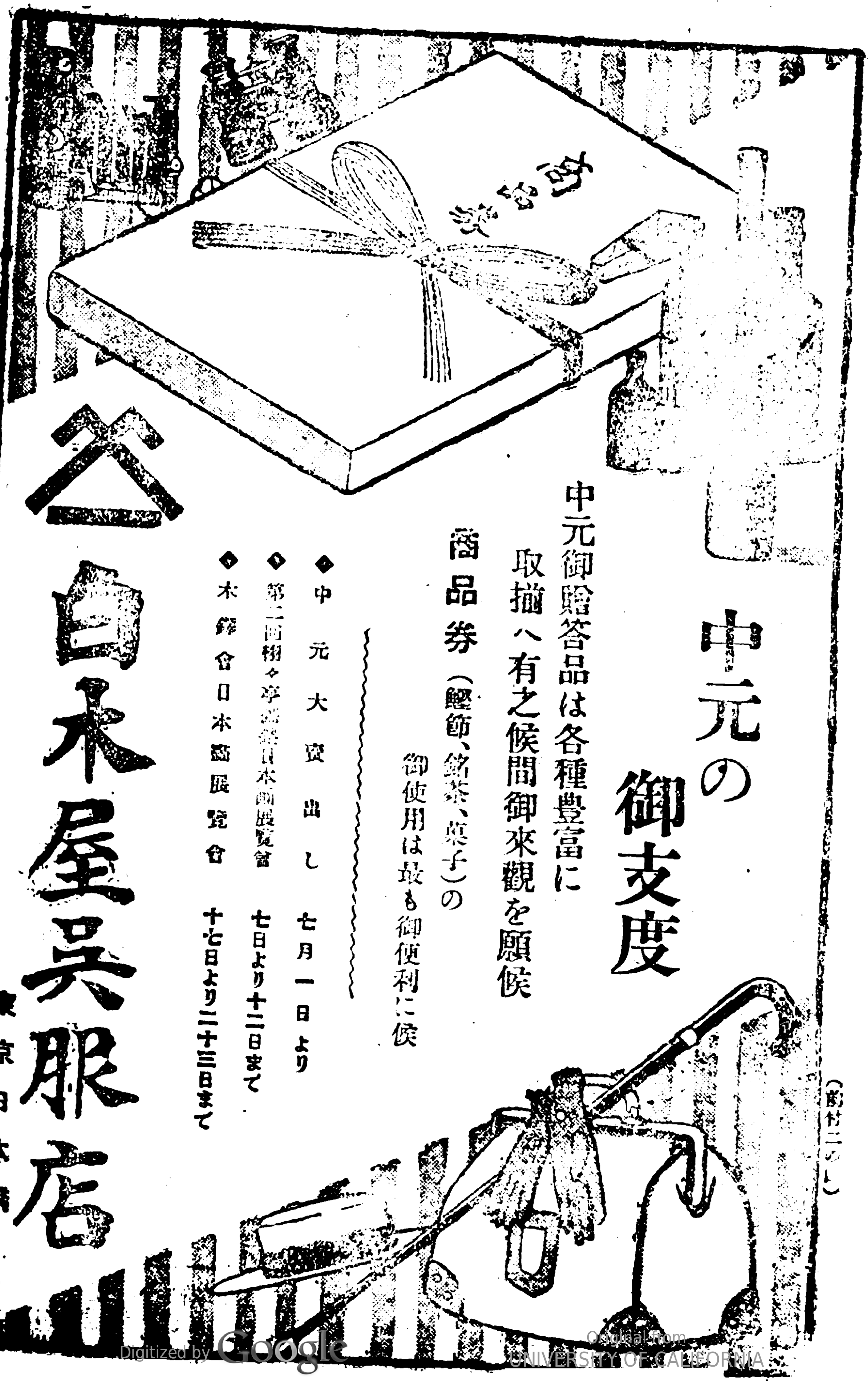
定價壹圓三十錢
郵稅六錢

稀有の物貨騰貴は來り果然！萬人の視聽は此の問題に集中せり！

食料問題を始めとして諸種生活の改造は今日の急務也。宜なるかな諸種の研究の續々として發表せらるるや。斯界に盛名ある著者、玆に多年の蘊蓄を傾け、新學說新事情に照して食品の經濟を說き、榮養を論じ、更に衣服問題、住居問題に及ぶ。食料問題を研究せんとする識者、實際に生活を改善し健康と幸福とを增進せんとする人、安價なる主食品の調理法と安價なる副食物の獻立を知らんとする人に薦む。

著者	書名	定價	送料	版數
島崎藤村	海へ	一三〇	一〇	七
夏目漱石	縮刷 社會と自分	一五〇	八	一六
榊保三郎	性慾研究と精神分析學	二〇〇	一二	八
河上肇	祖國を顧みて	一〇〇	八	一一
浮田和民	生活戰術	一五〇	六	六
内ヶ崎作三郎	リンコルン	二〇〇	一四	二
細貝正邦	易の原理と其應用	一三〇	八	四
同	經濟記事の讀み方	一〇〇	六	二十七

東京京橋南紺屋町十二番地 □ 實業之日本社發行 □ 振替口座東京三二六番


中元の御支度
中元御贈答品は各種豊富に取揃へ有之候間御來觀を願候
商品券（鰹節、銘茶、菓子）の御使用は最も御便利に候
◆中元大賣出し 七月一日より
◆第二回桝々亭當選日本畫展覧會 七日より十二日まで
◆木彫會日本畫展覧會 十七日より二十三日まで
白木屋呉服店
東京日本橋

（前付二の七）

狂亂せる支那膺懲論

近頃、學者、軍人、記者等の一部の間に、外務當局を鞭韃して武斷的對支外交の措置に出づべきを、頻りに說き廻る連中があるといふ噂を耳にする。

顏觸れを見ると、又あの連中かと眞面目に相手にする氣にもなれぬが、念の爲に其主張する所を聞くに、曰く暴慢なる支那の排日的行動を膺懲すべし。曰く之等運動の黑幕たる米國をも序に敵として一泡吹かしてやるべし。曰く英國は印度が恐いから中立を守るに相違なく、爾餘の國々は口では何と云つても當分東洋にまで手が出せまいから、やるならば今が實に絕好の機會だと。

斯んな無謀な企ての、到底實現さるべき筋のものでないことは言ふまでもなく、之を說く連中だつて本氣の沙汰かどうかは分らない。只物價の高い今日、態々御腹をすかして騷ぎ廻るに就ては、他に何等かの思惑があるに相違ないと觀るのも一つの解釋である。想像を逞うすれば次の様な事でもあらうか。曰く斯くして兎に角戰爭氣分を民間に深め、動もすれば起らんとする軍備縮少論の鋒先を挫かんとするに在り。曰く排米熱を民間に高め、之を轉じて親米的＝彼等の斯く看做す所の＝民本主義者の社會的壓迫に利用せんとするに在り。又曰く排日運動の膺懲論をば巧に轉用して、支那政府の自ら爲す所の武斷的取締を援助すべしとの國民的輿論を作り、原內閣の方針をマンマと切り崩して、再び寺內時代の援段政策に歸らんとするに在りと。

何れにしても、國民の疑惑の眼は直に軍閥方面へ飛ぶ。飛んだ迷惑だと彼等の知らぬ氣の顏が想ひやられる。噂の火元の孰れに在りやは暫く措く。只斯んな無謀な運動の少しでも娑婆に存在を許さるゝのは、必竟多數國民の頭の中に「あんな場合には癖になるから十分威壓を加へなければならぬ」との考が潜んで居るからである。我々は第一に此謬想より醒めねばならぬ。

去ればとて、支那人の暴行に對する自衛の策は決して等閑に附してはならぬ。我々の正當なる利權の飽くまで擁護に努むべきは言ふまでもない。

中央公論



第卅四年第七號
七月號
第三百七十一號

國民の解放は唯一の活路

中野正剛

一

現實は何時も思想に先だつて進む、既に空虛となつた思想は、新しき現實の背後から引摺られて行く。輓近、科學の應用は殆んど人間世界を一變した。今まで不可能と信ぜられてゐた事が、甚だ容易く出來る。そのどれ丈けの事が出來るかは、科學を應用して新しい現實を創り出した人間その者が、想像し得ない程であつた。現代人類の企て及ぶべき活動の範圍は、現代人が想像するより遙かに偉大であつた。所謂る識者なるものも、自分では進んだ考を持つて居ると信じながら、實際は現實が許すよりもずツと窮屈な小天地の中に跼蹐してゐた。こんな風で大戰以前の思想は、現實よりも後れてゐた。然るに大戰亂は端なくも自覺せざる列國の國民をして、既に自ら具備する力のある限りを盡くさしめ

た。列國は困難に踏み堪へて見て、案外自分の力が限りなく出るのに驚いた。後れてゐた思想は、此の現實の試用によつて覺醒させられねばならなくなつた。先づ自惚れてゐた獨逸さへ、四年半の久しきに亘つて、世界と鎬を削り得ようとは思はなかつた。英國はとても參戰しまい、白耳義を突破して巴里を陷るゝは、數週間の問題である、勝ち誇つた兵を回らして、露西亞を一蹴する、波蘭、芬蘭、波羅的三州、ウクライナ等は、露西亞の專制に反抗して蹶起する、斯麽な調子で獨逸は容易く歐洲大陸の覇權を收める。此の覇權を基礎として、第二の競爭に着手する。『獨逸の將來は海に在り』と絶叫して、英吉利の海上權力に挑み、その世界的覇權を叩き落すといふのが、獨逸世界政策の筋書であつた。之れは實力を過大に見積つてゐたやうにも見ゆるが、事實は問題を容易く考へた丈で、自分ながら計畫が齟齬して後、あれ丈け久しきに亘つて驚くべき實力を發揮し得ようとは思はなかつた。自國の實力を誤算したのはまだ好いが、英米の實力を見縊るに至つて、その誤算は致命的であつた。英國は海軍國だ、海賊的野心と吝嗇的打算の外、何物もない、よもや參戰はしまい、參戰したとて打算に驅られ、よもや踏み込んでは佛蘭西を援けまい、踏み込まうとしたとて、海中の大鯨、陸に上つたら夫程の働きも出來まい、と見當を付けたのが失敗の第一着である。米國に對しては未だ未だ甚しき見當違ひをしてゐた、米國が參戰しようと思へば、問題の中心になつたサブマリン戰爭にも、手加減をしたら、あれ程喧嘩腰に米國に挑まなかつたであらう。愈よ參戰するに至つても、未だ亞米利加を見縊つて居つた、どう世陸兵など大西洋を横切つて出て來る筈はない、來た所で程の知れたものである、と思つてゐた。然るに英國も米國も獨逸の想像以上に力を出すことが出來た、否、英米自身もあれ程に力を出し得ようとは思はなかつた。英國も始初は海さへ押へて置けば大丈夫だ、陸戰は露西亞がやつて呉れる、例のステイム・ローラーが東普魯西、ガリシヤ方面から驅けて來て、伯林を期月の中に捲き潰すとは、彼の滅多に高慢をいはぬキツチナー元帥の揚言であつた。それにステイム・ローラーは、

獨逸の鐵槌に打ち碎かれて、滅茶々々に壞れた、破片が散亂して味方へ迷惑になつた。それにも拘らず英國は踏み堪へた、五百萬の陸軍を動かした、綏みかゝつた大帝國の箍を締め上げた、印度問題も愛蘭問題も苦しいながら持ち堪へた。之れ丈けやれようとは、情熱的經世家を除いては、英國人の夢にも思はなかつた所である。米國に至つては、最初打算を主として參戰した、打算を遂行するに國民の援助がいるので、例の[illegible]動から民衆の情熱に訴へるやうに、巧みに理想論を高調した。最初は疲れ切つた英佛の人民を渴仰させ、その勢ひで外交的勢力を世界に隈なく加へようといふので、二百萬、三百萬、五百萬、千萬、無數の兵を歐洲に繰り出す、『米國人は世界の何處にも行く、人民の虐げられたる所、正義人道の脅かされたる所、米國人は行きて之を救濟するに躊躇せず』など揚言したが、案外獨逸が弱らないので、最初振り出した不渡手形を仕拂はねばならぬ、大西洋を橫斷して二百萬の兵を送り、武器、彈藥、糧食を補給し得ようとは、米國人自身にも信じなかつたであらう。それに民衆の情熱を煽る政治家の揚言が、事實となつて現れたのは、獨逸人のみか、世界の驚異であつた。列國は是れまで敵の力を見縊つて居ると共に、自己の力を自覺して居なかつた、容易く考へた戰爭が死活の大問題となつて來たので、止むを得ず力の限りを盡くした。能力、科學、經濟、產業、總ての動員を行ひ、此の整理したる國力を以て外敵に當つて見た、而して案外出來ぬと信じてゐた事が、易々と出來たのに驚いた。人間の活動の範圍が、知らぬ間に非常に擴大せられて居るのに驚いた。初めて今日の國家は、五十年前の國家とは別物であつた事に氣が付いた。今日の人類は、五十年前の人類とは、可能力、思想力、總てに於いて異る者である事を自覺した。そこで自覺された新しき現實の上に、新しき思想が生まれねばならぬ。新しき活動が開始せられねばならぬ。講和會議に入るに先ちて、列國は既に此の準備が出來た、それに日本は舊態依然たる頭腦で、此の新しき現實の上に試みられたる世界改造の舞臺に參加した。時代錯誤の悲劇が演出されるのは、無理ならぬことである。

二

古い制度は殘存して居るが、それは發育した身體には身丈けが合はない舊衣裳である。外交は別して然りである。由來、大使を派遣する制度は、ルネッサンスに於いて始められた宗主權の觀念と同時に發達したのである。十五世紀に於ける佛蘭西のルイ十一世は、外國の宮廷に恒久的エゼントを派遣した最初の帝王とせられてゐる。その頃まで此のエゼントは一種のスパイと目せられて居つた、之れが大使の起原である。此の假裝せる宮廷の外臣は、常に敵意を以て外國の狀態を觀察し、報告してゐた、それが世の中が進むと共に、辭令の上だけでも親交の使節といふやうになり、國際的實生活の調和を計るべき役目を帶びるやうになつた。今日では往年、宮廷のスパイであつた舊衣裳を付けて、外交官で御座る杯とは言つて出られぬ次第である。什麼しても國民の實生活を反映し、國民的主張を提げて、外國と調和もし、折衝もしなければならぬ仕末となつた。それから外交の性質が變ると共に、その重大なる所以も益々加つて來た。最近、五十年間に於いて科學の應用は、特に交通機關の上にも現はれ、陸上の交通速度は十倍となり、海上の交通速度は五倍となつた。是れだけで見ても、世界は十分の一、五分の一に收縮したと同樣である。更に飛行機、無線電信、海底電信等を算中に置くと、世界は五分の一どころか、五十分の一にも百分の一にも收縮して居るのである。そこで國家と國家との接觸は、民衆にとりて從前のやうな他所事でない、直ちに實生活に影響するのである、國民の實生活は國際的に調和せられねばならぬ、コスモポリタンの思想は、國際的實生活の調和を見當に置いて居る。畢竟、人類は顏の色が違はうが、背丈けの大小が異らうが、過去の傳說が特別であらうが、將來は協力、調和すべくして、衝突、殺傷すべきでない。併し將來は兎も角、現在は國際的調和を欲すると共に、國民的立脚地を離れる傾向はない、世界に奉公するが爲めに、國民的自覺を必要とするとは、一般列國の主張である。之れが少し意地惡くなると、自國の基礎により列國を範疇

×

し、優秀なる我が民族の理想によつて、世界を按配するといふ傾向になる。獨逸が戰前にクルツールを以て世界を律せんとし、英國が紳士道を以て列國を指導せんとしたのは夫れである。今度、戰爭によりて人類活動の範圍が擴大せられ、世界の面積が五分の一にも十分の一にも收縮したことが、自覺せられてから、國家と國家との距離が近接し、國民と國民との了解が進められたのは事實である。そこで近接と了解との上に、調和が樹立せらねばならぬ、併し近接すればする程、了解すればする程、相互の間に、齟齬、撞着、衝突は益々激甚となる。則ち理想の大調和を現出する前に、現實の大排擠が先づ開始せられる。此の大排擠は、從前の如く盲目的爭鬪ではなく、敵を詳かにし味方を詳かにした後の自覺的爭鬪である。幻影の衝突ではなく、實生活の生存競爭である。世界の實狀を明白にせぬと、國民に奮發を促すことが出來ない。從前は『國家及び帝王は、爾の生命を要求す』といへば、國民は忠君愛國の情熱に驅られ、踴躍して戰爭に趨いたが、今はさうはいかぬ。何故に外國と戰爭せねばならぬか、といふことを明白にせねば、國民は蹶起せぬ、外、列國の事情を詳かにし、國家は斯くの如き脅威を受け、國民生活は斯くの如く危殆に瀕して居るといふことが明白にならねば、誰も生命を投げ出す者はない。從前とは反對に『國民の實生活は國家を要求す』といふことにならぬと、愛國心は生れて來ない。外交官は國民をして世界の那邊に立つかを了解せしめ、愛國心を新たなる基礎の上に置き、國民的情熱を外に向つて燃やすでなければ、此の大調和前の大排擠の間に立ち、世界の進運に貢献することは愚か、己れの足場さへ失ふのである。世界は人類の競爭であり、又調和である。世界人類の進運に後れ、舊時代の舊衣裳を着けた外交官などは、今日の人類とは大分距離ある異つた種族に屬する。此等の種族は人類競爭の間に押し落され、人類大調和の一員たる資格はない。戰爭は帝王一人で出來ぬやうに、外交は大臣や大使個人では出來ぬ。外、人類普遍の理想に共鳴し、内、國民實生活の情熱を喚起さねば、とても列國と折衝、按配、調和することは出來ぬ。デモクラシーの力、

は、國際的にも國内的にも働らく、デモクラシーには、公明正大、簡明直截でなくてはならぬ。直言は今までの外交には禁物であつたであらうが、今後の外交には唯一の長技である。外交談判は今までは裏の裏を探り合ふ掛引であつたであらうが、今後は國民の實生活と情熱とを曝け出して、列國のそれと按配する事が緊急である。直言は對手國の爲めに必要であるが、又た此の直言と直言の反響とを、國民に了解せしめる事は本國の爲に一層必要である。是れが新時代の外交舞臺に、內、人民を結束せしめ、外、列國を敬服せしむる唯一の手段である。

三

然るに日本の後れ方は什麼であるか。西園寺、牧野、珍田、伊集院、松井、孰れも舊時代、宮廷の外臣たりし其儘の衣裳を着けて居る。此等の使節が時勢に後れてゐる事は勿論、此等の使節を送つた政府がなつて居らぬ。更に斯麼政府と斯麼外交官とに自己の實生活を託し、安閑として他所事視して居る國民は、時代錯誤の國民である。此の時代錯誤の國民は、西園寺、牧野、珍田諸氏に對し、可なりの信用と尊敬とを持つてゐる。然るに西園寺侯は如何なる人物であるか。侯と交り深かりし故中江兆民はうまく批評して居る。『西園寺侯、氣宇高亮、識見宏遠にして、加ふるに聰明匹儔なし、但だ其の甚だ聰明にして、一切事に於いて、直ちに輙ち其の着落の處を透視するが爲めに、一も侯の好奇心を動かすに足る莫し、即ち此の侯や、好奇心ある莫し、是れ其の冷々然として、些の內熱なくして、其の丰采に接し、其の言語を聽く者をして、亦た皆な其の內熱を冷却し去らしむる所以也、云々』と。唯でさへ內熱のない人である、それが隠居して居るから益々甚しい、曰く國際聯盟、曰く民族自決、曰くデモクラシー、曰く經濟自由、曰く原料解放、曰く勞働問題、此等は西園寺侯の實生活と沒交渉である。往年、政界に游泳しながら、政治に對してさへ內熱を持たなかつた西園寺侯が、自己と縁もユカリもない國際壇場、幾多の新問題に些の內熱を喚起しないのは當然である。內熱なしの主

張は、演劇である、附燒刄である、それで切れる筈がない。折角、佛蘭西語は上手であつても、胸中に云ふべき何物をも有たないのが悲慘である。それなら牧野男は如何であるか。之れは温厚篤實の君子であるが、矢張り内地の政界にすら馳驅するに堪へぬ後備兵である、殊に未だ一回の實戰も經驗しない後備兵である。勉強家であるとしても、その勉强の結果を、奮闘的生活の基礎としようとも思はない人物である。内地では大久保甲東の子であり、男爵であり、外交調査委員であるから、世間でも尊重するが、他流試合と來ては無理である。此邊をウイルソン、ロイド・ジョージあたりと引つ組ますることは、現役の栃木山に年寄の世話役を當てるやうなものである。相撲がとれないとて憤るのは無理である。抑々土俵に引き出すのが殘酷である。珍田氏は西園寺、牧野兩氏とは違ひ現役である、我國大使中の名星として霞ケ關派の花形である、外國の事情にも通じ、言葉も巧みに、その上勉強家として傳へられて居る。併し全體時代を取り違へて居るから、老巧であればある程惡い、惡しく學ぶは學ばざるに如かずである。舊時代の外臣的外交官としては訓練を經たものであらうが、その訓練が却て現代の傾向と相添はぬ。列國も形式的の外交官では間に合はず、大統領、首相、外務大臣、然も奮闘的實力によつてその地位を贏ち得た政治家が鎬を削つて居る。その中に舊衣裳を着けて立つてゐては、抑々他との調子の合ひ樣がない。今日の外交は國民實生活の折衝である、政府や利害や一部階級の利益に囚はれて居る連中では務まらぬ、今日の我が政府や政府の任命した使節等は、國民の實生活と沒交涉である、彼等は國民の利害を考慮せずして自己を考慮する。假令國民を考慮しようとしても、正當に理解することが出來ない。『理解せられざる事物は、處置せられず』である。畢竟、古いから駄目である。古いとは何事であるか、形式に囚はれてゐる事を意味する、何故形式に囚はれるか、それは解放せられぬからである、徹底せぬからである。彼等の仲間にも一つの信仰がある、その信仰が舊國民としての信仰である、舊官僚としての信仰である、舊紳士閥としての信仰である、信仰ありて眞理を受

け入れる自由を有たなければ、その信仰は外套となる。山縣公のお邸にも西園寺侯の隠れ家にも、新思潮が齎らす眞理の風は遠慮なく訪れる。此の眞理が彼等の爲めにはテンから異端邪説である。露西亜の革命も、その現實の中には何程かの眞理がある、その眞理が彼等にとりて都合が悪いので、直く過激派といふ風に葬つて了ふ。勞働問題が起る、何だ、之れは、社會主義ぢやないか、といふ風に安値に片付けて了ふ。葬りもし、片付けても見たが、内々不安である。開闊なる信仰は眞理を受け入れることは出來ぬが、その眞理が實例となつて現れて來ると、その權威を感ぜずには居られない。そこで脅やかれたる信仰は、忽ち空虚となる、既に空虚となつた以上、口には豪さうなことを言つても、内々腰に浮いて了つて居る。それで本國では浮腰の信仰でも、理を非として押し通すことが出來る。そこに特權階級があり、紳士閥があり、黨閥がある。その上に座つて公爵とか伯爵とか云つて居れば、内心では不安ながら世間には無理が通用する。議會に於ける官僚の答辯がそれである。下から鐵砲を打つても通らぬやうな盾を廻らして居るので、無責任な態度で胡麻化して行ける。その特別地位を利用して、成るべく闇々しく行く者は、大臣としての貫禄があるといふことになる。日本で政治家的態度といへば、不得要領で鰻鯰で無責任であることである。そんなことで大臣様、公爵様と済まつて行けるが、他流試合となるとさうは行けぬ、外力は八百長でなく本氣である。列國の主張する眞理の背後には力の後援がある。その力を伴ふ主張を破らむと欲せば、此方にそれ以上の眞理と信ぜられる何物かがなくてはならぬ。問題が理智に落ちて來た時に、日本では洒落とか、恬淡とか、茶人風とか、妙な態度で他の内熱を消却する方法があるが、外國人に對しては、茶人風の應用は利かぬ。同じ茶でも牛乳を混ぜて飲む白人諸國では、大分内容があつて、柳に風では受け流せぬ。サミユエル、ゴムパースが、勞働者的信念を勞働者的情熱を以て高調し來る際、我が官僚風の答辯では胡麻化し切れぬ。濠洲のヒユースが、假令その品格は土方風でも、足踏み鳴らし、卓子打ち叩いて絶叫し來る時、我が大

臣風の貫祿と上品とでは受け堪へられない。實力の競爭である、情熱の衝突である。その情熱源泉たるべき信仰の角逐である。今日の信仰なるものは、無識の迷信ではなく、上下内外を詳かにし、實情に徹底した後の確信である。實情徹底せむと欲せば、囚はれてはならない。バートランド・ラッセルの所謂 to be filled with faith and yet open to truth であらねばならぬ。囚はれたる信仰は、眞理の爲めに脅かされる、脅かされたる信仰を以て、人の前に立つても、目に色彩がなく聲に張りがない。帝國の外交が振はないのはそれである。單に使節のみの事でない、國民が解放せられず、徹底せず、自信と義憤とを缺くからである。

四

日本人も元來はこれ程意久地なしではなかつた、維新の元勳として現在して居る人達にも、も少し桁の高い連中がある。大隈侯は大分年取られたが、尚其の俤だけは存して居る、議論が何時でも對手よりは一段上から出る。あれは兎に角胸中に自信があるからである。學問はどれだけ治めて居らるゝか分らぬが、內熱の源泉たるべき哲學があるといはねばならぬ。犬養、尾崎兩氏は近頃は兎も角、曾ては潑剌たる面目を示してゐた。行政的ではなく政治的であつた、事務的でなく思想的であつた、打算的でなく情熱的であつた。此等は解放せられたる明治維新及びその維新の空氣を幾分か味つた時代の產物である。大隈侯は胸中の誠意に於て人に疑はれるが、何處となく政治家の俤がある、あの位ゐの氣位は、列國と折衝する以上、最少限度としても必要である。維新唯一の哲人政治家西鄉南洲に至つては、今一層氣位が高かつた、南洲翁の隨筆を見ても、書翰を見ても、作詩を見ても、言ひ廻しは巧妙でないが、磅礴として大人格と大信念とを偲ばしむる何物かゞある。その氣位丈けでも英國のパークスなどを後へに瞠若たらしむることが出來た。英國のパークスは、その頃傍若無人の態度を以て、我が大官を威壓し、殆ど日本國民を野蠻人扱ひにしてゐた。ある場合、南洲

とパークスとが對談した、何か日本の事情に就て三國の了解を求めなければならぬ場合が起つたのである、道理上は南洲の方にあるので、道がのパークスも正面から反對は出來ない、そこで佛蘭西が如何なる考へを有つて居るか解らぬから云々と答へて、その場を胡麻化さうとした。畢竟り不得要領で別れる一段となつたが、南洲は別れ際に極めて平氣な調子で、『一寸とお伺ひしたい事があるが、教へては下さるまいか』というた。パークスは何氣なく質問を聞いたが、南洲は唐突に『甚だ付かぬことをお訊ねするやうであるが、若しか英國は佛蘭西の屬國ではなかつたでせうか』とやつた。高慢なるパークスは眞赤になつて怒つた、世界の强たる大英國を、佛蘭西の屬國か杯とは底事ぞと詰め掛けた。南洲は平氣なもの、『間違つて居つたら御免を蒙る、私も西洋の事情には精通してはゐないし、それに最前から貴國の御決心をお訊ねしたのに、英國は什麼するといふ御返事を賜はらずに、佛蘭西は什麼いふだらうと言ひ逝れられるので、ヒヨツとすると英國は佛蘭西の屬國ではなかつたかと思ひ浮べたまでの事である。それでなければない樣に、最少し確としたお話をして頂きたい』と、遣り返した。パークスも南洲の機智、膽略には痛く驚かされた。それから談判にも實が入るし、その後は大いに南洲を畏敬したとある。南洲は參議とか陸軍大將とかいふ役人ではなかつた。解放せられた竹村の吉であつた、野人南洲の胸裡には信念があつた、情熱があつた、哲學があつた、詩があつた。普通の役人とは調子が違つて居る、機智がある杯と感心するのは末である、大膽物に驚かず杯と賞めるのは僞式である、信念があるから事に當りて機智となつて發する。大理想があるから問題に當りて、微惜とも動かない。鈍感の大膽とは譯が違ふ。明治維新の志士功臣には、皆な多少此の佛がある、橋本景岳、吉田松陰、高杉晋作杯、孰れも理想があり情熱があり詩趣がある。明治維新は哲學であり、理想であり、情熱であり、詩歌である。日露戰爭は兵を動かすの規模からいへば、維新の戰亂よりは遙かに大きいが、情熱の溢るゝ所、詩趣の流露する所に至つては、維新の方が上である。明治維新は個人の理想、個

人の内熱が直ちに問題と觸接して居る、日露戰爭の際には、國家の組織が既に完成して居る、此の組織を通して、國民の力は目的の爲めに傾注せられた。固より四千餘萬の同胞が一致協力したことは、事實であるが、明治維新の如く國民中の識者が何等の組織によらず、自發的精神により、矢石の難を侵したのとは趣きが違ふ。日露戰爭以後、日本は敵國外患を失つた、外患に脅かさるゝことがないので、內政は苟且偷安でも間に合はぬ事はない、そこで國內の組織は對外能力を發揮する爲めに、國民各個の能力を發揮せしむるといふ方向には進まず、却つて國民の能力を犧牲に供しても、特權階級の地位を安全にすれば好いといふ方向に向けられた。そこで機會は人才の前に閉された。政界には活氣がなくなる、現存せる特權と妥協齊合することが、政治家成功の秘訣とせらるゝに至つた。斯くして反對すべき實力が苟合するので、特權階級は益々牢乎として拔くべからざる基礎を定むるに至つた。此の特權階級の壓力は、政界、經濟界、社交界に加へらるるので、國家全般が卑屈、萎靡、退嬰の醜態に陷つて來た。その中に月給取より經上つて大使となり大臣となる人は、一種の游泳術によりて特權階級の寵遇を得る人でなくてはならぬ。その寵遇を得た事その事が、實際的活動家として無能である證據である。西鄕、木戶、大久保の氣風は、大隈、伊藤、山縣に至つて一段降下し、此の伊藤系官僚、山縣系軍閥に取り立てられた役人や黨人が、天下の大事に與かるに至つて、國民的情熱は玆に全く閉鎖せらるゝに至つた。

五

今度世界雜局の眞只中に投げ出された日本は、維新の志士位の小さき手には荷負ひきれないのである、況んや當代人物の力量が著しく低下して、維新元勳等の秘書官風に過ぎないに至つてをやである。維新の際にも大業を成さむと欲せば、單に一藩の志士では駄目であつた、尠くとも日本全國を見渡し、朧ろ氣ながらも外來の大勢に應ずるの識見がなくてはならなかつた。生野の銀山で正義の旗揚げをして日本志士の魁と稱せられた平野國臣は、最初福岡藩の正義派であつ

た、然るに一朝京都に乘り出して、日本の現狀と世界の大勢とを觀取するに及び、眼界は豁然と變つた。同藩のものに向つて『如何が御因循被成候哉云々』の長文を寄せ、君臣は天地の大道、主從は後世の私事と喝破し、眼中藩侯なく幕府なく、直ちに日本を脊負つて立つの意氣込を示めした。彼の眼界は外、大勢に應じ、內、內政を刷新すべく、尠くとも日本大となつて居つた。否、朧ろ氣ながら世界の大勢より割り出した日本の經綸を胸中に藏するに至つたのである。今日、世界の大舞臺に乘り合しては、朧ろ氣ながらでは仕方がない、世界の形勢を手に取るが如く心得て居らねばならぬ、日々の問題は走馬燈の如く、泡沫の如く、出でては去り、現れては消ゆるので、一々此等を掌中に指すことは出來まい。併し尠くとも世界を流るゝ潮流の方向、各民族の心臟を鼓動せしむる血液の溫度は體得して居なければならぬ。世界大戰爭が生み出した大人物は、之れをカイゼル、レーニン、ロイド・ジョージ、ウイルソン、クレマンソー等に數へねばならぬ。カイゼルの世界政策は、試驗濟みとなつた、ロイド・ジョージ、ウィルソンは外交界の素人であり、世界の事情には暗かつた、併し本國にては奮鬪的政治家であり、自己の地位を絕えざる努力の上に建設した人間丈けあつて、頭腦に彈力があつた。國を提げて世界の活舞臺に乘り出し、俄か仕込ではあつたが、四年半に亘つて實物教育を受け、兎に角現實の試煉に耐へ來つた。そこに英米は獨逸より自由であるから、反對論も八釜敷い、油斷をすると自己の政治的足場まで攫はれて了ふ、虛僞の擧國一致を强制しても、國民は納得が出來ねば、空嘯いて問題にせぬ。折角ウイルソンが意氣込んで、大統領の現職に處りながら、前例を破つて太西洋を押し渡り、英佛伊三國の間に單身飛躍して居れば、上院では報告が足らぬとか、國民の了解を得て居らぬとか、種々の不平を露骨に並べ出す。上院議員のシヤーマン氏などは、ウイルソン氏が夫人を伴れて、物見遊山的空景氣を、臆面もなく新聞電報として送られては迷惑千萬である、米國の市民は戰場に曝露せられて居る、親愛なる子弟の消息が知りたいのだ、それに令夫人を伴うた御自慢話で混

線を壟斷せられては困つたものだ抔とやり出す。それから折角正義人道振りを發揮して、國際聯盟を高調して居ると、本國ではモンロー主義を聯盟案中に加入せぬならば、批准することは出來ぬ抔と騒ぎ出す。氣が氣でなく一と先づ馳せ歸つたウイルソンは、國民に實情を說明し、更に國民の希望を提げ、大言壯語して再び歐洲の活舞臺に乘り込むといふ意氣込である。最後に獨逸との手詰談判に、國論が再び沸騰したので、ウイルソンは又復た本國に走せ歸らねばならぬ。太西洋の怒濤も物かは、意氣込みながら米大陸と歐洲とを走せ廻るウイルソンの武者振りは、天晴れ大丈夫兒の俤を存して居る。今後、失敗するか、成功するか、未だ分らぬが、國民が遠慮なく主張を並べて大統領を難局に立たしむる所、大統領が内外の困難に洗練せられて、益々精力を傾注する所、此の空氣は確かに人物を出すに適して居る。英國も同樣である。アスキス、グレー外交で、勇斷一番、大戰に參加はしたが、アスキスの Wait and see は當てにならぬといつて、反對黨は遠慮なく攻擊する。一世の德望家、誠實家たりしキッチナー元帥でも、輿論の標的となつて、不名譽を忍ばねばならなかつた。其處に直截、明快、活潑、潑地のロイド・ジョージが躍り出し、新聞界の覇王ノースクリッフと手を携へて、時局の難に當つた武者振りは、寔とに雄々しきものであつた。大戰には捷ち、選擧には勝つ、一世を風靡する美風を示して居るかと思へば、勞働黨のヘンダーソンも、ロイド・ジョージの思ふ通りにはならぬ。そこで素早く勞働者の脈搏を調べ、直接に握手せんと欲すれば、今度は死灰再燃、自由黨がボツボツ頭を擡げ出す。アスキスは最近に至つて、自己の失勢原因となつた軍需問題を曝け出し、當時、タイムス紙及びロイド・ジョージと陰謀を廻らし、アスキス内閣及びキッチナー陸相を彈劾したフレンチ將軍の罪狀を糾明する。當時のフレンチ將軍が、キッチナー陸相に與へた私信まで發表して、軍需缺乏なる讒誣が、單に内閣を陷れむが爲めの術策に出でたといふ事を明言するといふ騒ぎである。その中にロイド・ジョージの爲に肝腎のお味方たりしノースクリッフが何かの行違ひて新聞紙を率ゐ

て背き去る。そこでロイド・ジョージは密かに御用紙として舊自由黨系のデーリー・クロニクル紙を買收する、御用記者ガービンに腕の撚りをかけて、オブザーバー紙上に絢爛の筆を驅らしむる、といふ混雜となつた。そこにストライキが始まる、勞働問題が難しい、是等の難問を切り拔くるのは、並大抵の事ではない。佛蘭西のクレマンソーは、國狀が國狀であり、佛蘭西の存立を確かにするといふことが、刻下の急務であるので、世界的思潮の波を打たせる事も出來ず、歐洲に亘る雄圖大略を出すことも不可能である。併し兎に角渾身の英氣を愛國的情熱に漲らし、勇戰健鬪、往々にして英米二國を後へに撐若せしむる所、確かに充實せる態度である。それでも解放せられたる佛蘭西の國論は、機に應じて勃發し、街頭に短銃を放つてクレマンソーを狙撃する無政府主義者を出すかと思へば、數十萬の勞働者が一時に同盟罷工をして、政府の施設に反對するといふ活劇を演ずる。此間に立ちて內治外交に處する政治家の苦心は並大抵でない。その啻ならぬ苦心の間に政治家の手腕は試驗せられる、經世家の頭腦は鍛練せられる。反對、贊成、多々益々議論が面倒となるにつれて、輿論のキメは益々細かくなる。そこで斯くの如き國狀の間に現れて來た政治家は、試驗濟みの政治家である。その政治家が提げて居る國論は、鍛練せられた國論である。空虛でない、充實して居る。彈力がある。壓力がある。之れに對抗するに、弛緩せる我國論、情實的に纏められた政府、此の國論を反映し、此の政府の任命したる我が使節を以てする時、勝敗の數、榮辱の運は既に決定して居るのである。

六

我國の守舊家、官僚、紳士閥が、最も唾棄する露西亞のレーニンも、解放の裡に鍛練せられた一人ではあるまいか。我が內田外相は一度レーニンと會見して大いに畏敬の念を生じた、何でもレーニン政府が公使幽閉事件で、列國外交團の怒りを買うた際であつた。列國大使公使が袂を聯ねてレーニンに迫つた。その際レーニンは穢ないバラックの中で

素撲な詰襟の洋服を着け、自身で電文を處理し、電話を聽取し、命令を發して居た。列國の使臣が言を厲しくして迫つても、微懼ともせぬ。某國の公使が、卓を叩いて演説を始めても、空吹く風と聞き流し、落付き拂つて所信を述べ、讓歩をしなければ妥協もしない、固より喧嘩腰にもならない、全く平然たる態度には、列國の使臣、皆な感服した相である。以來、内田外相はレーニンを人格者として畏敬するに至つたと傳へられて居る。感服したなら感服したで、その實情を説明し、我が國民をして正當に露國の中心勢力を了解せしむれば好いのである。内田子は歸朝の途、哈爾賓あたりでその所感の一端を洩らした。元老達は目を丸くして驚いた。そうなると内田子は日本の現代的桎梏の下にある官僚である、解放せられぬ不自由の役人的習癖がある、忽ち雰圍氣の壓迫に驚いて、大きな聲で話さなくなつた。内田子は一と先づ官を辭し、郷山に歸臥するの決心さへ起したと傳へられる。それならば眞一文字に所信に向つて奮鬪すれば好いのであるが、そこが帝國大學以來、窮屈な傳説に囚はれて居る一人で、何とも決心が付かぬ、折角の觀察も國民に徹底せしめずに了つた。レーニンは内田子が言ふやうに大膽不敵、微懼とも動かぬ漢子であらう、之れを日本の舊式豪傑風に解釋して、鈍感の沈勇と思つたなら大きな間違ひである、あれ丈けの理想を高調する漢子であるから、定めてセンシテイブな性格に相違ない。然るに彼には彼自身の理想がある、その理想は追放、虐待、流浪の間に洗練せられ、動かすべからざる自信となつて居るのである。命懸けで鍛へ上げて來た自信が、列國使節の聲の大小位で動搖する筈がない。此のレーニンの大膽不敵は、理想に敏感なるの致す所である。併しながら愈よ露西亞民族を預つて見ると、マルクス張りのコンミユニズムでは行けさうでなくなつた。獨逸と辛うじてプレスト・リトウスクの講和は結んだが、今度は英米の資本主義から苛められる。列國は露西亞内の異民族を煽動し、リアクショナリイを買收し、勝手なことをやり出す。民族自決はレーニン自身の標語であつたが、普遍的に通用せずして、片務的に強制せられてはやれ切れない。そこで此の

外來の壓迫を防ぐ爲めには、何としても國家的に結束せねばならぬ。感情を一掃し、能力に依りて人才を進むるの路を開かねばならぬ。軍隊も整理せねばならぬ、國家の防禦も考へねばならぬ、既に五十萬の訓練兵を有するに至つたとさへ傳へられて居る。英米は此の勢ひを見てとつて、大分レーニン政府に對する考が變つて來た。併し解放せられたる露西亞人は、却々レーニン政府に盲從しない、何だ、レーニンはコンミユニズムで立ちながら、最早資本家的國家組織の糟粕を嘗めむとしつゝあるではないか、それでは當初の理想を裏切るではないかといふ調子で、本當の新過激派が生まれて來さうである。斯くなると內に外に困難は益々增して來る、是れに踏み堪へ得るか否かゞ天よりレーニンに下して試金石である。此の內外の試金石に遭ひ、愈よ見事の地金を出すか如何かゞ今後の問題である。困難の多い所に人才は磨かれる、これは世界の實情である。

獨逸も今までは政治に干渉する世俗的の神樣があつたので、獨逸民族の能力は、十分發揮せられなかつた。然るに舊人物は舊組織と共に一掃せられた、エーベルト、シャイデマン、ランツアウ等は、解放せられたる獨逸の撰手として、現れて來た。戰敗の頽勢を提げて、戰勝の聯合諸國に苛め上げられながら、新しい獨逸の理想を高調して、列國の主張に應酬し、蹂躪せられたる使節の面皮を國民の前に曝して、新なる愛國的精神を獨逸國民の間に喚起さうと試みて居る。之れを見て一部の國民は、俄かに國歌を唱へて蹶起し、階級戰に一時屛息して、敵愾心の勃發とならむとする傾向を示した。然るに解放せられたる獨逸は舊時の獨逸ではない、政府萬能では何事も出來ない。國內には既に現內閣に反對し、一層過激なる政府が生まれはせぬかといふ風潮を呈して居る。政局が那邊に落ち付くか。外國との講和談判が如何に締結せられるるか。獨逸の前途は益々暗黑である。併し解放せられたる獨逸には、暗黑の裡に一道の光明がある。任務は甚だ重し、人才の活動は絕對に自由なり、是れ國民の意氣を恢宏すべき空氣ではないか、之れに英雄が出でず、人才

が出でなければ、獨逸は舊制度が試驗濟みになつたと同樣に、民族も亦た試驗濟みとなる譯である。

七

現代の國家は、國土の廣狹によつてその大小を決する譯にゆかぬ。この國土の中に在る國民性格の大小は、その國家の大小を決する基調である。固より一千萬にも足らぬやうな國民の數では、世界に立ちて何事も出來まい。されど五千萬以上の民衆を有する國家は、その國民の性格を偉大にすれば、敢て世界の文運を支配することも不可能でない。日本の如きは國民を解放し、自由意志を奔放せしめ、情熱を高調せしむれば、何物か外より來つてその發展の前途を遮り得るであらうか。それに現時、國運が外に蹉跌して居るに際して、この國運を盛り返すべき國民が、舊思想に蹈踏し、毫も開展、暢達の趣きを有して居らぬ。一體、日本人は對岸に支那、西伯利亞の大陸を控へ、印度、波斯、到る處に民族的同情を共鳴せしめて、活躍の大天地を開拓し得べき地位に處るに拘らず、其の理想は亞細亞大とすらなれず、封建時代その儘の小さい量見に囚はれて居る。而して人民の數が多い割合に處理すべき仕事の分量が尠いので、軈て勢力を浪費するが如き繁瑣なる習慣制度を樹立して居る。展けば以て世界を蓋ふべき大民族を、畳んで一小島裡に詰め込んで居るので、發達の工合が惡い。先づ政治的に見れば、此の民族を開放して、外に活躍せしむるの抱負がなく、小天地に安逸するを得れば好いといふ寸法に切り組まれて居る。それには國家の實質的價値は如何でも好い、特權階級が地位を保ち、民衆が屈從しさへすれば好い事となる。斯うなると國内丈けは無事安穩で、至極結構であるが、人才は現れず、元氣は銷沈し、國家の實質的價値は著しく減少する。此の國家は外力の壓迫に會へば、錙銖一觸に堪へずして、存在の意義を喪失するに至るのである。有名なマキヤベリーが羅馬史論中、アゼンス、スパルタ、ローマ興亡の由來を論じ、此の眞理を探り出して、長嘆息に堪へなかつた次第である。經濟的に見ても同樣である。國民が世界的に自覺し、各國の

實狀に徹底して、活潑潑地の活動を開始すると云ふ事になれば、正當なる活動の天地は、到る處に存在する。世界の老人間の前に頭を低うし、因循姑息、胡麻化し合ひをやつて居るやうなことは、意氣として耻かしい次第であるのみならず、打算として不徹底である。そんなエネルギーを非經濟的に浪費するよりは、經濟上の原則に從つて、有效に活動した方が、ずツと利得が多い譯である。然るに、政治も經濟も是れを世界大となすの意氣込がないから、有り餘つた國民のエネルギーを何とかして浪費せねばならぬこととなる。そこで大和民族の理想を世界に押し出すべき筈の政治家が、地方で胡麻化し合ひをやつたり、譯の解らぬ、妥協苟合政策で政權を維持すると云ふやうな事になる。經濟界であれば、渾身の英氣を傾注し、支那、西伯利亞、歐洲列國、到る處に新天地を開拓せねばならない實業家が、宮内省の役人に取り入つたり、墮落政治家の臺所を受け持つたり、何々男爵の前にお辭儀したりするやうな勢力濫費を餘儀なくされるに至るのである。英米の經濟的壓迫は我が國民の對外活動を拘束するの勢は見え出したが、世界は英米許りでない、獨逸、墺太利もあれば、露西亞もあり、巴爾幹諸國もある、英米の勢力の及ばぬ所は未だ却々多い。近時、我國の海運業が英米に挑戰せられて居る際に、國内に一億萬圓の資本を擁する國際汽船會社が企てられ、その汽船が主として地中海巴爾幹より和蘭、獨逸、丁抹、スカンデイナビヤ方面に活動する計畫であるといふのは、近來快心の事である。企業家の人物も知らず、算盤も當つて見ないから、前途の成敗は豫言することが出來ぬが、此の意氣込みを以て突進すれば、活動の天地は未だ〳〵我六千萬の人民の爲めに殘されて居る。思想を世界大とし、活動の天地を世界に求めるといふ風にならぬと、日本は何時までも、小康主義、情實主義の犧牲となる外はない。此の小天地の中に苟且偸安を事とするのみであれば、大人物は出來よう筈はない。稀に大人物が出來ると、泉水に呑舟の魚を入れると同樣、人物の爲めには不幸であり、社會の爲めには危險となるの外はない。世界には健鰭を掉ひ、大翼を搏つて、游泳翺翔する大魚猛禽がある、是等

と競爭せしむるに、泉水に養つた金魚や、樊籠に飼つた金糸雀を選手とするのは無理である。國民の前に活動の天地を開拓し、國民の思想を解放することが、國民を偉大にし、國家を偉大にする唯一の活路である。政治の要訣は民間に個人的創造力、活力、元氣を充實せしむるに在る。英國のエリザベス時代は正にそれであつた。冒險、詩歌、音樂、美術の精華は燦然として一時に妍を競うたのであつた。政治の眼目は、安全を希望するのではなくて、國家にも個人にも發展の機會を與ふるに在つた。機會の存する所に希望あり、希望に滿ちたる國民には元氣がある、此の元氣を抑へれば、戰前に於ける英佛の如き徵候が次第に甚しくなるのは當然である。英國も漸次ケチ臭き拜金宗に流れ、人生の活動を重要視せずして、過去の活動の蓄積に成る財貨を尊重し、一種の拜金宗は次第に國民思想を侵潤するの趣きがあつた。そこで結婚にも金が要り、政治家となるにも金が要り、高等教育を受くるにも金が要り、機會は漸く少數者の手にのみ壟斷せられ、努力によりて地位名望を開拓するの意氣込は漸く消耗しつゝあつた。デモクラシーの英國に、階級觀念が案外に盛んで、あれは紳士階級である、あれはコンモン・ピイプル・クラスである杯と仰々敷く話されて居つたのは、吾吾の最も不快に感じたとであつた。斯麼空氣の中からは、決してエリザベス時代のやうな天才も英雄も出て來ない、國民より天才、英雄を出さないやうな空氣では、その國は興隆の運に乘じて居るとはいはれない。之が一層甚しくなると戰前の佛蘭西である。佛蘭西の拜金宗は、一種異樣の形式をとつて進んだ、元氣、努力に訴へて前途を開拓せむと欲する勢がなく、それでも家族の富と地位とを維持せむとする希望が熾んな爲めに、勢ひ人口を制限することゝなる。子供の數が制限されるので、男子の生命は別して尊いこととなる、そこで家付の一人息子は冒險的活動を忌むに至るのは、當然の歸結である。斯くなると對外發展は絕對に駄目となる。對外發展が駄目となれば、外國の智識も入つて來ない、何程天才的國民でも、戶を立て廻して、その中に消極的歡樂を求めて居れば、國家も國民も頹廢するの外はない。此際に

獨逸の如き天惠薄少なる國土に居る民衆が、フリードリツヒ・リストの經濟論をその儘に、財を重んぜずして人を重んじ、蓄積せられたる財よりは、財を蓄積すべき人の努力を眼目とし、四邊より壓迫せられたる苦痛を、その儘跳ね返して、外に發展の活路を見出さむとしたから堪らない。獨逸も金錢崇拜は英佛に讓らず、隨分猶太人に似た國民とさへ言はれて居つたが、その金錢慾、その生活慾を國家と一身同體にし、國家を荷いで外に乘り出さうとしたのは、眞に目覺ましい勢であつた。獨逸立國の精神には缺陷もあつたであらうが、國民の活路を外に解放せむとした所に面白味がある。あの不自然な官僚主義で內政を固めながら、それでも割合に國民の元氣を涵養し得た理由は此處に在る。

八

日本は內に官僚政治の桎梏を脫して、國民を解放すると共に、此の勢ひを以て外に乘り出す準備をせねばならぬ。外交の大蹉跌は經濟的に政治的に、日本の前途に陰翳を投じて居る。之れを挽回せむとならば英雄を要する、人才を要する、國民各個が各がじゝ異れる方面に英雄となり、人才となるのが急務である。人才は樹木と同樣である。大いに成長するには、自由の天地と豐富なる養分とを要する。是れを與へむと欲せば、政治的に解放して活動の天地を廣くし、學術的に解放して思想の養分を豐かにする事が急務である。幕末、朱子學の弊風は一世を蠱毒し、世を擧げて今日の官僚風を長ぜしめた。そこで此の朱子學徒の中からは英才を現はさなかつた。熊澤蕃山、大鹽中齋、佐久間象山、西鄕南洲等は、皆な王陽明學に觸れ、一世から異端邪說を以て目せらるゝ系統の人物であつた。固より朱子學徒の中にも人才は現れた、併し此等は德川幕府に都合の好いやうに朱子學を攻究した御家樣の學者ではない。皆な當世に逆行する如き氣質を有つて居る。一體王陽明の生れた時代が、訓詁の學、詩文の學、徒々繁瑣にして學者は僅かに末節を持して、其間以治の桎梏の下に跼蹐してゐた際である。此の際に學者の官僚風を脫し、舊思想より免れ、解放せられたる天地に飛躍し

て、直ちに聖賢の域に闖入せむとしたのは王陽明である。そこで理義の調べ方からいへば、幾分粗雜な點もないではないが、その知る所、信ずる所、直ちに渾身の情熱となつて、勇往邁進せずんば止まざる所に面白味がある。停滯せる現狀を打破し、國民に活氣を與へ、元氣を鼓舞するには、此の傾向でなくてはならぬ。停滯せる日本には、尠くとも駻馬を要する。半ば理性化せられたる情熱――此の情熱が活動の源泉となり、事物に當つて新しき經驗を生じ、新しき經驗が實情徹底の因緣となり、實情の徹底は堅實なる思想の建設となる。是れが活動の原則であり、進歩の前提である。某學者は『理性に支配せられた感情の解放』が必要だと云つて居るが、全く理性に支配せられて居るか、如何かを確めるまで待てば、最うその感情は拘束を受けて居るので、それは解放でない。固より理を窮め、物に當り、精微なる所を究めて情熱の源泉としてなければならぬ事は、學者の工風として最も大切な點である。併し信念が情熱となつて發揮する所、姑息なる理性を喚起さぬことが、現代に活氣を添へる所以である。加之、高尙なる情熱、衝動を抑制すれば、下劣なる情熱、衝動となつて現はれる。舊時代の御殿女中は、萬事を形式づくめにして、一切の情熱と衝動との發露を許さなかつた。そこで最も下劣なる情熱は、彼等の間に涵養せられ、御殿女中といへば、陰險、卑屈、惡德の權化とまで見らるゝに至つた。情熱、衝動を解放し、當つて碎けて、實情に徹底せしめ、此の新しき經驗の中に進路を見出さしむることが最も肝要である。官僚教育は作法を以て元氣、精氣の上に逍ゝ傾向がある。有名なる英國のイートン學校やオクスフオード大學も、形式を重んじて學生に紳士風の烙印を押すに至つて、まるでゼシユイツト派の宗教學校と同じ樣な弊害を生じて來たといはれて居る。圭角と無作法とは、偉材に付き物である。理想、信念に發した情熱、衝動は、之れを抑制せずして誘導しなければならぬ。教育の眞諦は眞理を渴望するの欲求を起さしむるに在る。特殊の信條に盲從せしむる事ではない。益々思ひて益々疑ひ、人生の意義を廣大ならしめる事が必要である。情熱、衝動により、新

—— 國民の解放は唯一の活路 ——
“解放”の個人と國家

たなる經驗を踏き拓き、前人未發の眞理を發見することが青年の希望でなくてはならぬ。青年の冒險心は、修養の上にも、實社會の活動の上にも、政治上にも經濟上にも應用せられ、『恐怖なく而して希望ある進路』を辿らしむることが、社會に元氣を添ふる所以である。今日世界の大勢は實に空前の壯觀を極めて居る。理想の光、希望の色は、各民族の上に輝いて居る。而して當つて碎けて、今日の存在を脅かされない立場を踏み占めると共に、未來の希望に向つて、人類を引き摺り行かむとするのが今日の大勢である。總て國民生活は、階級的にも國際的にも調和せられ、世界は遂に安樂の天國と爲るべき運命を有つて居るであらう。併し今日の形勢では、未だ個人の完全なる發達の爲めに國家を要する。人類の向上の爲めに政治を要する。『君主及び國家は、爾の生命を要求す』といふ舊套語は、今日の文明人を動かすに足らぬが、『爾の生命の向上は、國家を要とす』との標語は、文明人に愛國心の源泉を授くる所以である。一たび國民を解放し、國家觀念、財産觀念、經濟觀念、總てを現在の生存に必要なるが如く、建設するでなければ、國家として發展の餘地なく、個人として向上の路はないのである。解放、經驗、而して後に眞理の發見は、我國として、亦た個人としての唯一の活路である。斯の如き國家と、斯の如き個人とは、如何なる難局に置かれても、其處に希望ありて恐怖なき自信を得ることが出來る。(バアトランド・ラツセルの社會改革の原理。デライスル・バアンスの國際道德論。フリイドリツヒ・リストの國家經濟論を讀む)

對支借款團問題と日支經濟關係

法學博士　堀江歸一

支那人の借款萬能病

「支那に財政なく、支那人に財政策の觀念なし」とは、余が一昨年北京に滯在して、支那の財政狀態を硏究し、又支那の所謂財政家に會談したる際に、第一に余の腦裡に刻せられたる印象なりき。蓋し財政に於ては之を擔當する當局者自ら或る經綸を藏して、一定計畫の下に、國家の經費と收入とを調節せざる可からず。然るに支那人の國家財政に臨むや、其態度は決して斯の如くならず、經費として各行政官廳の要求するものは、常に之を承認して、何等の拘束を施さず、之に對する收入を調達するの道は經費の增加するに隨て、困難の大なるものあるが如しと雖も、支那人は之に當るの方便として、外國借款を案出し、其實業借款たり、政治借款たると、將た又何國の債權者たり、何人の債主たるとを問はず、只管借款に依賴して、以て一時の安を愉まんとするもの丶如く、支那に於て財政の局面に當り、手腕卓越せりと稱せらる丶は、要するに外國に借款を計畫し、又之を成就する能力を有するの意に外ならず。支那の財政を救治するには、宜しく外國借款を中斷し、國家の經費は現在の民力の負擔に堪へ得る程度に限り、一方に內國の富源を開發する爲めに、流入し來る外國資本は之を自然の趨勢に任せて、徐に民力の發達を謀り、斯く發達したる民力と相對して、財政の規模を伸張するの外に、何等の策あるを知らず。余は前年北京に在るの日、屢々此事を支那朝野の有力者に勸告したれども、當時借款病の彼等の膏肓に入れるの深き、毫も今日に讓らず、外國借款を措いて、他に一の財政策なしと輕信し、盲斷するの趣あるを免かれざりき。

支那に對して經濟上殊に財政上の關係を有する諸國にして、眞に支那の財政革新事業を擔當し、之を成就する爲に、若干の資金を要する見込の確乎たる場合に、支那政府をして此程度の借款を起さしむる一方に、自國の資本家をして之に應ぜしむるものならんか、自他を利益する經濟的行爲なること、恰も國際

間の貿易が關係國に利益を及ぼすものゝ如く爲る可しと雖も、諸國が支那の借款に應ずるや、必ずしも支那と自國との共同的利益の爲めにするの念に出づるに非ず、或は自國内に於て運用するよりも、支那に於てする事の高率の利子を回收する道なるが爲めに、或は自國工業の存立に必要なる原料品の供給を確保するが爲めに、或は將來支那分割と云ふが如き危局の生じたる場合に、巨額の債權を擁することに依て、自國の權利を伸張するが爲めに、借款に應ずるものなるのみ。隨て借款に對して確乎たる担保物ありて、債權を保護するに足らんか、諸國は支那に於ける借款の要求に應ず可く、此以外に支那の利益の如きは、毫も顧慮する所に非ず、斯の如くにして借款の行はるゝと無限ならんか、支那は借款の爲めに、一時の財政的命脈を維持するとするも、遂に借款に依て、内國の利權を外國に奪取せられ、其富源を壟斷せらるゝに至らざるを得るか、將た又外國に支那財政監督若しくは支那國有財産共同管理の口實を與へ、國家の外形を存して、其内容を失うに至らざるを得るか、共に大なる疑問とせざる能はず。支那人の間に時に對外經濟上の關係に就て偏狹なる意見の行はるゝは、彼等の知識の蒙昧なるのみに出づるものと斷ずる能はず、其内に一道の眞理の存することを看取せざる可からざるなり。

對支借款團の利弊

若しも國際貿易上の關係に於て、或る一國に物資を供給する諸國が互に協定して、其國に供給す可き物資の數量を制限し、又諸國の内の一より供給す可き物資の種類を限定し、加ふるに供給獨占の地位に居ることを利用して、自由競爭の場合に於けるよりも、價格を高度に維持するの政策を施したらんには、世人は之を何と評す可きや。物資供給國が獨占權を弄して、物資需要國に臨み、法外なる價格を徴して、以て後者を苦しむるものとし、宜しく斯る獨占を打破して、物資の供給上に自由競爭を認め、洽く世界の民衆をして物資を利用するに豐富ならしむるの必要を唱道するに至る可し。然るに今日列國が資本の供給に就て、支那に對するや、實に前記の獨占方針に基き、支那に資本を供給する諸國の銀行は相集まりて、一の銀行團を組織し、支那の外國に要求する資本は必ず此團體を經由して、以て之を供給する一方に、銀行團自ら或る程度まで貸付金の保全に必要なる處置に出でんとす。此事たる、支那の如き財政紊亂し、政權中心點の動搖しつゝある國に對して、諸國が資本を貸與する場合に、諸國の間に自由競爭を試みるときは、競爭の劇しきに制せられて、如何なる弊害を醸すに至るや、測り知る可からざるの懸念に出でたるものなる可しと雖も、之を他の一面より云

んか、支那に對して資本を投入するに就ては、諸國の間に自ら其理由の異なるものあり、又支那に對する關係の地理的に、政治的に、將た又經濟的に同じからざるものあり、然るに總ての國を擧げて、一の借欵團を組織し、對支借欵の計畫は一に此借欵團を通じて、行ふことに依て、諸國の對支經濟的關係を一律に置かんとするが如き、果して妥當の處置なりとす可きか、將た又我國の如き支那に對して特殊の地位を占むる國に取つて、有利なる處置なりとす可きか、吾輩の年來一の疑問としたる所なり。

元來對支借欵團は始め英佛獨三國の銀行業者に依て組織せられ、後に北米合衆國の銀行業者、之に參加して、四國團と爲り、更に日露兩國銀行業者の參加することに依て、六國團と爲れり。固より各國の間に財力の相違あるを以て、借欵團に於ける各國の地位勢力は同列を以て、之を見る能はずと雖も、六國銀行團は對支借欵に就て、一時互に協調して、或る效果を擧ぐるを得たり。然るに大正二年合衆國に於ては現大統領ウヰルソン氏の下に、對支外交政策を一新するや、從來の如く合衆國自ら對支借欵團に加入するを以て、自然他の諸國と共に、支那の内政に干渉するの端緒を開くものなりとして、脫退することとしたり。當時の敎書に據り、合衆國が借欵團脫退の理由としたる所は「借欵條件中に時勢に遲れたる課税を含める一定の租税を擔保とするのみならず、外國人の之に關する管理法に就ても規定したり。斯の如きは支那行政權の獨立に干渉するものと認めらるゝを以て、行政部は假令合衆國が主動者たらざる場合に於ても、之に贊同するの要を認めず、又政府より資本家團體に對する借欵參加に附帶す可き責任は一旦事あるに臨み、支那の財政は固より、政治にまで立入りて、干渉を施すの程度に達するや測り難く、斯の如きは我國是に反するを以て、行政部は合衆國の銀行團に對し、借欵參加を要求することを拒絕したり」と云ふの諸點に外ならず。卽ち此宣言を一讀せんか、彼の濫に借欵團を組織して、對支投資を獨占壟斷せんとするものに、一大痛捧を加へたるの嫌なしとせず。然も合衆國の脫退は諸國の對支投資に大なる障害を來さず、六國團は合衆國の脫退に依て、五國團と爲り、更に歐洲開戰後獨逸の除外せられたる結果、四國團と爲り、殊に團中の英佛露三國は戰爭に忙殺せられて、對外投資を試みるの餘裕なく、對支投資は殆ど我國の獨擅場と爲れり。今日より之を見れば、此時こそ、我國が支那に於て優勢を占むるの點に於て、殆ど空前絕後なるの趣あり。支那人の慧敏なる、此般の事情を看取し、我國に幣制借欵を求め、又之を求むる條件として、我國に幣制改革顧問の派遣を請ひ、一に我國の歡心

を結ぶに忙はしかりき。

斯る狀勢に對して、英米兩國が意を安んずる能はざりしは論を俟たず。唯兩國共に戰時財政の急に應ずるに忙はしく殆ど對支放資を顧みるの餘裕を有せず、日本の對支借款に跋扈するの事實を憤慨しながら、尚ほ之を如何ともする能はざりき。然も昨今の如く、休戰條約成立し、戰時財政の經濟社會に加へたる壓迫の除却せらるゝや、合衆國の如き戰時巨額の正貨を諸外國より吸收し、正貨の貯藏高頗る多額に上れるを以て、之を處分するの必要に會したり。合衆國にして資本を放下する領域を求めんか、中米南米の如き、重要なるものにして、所謂汎亞米利加主義を實行するの見地に於て、閑却する能はずと雖も、同時に對支放資をも等閑視する能はざるの事情あり。蓋し合衆國にして東洋方面に經濟上の權勢を擴張するには、對支放資は最も必要の手段にして、此點に怠らんか、積年東洋に扶植したる經濟的權勢は何等の意義を爲さゞるを以てなり。随て內國に正貨の吸收せらるゝもの夥しく、對外放資の急を訴ふること漸く緊切なるや、合衆國の內部に於て、殊に對外的金融の計畫に着手せんとする銀行團の內部に於て、往年ウヰルソン大統領が對支借款團より自國の銀行を脫退せしめたるを以て、輕率なる政策なりとし、非難を加ふるの聲漸く高く、ウ氏にして此點に顧みるものなからんか。次回の大統領改選に於て、民主黨の勢力發展に大なる妨害を蒙る可き事實顯然たらんとするに至れり。然も往年堂堂たる宣言を發して、借款團を脫退したる體面より言はんか、ウ氏が借款團に復歸するには、大なる故障の存するあり、氏が如何なる口實を捉へて復歸の機會を作爲す可きやは一個の問題に屬したり。

借款團の改造

今や合衆國の國際間に於ける地位は著しく上進したり。是れ合衆國が戰時資力に於て、兵力に於て、共に聯合諸國に多大の援助を與へたる一方に聯合諸國亦今後經濟社會の復活を謀るに就て、合衆國より財力の供給　仰がざる可からざるの理由に基くものと認む可く、一時巴里に於ける講和會議の重大案件がウヰルソン氏一個の方寸に依て決せられんとするの勢を示したるが如き、一に合衆國金權の然らしめたるものなり。而してウヰルソン氏は此權勢を對支借款問題に利用せんとし、昨年來頻に從來の四國團と異なれる別個の借款團を組織し、合衆國の借款團復歸と云はず、借款團改造を機會として、自國其一員たらんことを計畫し、日英佛三國に提議したるが講和會議に於ける合衆國の權勢以上の如く、一方に英佛諸國の合衆國財力に依頼せんとする欲求亦上記の如く爲るが故に、合衆國の主張に對し、

は英國は直に應諾し、日本も亦主義として贊成を表明するに至れること、既に世人の知悉する所の如し。

借欵團改造に臨んで、合衆國の提議したる要件は(一)新團體は政治借欵のみならず、經濟借欵に就ても亦協同することと(二)諸國の有する借欵優先權は支那に交附するか、又は新借欵に讓渡すことの二點に外ならず。斯くて合衆國は最も簡單に借欵團復歸問題を解決し、今後他の諸國と同等の地歩に立ちて、支那に資金を供給するの便宜を供へ、又實際には其財力の豐富なるに乘じて、他の諸國に對して優先的地位を占むるの準備を整うるに至れり。斯く容易に借欵團を改造し、合衆國自ら之に割込みて、往年の脫退以來蒙れる不利益を免かるるを得るは、合衆國として大なる成功なりとす可く、自國銀行團の一部を代表して、彼のアボット氏の北京其他に來遊するや、支那人は氏を遇するに一個の財神を以てし、歡迎厚遇到らざるなく、氏亦此機運を提へて、ラインシュ公使と共に將來の幣制借欵援助、幣制改革顧問の派遣等に就て、北京政府に交涉する所ありたりと傳へらる。新借欵團の未だ正式に成立せざるの時に、支那人の合衆國に對する感情斯の如きものありとすれば、愈々借欵團成立し、又合衆國が財力に於て借欵團の牛耳を握らんとする將來に於て、其勢力の伸張す可きは之を想像するに難からず。歐洲戰爭酣なるに當り、日本獨り支那に對して、資本供給の任に當るの地位に居るや、日支親善なる言辭の支那人間に傳唱せらるゝもの甚だ盛にして、余の如き當時偶々北京に客遊し、種々の宴席に於て、此語を繰返されて、其煩に堪へざるものありき。支那人の所謂親善なるものは單に資本融通の便を供ふる國に向つて、其之を供ふる間に唱へらるゝに止まり、俚俗に言ふ「金の切目が緣の切目」と爲るに外ならず。當時曹汝霖陸宗輿等親日主義者が支那政界に重用せられたるは、背後に日本の資力を控へたるの結果と見る可く、梁啓超、林長民、湯化龍等が日本に親しまんとしたるもの亦日本の財力に依賴するの必要に出でたるものとす可く、日本の對支借欵政策一變して、曹以下の輩が勢力を失墜し、梁以下の輩が親米主義者に急變せんとするもの亦偶然に非ざるなり。

日本と借欵團加入の利害

日本が合衆國の提議を容れて、借欵團に加入するの方針に決したるは、如何なる理由に基くものなるか。思ふに當局者は假に日本が借欵團に加入せざる場合に、諸外國と相對抗し、又相競爭して、對支投資に從ふ困難の大なるを恐れて、加入に贊成したるものならんか。即ち我國は資力に乏しく、又金利高率なるを以て、合衆國の如き、資金豐富にして、金利の低廉なる國

と對支投資に於て競爭するの不可能なるを信じ、寧ろ共同借款の形式に於て日本自ら合衆國の資力を利用するを便利なりとしたるものなる可しと雖も、日本は地理上に於て、支那に對して他國の有せざる長所を有し、隨て對支企業を計畫する點に就て、支那人を操縱し、又彼等を使役する點に就て、他國人の企及す可からざる優越點を有することを知らざる可からず。合衆國に於て時々對支經濟關係に就て、日米兩國の聯合を必要とする所說の主張せらるゝが如き、要するに日本人に上記の長所あるが故に外ならず、既に此長所ある以上は、自由放資の下に於て、日本自ら諸外國に對抗して、對支企業に當り、我國の金利の不廉、資本供給の匱乏より生ずる缺點を補うを得べき道理なるに、一意合衆國に頼らざる可からざるが如き考を以て、將來の行動を拘束せらるゝの端を開きたるは、我國に取つて、得策なりとする能はず。

我國が滿洲蒙古に於て、優越權を有するは、當然の事實なり。此優越權を利用して、滿洲蒙古の富源を開發し、我國工業の存立に必要なる原料品を支那に供給せしむるは、日支經濟關係の將來に歸着す可き要點なり。即ち我國は富源開發に必要なる資本を支那に供給し、之に對して支拂はる可き利子、企業に依て回收せらる可き收益に代つて、工業原料品を、我國に輸入するは、我國工業の原料品供給を確保するの道なると共に、日本の資力に依て、支那の經濟を繁榮に導き、又支那人の生活を豐富ならしむる所以なり。然るに新借款團の條件に於て、滿蒙地方に於ける、我國の優越權は承認せられず、啻に承認せられざるのみならず、我國と支那との間に於ける既得の借款優先權は總て新借款團に之を讓渡す可きの條項ありとせんか、我國が將來經濟的生活の安定を得る爲めに、幾多の努力を費し、又多大の犧牲を拂つて、支那に收め得たる既得優先權は殆ど一空に歸し、日本が支那に得んとする種々の原料品の如き資本の威力に依て、他國に奪取せらるゝの愚を見るに至ることなきを保す可からざるなり。

或は政府の爲めに、將た又合衆國の爲めに辯ずる者は日本が今回の如き條件の下に、借款團に加入するときは我國の既得優先權を犧牲に供して、英國の有する大なる既得優先權に參加するの利益ありと。然れども千九百十六年末の調査に據るに、對支投資金額中、英國の投資額は全體の二割一分二厘なるに對して、日本の投資額は二割一厘に當り、殆ど伯仲の間に居れりとす可く、其後兩三年間英國の投資の停滯したるに對して、日本の投資は幾多の方面に行はれ、而して日本の放資中、單に權利を收めたるに止まり、未だ實際に資金を投下せざるものありと

すれば、既得優先權を新借款團に讓渡し、一方に他國の讓渡したる借款に參加することに依て、我國の利益するが如きは殆ど之を望む能はず、我國としては最近兩三年間に築きたる基礎の上に立ち、自由競爭を試みて大に活動するを便なりとするの事情あるの際、政府が日支兩國經濟關係に特殊的方面あることを閑却し、單に國際協調と云ふが如き空漠たる主義に捉へられて、借款共同の政策に出でんとするは、決して事の可なる所以を知る能はず、我國の銀行業者は今や內國の狹隘なる天地に跼蹐し、單に利俏を貪るの營業を以て、安んずる能はず。我國の製造工業家は支那の富源を開發して、原料供給の道を確保せざれば、將來の事業經營を全うする能はず。國民亦生活の安定を謀るには、支那に就て天然資料の供給を仰がざる可からず。斯る場合に政府自ら進んで合衆國の後塵を拜し、對支放資に就て合衆國の爲す所に追隨すれば可なるが如き態度を示すは、吾輩の承服する能はざる所なり。

由來銀行業者の如きは、單に資本を貸付けて、金利を收むれば我事足れりとするの風あり。銀行業者としては、此事或は可なるものあらんか。然も一國の財政當局者が對外經濟の關係を律するに當り、斯る金貸根性を脫する能はずとせんか、財政家として最も任に適せざるものと評せざるを得ず。對支借款は單に我國が若干の資本を支那に貸與して利子を貪るの必要に出づるに非ず、之を對支企業に連結せしめて、國民經濟上將た又國際經濟上の必要に伴はしめんとするを以て、根本の趣意とす。銀行業者より身を起したる財政家は遂に此要訣を知らず、合衆國に伍して、若干の資金を貸付くれば、日本の對支企業が如何なる狀態と爲るも之を顧みざらんとす。對支借款團は之を破壞するか、我國自ら脫退するか、然らずんば嚴重なる條件を付するか、三者の一を以て臨むの外に、我國の取る可き方針なきものとす可し。

由來外國の意嚮を顧み、其主張を重じて、自國の利害を忘却するは、邦人殊に我國官僚の病弊なりとせざる可からず。合衆國より對支借款合同の提議あるや、其我國に及ばす影響我國の支那に對する特殊的地位、日支兩國間に生ぜしむ可き將來の經濟的關係等は全然之を不問に付して、我國が一議に及ばす、之に贊成を表するが如き、要するに例の拜外的思想の之を然らしむるものなるものなる可しと雖も、吾輩は之に與する能はず、我國の力を以て、借款團を破壞する能はずんば、我國は宜しく之より脫退す可く、既に主義として贊成したる今日、脫退することの國際道德上に於て不可なりとすれば、幾多の條件を付して、加入す可きのみ。而して其條件として重要なるは

(一)既得の借款優先權を新借款團に讓渡するや否やは加入國の自由意思に於て、之を爲す可く、又滿蒙地方に於ける借款の如きは將來に於ても四國協同の範圍外に置くこと

(二)鐵道運河治水の如き大資本を要する事業に對しては借款共同の主義を認むるも、是等以外の借款は各國の自由競爭に委すること

(三)政治借款經濟借款の區別は之を撤廢するも、金額の大小に依る區別は之を存し、其小なるものに就ては新借款團に於て、何等の制限を加へざること

の三點にして、斯の如くならんか、或る程度まで我國の支那に於ける特殊的地步を保護し、外國の勢力に依て、遽に之を侵犯せらるゝの恐なきを得べし。唯外國に恐怖する我國政府の當局者に幾何の勇氣と自信との存するかを以て、疑問とす可きのみ。

更に之を支那の利害より考ふるも、支那人中、借款に依て自己の嚢裡を肥し、又は自己の事業に要する資金を調達せんとする者の如きは、如何なる形態に於ても、又將來如何なる困難の自國の命運に落下し來るも、之を問はず、一意借款の成立を歡迎す可しと雖も、支那人必ずしも斯る借款萬能病者のみに非ず、又借款を求むる場合に於ても、債權國間に或る競爭の行はれて、支那に有利なる條件を收むることを希望する者あり。現に前年余の北京に在るの際、支那人中、日本借款團に屬する諸銀行が常に步調を一にして支那に臨み、常に自己の要求する條件に比較して、苛酷なる條件を強ひらるゝの苦痛に堪へず、特殊の銀行と取引を開きて、此苦痛を脫せんとするの計畫を懷く者少なからざりき。今回の如き新借款團にして成立せんか、益々支那に於て債權國橫暴の愁訴を生ずるは當然の數なりとす可く、支那を助けんとする借款が將來に於て支那を苦しむるに止まらず、現在に於て支那人の反感を助成し、支那人の間に借款團打破の運動を生ずることとなしとす可からず。況や往年支那內政に對する干涉を不可なりとしたる合衆國が態度を豹變して、借款團成立の主動者と爲れるは、一面より見れば內政干涉も亦辭す可からずとするの前提を示すものなるに於てや、借款團の組織、之に次ぐ借款の成立は一部支那人の滿足を買ふの所以なると同時に、他の支那人に大なる反感を懷かしめざるを得るや否や、一個の疑問にして、借款團の將來決して之を樂觀するを許さゞるなり。

獨逸の現狀

紐育にて　鷲尾正五郎

一

獨逸の將來を計する人の意見凡そ三種に分る。第一は戰後の歐洲及び世界の形勢が戰前のそれよりも非なると想ふて獨逸は早晩其の帝國主義に歸ると言ふもの、第二はスパルタカス運動の成功を豫想して露獨同盟を說くもの、第三はエベルト政府の運命を信じて結局獨逸は英米の大勢に順應するに到るべしと論ずるものである。

二

近頃の新聞には獨逸は亦例の奸猾なる秘密外交手段を弄して英米の間を裂かんとして居るとか、復讐戰の臍を固めて竊に軍力を養つて居るとか、佛蘭西の警戒は實際政治として無理ならぬ事であるとか、許多の倉庫に今尙ほ軍需品が貯藏せられてあるとか、敗戰國とは云へ國內の產業組織は一絲だも亂れて居らぬとか、種々の恐怖說が傳へられる。此種の說をなすものは好んで舊官僚系の人才が現に革命政府の政治外交に携はつて居る事實を指摘して、革命は聯合國を欺く芝居たるに過ぎず、本當の精神は依然として軍國主義であると說く。併しながら此は昔の影を捉へて騷ぐもの、現狀を有體に觀て說をなす者の言ふべき事ではない。勿論舊人才が今尙ほ政治の要路に立てる事は幾分事實であり、また昔の貴族に對して一般國民の間に左程反感なき事も事實であり、更に裏面の一部には帝政復興運動を企てんとする者も全く無いとは言へないが、國民の心は明に之に反對であるのみならず、周圍の形勢に再び軍國主義乃至帝國主義の望を繫ぐべき機會ありと思はれない。過去四十年間世界の虛に乘じて築き上げたる軍國主義にしてさへ尙且つ國を誤つたではないか、況んや海軍は奪はれ陸軍は崩壞し國民の信が去りたる敗戰の後を繼いで何の軍國主義が立てられやうぞ。對外政策に於て何等かの奇功を奏する見込がない以上は帝國主義は絕望である。然る　今後少くとも幾十年間は帝國主義は獨逸の對外政策として害ありて益なき事は云ふまでもない。聞く所によれ

ば、軍備復興所か今日の獨逸は單に國內の秩序を守るに必要なる八十萬の常備軍さへも造り兼ねると云ふ。それ程に國民は軍隊を厭きて居る。で、第一說は取るに足らざる時代錯誤の謬見として斥け、第二說を考へてみる。

三

若し軍國主義の國として獨逸の復活に何等かの機會ありとすれば、それは世界を過激派の洪水で洗ひ流し、荒廢の跡に過激軍の戰意を轉じて帝國主義の戰意とする事であらうが、舊官僚系の人物にそんな冒險を試みる勢力がないのみならず、假令世界の過激派の洪水で洗ひ流し得るとしても、過激軍の戰意を轉じて帝國主義の戰意となす事は絕對に不可能である。歷史は逆轉しても人間は猿になるものではない。併しながら新社會組織の下に獨露同盟を作り之を一種の武裝同盟若しくば經濟同盟となす事は必ずしも考へられない事ではない。

戰局の變化は實に意外なものである。鍊ひ上げた獨逸の軍隊は崩壞して、烏合の衆と思つた過激軍が攻勢に出て居る。獨軍を破つた聯合軍もレーニン、ツロツキーの軍隊を如何ともする事が出來ない。餓の影が曠野を步いてゐるやうなもの、街へ出て來たら自然に消えると言つて安心は出來ない。蹣跚としてではあるが旣に彼方此方の街へ姿を現して居る。大戰役に次ぐ人心動亂の機に乘じたからとはいへ實に不思議な現象である。昨年の夏頃ツロツキーが過激軍隊組織の意ある事を發表した時は誰も彼の言を信ずる者がなかつた。然るにそれが今日事實となつて表れ、戰鬪力の未だ薄弱なる割合には內部の結束頗る强固にして戰はずして敵を破ると云ふ勢ひ、敗殘の獨逸軍はヒンデンバーグの指揮の下にあつて過激軍の侵入を防ぐにも足りないと傳へられ、聯合軍もツロツキーの軍隊に對しては戰意なく、軍力干涉は絕望の姿となり、今は漸くコルチヤツク、デニキンの軍隊を信賴するばかりとなつて居る。何時まで續く形勢であるかは知らぬが、意外な事であると言はさるを得ない。

餓の影が群をなして雲霞の如く文明の稻穗を襲ふ、レーニン、ツロツキーも大勢の赴く所を觀て恐怖しいであらう。今に遁げ出して和をケレンスキーやミリユコフに求めるであらう。革命の諸星が一致してデニキン、コルチヤツクを援け露國を餓と恨の手から救ひ出す事も遠い事ではないと樂觀する人があるが、餓の影は單に餓の影でなく、レーニン、ツロツキーの理想たる武裝社會主義の實現であると觀れば如何ん。獨逸の隆勢なりし頃獨逸を利用して露國を過激派化し、其力を以つて次は敗戰の獨逸を過激派化し、世界を資本國と勞働國とに分つて、おはよくば西部戰線を立て直すと云ふのがレーニン、ツロツキーの

最初よりの腹案であつた。所詮保束ない事であるとしても、今日或る程度まで斯る形勢を誘起し得たる事は認めざるを得ない。事成らんとして遁げ出すやうなレーニン、ツロツキーでもあるまい。併し武装過激派の運命も獨逸の形勢如何によつて、行詰りであらう。

獨逸國民の組織的訓練と精力主義に信を繋ぐ人は獨逸の復活を豫期し、假令時局の紛亂は如何にあらうとも、軍國主義の再興は絶望であらうとも、講和問題の落着と共に人心定まれば獨逸は必ず再び國家的組織統一の緒に就くであらうと考へるのは自然である。獨逸の現政府が大戰の後を承け血を流さずして兎も角も革命政府の形式を備へ内能く共産黨の暴動を防ぎ外亦忍辱の温和政策を固守して居ると云ふ形勢から觀ても、總て必ず施設の再び世界を驚かすべきものがあらうと考へるのは、一應は如何にも道理のやうであるが、仔細に獨逸の現狀を想へば決して斯る樂觀を許さい。エベルト政府が果してスパルタカスを鎭壓し得べきや否やも疑問である。

私は獨逸の現狀を想ふて痛切に感ずる事は、國の組織が一度破るれば國民精神も訓錬も左程頼みになるものでないと云ふ事である。組織的軍國主義の滅びたる今日獨逸の國民性は何の頼みぞ、其の氣慨に乏しき事露國にさへも及ばない所がある。遠くから觀れば無氣慨は忍辱であるやうに思はれるかも知れないが近づいて見れば寧ろ奴隷根性にも似たる所がある。先づ獨逸の現社會狀態を述べる。

第一今日の獨逸にして尚ほ戰爭成金の跋扈を觀る。エベルト政府の大藏大臣は革命の當時成金連を一時國外に避難せしめた。財産携帶で悠々と遁げた成金は其後形勢の改まるにつれ獨に國境を窺つて忍び入り、今は白晝横行贅澤の有次第を遣つて居ると云ふ。食料の缺乏を叫ぶ敗戰國にあつて金さへ出せば成金の欲するものは何でも得られると云ふ。それぱかりか昔の貴族連は今でも依然として郊外或は田舎の宏壯なる邸宅に安臥して、百姓の貢を取りて自分の税金は支拂はないと傳へらる。國を誤つたルーデンドルフが平氣で行列の先頭に立つたり、或は貴婦人の夜會が屢々市民の話頭に上るかと思へば、他方には竊盜品が公然と賣られたり、而も陸軍貯藏の砂糖類が盜み出されて市場を賑はして居ると云ふ話もある。此等は皆近頃獨逸から歸つた人の實見談である。旅客など浮つかりタキシでも傭へば無法の代價を要求されて、拒めば鐵拳制裁を加へられると云ふ。約して言へば不規律の暴動と不規律の贅澤が同時に行はれて居る。一般の市民は飢ゑてゐても默つて觀て居る。エベルト政府は之を成行に委せ統禦する力もなければ亦統禦せんともしな

い。雨とも嵐とも定まらぬ變局に立つて如何ともすべからざる事情ありとは云へ、此の有樣では獨逸國民の訓練云々も信ずるに足りない。況んや臥薪嘗膽竊に戰後經營の籌有りなどとは思ひもよらぬ事である。

エベルト政府を評する者に此は似而非革命政府であつて其實體は依然として舊官僚勢力であると言ふものと、此と反對にエベルト政府はスパルタカスに對して本當の敵意がなく寧ろスパルタカスを當分外交道具として用ゐ、形勢愈々非なれば自ら進んで之に地を讓る考であらうと言ふものとがある。兩者とも買被りたる見解で、殊に後者の說は全く根據なき憶說である。スパルタカスとエベルト政府との關係は露國の過激派とケレンスキーとの關係に類し、兩者の間に意志の疏通ありとは考へられない事である。而もケレンスキー政府失敗の原因は軟弱政治に在つた如く、エベルト政府不人氣の原因も軟弱政治にある。政權を持する事既に半年餘にして何一つとして功績が擧つて居らない。外交の事は時局止を得ないにしても、社會政策の豫約せられたるものにして實行せられたものは唯の一つも聞かぬ。國民の信賴心が現政府を去つて居る事は疑ひない事である。たゞスパルタカスを措いて之に代る者がないと云ふだけの事で漸く其位置を保つに過ぎぬ。

此に反しスパルタカスは兎も角も一貫せる主義主張を有し其聲は衆愚の心を收ると同時に亦智識階級の理性にも訴ふるに足る。エベルト政府の無能は益々スパルタカスに對する同情を煽る。冒險と云へば冒險ではあるが行詰つた局面の道を開くものはスパルタカス以外にはないと云ふやうな心を起させる。第一スパルタカスは共産主義の實行は獨逸をして凡ての對外負擔を免かれしむると說く。第二に共産主義の實行は凡ての社會問題を解決すると說く。元哲學者の考へた議論であるから筋道が立たぬとは云へない。唯實行不可能として排するのであるが、露國では實行せられ、獨逸でも實行政策として眼前に突き出されてみると誘惑せられずにゐられない。次にスパルタカスは露獨同盟の將來に橫はる光明と希望とを說く。此がまた獨逸人の想像を魅するに足る最も有力なるプロパガンダである。併しながら一般民衆は到底言論では動かぬ。共産黨に與しても今急に食物が得られるか、それよりも米國が食料を供給すると云ふから今暫くそれを待つて、愈々食料を送らない時は、其時は掠奪でも燒打でも――と云ふのが獨逸の勞働者十人集れば九人迄の心理狀態であると傳へらる。一般獨逸國民は斯の如く信賴するに足りないものであるが、共産主義は獨逸に於て著しく智識階級の同情に訴へ、其中心勢力も智識階級の中にありと云ふ。近頃智

識階級の者が續々實行運動に加はりつゝありと云ふが事實であるらしい。

スパルタカスの實行手段は秘密會合、秘密探偵、暴動、同盟罷工、それから獨立社會黨と通じて國民議會攪亂策と云ふやうなものが重なるものである。五月一日には總同盟罷工を起し、之と同時に講和條件可否決を問題として議會を攪亂し、其勢に乘じて共產主義のクーデターを遣る計劃であると云ふ。果して遣るか遣らぬか、また遣つて成功するか失敗するか此の原稿が印刷に附せらるゝ前に既に讀者は電文によつて知り得て居る事があらうが、前後の關係を窺ふ參考までに現在の形勢として私の知る所を述べて置く。

先づ言論界を觀るに此方面に於ては正面より共產主義と戰ふ機關は殆と存在してゐない。スパルタカス暴動の初期に於て多數社會黨の機關紙にして共產主義を非難したものは重砲を向けられ、中には燒打せられたものもあれば占領せられたものもある。其例が今でも威嚇となつて、未だ孰が最後の勝利者であるか決せられざる形勢に於て、殊更にスパルタカスの仇となるやうな新聞はない。此が一つ、も一つスパルタカスの勢力をして言論界に重きをなさしめた事はエベルト政府の誤つた政策である。自由主義を標榜して立つたエベルト政府は勢ひ言論の自由を許し舊政府の禁壓策を解かざるを得なかつた。然るにスパルタカスは其機に乘じて種々の秘密結社を組織し秘密探偵を發して反つて政府側の言論を監視すると云ふ始末、形勢逆轉の姿である。大學教授連の中には過激派を防ぐ唯一の道は過激派を研究するにありと稱して種々の反共產主義學會を起す者があるが、彼等の聲は固より社會に徹底する筈がない。今は全く力と力との戰である。機を觀て之に乘ずる事敏なる者の勝を制する時である。

スパルタカスがクーデターを強行した時に伯林を守る兵力は如何に分れるであらうか、此が亦疑問である。今日エベルト政府の警察力は唯に千三百人と見積られて居る。而も此等の警官は皆二心ある者で、事ある時には比較的優勢なる方を援け、政府にとりては賴とするに足りない力である。此外に伯林の護衞兵二萬五千乃至三萬と稱せらる。其中一萬近くは既にスパルタカスを援助すべき事を誓つて居ると傳へらる。殘りの分も形勢を觀て去就を決する心で、飽くまでも政府を援けんとする兵力は何所にも存在して居らぬ。現獨逸の兵力は全體で二十萬を多く出でず、其大部分はヒンデンバーグ將軍指揮の下に東部國境を守つて居る。此に對しトロツキーは五十萬の兵力を以つて向ふべしと豪語し既に東プロシヤの邊境に迫れりと云ふ說もあ

る。而已ならず此の軍隊も勞兵會の最高指揮權内に在つて、一朝エベルト政府が斃れた場合にはヒンデンバーグと雖如何ともすべからざる立場にある。之を要するに最後の勝敗を決すべき軍隊も今は一般市民と同樣傍觀の態度である。若しスパルタカス團にレーニン、ツロツキーの如き機を観る事敏にして事を構ふる事大膽なる首領があれば、獨逸を過激派化する事必ずしも困難なりとは云へない。

　獨逸のスパルタカスと露國の過激派との間にはリープクネヒト存命中の時から既に同盟が訂結せられて居る。若しスパルタカスが獨逸の政權を掌握するに到れば西部戰線を立て直さざるまでも、聯合國に對して尻を捲る位の事は既定の方針である。此の意味に於て露獨の同盟が成るであらうか。露西亞の曠野に迷ふ餓の影が愈々巴里の街頭を擁する時が來るであらうか。兎も角も巴里に集まる政治家の心膽を寒からしめ、永く結んで解けざりし講和問題を急がしめたのは此の危險である。講和はウヰルソンが作つたものでもなく、ロイド・ジョージが作つたものでもなく、クレマンソーが作つたものでもなく、露國の過激派がをびき出した講和である。

四

講和條件は豫想よりも寛大なる事は疑ひない。獨逸が果して

受けるであらうか否やは疑問であるが、エベルト政府は寧ろ寛
んで受けるであらう。不平は言ふであらう、また多少の變更は
請求するであらうが、要するに國民の前に體裁を繕ふための不
平變更であつて、受けなければ自己の致命傷である、城をスパ
ルタカスに明け渡すより外がない。スパルタカスを鎭壓するた
めには聯合國の武力干渉をも辭せざるエベルト政府が進んでス
パルタカスに政權を譲るやうな事は決してするものではない。
若し國民の輿論が沸騰して斷乎として講和條件に反對するやう
な形勢となれば獨逸は第二の革命、スパル・タカスの天下であ
るスパルタカスの暗中飛躍が成功するか、それとも國民は精神
よりも麪麭を重しとするか。

　南獨逸ミュンヘンに過激派の革命があつた頃視察に行つた人
の報告によれば、當時のミュンヘン市は靜肅にして朝の中は教會
のベルが鳴り響き、道行く人に何の不安の面影もなく、「今日此
市に革命があると云ふは事實か」と問けば「然り」と點頭くが、
革命は何所で行はれてゐるか影さへも見えぬと云ふ事があつ
た。獨逸人には徹した樂天性がある。今でも多數の獨逸人は戰
爭の事を云ふと「何に獨逸は敗けたのではない」と言ふかと思
へば、次は必ず「お前の國に何かよい仕事がないか」と聞くこ
とである、此も同じ樂天性の表れである。想ふに時局に

る政府の態度も一般國民の態度も恁したあきらめの精神であらう。エベルト政府は焦つても所詮及ばぬ事である、何よりも先づ封鎖が解かれて留易が始まれば自然の勢で成るやうに成らうと位に考へてゐるのであらう。英米順應說を言ふ人は此の心理狀態を察して言ふのである。此の說によれば獨逸の野心とか復讐心とかは最早問題外である、軍國主義に率ひられた獨逸にしてこそあれ程の氣慨があつたが獨逸國民は實は平和にして能く働く國民である、第二流のブルヂョア國たるを以つて滿足するものであると云ふ。近頃獨逸の實業家の或る一部分には獨逸は寧ろ英國の殖民地となつた方が安全であるとさへ言ふものがある。若しエベルト政府の如きものが永續すれば獨逸の精神は漸々英米順應說に傾くであらうと思はれる。姑息なる物質的平和を願ふ心が今後の獨逸を支配し、獨逸は今は物質的にも精神的にも英米の手先とならんとするのではないかとも感ぜれる。

半世紀の努力を絞つて尙且つ足らざる程の負財を加へられ、而も產業經營に於ても數多の原料品は之を英米の供給に仰がざるべからざる位地にあつて、今更舊敵に對し何の牽制策があらうぞ、直しく英米に順應して自己の活路を開くべしと云ふ考が起るのは無理ならぬ事である。心を廣く持てば世界にはまだ未開地がある。露西亞と云ふものがあり、支那と云ふものがある、英米の利害に順應して自己の進路を見出し得ない事があるか。若し此が獨逸精神でありとすれば賴むべからざるは今後の獨逸文明である。

五

併しながらスパルタカスの暗中飛躍は遂に失敗に歸しても其精神は容易に滅びるものではない。他方エベルト政府は講和問題を纏める迄は存在を許されても到底永續の見込なしと云ふ說は穿ち得た說であるらしい。此間に在つて竊に機會を覗つて居るのが獨立社會黨である。講和訂結後獨立社會黨を中心として第二の平和的革命を見ないとも限らない。而して此の革命政府が愈々產業社會化の實を擧げ、此と同時にレーニン、ツロツキー若しくばレーニン、ツロツキーに代る露國の政府が武裝社會主義の理想を捨てゝ國內の經濟組織整理に意を用ゐ、兩者相結つて北歐文明の基礎を据へ其精神を世界に發揮する時が來らぬであらうか。獨逸國民の組織的訓鍊に多少たりとも信を繋ぐ人は、獨逸が先に立つて斯る形勢を造るであらうと云ふ希望を失はない。

獨露の新文明は社會主義の文明となる事は殆ど旣定の大勢なりと見做すべき理由なきにあらず。現に世界の視線は一齊に此の方向に注がれて居る。露國に就て見てもミリュコフと云ひケ

レンスキーと云ひ其他革命の落武者にして現に反過激派なる人人と雖社會主義を理想とする點に於てはレーニン、ツロツキーと異なる所がない。彼等の爭は畢竟手段の爭である。而已ならずレーニン、ツロツキーの地均的破壞運動が完全に行はれてしまつた今日の露國には誰が現れても他の社會制度を布くべき中心勢力を集める事は不可能である。獨逸と雖今尚ほ成金や貴族の跋扈ありとは云へ、それは一時無爲無能の政府の下にあればこそ出來る事で、勞働者及び一般民衆の壓迫は所詮避くべからざる時代に於て、殊に敗戰後の貧乏世帶を抱へて、社會主義以外に再び國家を統一すべき策ありとは考へられない。

露國及び獨逸には英米の流を汲む勞働組合運動は害ありて益なし、國民にその訓練もなく亦か丶る運動が暴動と化せずして自然に發展して行く程國家の富に餘裕がない。此の境遇は尚更露獨を驅つて急速に產業社會化の實を擧げしむるであらうと思はれる。今は餓の影の歩く天地であるが、來るべき新文明の曙光此所を照らさざれば、歐洲戰爭は遂に無意味である。(四月十八日)

植民地總督制度改革論

江木翼

一

我が國の憲法政治の實際に於て政務が縱に兩斷せられて居るといふ事實があつて、之が爲めに國務が謂はゞ半身不隨の狀態に在るといふ事は、我輩の從來屢々論議して來た所である。植民地總督制度を考へるに就ても、此點が先第一に論議せられ、而して結末が着けられなければ到底徹底的の効果を得ることは出來ぬ所である。然らば夫れは如何なる點であるかと云ふに、軍務と軍務以外の政務との區分是れである。軍務の主要なるものは制度上軍令機關によつて統理せられ、直接に所謂帷幄上奏の形を以て裁可實施せらるるものである。之に反して一般の政務は凡て内閣の首班たる内閣總理大臣に由りて上奏せられる次第である。憲法上の理論よりすれば、軍務と雖も、其事が[illegible]

機軍令に關する場合に在りても、固より其國務たる事は疑ない事である。而も國務中の重要なる國務であるといふ事も亦疑ない事である。果して然らば凡て國務大臣が輔弼責任を負ふべき一般政務と同様に、内閣に於て此事が取扱はれ、論議せられ、而して内閣總理大臣に由りて上奏せらるべき性質を有することは他の政務と何等違はないものである。此事柄は憲法の論議又は解釋としても毫も疑を容るる餘地のない事と思ふ。而しながら我憲政の實際に於ては何うかと云ふに、國務大臣の輔弼責任以外の事項として、全く國務たるの形を具へて居らないといふ事になつて居る。此事柄は先づ根本に於て革めなければならぬ事と思ふ。

斯くの如き根本の誤謬が實際に行はれて居る結果として、植民地に於て總督を文官にした場合に於て、此文官に軍務を託する事の出來ないといふ結果が生ずるのである。是に於て乎、文武を兼ねて統理せしめんと欲せば勢ひ武官を以てせざるを得ぬ結果に陷るのである。之れ即ち現行制度の由つて起る所以である。今日の制度を改正せんと欲せば、勢ひ遡つて文武國務の統斷といふものを統一するといふ根本的整理を斷行するのが先づ努むべきことであると思ふ。此の觀念よりして、植民地の總督制度の問題に就て特に一言して見たいと思ふ。

二

形式論を以て之を云へば、現行の制度に於て植民地の總督は、朝鮮總督も臺灣總督も等しく之れ文官である。其總督なる官其れ自體に於て、夫れが武官であるといふ規定は何等存せぬが故に、形式論を以てすると、植民地の總督は純然たる文官であると云はざるを得ない。而して其總督の司つて居る職務といふものの大部分、主なる部分、樞軸的部分は所謂文的事務である。軍務以外の事務である。であるが故に其性質に於ても亦文職であるといふ事が言ひ得るのである。此文官に任用するのに資格が制限されてあるのである。即ち陸海軍の將官よりのみ任ずるといふ任用の制限がある爲めに、其官は文官であり、其職務中の主なる事項は軍務以外の文的政務であるにも拘らず、之に當る所の人は軍務にのみ堪能であるべき武官が任用せらるるといふ結果になつて居る。固より總督の職務の中に於て軍務に屬する事柄も無いとは云へない。靜謐を保持する爲めに軍隊に命令を發する必要がある場合の如き、總督に軍務に關する事柄が無いとは云へない。併し乍ら其司る所の事項の百中九十九までは文的事務であると言はなくてはならぬ。此點から云つても總督を以つて軍人に限るといふ理由が無きのみならず、軍人としては到底適材を得る事が結局困難に陷るべきは定に見易き實際狀態

と云はねばならぬ。

三

少しく官僚式の吏務の細道に入る話のやうではあるが、親任官といふが如き、行政官吏としては高い地位で、而して政務の統轄を爲すといふが如き要職に對しては、其任用の資格といふが如き者は全然設けないと謂ふのが、我國の現行制度の通則であり、又さうあらねばならぬ筈のものと思ふ。今日に於ても國務大臣然り、樞密顧問然り、鐵道院總裁然り、全權大使然りであつて、凡そ親任官は原則としては自由に任用せらるるものである。自由に任用されて初めて適材を得、政務の疏通に障碍の無い結果を得るのである。然るに陸海軍大臣及び植民地總督に對してのみ特に武官制を用ゐて居るといふ事は、適材を廣く求むる點に於て頗る適當でないのみならず、現行制度の大いなる除外例であつて、速かに改革しなければならぬと思ふ。吾輩は理論上植民地總督は文官であり、又其主なる事項が文的であるが故に、全然其任用の制限を撤廢して、廣く各方面より人材を得る事に勗めるのが、殊に刻下の狀態に照して必要であると主張するものである。必ずしも武官を排除し、武官たる者は總督たるを得ずと殊更に限局する必要は無いと思ふ。

四

り乍ら武官にあらざれば軍隊の使用を爲す事を得ずといふは、之れ間違つたる原則である。總督たる者が假令如何なる出身の者たりとも、之に文武の權を併有せしむるといふ事にしなければ、植民地政務の統理を完うし、由つて以て政治の圓滿なる效果を擧ぐる事は出來ないと思ふ。植民地の秩序は内地とは違ふのであつて、大體に於て植民地に臨む所の人は本國の人であり、統治を受ける人は土地の人である。動ともすれば意思の疏通が十分でない事が起り易いと云ふのは、植民地統治に於ける一般の事例といふても差支へない。殊に我が國の如き、植民地統理に入つてより僅かに二十有餘年に過ぎない國に於ては、植民地に於ける上下の意思の疏通が甚だ圓滿に行はるることを期し難い。是に於て乎、騷擾を惹起する事を免がれない。又一般に文化の低い所であるが故に、自ら秩序の整頓が内地の比でない。現に朝鮮の如きに於ても、近年に至るまで毎年一定の時期には匪賊が各所に出沒するのが常であつた。是に於て乎、植民地の總督たる者は普通の警察力以外に軍隊なる警察力を常に帶有して、機に應じ、機を逸せず、兵力を用ひる事が出來なくてはならぬ。此狀態は朝鮮臺灣に於て缺くべからざる要件となつて居る。此點から考へると植民地總督は現に文官であり、又文官でなくてはならないが、即ち其任用は武官に限るべき理由

はないと思ふが、併し其文官には兵權を有たしむる事の必要にして缺くべからざる要件なる事は、我輩の確く信じて疑はざる所である。若し夫れ文武を分ち、一つは總督、一つは駐剳軍司令官と箇々特別の働きを爲さしめて差支へなしと觀る者は、植民地統治の實際に通ぜざる極めて迂遠の所論であると思ふ。

五

先般關東都督府の官制を改正し、關東廳と駐屯司令官とを別箇のものと爲し、而して關東廳長官には兵力使用の權を與へず、內地に於ける府縣知事と同樣に僅かに出兵要求の權を以てしたのは、甚だしく姑息の改正と云はなければならぬ。のみならず關東廳長官は、實際に於ては殆ど滿洲の事項には當らぬかの感を今日に於ては起さしむる。即ち滿洲鐵道の警衞なる極めて機宜を要する、而して從來屢々紛議の問題となつた所の鐵道擁護なるものは、今回の改正には關東廳長官の權限に屬せずして軍司令官の職權に屬せしめてある。斯くの如き重要なる警察的の事務が、又外交上の紛議を起すべき重要なる事務が關東廳長官に屬せず、却つて軍司令官の權限に屬するとしたのは、殆ど改正の要綱を沒却したと云はなければならぬと思ふ。殊に斯くの如き重大なる文的の事務を擧げて軍司令官の權限に屬せしむるに至つたのは、一面から云へば純然たる武職の權限が純然たる文官の所掌に立入つたと謂ふ點に於て大なる改善と評するを得ないと思ふ。我輩は斯くの如き改正が朝鮮若くは臺灣等に於はるるといふ事は甚だ不可なりと認むるものである。之を改むるに際しては斷々乎として軍務を擧げて文官の管理に置き、して植民地事務の統一を圖らしめ、非常急變の場合にも萬遺憾なきを期せしむる事が最も必要である。而して任用の範圍は之を廣くし各方面に適材を求むることが目下の急務であると思ふ。

農商務官吏殺人事件に關聯する政治的責任の歸着點

法學博士　吉野作造

農商務省の技師山田憲が横濱の豪商鈴木辨藏を撲殺したと云ふ報道は、青天の霹靂の如く六月中旬の新聞界を賑はした。二人の下手人が共に帝國大學卒業の農學士であると云ふ事と、又其中の一人が、前途有望を以て同僚先輩の尊敬を買つて居つた高等官であつたと云ふ事は、官界の腐敗・教育界の無力と云ふやうな事に引きつけて之を一つの大いなる社會問題たらしめんと敎困いて居るものもある。成程此事件は其關係者の人物から觀ても、又其殘酷を極むる點から觀ても近來稀なる破天荒の事件たるに相違ない。けれども此事件其れ自身は社會問題としては實はそれ程の大きな意味は無いと思ふ。何故なれば、官界は如何に腐敗しても、斯かる罪人を出すのが當然だと云ふ程腐敗してはゐない。教育が如何に無力でも斯かる罪人の發出を止め得ない程無力とも思はないからである。官界も教育界も頗る頹廢して居るの事實に異議を唱へないが、併し今度のやうな事件は一種變態の出來事で、假令官界教育界がもつと立派になつて居つても絶無を期する事は出來ない。故に此事件は我々から觀れば伯爵のお嬢さんが運轉手と情死をしたと云ふ破天荒の出來事と同じく我々の好奇心を十二分に滿足せしむる異常事件には相違ないが、社會問題などゝ吹鳴る程の事件ではない。

けれども此事件は端なくも他の重大なる社會問題を吾人に提供したと云ふ事實は輕々に之を看過する事は出來ない。若し之を機として茲に矢釜しく議論すべき事柄がありとすれば、夫は此方面でなければならない。夫は何かと云ふに、又しても我々の目前に展開されたる官吏と商人との忌むべき結託である。巨萬の富を擁し、國家の特別なる恩寵に浴し、而かも上流階級を以て人も許し、己も許す所の富豪が、破廉恥極る方法に依つて不正の暴利を貪らんとする事である。殊に去年の米騷動以來、國[illegible]

生活問題は算盤以外の公共問題として取扱ふと云ふ事に上下心を併せ、一方には各地方の富豪が夫れ〴〵莫大の私財を投じて救濟の資に宛てなどして居る間に、偶々政府のお目鏡に協へ、又國民の信任を負うて外米輸入の任を托せられた商人が、其信任に裏切つて而かも最も陋劣なる手段を弄して火事場泥棒以上の不正行爲を働いたと云ふ事である。更に驚く可きはかゝる不正行爲を働いたものも只一人や二人に止らないと云ふ事である。どれ丈け本當か知らないが、曩には例の鈴木商店に對する非難の聲が高かつた。今又鈴木彌藏氏の不正事件に引續いて湯淺商店の贈賄暴露がある。而して國民の疑の眼は更に此外諸々方々に飛ばんとして居る。此等の點が實に社會問題として我々の愼重なる考究を要する所であらう。曩には製鐵所事件があり、今又此事あり、何ぞ我國官吏の前轍に戒むる念慮の乏しくして不正の利を趁うに汲々たるや。斯かる不正事が頻々として起りながら、而も之が監督の任に當るべき上司が何處でも事件の暴露する迄茫然として居るに至つては、之れ亦許すべからざる一大問題である。

此種の不正漢に對して科すべき法律上の制裁が如何なる程度のものであるやは茲に論ずるの限りでないが、兎に角法律の許す最極度の重刑を科すべきは言ふを俟たない。併しながら我々は法律上の制裁を以て彼等を許すべく餘りに寛大であつてはならない。何故なれば法律上の制裁さへ免るれば依然として社會に橫行濶歩するに妨げないと云ふ觀念を養ふの恐あるからである。さればとて我々は彼等に死刑を科すべきを國民に煽動する積りではない。我々は法律上の制裁以外に道德上の極刑を科し、例へば社會的絶交によつて此種の不正漢を極度に排斥するの嚴格なる態度を示す事が必要であると思ふ。此種の不正漢は又外に其邊に大きい顏をして幾人あるや分らない。之を社會的に亡ぼす工夫が社會問題として我々の大いに考究を要する點であらう。

此種の不正漢の誘惑に陷る官吏も固より不都合に相違ないが、之を强ち現代教育の弊に歸し、大にしては教育界を責め、小にしては帝國大學を責むると云ふやうなのは當らない。斯う云ふ所に良心の鈍いのは固より教育の弊ではあるけれども、どんなに教育が立派になつたからとて教育のみで國民の良心を十分銳敏にすると云ふ目的は達せらるゝものでない。況んや今日の國民は我國教育制度の弊所をよく知つて居り、而して其惡制の下に如何にして自ら修養すべきやの道を略ぼ知つて居るに於てをや。尤も一層良心を銳敏ならしむるやうに教育の效果をも

う一歩も誤らしむる工夫は固より必要である。さうすればうつかり誘惑に陷る道を幾分免るゝ事は出來よう。

けれども當節の商人はなか〳〵巧妙で容易な事では誘惑の手を退ける事が出來ない。斯う考へると官吏もなか〳〵六つかしい商賣だ。僕が或役所の官吏だとする。役所に机や卓(テーブル)も收むる出入の商人があるとする。偶々僕の家で机が入用だと云ふので役所で逢つた序に此商賣人に相談する。軈て望み通りの品物が自宅に屆けられる。月末になつても此方から促さなければ勘定を取りに來ない。凡帳面で無い奴は投げて置く。懷工合の惡い奴はこつそり請求に來ないのを勿怪の幸とする。斯うして居る間に不知不識此商人に對して一種の好意を有つやうになる。其結果役所の方へ惡いものを高く納めても大目に見ることになる。之は法律上少しも罪にはならない。之が昂ずると賄賂授受と云ふまで進むが、其處まで進まなくとも道德上から云へば立派に背任行爲であるけれども現今官界の常識は恐らく之を不正と意識しては居まい。此位の事は誰でもやつて居るらしくも思はるゝ。今度の事件に關して三宅雪嶺先生が東京朝日新聞記者に語つた所によると、政界軍界の元老諸公の富は皆此方法を上手にやつて出來たものだと云ふやうな事が書　てある。

政界の先輩はよく官紀振肅と云ふ事を言ふ。朝八時より遲刻はしない、午後は四時になつても匆々にして歸らない、高等官はフロックコートを着て机の上を餘り亂雜にして置なければ、それで官紀は振肅されたと云ふ譯には行かない。もつと心の底に立ち入つて汚い埃(ごみ)を拂ふ必要はあらう。併し之を獨り教育界に求むるのは無理であり、又斯う云ふ方面から官界の腐敗を説くのは之は何も今に始まつた事ではない。今度の事件に關聯して官界に責むべき點ありとすれば、もう少し特殊な方面に尚重大な問題がある。

夫れは外でもない。現今の官界には一般に其施設に對する現實の責任感が乏しいと云ふ事である。彼等はよくいろ〳〵な計畫を立てる、いろ〳〵な法律を作る。斯うすればいゝ、あゝすればいゝと云ふ妙案を工夫するに於ては獨得の才能を有つて居る。けれども之が實際に行つた上で果して所期の目的を現實に達して居るかどうかに十分責任を有つかと云ふ問題になると頗る怪しい。

一體外米管理は何の爲めに行つたか。結局の所廉い米を喰はせる爲めではないか。而して若し茲に今度の事件で暴露されたやうな、又豫ね〳〵國民が何となく疑つて居つた樣な不正行爲が彼處にも此處にも行はれて居つたとすれば、所期の實行が擧

る道理がない。細かい内情に通ぜざる國民には其事は分らないにしても、當局者に之が分らぬ道理がない。假令不正行爲の影響が極めて微細なものだとしても、言ひ換へれば之が爲めに二十錢で買へる筈の米が二十一錢になつたと云ふ丈けの殆んど國民には感知せられざる程の微細な影響でも、もと／＼の計畫の張本人であつた當局者に之が分らない筈はない。分らなかつたと云ふならば夫れはよく／＼の凡暗か、然らずんば商人に籠絡されたのか、其孰れかである。彼が善良な官吏である以上、少しの臭い事も必らず分る筈である。其處で問題となるのは之れが多少でも分つて居つたならば何故今日まで夫れを放任して居つたかと云ふ事である。米問題は最近に於ける最も重大なる國民的大問題ではないか。此問題の爲めには前内閣と現内閣との當局者の間にも火花を散らして利害得失の爭論があつた。之れ程の重大問題であるから眞に其職務上の責任を現實に盡さうと云ふ誠意があつたら、今頃になつて醜態を暴露する筈はない。私は此點を重大なる社會問題として世上の考究を煩はし度い。

今の役人は立案に長けて居ることは前にも述べた通りだが、之が國民の生活に何ら働くかは一切夢中なるを常とする。思つた通りの效果が表れないか、又は反對の結果が表れると、之れ／＼の規則を作つたのだからさう云ふ筈はないと空嘯いて居る。之では貴族院や樞密院の矢釜しい御連中には申譯が立つかも知れぬが、國民はなか／＼納得しない。要するに國民の生活をどうしようと云ふ問題だから、其國民の生活がどうされたかと云ふ事に對する責任感をもつと鋭敏ならしめて貰ひたい。

斯う考へて來ると予輩は玆にも亦官僚政治の痛弊を思はざるを得ない。官吏は何人に對して責任を負ふやの法律上の議論は今玆でする場所でない。只現實今日の官吏社會が何か仕事をして事前事後を通じて一切の辯明の責任を感じて居るのは誰に對してかと言へば樞密院邊の矢釜しい連中乃至元老であつて、斷じて國民ではない。議會も兎や角文句を言はないでは無いが、之は如何樣にも處分が出來るとされて居る。又現に如何樣にも處分されて居るのである。而かも之は必ずしも國民の聲ではない。而して眞に國民の聲を代表する政府施設の批評乃至糺彈は偶々新聞や雜誌に表はれても政府は殆んど之を苦としない。苦とする程度のものは發賣禁止の壓迫を蒙る。故に官吏は自分の計畫がどう國民の生活の上に實際の效果を及ぼしたかは全然不問に附すると迄は言はないが、先づ重きを置く所ではない。彼等の主として頭腦を惱ます所は、之れ丈け立派な事をやつたと元老先輩の納得賞讚を博し得ればいゝのである。而して元老先輩は又固より國民の爲めに良かれかしと計る誠意に於て其疑[illegible]

容れないが、只彼等は不幸にして國民の生活を理解し得る頭腦の所有者ではない。

五來素川君の巴里通信に據れば、平民的の貴族として又最も下情に通ずる雲上人として知らるゝ西園寺侯が長島隆二君を招いて、近年日本にも普通選擧を主張するものがあると云ふ事だが本當かと聞いたさうな。斯う云ふ人に米の事細民の生活の事を監督されるのだから堪らない。偶々世間で政府の施設に兎や角文句を言ふ樞密院の連中が、當局者を呼んで之はどう云ふ譯かと訊く。此問題に就いては斯く〳〵の規則、斯く〳〵の方針を取つて居るから別に文句の起るべき筈は御座いませんと答へる。總ての問題は之で完了し、官吏の一切の責任は玆に如何なる意味に於ても完全に解除される。斯くの如き官界に國民生活の大問題を托して實行の擧るを期するは木に緣つて猶魚を求むるが如きものである。

或問題に就いて元老の一人が政府に質問を發した。政府は各府縣の長官に之に對する調査答申を命じた。縣知事は之を郡長に命じた。之までは無難だが、答申の方式は內容まで添へて中央政府から一定の雛形を示したと云ふに至つては、知らないものは一寸面喰らはせらるゝ。此官僚政治の弊害を何うするか。之は古い問題であつて又今度の事件に依つて新たにされた大いなる問題である。

今度の犯罪事件に就いてもう一つ言ひたい事がある。何處の役所でも自分の內から不屆な奴を出すと如何にも不面目に考へるといふ所から、出來る丈けは之を庇つて白いものも黑と云ひくるめようとする弊風のあることである、いよ〳〵隱し切れないと云ふ時までは何處までも彌縫する。隱し切れなくなると誠に相濟みませんと言ふので局長が辭職をするとか、大臣が進退伺を出すとか騷ぐ。今度もさうだ、勿論進退伺に値する程の不體裁には相違ないが、斯う云ふ重大犯人を出したからと云ふのでは理屈の附け所が違ふ。平素職務に忠實な男があゝ云ふ犯罪をやつたと云ふのでは何んな人でも騙されるに相違ない。形式上監督不行屆の責はあらうが、夫れ以上に上官同僚に何の責任は無い。けれども只彼等が此事件に依つて偶々暴露された不正事件、並びに外米管理事件の大失態のあつたに拘らず永く之を知らなかつた事、或は等閑に附して居つたと云ふ事に就いては、斷じて其職務上の責任を免るゝ事は出來ない。此肝腎の點は知らぬ顏で、只稀代の惡人を出したからと云ふ丈けでいゝ加減に責任を免れやうとするのは不都合だと思ふ。世間も亦稀代の惡人を中から出したと云ふ事に責任があるやうに考へるのが

間違つて居る。又斯ういふ考があるが故に、兎角今日の役人社會にはいよ〳〵始末のつかぬ破目に至るまでは出來るだけ內輪の醜穢を外に出さないやうにと努むる惡い癖がある。此弊は殊に軍界に著しいと聞いて居るが果して然るか。中內の恥を明るみへ出すなと云ふ、臭いものに蓋をする主義は固陋なる封建時代の道德としても餘り感服は出來ない。今日の明けつ放しの政界に於ては、糺彈すべきものは厭く迄糺彈して假借する所なきを必要とする。併し此事は只今度の事件に附帶して序に一言して置く迄の事である。

七月十五日發行の

「勞働問題」號

の豫告は本號卷末

に在り

ユウトオピア物語（上）

—見れども盡きぬ永劫の夢＊人間共同の長夜の夢—

井箆節三



發端

神が宇宙を創造して、全べてのものが完成したとき、その成績を観やうと思ひ、天地萬物に命令して、いざ活動を始めよと言ふと、神の意匠した如く、整然として一糸亂れず、一齊に活動を始めましたので、神は深くも滿足して、その悅びに堪えませんでした。

人間は繪畫や彫刻や詩歌や音樂を好みます。何故それを好むでせう。自然が立派な繪畫であり、彫刻であり、詩歌であり、音樂であるではありませんか。何故自然の風景の外に、人爲の風景が必要でせうか。人爲は自然の模倣だといふ。たとへば模倣であるにもせよ、自然そのものに滿足せずして、何故人間は模倣するでせう。

それは人間がやはり小さな造物主であるからです。小さな神であるからです。自身が創造したものに一種の悅びを感じるからです。

むかしエルが戰死して、十二日目に蘇生しました。エルは此の十二日間に、三千世界を遍歴しました。そこには運命の娘ラヘシスが居て、運命の糸車を操つて居ります。一度廻轉する毎に、人生の運命が一轉します。その一轉する最初に、今後の運命を選ぶことは、すべて人間の自由です。

古から今に至るまで、人間は彼等自身のために、種々の運命

を選びました。或る時は巧に選びました、或る時は拙く選びました。此の運命の選擇に就いて、多數の意見に滿足せず、自身の考案を設計して、提案したのが「ユウトオピア」です。

　ユウトオピアは「無可有郷」です。即ち一片の夢想です。けれども人間は夢を見ます。聖人に夢なしといひますが、寧ろ聖人こそ夢見る人です。夏になつて、日が暮れると、色々な蟲——いやしくも羽があつて飛ぶ蟲は、大きな蟲でも、小さな蟲でも——燈火を慕つて飛んで來ます。彼等は夏の永い眞晝の曜く光線に醉はされて、光と熱とにはもう充分飽滿して居る筈なのに、それでも彼等には憧憬(あこがれ)があつて、夏の短夜をおちおちと、靜かな夢に明かさうともせず、短い生涯をも打忘れて、彌が上にもあこがれます。それは彼等に危險です。彼等は多くの犠牲者を眼の前に發見します。丁度飛行家が落ちても落ちても、死んでも死んでも懲りないやうに、彼等は冒險を斷念しません。光と熱との犠牲として、その身命を捨てることも、彼等に取つては欣びでせう。(此の可憐な殉教者、熱烈な理想家を、網を張つて捕る蜘蛛は、如何にも憎い動物です。自分も光を慕ふやうな、或は涼みに來たやうな、いやに呆けた顏附をして、庭の隅や檐の下から、のそのそと匍出して、不意に彼等を取つて食ふ、蝦蟇も醜い動物です)。人間はみな理想家です。誰でも多少の理想なしに生きて居る人間はありません。理想は人生の精髓(エキス)です。その人間全體の、或は各自の雜多な理想を、坩堝に入れて精製したら、どんなものが出來るでせう。

　心理學者は申します、いやしくも人間の觀念に現はれることは、どんなことでも、悉く實在の影であると。しからば理想は現實の影なのではないでせうか。プラトオンはヨオロツパの西海に「アトランチス」の大陸があると、「チマイオス」で夢想しました。それゆゑ中世のヨオロツパでは、航海が次第に發達すると、そのアトランチスを發見しやうと、多くの人が努力しました。多くの失望者の後で、コロムブスが遂に成功しました。それゆゑヨオロツパの西海を、今も大西洋(アトランチス)といひます。アメリカが發見せられると、今度は南洋の方面に「アウストラ」の大陸があるといふことを、ベエコンが「新アトランチス」で空想しました。これも多くの失敗者の後で、ボウルミイルが發見しました。それが即ち濠洲(アウストラリア)です。

　一體十九世紀までは、理想の社會は、アメリカか或は南洋に夢想せられ、また實際にも試みられましたが、二十世紀には此の夢想が、またもとのヨオロツパに歸つて、今から三千年乃至二千年前に、リクルグスがスパルタに行つたことや、ヌマがロオマに試みたことが、ロシアやドイツに行はれようとして居ます。

私は謂はゆる社會主義が果して那邊まで實行の出來るものかを疑ひます。けれども人間の理想としては、人間は誰でも一視同仁の清く暖い心を缺いてはならないものと信じます。

古來ユウトオピアを書いた人は、隨分多勢あるやうです。殊に近世になつてから、それが著しく增加しました。私が既に讀んだだけでも、二十幾種に上りますが、尙ほ最近にも色々なのが出ます。或は今後ユウトオピアの一大流行が來はしないか、いや、現に來て居ります。「改造」は一種のユウトオピアです。私は自分の讀んだものの梗概を玆に傳へるに當つて、その目錄を揭げて置きます。

(1) プラトオン「理想國」(前三七五)
(2) キケロ「共和國」(前六〇)
(3) プルタアク「リクルグスの傳」(後九八)
(4) アウグスチヌス「神の國」(四二七)
(5) トマスモア「ユウトオピア」(一五一六)
(6) ハウエル「クラピユウリア」(一六〇七)
(7) カムパネラ「日の國」(一六二三)
(8) ベエコン「新アトランチス」(一六二九)
(9) ハリントン「オオセアアニア」(一六五六)
(10) フエネロン「サレット航海記」(一六九九)
(11) コムト「西洋大同共和國」(一八二二)
(12) カベエ「イカリア航海記」(一八四〇)
(13) リツトン「世界人種未來記」(一八七一)
(14) バルトラア「アイルフオオン」(一八七二)
(15) ベルラミイ「ボストン未來記」(一八八八)
(16) モオルリス「無可有鄉だより」(一八九〇)
(17) ヘルツツカ「自由國」(一八九〇)
(18) 同「自由國紀行」(一八九三)
(19) ウエルス「未來記」(一九〇一)
(20) 矢野龍溪「新社會」(一九〇三)
(21) ウエルス「近代的理想社會」(一九〇五)
(22) 同「舊世界と新世界」(一九〇八)
(23) 同「大國家」(一九一二)

尙ほ一言して置きます。ユウトオピアは空想ですが、それが社會主義に對しても、また資本主義に對しても、おのづから一種の批評です。原文は概ね名文で、小說的でもあり、論文的でもあり、諷刺的でもあり、人道的でもあります。私はしかし其の大略を梗概的に紹介するだけです。

第一 理想國

作者プラトオンは紀元前四二七年、南國の春酣なる五月二十六日に、アテナイの都市で生れました。その家は累代の名門でもあり、また富豪でもありました。プラトオンは千金の子と生れ、非常な天才でもあり、また美男でもありました。古今獨歩の大哲として、プラトオンが即ち眞理であるか、眞理が即ちプラトオンであるか、その思想の旺盛にして、その想像の豐富なのは誰でも驚嘆せざるを得ません。歿したのは紀元前三四七年、享年八十一でした。著作の多くは論文と戯曲とを兼ねた對話（ダイアローグ）で、理想國（リパブリック）は其の中でも、最も長篇の傑作です。プラトオンの師匠ゾオクラテエスを假り來つて一篇の主人公となし、女神ベンチスの祭典に、パイライオイスといふ港の、長老ケフアロスといふ人の邸で、十人ばかりの人々が、「正義」に就いて談論して、色々議論した結果、正義の意味を明白にするには、國家と個人との關係を明白にする必要があるとて、ゾオクラテエスが胸中に祕めた經綸を發表して、理想の國家を説明し、一座を驚かすといふ趣向で、登場人物は左の如くです。

ゾオクラテエス（アテナイの哲學者）
ケフアロス（パイライオイスの長老）
ポレマルヒオス（ケフアロスの息子）
グラウコオン（アリストオンの息子）
アダイマントス（グラウコオンの弟）
トラジユマヒオス（詭辯派の哲學者）
クライトフオン（トラジユマヒオスの友人）
其外數人（默聽）　（時は盛夏）

※

女神ベンチスの祭禮の當日、アテナイの哲學者ゾオクラテエスは、祭禮の樣子を見物せんとて、弟子のグラウコオンと打連れて、アテナイの市の海港に在る、パイライオイスに下向する。やがて見物も終つたので、アテナイの方へ歸らうとすると、パイライオイスに住居する長老ケフアロスの息子の一人で、ポレマルヒオスといふ青年が、グラウコオンの兄弟アダイマントス、ニキアスの息子ニケエラトス、其他の人々と同伴して、これも祭禮から歸らうとして居たが、遙かにゾオクラテエスの姿を認め、急いで傍へ近づいて來る。

ポレ「もうアテナイへお歸りですか。」
ゾオ「まづ其の邊でせうねえ。」
ポレ「私達はこんなに多勢ですよ。」
ゾオ「それがどうしたといふのです。」
ポレ「そちらはたつた二人でせう。こちらはこんなに多勢です。だから私達の言ふことをお聞きなさいと言ふのです。」

ゾオ「何とか方法はないものかな。實は御免を蒙りたいが。」
ボレ「御免を蒙りたいといふには、どういふ理由があるのです。」
グラ「別に理由とてもないが。」
ボレ「それでは私達もあなた方の言ふことは決して聞きませんよ。」
アデ（傍から口を入れて）「今日は夜るになると、祭禮の餘興に炬火競馬の催ふしがあるといふことは、多分あなた方も御承知でせう。」
ゾオ「なに、炬火競馬の催ふしがあると。それはまた珍らしい。炬火を持つて競馬するのかね。」
ボレ「さうです。それに夜になると、祭りも一段と賑かで、それはそれは面白い。切角ここまで來たからには、それを見なくては駄目ですよ。ですから私達は晩餐をして、一緒に見に行かうと思ひます。それに今夜は私の宅へ、多勢若い連中が集つて來る筈ですから、自然愉快な話なども出るだらうと思ひます。まあ強情を言はないで、私達と一緒に入らつしゃい。」
グラ「あなたは餘興が見たいなぞと言つたからには、どうしても行かないわけには行かないでせう。」
ゾオ「ではお伴するとしやうか。」

ボレマルヒオスの家へ行くと、果して多くの青年が、既に集つて來て居る。主人の長老ケフアロスは、今しも庭の祭壇に供物を供へ終つたところで、蒲團の附いた椅子に坐し、花の冠を戴いて居る。ゾオクラテエスの來訪を熱心に歡迎して、直ぐ傍の椅子を進める。
ケフ「ゾオクラテエスさん、何故あなたは度々お出で下さらぬ。私も足さへ惡くなければ、度々私からお訪ねして、あなたにお越しを願ふまいが、かう年を取りましては、何分アテナイの市中まで行くことが大儀なやうなことで。とかく人間といふものは、體の樂しみが少くなると、人のお話を承はるのが、また何よりの樂しみぢや。どうか私の家を集會所にして、時折若い連中と會合することにして下され。」
ゾオ「これは痛み入りました。ところが吾々に取りましては、老人の實歷のお話ほど有益なものはありません。」
ケフ「いや、かう年寄になりましては、もう死んだも同じことで、何の面白味もありません。しかしまた老人には若い者の知らぬ樂しみもある。以前に老詩人ソフオクレエスに、或人が尋ねて申しますには、年寄にも色戀の沙汰はあるか、かう言つて尋ねますと、ソフオクレエスが申しますには、年寄に色戀なぞはない、寧ろ無いのが樂しみぢや、色情といふものがなくな

ると、悪い主人から逃げたやうぢや、から答たのを聞きましたが、成程これは其の通りぢや。けれども、また考へて見れば、これは年寄に限らぬことぢや。若い者でも色欲に淡泊な者は氣が樂じや。すべて色欲に限らず、人間は欲が仇ぢや。欲が失せぬと年寄つても、何時までも氣樂にはなれぬものぢや。」

ゾオ「それはお說の通りですが、しかし世間はどうでせう、あなたのお說に感服せぬ人間も少くはないでせう。それといふのも一つには、あなたが富裕だからでせう。」

ケフ「世間はさうかも知れませぬ。しかし、どうです、世間には、貧乏でも氣樂な人間もあれば、金持でも因業な人間もあります。これは貧乏とか金持とか、年寄とか年若とかいふよりは、その人の性質に出ることです。」

ゾオ「しかし同じく金持でも、あなたのやうに先祖から財産を相續した人こそ、大抵金錢に淡泊ですが、自分が一代で儲けた人は、詩人が自作の詩を愛し、兩親が自分の子を愛するやうに金錢に特別の愛著を抱くやうになるものです。」

ケソ「それは如何にもさうでせう。けれども、また斯ういふことがある。たとへ祖先から樂々と財産を相續した者でも、段段年を取るに連れて、未來のことが心配になる。若い内こそ未來なぞといふことは馬鹿にして居るが、段々來世は恐ろしくなる。だから人間は金持でも、貧乏人でも同じことぢや、若い内から正義を守つて、生涯虛言をいはぬこと、人には義理を缺かぬことこれが何より大切ぢや。」

ゾオ「さあ、その正義の問題ぢやが、正義とは一體どういふことか、これが頗る問題ぢや。なるほど虛言をいはぬこと、人に義理を缺かぬこと、これは正義に相違ないが、例へば人から刀物を借りて、その人が若し發狂して、刀物を返せといふときに、虛言もいはず、義理も缺かず、素直に返すのはどんなものぢや。」

ケフ「なるほど、それは問題ぢや。」

ポレ（此時言葉を挾む）「それでも生涯虛言をいはず、人に義理を缺かないのが、即ち正義だといふことは、シモオニデエスの格言ではありませんか。」

ケフ（中座）「私はこれから祭禮の儀式にちよつと行つて來る。議論の中途で失禮ぢやが、ポレマルヒオスや皆さんに、暫く議論は預けて置く。」

ゾオ「ポレマルヒオス君は、あなたの長男で入らつしやいましたね。」

ケフ（戯れて）「確か、さうだつたと思ひます。」

ゾオ「それでは當然此の議論は君が相續すべきものだ。そこ

で君に尋ねるが、今言つたやうに、場合によつては、却つて虚言をいふことが、正義なこともあるではないか。つまり正義といふことは、他人に對して當然に爲すべきことを爲すことだ。ところが之にも疑問がある。即ち「當然」といふ意味である。例へばシモオニデエスの如きは、「わが味方には惠を與へ、わが仇敵には害を與へ」といふが、眞實どれが我が味方で、どれが仇敵かといふことは、容易に區別の出來ないものだ。味方と思つたのが仇であつたり、仇と思つたのが味方であつたり、世の中は複雜である。殊に立入つて考へると、味方に益を與へるのは、即ち一種の利己である、また仇敵であればとて、一概に害を與へるばかりが、果して正義であるか、どうか。」

ポレ「眞の味方とは即ち善人を謂ふので、仇敵とは惡人のことでせう。」

ゾオ「それにしても、善人が惡人に對して不正を爲す、それが正義といふことは、果して正當であるだらうか。」

トラ（此時まで度々口を出さうとして、人々に制せられて居たが、ポレマルヒオスが難詰せられて、口を噤んだのを機會に、猛然として咆吼する）「おい、おい、諸君は何故そんなに、ぐずぐずと無駄口を叩くのだ。一體ゾオクラテエス君は、人の揚足ばかり取つて居るが、然らば君の意見はどうだ。それを明白に述べ給へ。」

ゾオ「まあ、さう怒つてはいけない。君は專門の哲學者だが私などは素人だ。私などの意見より、君の意見を聞かうではないか。」

トラ「それは意見も語らうが、もし僕の意見が君の意見より正當であつたら、どうしてくれる。」

ゾオ「どうも私は貧乏で、格別お禮も出來ないが。」

トラ「一文も拂ふまいといふのかね。隨分蟲の良い話しだね。」

ゾオ「金さへあれば拂ふがね。」

グラ「いや、その金は僕等が寄附する。」

トラ「宜しい。それでは聞き給へ。僕は確信を以て言ふが、正義とは強者の利益を云ふのだ。どうだ、諸君、一言もあるまい。」

ゾオ「どうも意味が善く分らぬが、正義は強者の利益だとすると、力士は即ち善人かね。」

トラ「それが君の惡い癖だ。人の言ふことに茶々を入れる。」

ゾオ「決してさういふ意味ではない。君の意見を充分に領會したいからである。」

トラ「それでは少し説明しやう。今日政體には色々ある。即

ち專制政治もあれば、民主政治も貴族政治もある。政體が異なるに從つて、利害の見解も違ふから、民主主義とか貴族主義とか專制主義とかの法律を作る。これは政府の人間が、自己の利益を保護するために、人民に强制する正義なのだ。たとへ政體は異なつても、正義が政府の利益を保護する武器だといふことは眞理である。」

ゾオ「もう少し質問するが、人民が政府に服從するのは、正當な行爲であるかどうか。君はそれを正義といふ。しかるに如何なる政府でも、全然過失が無いとは限らぬ。即ち自己の利益に反したことを行ふ場合もある。かういふ場合に人民が政府に服從するとすれば、その結果は政府の利益とならず、却つて損害となるではないか。然らば政府が自己の利益を保護するために、人民に强制するのが正義とは、聊か矛盾した意見ではないか。」

ポレ、クレ、兩人「先生のお說が本當だね。」

ゾオ「そうではないか。トラジユマヒオス君の意見のやうだと、結局正義は强者の利益又は損害といふことになる。」

トラ「君の議論は一種の詐僞だ。たとへば醫者にも過失はある。けれどもそれは藪醫者だ。庸醫が悉く醫者ではない。優れた醫者には過失はない。それが卽ち本當の醫者だ。治者でもそれと同じことだ。本當の治者には過失がない。過失があるのは治者として資格に缺くるところがあるのだ。だから嚴格な意味に於て、正義は强者の利益なのだ。」

ゾオ「詐僞とか瞞者とかいふやうな、言葉は暫く已めにしやう。そこで醫者の例へだが、醫者の目的は何處に在るか。自己の利益が目的か、病氣の療治が目的か。」

トラ「それは勿論病氣の療治さ。」

ゾオ「羊飼の目的は何處に在るか。自己の利益のみが目的ではない、羊の利益も目的である。」

トラ（如何にも殘念らしい樣子、しかし抗辯することが出來ない。）

ゾオ「しからば正義は必ずしも治者の利益を目的とせず、人民の利益をも目的とする。」

トラ「ゾオクラテエス君に質問するが、君は子守なしで育つたのか。」

ゾオ「何故そのやうな質問をするのだ。」

トラ「多分君は鼻垂らしで、鼻を垂らしても拭いて與れる子守もなしに育つたのだらう。だから君は羊飼と羊との區別さへ知らないのだ。」

ゾオ「それは一體どういふことだ。」

トラ「君は羊と羊飼との利益をゴッチャにして居るではないか。なるほど羊飼は羊の利益も計ることは勿論だが、それは羊のためではなく、實は自己のためなのだ。君は樣々に曲解するが今日社會の實際を見給へ。正義の美名を利用して自己の利益を計る者は强者で、弱者はそのために損をする。例へば弱者は正直に多額の税金を納めるが、强者は收入を僞つて税金を胡麻かすではないか。だから大抵の人間は、自分が强者の地位に上つて、不正を働かうと努力する。世間には不正を囂々と批難する人間もあるけれども、それは本心から正義を貴び、不正を憎むからではない。他人が不正を働けば、自己に不利益を來すから、他人を羨望する意味や、自己を擁護する動機で、他人の不正を攻撃したり、正義を喋々したりするだけだ。

斯う言ひ捨てゝ、トラジュマヒオスは席を蹴つて去らうとしたが、一同はトラジュマヒオスを引留めて、尚も議論を繼續する。

ゾオ「或は私が羊飼と羊とを混同して居るかも知れない。即ち君は羊飼が羊を飼ふのは、自己の利益のためであつて羊のためではないといふ。しからば醫者はどうかといふに、君の斷定に從へば、醫者が善良な醫者であるのは、善く病を醫すからで、醫術の眞の目的は、病氣を療治することにあつて、利益が眞の目的ではない。それでは醫者が善良な醫者で、而も報酬なしで療治するとしたら、病人は無報酬で療治を受けるか。相當の報酬を與へるではないか。即ち療治が目的で、利益が目的ではないけれども、療治をすれば利益も亦たおのづから之に伴ふのだ。それはもしも利益を目的として、療治を目的としないならば、それは本當の醫者ではない。それでは政府はどうであるか。元來政府の人々の利益を目的にするのではなく、國民全體の利益を以て目的とするものである。それであるから本當に利益を目的としない人は、好んで爲政の地位に立たない。已むを得ず其の地位に立つのは、三種の報酬のためである。三種の報酬とは何であるか、その一つは金錢である、その二つは名譽である、その三つは刑罰である。」

グラ「最初の二つは分りましたが、刑罰が報酬とは何故ですか。」

ゾオ「金錢も名譽も好まぬ人は、自己の良心の苛責を受ける。天下の生民が苦しんで居る、その苦痛を醫すべき方途を知つて居りながら、爲政の地位を避けるといふのは、其の人に取つて苦痛である。自己が其の地位を避けるがために、自己より不良な人々が其の局に當るといふのも、彼に取つては苦痛である。」

此の日は夏の最中であつたが、トラジュマヒオスはゾオクラ

テエスに追求せられて、益々汗を流して居る。これで一個はホツとしたが、グラウコオンは、どうもまだ不滿に堪へないと思つたか、トラジユマヒオスと入換つて、ゾオクラテエスに喰つてかゝる。これまでの議論を以てしては、正義が不義より利益であるといふ眞理が未だ充分でない。普通に吾々の考へる如く、正義は餘り利益でない、寧ろ不正こそ利益であるが、唯だ正義は安全であり、不正は危險であるからこそ、正義を守るだけではない。

ゾオ「さあ、さうなると問題を換へて、箇人の正義といふことより、國家の正義といふことを、考へて見る必要がある。小さな文字より大きな文字が讀み善い如く、箇人の正義より國家の正義は見易いのだ。必要は發明の母である。國家の起原を考へると、國家は必要から生れたものだ。人間が群居して生活すれば、衣食住の凡べてに亘つて、農夫とか牧者とか大工とか鍛冶とか、種々な分業が必要になる。それで之等の人間は相互に一致して國家を造り、相互に有無を交換する。それが次第に發達すると、附近の國家とも交通して、品物を交易する。そのために貨幣を發明する。かくて人口が增加して、人事が複雜を加へると、正義と不義との區別が出來る。原始時代の社會では、人間は自製の家に住み、自製の衣を著て、自製の物を食ひ、自製の酒を飲んで、家族團欒し、神を讃へて、極めて愉快に生活する。唯だ節制を怠つて、その度を過すが如きことのないやう相互に相戒めるだけのことで、格別正義とか不正とか事々しい問題は起らない。」

グラ「それでは人間の國ではなくて、寧ろ豚の國である。」

ゾオ「如何にも、それは華美な國ではない、けれども、それは健全な國だ。しかし國家は何時までも斯樣な狀態で居るのではない。四方に向つて發展する、そのために戰爭が起る。軍事が國家の一大事業になる。そこで專門の武士が出來る。武士は護國の干城として、國家に重大な地位を占める。武士の教育が必要になる。武士を理想的に教育するには、無用の財産を所有せしめず、而も衣食に困らぬといふ方法が必要である。しからされば武士をして其の職業に專念し、國家と生死を共にする覺悟を持たせることが出來ない。一體人間を墮落させる最大の原因は何かと云ふに、それは富貴と貧乏とである。餘りに富めば職分を怠り、餘りに貧しくても仕事が出來ない。しからば武士をして富貴でもなく、貧乏でもなからしめるには、如何にすべきかといふに、それには幣制を改革して、此の目的に添はせねばならない。凡そ國家に必要な根本條件は如何といふに、知慧と、勇氣と節制とである。治者は知慧を司り、武士は勇氣を司り、

國民は節制を司る。これは個人でも同じことで、知恵は即ち理性の作用、勇氣は即ち意思の作用、節制は即ち感情の作用である。而して此の三つのものが調和するのが正義である。――何た君等はコソコソと内證話しをして居ます。」

アデ「實は只今のお話中に、武士は財産も共有にせよ、妻子も共有にせよとでしたが、これは大變な議論ですから、飽くまで理由が聞きたいので。」

ソオ「その説明は容易でないが、折角言出したことであるから、一應説明するとしやう。私の理想の國家では、武士は質素を專念とし、利欲や贅澤は放棄して、一意職務に勉勵する。これでは武士の生活は、甚だ窮屈千萬な面白くないものゝやうだが、これは決してさうでない。元來理想の國家としては、目的を國家全體に置き、個人は國家と休戚を全く共にしなければならない。今日の國家は一國でも、その實は二國である。即ち一つの國家に於て、富者と貧者とが相分れて、各自一國を成して居る。盜賊でも盜賊同志では互に一致團結する。國民が二つに相分れて國内に相鬩ぐやうでは、國家としては理想的でない。武士が妻子を共有するのは、即ち此の主旨に基づくので、婦人も男子と同樣に體操と音樂とを日課にする。婦人が裸體で體操する、之を今日の思想で想像すれば　隨分滑稽な沙汰であるが、眞理を殺すは大罪である、國制を根本から改革して、理想の國家を建設するには、眞理を回避してはならない。世人は男子と婦人とは、大いに天性を異にするといふが、男女の相異は孕兒の有無、其外には格別の相異はない。婦人にも勇健な婦人があり男子にも惰弱な男子がある。

「かくて財産と妻子とを共有にした理想國の生活狀態を想像するに、上には治者、中には武士、その下には勞民が居る。治者は國内に布告して、有爲の青年を募集する。また武士の好配たるべき優秀な婦人を選拔して、武士と共同の家屋に住まはせ、共同の食事を取らしめる。即ち軍隊と同一である。但し戀愛は自由ではなく、男子も女子も嚴格に秩序と禮節とを遵守する。結婚は治者が媒介して、適當な男女を配合する。結婚には適當な制限を設け、以て人口を調節する。生兒は政府が引取つて、共同の家屋で保育する。生母は一定の時間を計つて、乳兒に哺乳するのであるが、どれが自分の生んだ子か、それは全く知るを得ず、從つて自分の生んだ子に限つて哺乳するのではない。夫婦の關係を維持するにも、また相當の年限を定めて、婦人は二十歳から四十歳まで、男子は二十五歳から五十五歳までを年限として、其他の年齡の夫婦を許さず、公定年限以外で出來た子供は私生兒として待遇し、また公定の年齡に於ても、治者

許可を待たずして、相會ふものは野合である。尤も斯様に生れた子と、生んだ母との關係を全然知らせないことにすると、親子の區別といふものがなくなる。そこで男女が結婚して、十七箇月を經過した以後に於て生れる子供は、たとへ自分が生まない子でも、それは共有の子供として、その子供をば我が子と呼ぶ。子供も自分が生まれた時から、十七箇月以前に於て結婚した男女に對しては、たとへ自分を生まなくても、それを共有の父母として、彼等を父母と呼ぶことにする。

「しからば斯様な方法は、果して如何なる效能があるか。凡そ國家の大弊は國民の不和分裂である。さうして國民の不和分裂は主として財産や妻子をば私有するのが原因である。箇人を國家に比較せよ、一本の指が傷いても、直に全身が苦痛を感ずる。若しも國家全體の利害と國民各自の利害とが、全然一致するならば、各人は互に爭はず、互に苦樂を共にするであらう。されば妻子を共有にし、財産の私有を禁ずるならば、國家顛亂の主因たる國民の不和分裂を、根本から統一することが出來る。而も此の方法を實行すれば、國民は唯だ各自の職務を忠實に勵行すれば、無用の富に戀々たらず、而も衣食に營々たらず、何等煩悶も苦痛もなく、それこそ眞に幸福な生涯を送ることが出來る。

「諸君は之を空想と思ふか。如何にも今日このことを俄かに行ふのは困難である。それは今日の政體では、それが行はれないからである。先刻トラジユマヒオス君も言つたが、今日政體には四つある。第一は卽ち權勢政治で、現にスパルタやクレテで實行して評判の佳いものである。第二は寡頭政治であるが、これは餘り評判が善くない。第三は卽ち民主政治で、これは第二より下等である。第四の暴君政治に至つては最も劣惡な政治である。しからば理想の政體は如何、それは哲人政治である。それ人間の精神には、理性と意思と感情とがある。國家に於ても亦た然り。卽ち治者は理性であり、武士は意思、勞民は感情である。哲人とは卽ち理性の發達して、充分に意思と感情とを統御することの出來る人だ。故に理想の王者は當に哲人でなくてはならないのだ。だから國家を政體によつて個人の性質に例ふれば、第一は卽ち野心の人、第二は卽ち貪欲の人、第三は卽ち放縦の人、第四は卽ち横暴の人、第五は卽ち明哲の人だ。

「しかるに今日世間には、第五の人が無い如く、また第五の國もない。けれども、それがためにこそ、正義が完全に行はれない。第五の人、第五の國、それは一片の理想としても、理想必ずしも無用ではない。たとへば畫家が美人を描く、そのやうな美人は世界に無い、けれども美人畫は無用ではない。昔、

といふ者が、死んで十二日目に蘇生した。エルは此十二日間に、靈魂と化して大衆と共に、三千世界を遍歴した。その話しをすれば永くなるが、そこには審判もあれば、煉獄もある。「必然」の娘ラヘシスが運命の紡車を操つても居る。紡車が一轉する毎に、人生も一回展廻する。その回轉の初期に當つて、人間は將來の運命を自由に選擇することが出來る。――エルの話しは如何にも奇怪だ。けれども後世の人々は、このエルの物語によつて、靈魂の運命を信ずるやうになつた。吾々も此の物語に柔順ならば幸福であらう。」

議論はこれで終りましたが、さて約束の烟火競馬を見に行くことは如何したでせう。餘り話に花が咲いて、一同はそれを忘れたと見えて、果して餘興を見物したか、プラトオンの書物には、それが書いてありません。

第二　リクルグスの傳

プラトオンの後三百年、ロオマの哲學者キケロも亦た「共和國」を書きましたが、これはプラトオンの「理想國」の摸倣で、「エルの物語」の代りに書いた「スキピオの夢」が幾分か面白いくらいのものです。キケロより半世紀後に、プルタアクの書いた英雄傳中、「リクルグスの傳」に至つては、勿論リクルグスの傳記ですが、これはリクルグスの傳記を假りて、プルタアクが濟世の經綸を吐露したものとも想はれます。(プルタアクが英雄傳を書いたのは、第一世紀の末葉です。)

リクルグスは果して何時頃の人か、世說が區々でありますが、多分ギリシアの氏族時代の共産制度が弛廢して、國政が紛亂した時代に、支那ならば周公の井田とか、日本ならば大化の革新とか、とにかく復古の大業を敢然決行したのでせう。プルタアクに從へば、詩人ホメロスと同じ時代の空氣を呼吸した人のやうです。

リクルグスはスパルタの王族であつたが、累代の國王は朝政を誤り、國家を紛亂に陷れた。リクルグスの父であつた國王は臣下のために弑せられ、長子ポリデクテスが位を紹いだが、これも幾許もなく夭折して、其時王妃は懷姙して居た。天資英明なりクルグスは、衆望を負つて攝政となつたが、王妃はリクルグスに不義を挑んで、若しも王子が生れたら、之を殺してリクルグスを王位に上らせやうと謀つた。リクルグスは王妃の陰謀を憎み、王妃の周圍に密令して、生兒に保護を加へたが、王妃の兄レオニダスは、リクルグスの野心を疑つて、或時リクルグスに毒言を吐いた。リクルグスは之を潔しとせず、直に攝政の位を捨て、飄然として國を去つた。彼はまづクレエテに上陸し、

ホメエロスを始めとして、幾多の人物と交遊し、次いでアジアからエヂプトに出で、リビアからズペインにも歴遊して、諸國の政體を視察した。

しかるに此時スパルタでは、國政が益々紛亂するので、リクルグスを招還することになり、度々使者を遣はして、リクルグスの歸國を促がした。やがてリクルグスはスパルタへ歸ると、國政改革の決心を定めた。リクルグスが思ふには、醫者が病氣を醫すにも、根本療治が必要である。病氣の起る根本の原因を除くことが必要である。リクルグスはまづ親密な貴族を次第に勸誘して、やがて多數の同志を造つた。かくて機會の熟するを見るや、氣の利いた者三十人を選び、之に武裝させて、或日の明方、スパルタの市場に闖入させた。幼弱な國王カリラウスは、叔父が謀叛を企てたと想ひ、愕然として色を失ひ、カルキオイコスに蒙塵したが、やがて一味の主旨を聞いて、却つて之に滿足し、國政の改革に賛成した。元來國王は好人物で、萬事を叔父に一任したので、リクルグスも大いに安心して、自由に手腕を發揮した。

(一)元老制度　スパルタを理想の國家となすべく、リクルグスは種々の新制を施したが、中にも第一に重要なのは、元老の制度である。プラトオンが言ふやうに、國王の權力が餘り強大であると、專制に渉る虞があるので、元老に國王と同等の權威を分つて、國王の横恣を制肘させる。從來はとかく國政が、專制主義に流れるか、民主主義に陷るか、いづれかの極端に走る弊害があつたが、元老の制度を設けた結果、丁度船舶の底荷のやうに、それが中間で平衡を維持するための方便となつて、二十八人の元老が、若し人民の勢力が餘りに跋扈するときには、國王を助けて人民を抑へ、また國王が專擅に渉らうとする場合には、民意を支へて國王を阻む。

元老の定員を二十八名としたのは、アリストテレスに從へば、最初定員は三十名であつたが、二名は憚つて受けなかつたので、自然に二十八名になつた。またスフエルスの説では、定員は最初から二十八名であつた。しかし私(プルタアク)の意見では、當時國王が二人あつて、二十八人の元老と合せて、三十名となつたのである。

之等の元老が會議すべき建物とては別になかつた。蓋し徒らに議院を莊嚴にして、彫像や繪畫で飾り立て、芝居じみたことをするのは、議事に有害無益である。元老會議の場合には、一般人民にも參列を許した。但し人民は國王又は元老の提出する議案に對して、參否の意見を發表するだけで、議案を提出することは出來ない。若し人民が國法を無視する如き行動に出づれば

ば元老は議會を解散して、翌年に至らざれば再開しない。

(二)土地國有　第二は土地の公有で、これは元老の制定より、尙ほ一層の勇斷である。當時貧富の懸隔が甚しく、人民は概ね土地を失ひ、富は少數に集中した。是を以て人民は頻りに不平を懷へたので、リクルグスは根本から此の弊害を一掃せんと決心し、土地の所有者に勸告して、その土地を放棄せしめ、人民に平等に分配した。斯く財産を平分した結果、自分が他人より立優らうと欲するにも、一に德性を涵養し、才能を鍛錬することしか、他人を凌駕する方法はない。全國の土地は三萬九千に分割せられ、九千は市中の人民に、三萬は市外の住民に與へた。土地分割の區數に就いては、尙ほ二三の異說があるが、これは其後に至つても度々變更せられたのであらう。一區の土地からの產物は、男子は穀物一石四斗、女子は一石二斗の割合で、其外葡萄や油類も之に相當して生產した。リクルグスは後に述べる如く、勤儉尙武を奬勵したから、收穫は之で充分であつた。此の方法を採用して後、或時リクルグスが旅行から歸ると、田畑は一面に整然として、五穀は穰々として實つて居た。彼は欣然として微笑し、ああ、ラコニアの人民は、新しい土地の制度によつて、如何に幸福になつたではないかと、傍人に向つて語つたといふ。

(三)貨幣廢止　次いで一切の動產をも私有することを禁じやうとしたが、それでは人民は收穫を自分で處分することが出來ない。故に別に一策を案じ、まづ金貨と銀貨とを廢止し、貨幣は一切鐵錢となし、而も其の量目を低くして、巨額の金錢を所有することを甚だ困難ならしめた。たとへば十圓の鐵錢を貯藏するには、一室を之に充當するを要し、また之を受取るには牛車一輛を要するのである。之を實行した結果、種々の惡德が跡を絕つた。他人の金錢を盜むにしても、多く盜めば始末に困る。少し盜んでは何にもならない。之を錆びさせないためには、錢を酢に漬けて置かなくてはならない。また外國ではスパルタの鐵錢を取り分け輕蔑して、外國貿易に應じないから、スパルタへは外國から無用なもの、贅澤なものは入つて來ない。また品物を外國へ賣つても、得た金錢はスパルタでは一切通用しないから、品物を外國へ輸出もしない。詭辯派とか、賣卜者とか、淫賣屋とか、兩替屋とか、さういふものも跡を絕ち、贅澤は全く廢止せられて、寢臺とか、椅子とか、卓子とか、有用なものしか製造しない。而も無用な生產を廢して、專ら必要な品物の製造に努力する結果、技術は非常に進步した。

(四)共同食事　これでも、まだ食事などに贅澤があつてはならないといふので、自宅で食事することを禁じ、公共の食堂

設備して、人民は共同の食事を取ることにした。これは贅澤や奢侈の悪徳を除くためのみでなく、また經費も低廉であり、且つ健康にも有效であつた。但し此の制度を創定した當座には、富者は貧民と同席して、同一の食事を取ることを嫌ひ、それでは何處に金持の有難味があるか分らないとて、大いにリクルグスの處置を憎み、或日多勢團結して、手に手に石を振り上げつつ、リクルグスを襲撃した、リクルグスは身を以て逃れたが、途中でアルカンデルスといふ青年が、突然ステツキを以てリクルグスを撃つた。リクルグスの隻眼からは鮮血が全面に流れ出した。之を見ると群衆は俄に同情を催ふして、アルカンデルスを引捕へ、リクルグスに謝罪した。リクルグスは少しも怒らず直に一同の罪を赦し、アルカンデルスは改めて自分の周圍に召仕つた。青年は日夜リクルグスに私淑し、その行動を實見して、リクルグスの寛厚と勤勉とに感動し、或時友人に語つて曰つた。リクルグスは往々にして高慢苛刻と誤解せられるが、天下に此人ほど溫厚で篤實な人は決してない、と。

この共同食事のことを、スパルタではフイデイチアと呼んだ。これは「親密」の意味である。共同食事の場合には、一箇の食卓に十五人前後が著席することになつてゐて、各自は毎月穀物二斗、葡萄酒二斗、乾酪(チイズ)五斤、無花果二斤半、並に肉類の代金若干を持參する。果物の初生を獲た場合、又は鹿肉を得たときには、その一部を供給し、其他は狩獵の場合に限つて、特に自宅の食事を許す。以上の規則は永い間、頗る嚴格に勵行せられ曾て國王の一人アヂスが、アテナイ遠征に成功して凱旋するや王妃と食事を偕にせんと欲し、自邸で食事することの特許を求めたけれども、食事奉行は之を許さず、國王は大いに怒つて翌日凱旋の供物を神前に供へることを怠つたが、奉行は國王に罰金を課した。

食卓に出席するには、會員一同の賛成を得なければならない。例へば或人が新に加入せんと欲する場合には、會員は各自給仕が頭に乘せて歩く皿の中へパンを投げ込む。その中に若し一つでも平たく推潰したパンがあれば、入會を拒絶せられる。

(五)尚武敎育　リクルグスは法律を悉く不文律にし、成文法を排斥した。これは國民をして法律の強制を待たず、法律の精神とするところを、一身に體得せしめるがためである。また特に贅澤を忌み、質素を尚ぶことを敎へた。例へば門でも天井でも、唯だ斧をかけただけの材木を用ひ、鉋を掛けることを禁じた。されば後年スパルタの國王レオチキダスが、コリント國王の招待を受けたとき、食堂の天井や柱に華麗な彫刻が施してあるのを見て、非常に珍らしいものに思ひ、「當國では此樣な木が

生えますか。」と眞面目に訊ねた。

スパルタでは女子にも男子と殆ど同樣の教育を授け、處女でも競走や角力や輪投、槍投などの如き、體育と武術とを練習し、且つ男子に對して羞恥を感ずるが如きことなからしめるために、處女も青年と同樣に、裸體で大道を濶歩させ、また祭禮の場合には、青年男子の面前で、處女に裸體で踊らせる。戰場で卑怯を働いた武士は、かういふ場合に處女から擧動で嘲笑せられることがある。しかし婦人の裸踊は、決して醜いものではなく、すべてが愼ましやかであつて、少しも卑猥に涉らない、寧ろ清淡高潔で、極めて神聖な感じを與へた。

尤も處女の裸踊は、おのづから青年の結婚に對する欲望を刺戟した。プラトオンは之を批評して、少女の裸踊が青年の戀情を挑發するのは、數理の如く當然で、正に百發百中であると云つた。しかしスパルタでは一般の獨身に特別の負擔を課し、男女の結婚を奬勵もした。故意に獨身を守る者は、少女の裸踊を見るを得ず、且つ寒中に裸體になつて、獨身者を罵倒した歌を唄つて、市中を一巡しなければならない。

男子が結婚しやうと思へば、一種の腕力に訴へて、花嫁を掠奪して來るのである。すると媒介の婦人が來て、花嫁の頭髮を五分刈りにし、之に男子の服裝をさせ、暗闇の中に蒲團を布いて、其上に轉がして置く。すべて男女の會合は絕對秘密に行はれる。花聟は何食はぬ顏して、共同食卓で晩食を認め、其夜は特に酒を飲まず、白面で、花嫁の寢室へ忍んで行き、暫くにして自室に歸り、平素の如く多數の青年と起居を共にする。されば數人の子供が出來ても、未だ一度も白晝に細君の顏を見たことがないなぞといふ珍談もあつた。しかし之が爲めに夫婦の愛情が非常に濃厚で強烈であつた。而もリクルグスは一人の男子が一人の女子を獨占して、それがために嫉妬とか姦通とかいふ惡德の發生すべきことを虞れ、優秀な子種を得るためには、己の妻を優秀な男子に貸すを名譽とし、また老人で年の若い女を妻にしたときには、別に年の若い男を選んで、健全な子孫を得るために、妻に與へることを許し、また他人の妻の優秀なのを見て、自分との間に子を得んと思へば、之が貸與を乞ふことも出來た。蓋しリクルグスの意見では、子供は父母のものであるより、寧ろ國家のものである。故に善良な子女を得るためには、有らゆる便利を計つたのである。即ちリクルグスから見れば、餘所の國々では、人間が牛馬の良種を得るためには、充分の注意を拂ひながら、人間の子種の改良には少しも注意することなく、婦人を一室に押籠めて置くのは、却つて滑稽な愚策であつた。實際スパルタには姦通といふ罪惡は姿を隱した。ゲラダ

スといふスパルタ人は、或時外國で、スパルタでは姦通する者を如何に處罰するかと聞かれて、「スパルタでは、姦通すると、タイゲツスの山上から、コウロッスの河水を、飲むことの出來るやうな長い頸の牡牛一頭を被害者に辨償することになつて居る」と答へた。「そんな牛はないではないか。」「だからスパルタには姦通はない。」

夫婦の間に生れた子供は、父母が勝手に處分することは出來ない。政府の役人が檢査して、健全な嬰兒は土地臺帳に登錄し、病弱な嬰兒はアポセテといふ空谷に捨てゝ殺してしまふ。幼兒の保育も嚴格を極める。小兒が七歲になると、多數の小兒を一組となし、その中の一人を大將にする。すべて小兒の教育は父母が自由にすることは出來ない。小兒は「大將」に服從して、その命令によつて行動する。讀書の如きは唯だ必要なことだけを少し教へるのみで、體育と武育とを本位にした。十二歲後の少年は下衣を衣ることを許されない、一年僅に一枚の上衣を與へられるのみである。夜は葦の褥の中に三四人づゝ一組になつて寢る。その葦を取つて來るにも、決して刃物を用ひない。前途有望の少年は、年上の名士の寵愛を得て、之に隨伴することが出來る。老人は始終運動場で、少年を相手に議論をしたり角力したりして、少年の教育に努力する。少年には食物を與へないから、少年は自己の食物を自身で盜んで來なければならない。もし食物を盜むところを發見せられるやうなことがあれば、其様な鈍物は駄目だといふので、盛んに鞭韃せられた揚句、斷食の罰則を課せられる。だから彼等は機會を窺ひ、四方に眼を配り、人の寢た後や、油斷を見すまし、畑や店に忍び込んで、菓物や菓子を盜むのである。或時一人の少年は、仔狐を盜んで上衣の下に隱したところが、仔狐は齒と爪とで少年の腹を搔き破つた。それでも少年は大腸が露出して卽死するまで隱し終せた。

すべてスパルタの少年は、天眞爛漫で、剛健で、言語は直截簡明であつた。故にちよつと串談を言ふにも、決して無駄な言葉は使はない。或人が鶯の啼聲の名人のところへ誘はれたとき、「僕は本物の鶯の啼聲を聞いたことがあるよ。」或る少年は死ぬまで喧嘩する鬪雞を與へやうと言はれて、「僕は死ぬやうな雞は入らない、死なない雞を見せ給へ。」或人がデマラタスに、スパルタで一番の善人は誰だらうと、煩さく聞かれて答へて曰く、「それは君のやうでない人さ。」

詩歌や音樂も豪快で、老人組と青年組と少年組とに組を分けて、合奏するときはかうである。まづ老人組が唄ひ出す、「吾等昔は若かりき、勇ましかりき、強かりき。」すると青年組が之に合せて、「吾等は若し、今はこそ」すると少年組も合せる、「吾等

もさなり、やがてこそ。」

以上はリクルグスがスパルタに施行した新制の大略である。今やスパルタの人民には貪欲も貧困も無くなつた。各自は無用な財産を持たず、而も必要なものは悉く政府から與へられた。彼等は歌舞と遊獵と運動と會談に時間を費した。三十歳下の人人は市場へ買物に行くことを許されず、三十歳上の人々でも、餘り度々市場に行くのは、恥づべきことに考へられた。けれども彼等は必ずしも嚴格一天張りではなく、寧ろ好謔を奬勵した。

要するにリクルグスは人民をして個人的利害を放棄せしめ、國家と利害休戚を全然一致せしめたのである。或時スパルタで三百名の決死隊を募つたことがある、其時ペダレテスといふ者は、其選に漏れたのであつたが、しかしそれは自分より優れた者がスパルタに三百人以上あるといふ證據であるといふことを知つて、喜色滿面にして家に歸つた。ポリクラチダスといふ者は、ペルシヤへ使節として派遣せられ、その資格を問はれたとき、「もしその命を完うしたならば、その時は公共の資格である、もし失敗して命を辱めたときには、それは箇人の資格である。」

元老議員は最初こそリクルグスが指名したが、其後缺員が出來る毎に、六十歳以上の人々を以て之を補ふことにした。而して之に選擧せられるには、最も善良で聰明でなくてはならない。故に之に推されるのは、天下無上の光榮であつて、また之を得んとする競爭は光榮な競爭である。選擧の方法としては、まづ人民が召集せられ、次いで候補者が招致せられるが、候補者は別室に閉籠められ、人民と顏を合せることが出來ない。やがて準備が整ふと、候補者は抽籤の番號で、順次一人づゝ呼出され、群衆の間を通過する。其時群衆は候補者に對して歡呼の聲を擧げるのであるが、その受けた歡聲の最も大きかつた者が、即ち議員に當選する。新選議員は花の冠を頭に戴せられ、堂々たる行列に送られて、神々を巡拜する。行列が市中を一巡するとき、議員の親族朋友は、食膳を其の面前に捧げ、「閣下の光榮を祝福せんため、立食の饗宴を進呈する」といふ。しかし議員は之を受けず、普通の共同食事を取る、但し此時には特別に二人前の食物が與へられる。議員はその一人分を食ひ、一人分は殘して置いて、やがて親近の婦人達が公會食堂に集まると、其中で最も尊敬する一人の婦人を手招して、彼女に食物を贈呈する。彼女も亦た喜色滿面、得々として家に歸る。

神が天地を創造したとき、萬物が活動を開始すると、それを視た神は心から歡喜に堪えなかつたと、プラトオンも語つたが、今やリクルグスも色々の新制が其緒に就いて、その國民の精神

に合し、その國民の風俗に馴れたのを見て、彼は創造の喜びを感じ、深く滿足したのであつた。しかし彼が第二の希望は、如何にもして此の制度を萬世に傳へたいといふことである。そこで人民を召集し、嚴かに之に告げて曰く、今や萬事が整頓して國家の幸福は確立した、けれども茲に尙ほ一つ極めて大切なことがある、故に私はデルホイの神殿へ、これより出張して、神託を蒙るために、參籠しやうと思ふのである。かくてリクルグスは元老にも、自分が歸國するまでは、決して制度に變更を加へないといふことを誓はせ、さうしてデルホイへ出發した。彼は神前に犧牲を捧げ、自分が制定した政治が果して人民に幸福であるかを、神に向つて尋ねると、アポロの託宣に答へて曰く、汝の新政は善美である、人民が之を守る間は、必ず幸福を享けるであらうと。彼は直に此の託宣を紙に寫してスパルタに送り、今は心安しとて、一命を捨てる決心をした。彼は尙ほ矍鑠として五體健全であつたけれども、自分が一命を捨てることは、國家萬歲の利益である。これを思へばスパルタのために死ぬのは寧しろ喜びであるとて、其日から食を斷ち、從容として死に就いた。さうしてリクルグスの此の希望は、決して空しくはならなかつた。スパルタの人民はリクルグスが歸るまで制度を變へなかつた。かくて其後五百年間、スパルタは國威隆々として、キリシア第一の强國であつた。

しかるにアギス王の治世に、ライサンデルス將軍が、四方の諸國を征服して、夥多の金銀を分捕つた結果、多年勤儉質素に馴れたスパルタに俄然として貪慾や贅澤の惡德が勃興し、リクルグスの政法も遂に破壞せられてしまつた。元來リクルグスの目的は、スパルタをして威武を振ひ、四方を征服せしめるのではなく、自國の安寧を計るに在つた。即ち彼の意見では、國家の福祉は箇人の幸福と同じことで、德を修め、人民を和合せしめるに在る。然り。彼の政法は善美である。故にプラトオンも之を模範とした。而もプラトオンは唯だ議論したが、リクルグスは之を實行した。彼は空論家でなく、實際家であつた。彼の政法がスパルタに整然として行はれたときには、その光景の高潔なるは、一國民の政治といふより、寧ろ一賢哲の淨行であつた。故にスパルタの政法が萬世に傳はること能はず、五百年にして亡びたのは、決してリクルグスの罪ではない、リクルグスの素志を忘却して、國威の隆盛なるに乘じて、濫りに無用の干戈を動かし、四方を征服するに至つた、後世子孫の罪である。

リクルグスはクレエテで歿したが、生前友人に懇請して、自分が死んだら、屍骸を火いて、灰は悉く海に捨てよ、決して遺骨をスパルタへ送つては呉れるなと言つた。これリクルグスの

遺骨が若しスパルタへ送られると、人民は熱にリクルグスが歸つたものとして、誓約を破り、政法を改めるであらうといふことを懸念したからであつた。スパルタの立法者リクルグスの言行は大略かくの如くである。

第三　日の京

今度はトマス・モアの「ユウトオピア」を紹介すべき順序ですが紙面の都合で繰替へて、此の「日の國」を紹介します。これは作者の註釋に依れば、中世の「武士團の隊長とゼノアの船長との詩的對話」です。作者トムマソ・カムパネラは、一五六八年にイタリアのカラブリアに生れ、一六三九年にフランスで歿しました。餘り科學に熱心であつたために、悲慘な半生を送りました。最初はドミニカの僧院に入りましたが、その固陋な思想に滿足せず、ベエコンと同じやうに、自然の現象を研究するには、人爲の書冊に依賴するよりも、自然の作用そのものを材料にしなければならぬと主張し、またベエコンと同じやうに、アリストテレスに中毒した當時の學風を攻擊し、アリストテレスの學問に熱心な態度こそ學ぶべきであるが、之を偶像の如く盲信するのは、信仰を殺す所以である、故に當代の學問は悉く根本から改造する必要があると主張した。カムパネラは斯かる思想を以て、諤々の議論を主張することと十年、此時恰もカラブリアで、イスパニアの暴政に反抗する一揆が出現したので、カムパネラも愛國主義の一人として、捕はれてナポリへ送られましたが、危險思想の人物として最も苛酷な拷問を受け、ロオマ法王はイスパニアの國王に哀訴してカムパネラの寃罪を主張しましたけれども、それさへ終に無效に終つて、カムパネラは二十七年の間牢獄に呻吟し、其間に種々の著作をした、その一つが即ち「日の國」(Ciritas Solis) です。

やがて獄中生活を終り、カムパネラはロオマに去りましたが、法王ウルバン八世の禁令にも拘はらず、依然として諤々の主張を捨てないために、またロオマをも去ることゝになり、フランス公使の下僕になつてパリに赴きました。パリではリシエリウの友人となり、フランス國王からは三千リイヴルの年金を賜はり、またソルボンヌの大學ではカムパネラの著作が正教に違反しないことを保證しました。かくて安穩な晩年を送り、七十二歳の高齢を以て、パリのドミニカの僧院で客死しました。

「日の國」は割註に記す如く、隊長と船長との詩的對話で、アリテエと云ふ船長が、隊長の家に客となり、主人の求めに從つて、航海中の實見を物語るといふ趣向です。

*

隊長「プリテエさん、それでは一つ今度の航海のお話をゆるゆる聞くとしませうか。」

船長「今度は殆ど世界を跨に掛けて、方々へ航海して來ましたが、タプロバノといふところへ到著したときには、一同上陸することになりましたが、土人がどんなことをするか知れませんから、私は木蔭に暫く忍んで居ましたが、やがて其所から出て見ると、此所は赤道の眞下で、見渡す限り平原です。」

隊長「それから何事か起つたのですか。」

船長「大勢島人がやつて來ましたが、女も武裝して居ります。言葉は更に通じませんが、とにかく私を案内して日の國へ連れて行きました。

隊長「それはどんな所でした。」

船長「都は山の上に建ててありまして、四方の平原を見下します。尤も山の麓へも町が續いて居りまして、廣さは直徑一里です。直徑一里と言ひましても、山形になつて居るのですから、平地にすれば一里以上でせう。

町は中心から外廓に向つて七つの圓圍に區切られて、七星によつて名づけてあります。各區は中心から東西南北に向つて、四條の大道で連絡するやうになつて居り、道々には關門が建ててあります。それで要害が非常に堅固で、たとへ外廓の一區を占領しても、まだ六區が殘つて居る。七區を悉く占領するのは容易なことではありません。つまり普通の町を攻めるより七倍も困難なわけです。而もその城壁には、非常に堅固な城寨や城溝や鐵砲が備へてあつて、一區を占領することが、決して容易でないのです。

「私は北の門から案内せられましたが、その門は頑丈な鐵門で、しかも何か不思議な仕掛で、樂に開閉が出來るのです。門を入ると、圓形の城壁に沿つて、宮殿が犇々と立竝んで居ります。第一の城壁と第二の城壁との中間には、廣い間隔が取つてあります。宮殿の前面には寰門(アアチ)が竝び、其上には露臺を設けて、運動場にしてあります。宮殿や露臺へ上るには、立派な大理石の楷段が、高く積上げてあります。室内は極めて莊麗で、窓や壁は三重にして、外側のは凸面になり、内側の凹面になつて居ります。第一以下の圓圍も大同小異でありますが、第一から第七まで上るのに、道路の勾配に綿密な注意が施してありますから、格別山へ登るやうな心持もしないのです。それから中央の一區には、卽ち山の頂上には、眞中に寺が建ててありますが、この寺の建築がまた珍らしい。」

隊長「成程、これは面白さうだ。そこでその寺はどんなです。」

船長「寺の周圍は圓形ですが、壁といふものは更に無く、す

べてが太い圓柱です。中央には大きな御堂があつて、圓天井には噴水を設け、それが祭壇の眞上になります。祭壇には唯だ一箇の地球儀を安置し、天井には様々に天體を描き。その一々に三行づつの詩歌が書き添へてあります。廻廊には金製の七つの燈籠を燈し、鋪道には種々の寶石を鏤め、夥多の椅子が竝べてあります。またその寺の周圍には大小の僧庵が建てられて、そこに四十九人の僧侶が住みます。寺の庭には旗竿があつて、僧侶はその旗によつて始終天候を觀測します。」

隊長「これは隨分面白い。しかし何より聞きたいのは、その國の政治だが、一體どういふ仕組かね。」

船長「その國の王様は坊さんで、人民はそれを「ホオ」と呼びます。つまり「哲學」といふ意味です。これが宗教でも、實業でも、政治でも、法律でも、一切のことを支配する、最高の權力を持つて居ります。ホオを助ける三人の貴族は「ポン」と「シン」と「モル」とです。即ち意と知と愛とです。ポンは兵馬を司り、シンは學藝を司り、モルは生活を司ります。博士には天文博士、地文博士、算數博士、幾何博士、歴史博士、詩歌博士、論理博士、修辭博士、文法博士、醫術博士、生理博士、政治博士、道德博士の十三があります。けれども書物は唯だ一種で、之を知識と呼んで居ります。博士はピタゴラス派のしたやうに、それを一般の人々に説聞かせます。第一から第六までの城壁の兩面には、種々の學問を説明した繪畫が一面に畫いてあります。モルの仕事は色々で、衣食住の一切を司るのですが、殊に男女の配偶には特別の注意を拂ひ、性交の世話までします。これは隨分滑稽ですが、彼等は却つて吾々が、犬や馬の交尾に注意し、優種を得ることに努力しながら、人間自身の性交を自由に放任して置くのを見て、それこそおかしいと申します。ホオはポンとシンとモルとの三つを統括するだけの役目で、自身は何もしませんが、これが何よりも大切なものと崇められて居ります。」

隊長「愈々面白くなつて來たが、一體その國の政治といふのは、專制か共和か、それとも貴族政治かね。」

船長「この國の人種は、もと印度から來たので、マギの剱から逃げて來たのです。このマギといふのは暴君で、非常に人民を苦しめたので、人民はより／＼相談の結果、この所へ移住して、飽くまで道理に適つた生活をして見やうと決心したのです。そこで妻子に至るまで、一切萬事を共有にしました。それは妻子を私有にして、各自の生活を營むと、自然に種々の弊害が出來て他人よりも贅澤がしたいとか、子孫に安樂がさせたいとか、色々の煩惱が起るのです。私有を一切禁止すれば、利己の觀念

は無くなつて、各自が共同の利益を計る。」

隊長「さてさうなると、人間は成るべく他人に働かせて、自分は惰けやうとする。だからアリストテレスはプラトオンに反對したではないか。」

船長「ちよつと説明には困りますが、とにかく此の國の人間は公共のために熱心で、昔ロオマの人民は隨分國家に忠實で、身命をも惜まなかつたと言ひますが、此の國の人間の熱心は、恐らくそれ以上でせう。それといふのもロオマには、私有財産といふものがあつて、國家の利益ばかりを貴び、自己の利益を無視するといふことも出來なかつたからでせう。今日でも坊さんが自己の一族や自己の名譽といふやうなものを考へず、初代の使徒と同じやうに萬事を共有にしたならば、もつと坊さんらしくなるでせう。」

隊長「聖アウグスチヌスでも言ひさうなことだが、萬事が共有になつてしまへば、お互に利益を交換するといふやうな場合もなくなつて、お互の愛情もなくなるわけだ。」

船長「いや、さうではない。財産こそ共有で、必要なものは社會から貰ふことが出來るから、各自が交換する必要はないが、しかし精神ではお互に助けたり勵ましたりする必要がある。現に此の國では、年輩の同じ人間は兄弟と呼び、二十二歳以上の者は凡べて父とか母とか呼ばれ、その以下の者は子と呼んで、自分とか他人とか區別せず、非常に親密にして居ります。」

隊長「どうしてそんなことが出來るのだ。」

船長「それは寛大とか、剛毅とか、慈愛とか、自由とか、正義とか、感謝とか、快活とか、勤勉とか、眞率とか、樣々な善い役人があつて、それが人民から選擧せられ、深切に支配するからで、偷盜とか、殺人とか、淫亂とか、姦通とか、賣淫とかいふやうな、悪德は此の國にはありません。」

隊長「そこでその役人はどうして選ぶのかね。」

船長「それを説明するには、まづ此の國の日常生活から説明しなければならぬ。此の國では男でも女でも、凡べて同じ服裝をして、唯だ女の服は男のより上衣が長いばかりです。子供のときから同じやうに色々な教育を受けますが、それには例の壁が學校で、それで色々な知識を得る。相當な年頃になると、體育を奬勵して身體を强壯にし、更に進んでは料理とか、大工とか、鍛冶とか、繪畫とか、種々の實業を練修させ、各自の天才に從つて種々の職業を選ばせる。どんな職業にも貴いとか賤しいとかいふ區別はない。だから吾々が職人を輕蔑したり、貴族が大勢の奴隸を使役して贅澤三昧に耽るのを見て、彼等は滑稽だと笑ひます。そこで役人を選ぶには、各自の中から適當と認

める者に投票する。その以外にもホオとポンとシンとモルとが特別の役人を選んで、すべてのことを飽くまで公平に合議します。最も最高の權力はホオが持つて居りますが、ホオは飽くまで聰明で、一切の知識を兼ね、殊に神學と數學とには最も精通して居ります。このホオに選ばれるには三十五歳以上でなくてはなりません。」

隊長「けれども一人の人間が、どうしてそんなに博識になれやう。假に立派な學者になつても、俗事には段々迂くならう。」

船長「私もさう言つて尋ねましたが、彼等は斯ういつて答へます。我々の社會では學問といつても、君等のやうに無益なことをコテコテと頭に詰込むのではない、眞に必要な知識だけを井然として學ぶのだ。だから學問も容易であり、そのために俗事に迂くはならない。寧ろ博識な人間こそ治者として最も適任である。」

隊長「どうも分つたやうで分らない。もう少し其の社會の有樣を精しく聞かうではないか。」

船長「まづ衣食住のことを申せば、住宅はすべて共同で、六個月毎に入替はる。職業には肉體の勞働と精神の勞働とありますが、大體は男女共通で、唯だ耕作とか、粉搗とか、さういふ骨の折れる力業は、大抵男子が引受けます。牛の乳を搾ることと乾酪を製造することとは、婦人の專業になつて居ます。これから機織、裁縫、薬の調合、裝飾の製作なども、婦人專門の仕事です。音樂も多くは婦人のものです。

「食事の場合に支度の役目は、二十歳以下の少年と少女とが引受けることになつてゐます。すべて共同住宅には、「臺所と納屋とが設けてありまして、食料や飲物が貯へてあります。さうして、其の二階には、男女の老人が住んで居まして、一同の者を監督します。

「四十歳以上の人々には、年下の者が給仕をしますが、年下の者はお互に給仕をし合ふことにします。食卓には男女が向ひ合つて、右側には男子、左側には女子が坐ります。その靜肅で行儀の良いことは、お寺の食堂と同じことです。食物は一々醫者が檢査しますから、非常に清潔で滋養にも富んで居ります。老若男女が多勢で、清洒とした衣物を著て、上品な談話をしながら、和氣藹々と食事するのは、見て居ても愉快です。それから内で働く者と、外で働く者とが、互に仕事の成績を褒め合つたり、年寄が若い者や子供達を勵ましたりなぞするのも、誠に美はしい風俗です。

「著物は白い下衣の上に、色々の上衣を著るのですが、一年四回更衣をします。それは太陽が白羊宮と巨蟹宮と天秤宮と

宮とに入る場合に、それを標準にするのです。衣服は非常に幾通も準備してありまして、毎日天氣によりまして、係の役人が適當なのを選びます。市中には規則正しく用水が引いてありまして、立派な仕掛で、山の上でも麓でも滿遍なく水が流れ、市民は衣服や道具などを、毎日のやうに洗ひますし、入浴も隨分頻繁にやります。

「妻子は前にも言つたやうに、すべて共有になつて居ります。それで子供が生れると、二箇年間は母親が哺乳する。それから後は、男の子はお爺さんが預りますし、女の子にはお婆さんが引取つて、段々と教育します。それで生れた年も同じで、同じ住宅で育つた者は、性質から容貌まで非常に善く肖て、また兄弟以上に親密です。名前は子供の特色に依りまして、哲學的に名づけるので、更に大人になりますと、職業によつて異名を加へる。ですから其人の名前を聞けば、性質から職業までが一通り推察することが出來るのです。」

隊長「さて其の職業の話しだが、或はどういふ役人になりたいとか、或はどういふ職業はいやだとか、色々な苦情はないのかね。」

船長「それは決してありません。何故かといふに、一人として威張りたいとか、贅澤がしたいとか、怠けたいとか、さういふ考へを起しません。何から何まで共同のためで、自分一人のためではないから、どんな役目でも職業でも、みんな同じことなのです。子供は自分の私有ではない、種族を保存するためだと、聖トムマソも言ひましたが、彼等はその通りを實行して、而も單に子供だけではなく、萬事にこれを應用してゐますですから子供の教育には取り分け注意して、決して自分だけの利益といふやうな觀念を抱かせぬやうにします。

「男女の交りに就きましても、生れる子供のためを計つて、役人が綿密に調査して、適當に男女を配偶します。プラトオンは此の割當を抽籤にしないと、美人を得ない男子から不平が出るやうに申しましたが、これも此の國では無用な沙汰です。何故かといふに、此の國では、男子も女子も大體に於て、各人が平等に發達して居て、男子は凡べて好男子、女子は一般に美人ですから、醜婦を割當てられるといふやうな心配は決してないのです。これは不思議なやうですが、一體吾々の社會では、貧富貴賤の差別がある上に、婦人が體育を怠つたり、懶惰な生活を送つたりして、それが代々押積つて、色々と不自然になつたので、自然の發達を損はなければ、當然此の國のやうになるのです。また此の國では各人に割當てられた婦人の外に、他の婦人と親密に交際することは極めて自由で、唯だ交際の關係上夫婦

の關係とは區別して、性的關係に亘ることは嚴格に禁じてあります。

「人民の善行を彰はすためには、白い衣を著させます。此の國では黑い色を嫌ひます、それは黑は不淨だからです。それゆゑ此の國では黑を好む日本人を好みません。しかし褒められたからとて、決して慢心は起しません。此の國では高慢といふことは最も卑しいことになつて居ます。それから善行といひましても、その意味が大分違ひまして、此の國では自然を貴んで、天眞爛熳であることを、最大の名譽とする。勞働を卑しむとか厭ふとかいふことも皆無です。自然「奴隷」などといふものもありません、必要なものは自分で生産します。おお、わがナポリではどうですか。七萬人の市民の中に、一萬人から一萬五千人までは、殆ど金持の奴隷です。さうして多くの人間は、怠惰と贅澤とに耽つて、種々な惡德を擴めます。しかるに日の國の人間は、唯でも必ず働く代りに、一日四時間しか働きません。其他の時間は有益に、さうして愉快に送ります。貧富の區別などといつては、夢にも見ることは出來ません。富者もなく、貧者もなく、富者といへば非常な富豪、貧者といへば無一物で、つまり非常な金持と非常な貧乏とを兼ねて居ます。ですから此の國の人々は、初代キリスト使徒の生活を大變に倣傚します。」

隊長「あれは勿論尊い事蹟だが、しかし財產は共有としても、婦人の共有はどうであらうか。クレメンと倂正のお說では、使徒の教へから言へば、婦人も共有にせよとのことだが、聖書學者の說に依ると、初代のキリスト信者でも、婦人だけは共有にしなかつたといふことだな。

船長「さういふことは存じませんが、とにかく日の國の人民は、それを實行して居ました。それから此の國には商賣といふことの必要が全くありませんから、金錢といふものも、唯だ外國と交易する場合だけ使用します。ですから此の國の子供などは、あんな小さなので、あんなに大きなものと、交換の出來るのは不思議だと言ひます。外國人にも深切で、三日の間は誰にでも、公費で待遇して與れます。」

（記者これから裁判や行政や軍事や科學のことが出ますが、餘り管々しいから省略します）。

船長「それから一つ面白いことには、此の國の人間は一般に、非常に健康で、快活で、醫藥は餘り必要がなく、病氣は祈禱で全快します。夭死する者も少くて、みな長生するのですが、しかし靈魂の不滅を信じ、死といふことを怖れません。」

隊長「一體宗教は何宗だね。」

船長「宗教の頭はホオですが、宗旨は何宗と限りません。キ

リスト教でも、回教でも、すべて眞理は一致すると言ひます。しかし信仰の根本は何處に在るかと言ひますと、それは宇宙を一體と見て、太陽をわが父となし、地球を我が母となし、空氣を神の靈となし、海水を母の乳となし、太陽からは熱を貰ひ、地球からは食を貰ひ、自然と一體になつて生活する。世界は一つの動物で、人間はその細胞です。それで此の國の人々は、天體を非常に崇拜し、殊に太陽を崇めます。天文學者のトレミイやコペルニクスを大へん尊敬します。しかし最も尊いのは、勿論神でありまして、その神が一切の天體を造つて支配する。世界は無から出來たとか、他の世界が破滅して此の世界が出來たとか、混沌から世界が出來たとか、さういふことは信じません。やはり神が設計して造つたものだと信じます。」

隊長「天文神教とでも謂ふのだらうか、どうも君の言ふやうに、天文にそれほど大した意味もあるまい。見給へ、過去の百年には、その以前の四千年より、もつと大きな進歩をした。これは天文の力ではない、人間の努力の結果ではないか。印刷だとか、鐵砲だとか、磁石だとかいふものが、月や星のことばかり考へて居て、發明の出來るものだらうかね。」

船長「おお、さうです、神樣は人間に適當な時を見定めては、色々授けて下さります。ですから餘り天文に、偏るのは善くないのでせう。」

日本アルプス山間溫泉の趣

水谷竹紫

一

──下々の下々、下々の下國の暑さかな──

俳人一茶は、既にかう云つて居る。

下國はまつたく暑い。おまけに米が高い。涼しくつて、金のかゝらぬ場所はないか。

海もよいが山もよい。そのまた山に溫泉が湧いて居れば更に可い。

山の秀でた事は必ずしも日本の矜ではあるまいが、溫泉の多さ

いことは、たしかに日本人の幸福である。普通の水を沸かした湯の肌さはりのぎごちなさに比べて、地から湧いた自然の湯の何と云ふしなやかさであらう。滑でさらりとして、人の魂の底までも溶けこみさうな、人の心の垢をも凡て洗ひ出しさうな……

特にもそれが三四千尺の高處にあつて、翠巒と秀峰とに包まれて、清淨な谿流に沿ふて居たなら、夏の理想の幾分は、たしかにそこに見出さるゝに相違ない。

夏は山間の温泉に限る。夏の旅行は山間温泉を經巡るに限る。

脂太りで汗かきで、十九貫の肥肉をもてあます私が、夏になると、いつもかう云ふ要求の下に擔ぎ出すのが地圖のつまつた行李である。旅行用には最も都合のよい陸地測量部版の五萬分一地形圖を、あちらこちらと綴合して、水平曲線の渦をまいた山岳地の中から、白蟻の卵に毛の生へたやうな符號を探しだして、その四邊の地形を圖上に讀み初める。毛の生へた白蟻の卵は、温泉所在地の符號である。

箱根―鹽原―那須―伊香保、何れも山川の美觀を作つた涼しい温泉地には相違ない。しかし今日にあつては、餘りに有名で餘りに雜沓に失する。金の匂も人の匂も餘りに濃厚で、避暑客第一の手段たる生活の單純化が却つて害れるやうな、汗を拭きに行つて汗をかいて歸るやうな、いやいやそれも普通の汗ならばともかく、やゝもすれば、したゝか冷汗を流して歸るやうな始末もないとは云はれない。

それはいやだ。

だから私は那須から離れて、大丸や三斗小屋の山深く分入つたこともあるし、鹽原や安代を素通にして上林の翠にしたつた事もある。赤倉よりもその奥の燕や關の温泉がよく、鹽原は福渡戸なんかより、新湯や古湯本が遙によい。

所謂日本アルプスの怪岳峻峰の間に點在して、積雪の中から夏ばかり首を出す諸温泉の如きは、銷夏の場所としてことに可い。

二

私が上河内に行つたのは、昨年の夏の終であつた。松本市の西端渚と云ふ所からカタクリ馬車に乘つて、五里の松本平を西へ、うつら〳〵と揺られて、島々村に着いたときは、もう夕暮であつた。

島々は日本アルプスの玄關口として知られて居る。松本平野の行詰つた處で、梓川の本流に沿うた野麥街道上の暗い寒村だけれど、日本アルプスの旅が流行だしてから、俄に明うなつて、化粧品屋が出來、電信局が出來た。

『この村は非常な借金村でしてね、仕方がないから、山林を濫伐して息をついてるんです』

乘合の馬車の中で、長野縣の山林技師と云ふ人が、かう云ふ内輪話もしてくれたが、旅人の私には、それをどう云ふ意味に取つていゝか分らなかつた。

馬車の着いた處は、清水屋と云ふ宿の門口であつた。清水屋の名は日本アルプスの名と共にかねて親しい名前である。しかし此の宿の主人が此の村の村長で、上高地の溫泉宿も亦この人の經營であるとは、矢張馬車の中で聞いた新知識であつた。ともかくも、こゝに一泊する。

その翌朝、荷物だけは、上高地へ米を運ぶ人夫に托して、私は單身島々谷の溪流に沿ふて分け入つた。昔はどうであつたかしらぬが、今は林道が開けて、ある部分にはトロックの軌道が敷設してある位、道は至つて平易である。

流るゝ水の美しさ、飛び交ふ蝶の夥しさ。

島々川が漸く行詰つて瀨つ瀨となる鮨留と云ふ地點から、德本の峠までは、羊腸たる急坂で、大分に喘がせられたが、峠に立つて翠の林の梢の間から、穗高岳を望んだときは、豪宕と魁偉と淸麗とが一時に込み合つて、思はず聲を上げずには居られなかつた。

『おゝ、シーザーよ』

羅馬市民の偉大なる人格に對して擧げた吠聲と同じやうな吠聲は、私がこの際、ふと口走つた詞であつた。

峠を下れば、愈日本アルプスの內苑である。

唐檜や栂の密林の、旺なるは天に冲し、老たるは道に倒れてその腐ちた樹幹には夢色の蛾が群がつて居た。白骨の並び立てるが如き白樺の林、紫や黃や白の色彩的には單純でまた非常に鮮明でありながら、どこともなく仄暗い趣の漂ふ高山草。かう云ふ景物も續々と展開され初めた。そして磊爛した花崗岩の白砂を流るゝ川水は、曾つて見た事のない碧澄んだものであつた。

河童橋を渡つて熊笹の徑に入つて、石を積み並べた溫泉宿の平つたい板屋根が見え初めたとき、夕陽を浴びた燒岳が、赤裸體に力み返つて、旺んな烟を吹き出しながら、行くての正面に立ち塞つた。私は地の底の恐しい不平を思ひ泛べながら、俄に輕うなつた足取で、上高地の湯の宿に達した。

島々から六里、私の鈍重な歩度でも八時間はかゝらなかつた。

三

上高地は槍から發した梓川の峽谷の稍膨んだ地區にある細長い盆地である。長さは一里ばかり、弓なりに曲つて、その握手の處に溫泉があり、此の宿が建つて居る。木造の二階[illegible]

だゞつ廣い室だが、詰め込んだら五六十人は浴れるだらう。いつの起源かは聞かつたが、浴室の梁に明治三十七年日露開戰の第六日建之と書いてあつた。

湯は宿の右手にある池の頭から湧くので、湧出地で攝氏の五十二度、浴槽では四十度ある。新しく湯を入れ換へた當座は熱いけれども、裸なくすると、丁度の湯加減となる。色は透明で性質は單純泉でなければ、それに近い鹽類泉らしい。

何と云つても、日本アルプスの眞只中、病人の來る處では固よりない。梓府にも穂高にも燒岳にもこゝから登るので、登山家の足溜となるステーションである。宿からくれた手拭にも、Japan Alps station と云ふ妙な英語が書いてあつた。

私が行つたときには、獨人と米人とが大分コグゴタ詰込で、十三になると云ふ女の子も交つて居た。

『よく來ましたねえ、歩いて來ましたか』

と、聞くと流暢な東京言葉で

『えゝ、歩いたの、面白かつたわ』

と答へる。

『嘘でせう、おんぶして貰つたんでせう』

『あらいやだ。嘘ぢやないわよう、私、ほんとに歩いたのよう』

熊踏の黄ろい花や、なゝくら櫻の紅を束ねた花の冠で、山姫のやうに飾り立てた頭を、一寸傾けて、長い前髪しやくになから、人見知りもなく甘つたれた小女は、どう考へても御伽話の中の人であつた。

いや此の小女や御伽話中の人であるばかりではない。上高地そのものが御伽話の境地である。夢の國である。

雨の神風の神雷の神が、その精根の極みを盡して彫り上げた穂高の嶺、花色威の隙間なき鎧を重ねて、白雲母花崗岩の眞白な頭を突出した霞澤岳、大正六年の爆發に、燒かれて折られて枯れ盡した森林の殘骸で、針の山のやうな物凄を示しながら、飽くまでも何怪煙を吐く燒岳。梓林濱の美しい田代ケ池は、游麗と幽邃と云ふ文字の意味を極度まで示してくれるし、燒岳の爆發の爲に谿を埋めて出來上つた大正ケ池は、枯木の林をそのままに、死の國の影を仄めかして居る。

明神の棲處とも思はるゝ宮川池のほとりには、そのむかし日本アルプスの主と云はれた嘉門治爺の小屋があつて、その息子の嘉代吉が今では山案内を廢めて、此の池の岩魚を無心に釣つて居る。

小屋の柱と天井は、黑漆で磨き立てたやうに光つて居た。除りに見事だから、話の序に聞いて見たら、なあに焚火の油煙でかうなるんだと云ふ、しかし檜や落葉松の性のよい生木でなければ

ば艶が出ないとも彼は談つた。

私は、嘉門治以來、幾多の山居ロマンスが此の黑光の裡に塗り込められて居るやうに思はれてならなかつた。

『此の間も、東京の御客さんが來て、珍しいから譲つてくれと云つてなあ、屋根の板二三本引剝して持つて行かつしただあ、都の人と云ふもんは妙なものが好きだなあ』

彼は笑ひながら、かう云つた。

嘉代吉は、もう五十に近いのであらう。岩丈な朴訥な、いかにも山の人である。小一時間も話して居る中に、山の話や岩魚の話、熊狩の話が重い口から鉛をたらしたやうに、ぽつりぽつりとちぎれ出た。

『こけえらの熊あ槍で突んでさあ。熊の穴のねきに行つてな、木の枝でも棒切でも差し出すと、熊の奴馬鹿でな、それを引たくつて、自分の尻の下に敷くんづら、やればやるだけ引たくる。すると、だんだん穴が狭うなつて、今度は熊の奴、穴から首だけ出すんぢやな、その首を隠て居る獵が槍で突き徹しますぢや。かうするのが皮に傷がつかんで一番えいのぢやて』

かう云ふ面白い話もあつた。彼の言葉は明晰で軍隊生活をして居た男であることを思はせる。彼の腹には日露戦役で受けた銃丸が殘つて居る筈だが、今もあるかどうか、それは聞いて見なかつた。

四

上高地は岩魚の名所である。岩魚は鮎のやうな形の、鮎を大味にしたやうな魚で、山中唯一の珍味である。普通のものは四五寸から六七寸だが、大きいのは一尺にも餘るさうな、釣つて捕るのが普通だけれど、上高地では流し網でも捕る。百目三十錢——五十錢で、運のよい日には二貫目から捕れると云ふ。

岩魚は高山の谿谷に棲む魚で、それを漁る翁は幾日も幾日も山に篭て深碧の淵に綸を垂れる。嘉門治翁も之であり、大町の品右衛門翁も黒部の里吉爺さんも亦之れである。熊の皮の衣を纏つて、釣竿を肩にして、あくまでも山の神秘を吸ひ盡したらしい白髪童顔の相貌は、たしかに山神と云ふものの面影に適はしい。山又山のその奥の霧の濃いあたり、ふとかう云ふ人物に會へば、山居の威壓に襲はれた旅人の眼が、どうしても彼等を神仙化せねば止まないのは當然である。私は、槍ケ岳から二股に通ずる峽谷で、かう云つた岩魚釣の翁に出遇した。そしてその足の健さに驚いた。見る見る裡に姿が遠くなる、足下には雲が湧いて居る、不用意に見ると、雲の上でも歩いて居るやう、成程雲に乗ると云ふ事は昔の人の描いた空想ばかりではない、迷信の眼で見た古人の實感であると思つた。

「岩魚を釣つても日に三圓や四圓にはなんですからな、山案内の人夫が云ふ事を聞かんで困ります」

と、村長然とした威嚴で宿の主人が話した。

その爲か、上高地の人夫賃は高い、一日二圓では決して喜い顔はしない。私が槍岳から中房へ拔けたとき連れた人夫は、三圓の外に酒代をくれとも云つた。

上高地溫泉場の宿料は、一泊一圓四十錢、三貫ばかりあつたリユツサツク一個を托して島々からの運賃は、八十錢であつた。

『五』

上高地から西に燒岳を越せば、その山麓に蒲田の溫泉がある。もうこゝは飛驒の國で、飛驒から云へば、山奧の奧に當る。

槍と穗高と笠岳から落ちて來る雪解の水の奔流する蒲田川の右岸にある小部落で、家の數は十四五軒もあつたらうか、いかにも山奧らしい色彩の鋭く出た部落であつた。旅宿は二軒かある。どちらがどうか分らないからいきなり今田屋と云ふ看板のある一軒に入つたら、雪袴をつけた女房が俄にばたばたとやつて、二階の角の間に案内した。家の中は蠶飼で忙しいらしい。

思の外に立派な室だ。檜作のまだ新しい木の香が匂つて、欄間には日本アルプスの山々が透し彫になつて居る。そしてこの彫が私の頭に飛驒匠の昔譚を咄嗟に思出させた程も馬鹿に出來ないものであつた。床には丸山晩霞氏が日本アルプスを描いた軸がかゝつて居た。

槍がよく見える、上高地では見えなかつた槍の穗先が、四つ目錐の頭のやうに尖つて、折からの通り雲を貫いて居た。上高地から見ては腕白な鬼の子の様に見えた燒岳も、こゝから見れば深い翠の裾を引き廻して、豊かに安座してゐる。

私の飛驒に入つた第一印象は、この豊かな平和と云ふことであつた。

溫泉は道筋の巨岩のほとりで、浴室もそこにある。から云ふ山奧でも男女二室に仕切られて居た。

湯は無色無臭の鹽類泉で微に鐵味を帶びて居る、浴槽で四十五度だから少し熱い。外から冷水を引いてうめる様になつて居る。

『六』

その夜、私は浴室から漏るゝ平和な飛彈の唄を聞いた。

色の白いは山中の女郎衆、とちの小さわし食せいか
わしが殿御は小池の池の頭にかやを刈る
吉田八重菊八重牡丹、籠で墜ちたよ瀬波へ

吉田八重菊の唄には可憐な傳說がある。平治のむかし、惡源太義平が、飛彈に放浪したとき、吉田の郷士左衛門か許に身を

寄せた。こゝには、八重菊八重牡丹と云ふ姉妹の美人があつた。名にし負ふ源氏の御曹子、たとへ、都では惡源太と名を取つた驍白獰猛の義平でも、飛彈の乙女の眼から見れば都育ちの優美な貴公子であつた。男の目に女が美しければ女の目にも男が慕はしかつた。やがて彼等は戀に落ちて三年の樂しい平和な日が續いた。しかし義平には仕事がある。平氏に對する復讐の念がこびりついて居る、それは八重菊八重牡丹の情の泉でも溶かすことの出來ないものであつた。義平はやがて清盛に一太刀恨まんと都に馳上つた。思に餘つた二人は男の後を追つた。幾山河の險をも戀の力に踏み拓いて、やがて越中路へ拔けると云ふ峽谷の籠を渡つたとき、飛彈の山靈は美人の出國を惜んだかどうか、籠の綱はぷつつと切れて、美しい戀の屍は、はかなくも蒲波の水底に沈んで了つた。

奧山里の溫泉の宿に、かう云ふ話とかう云ふ唄を聞くとき、それがほんの曲もない朴素な鄙唄でも、旅人の身には魂の底の何物かを呼び起さゞるを得ない。私は佗しい樣な懷しい樣な思に充ちながら、ぢつと耳を立てたのであつた。

〔七〕

蒲田は信州者の驛宿と云ふよりも、湯治場である。飛驒ではあるけれども、越中へ路が開けて居るので、湯治客も飛驒の人よりか越中方面からが多い。米なんかの物資も越中から運ぶのださうな。

いや、その米はほんの客用であつて、土地の人は稗ばかり食べて居る。田なんかもとより一つもない。私も稗の飯を一杯所望して見た。ぼろ〳〵したもので粘氣も味もない、しかし氣持が爽で、カレーライスなんどにしたらよささうであつた。

私はまた、この宿の後架で珍しいものを見た。二寸ばかりに切つてある薄い木片で、それが後架の片隅に堆んであるのである。何にするのか一寸判斷がつかなかつたが、ふと下をのぞくと、何の事だい。それが即ち塵紙の代用品なのである。

蒲田の景觀は、笠岳の雄姿と、錫杖ケ岳岩壁群の美觀である。しかし宿からは見えない。向河岸の丘の上の中尾と云ふ部落のあたりから眺めるのが最もよい。錫杖ケ岳の岩壁群は南畫の山水そのまゝである。上高地の風物が歐羅巴的であるならば、これは餘りに支那的である。そしてどちらも、私がもつて居た日本の風景に對する概念を一變せしめたのは同一であつた。

蒲田からは、笠岳と槍と穗高に上ることが出來る。燒岳は上高地までの通路にあるので最も近い。私は燒岳を越して飛驒側森林帶に下つたとき、二三の洞窟の中で偶然にも光蘚を發見した。光蘚は高山の濕潤な洞窟等に生ずる一種の蘚苔類で、その

葉から螢火に黄を加へたやうな美しい鮮緑色の光を放つ珍草である。信州平穏温泉の附近にもあるし徳本峠にもある。駒岳にも飯盛山にもあるさうで、左程珍らしくもないが、燒岳にあると云ふ事は、何れの本にも旅行記にもまだ書いてない新事實である。

蒲田の宿賃は僅に八十錢、日中の溫度が攝氏二十二度、冬のシャツを着て、夜はちと寒い位、金がかゝらなくつて涼しい土地の答案としては、先づ有力な候補地であらう。たゞすこし、こゝまで來る道が面倒なばかりだ。但し越中方面から舟津へ出て舟津から入れば山越の難はない。俥は通らないけれども馬は通ふ。

「八」

浦田から平湯迄の間には、圖上で見れば一重ケ根、福地、山伏と云ふ三つの溫泉地がある。私は刷毛ついでに、それも探つてやらうと蒲田川を西に下つた。道の邊には木苺が熟して蝶と蜻蛉が非常に多い。こゝで大紫蝶らしい珍種を見付けて追廻したがたうとう手に乘らなかつた。

飛驒の里道は淸潔で整頓して居た。岐道の角々には道標が立つて居るし、所々に塵埃箱が据付けてあつて、瀨戸物の屑や硝子の破片はあぶないから之に入れて下さいと云ふ注意書もそれに書いてあつた。

蒲田川が高原川に合するあたりから、左折すると、道の邊に村上神社と云ふ神寂びた社がある。道連になつた村夫子の話によれば、村上天皇が松浦の大夫に犯され給ふて難を此の里に避けさせ玉つた記念だと云ふ事である。

『御崩去の場所は、こゝよりは今少し上の福地の寺だつたさうです。しかし、もう其寺は燒けて了つて何もありません。はあ」

村上帝の時代と云づたら千年も前の事である。それをさも昨今のことの樣に云つてのけた村夫子の言葉に、このあたりの人の單純さが嬉しかつた。

靑々とした美しい粟畑が幾町か續いて、一重ケ根の部落に達した。溫泉は五六丁の右手奥で高原川の右岸にある。村人に聞いても要領を得ないので、地圖と首引にやつと探し當てたら、廢屋の裏に年寄が溜を堀つて居た。去年の洪水で、泉源に川水がついて急に冷えて了つたから、もう駄目だ。それで此の家の人も今は平湯に行つて了つて自分は留守番だと云ふのである。年寄は耳が遠かつた、そして齒もなかつた、御負にまだ耳にたれない飛驒言葉と來たので、之れ丈の要領を握むにもなかなか骨が折れた。

「九」

福地は、一重ケ根の南約半里の部落で、高原川左岸の段丘の上にある。平湯道からも離れて居るので、近代の文化に没交渉な、如何にも昔ながらの飛驒らしい特色のある村であつた。

溫泉の位置を聞いたが、何分にも說明が充分に聞き取れない爲に、屢々道を迷うて、やつと辿りつく。行つて見れば、高原川の河原に湧いて居る溫泉で、天然の岩の凹みをその儘の浴槽とし、それに小さな小屋掛がしてあるに過ぎない。村人の共同湯で湯治客の來る處ではない。もとより旅宿と云ふものもない。

のぞいて見ると、一人の若い農夫がつかつて居たので、一寸斷つて、溫度を計つたり、湯を試驗管に取つて見たりする内にうんうん唸り出した。驚いて聞けば、腹が病んで堪へられないと云ふ。有合の阿片チンキを六七滴水にたらして飲ましてやつたら、私が一浴して居る間にもうけろりとして居た。

彼は藥の神變に驚いたらしい。そして頭を地にすりつけて敬々しく禮を述べながら、談り出した。

彼の話によると、平素から胃が惡いので時々今日のやうな苦しみをするらしい。醫者はあるけれども醫者の藥ではとても納らない。しかし此の湯に暫くつかつて居れば、いつも治るのだ、處が今日に限つて此の湯も少しの效驗がないので、もう死ぬのかと思つたのださうな。

『偉いお藥でがすなあ』

彼は私を醫者と見立てゝ、切りに藥の神變不思議と、それを盛つた私の醫術とを嘆賞した。

私は思はず頬笑んだ。蒙古の奧深く分け行つた友達が、十六の病氣に對して健胃劑の一點張で風邪から齒痛から何でも來いとやつてのけ、外科の治療にさへも健胃劑を塗つて成功したと云ふ話を想出したのである。阿片チンキは成程一時の鎭痛劑として患部を痲痺させる效があるかも知れない。しかしかうまで即時に效驗のあるものとは醫者ならぬ私には思もよらなかつた。私が時々惹起す胃痙攣は、眞正の醫者の技術を以てして、なかなかこんな事ではすまなかつた。

道に飛彈の山奧だ、人間離れがして居る。と、思はざるを得なかつた。

『十』

戯醫者の奇劇は大分の時間をとつた、前途を急がねばならぬ。此の文もまた豫定の紙數がある。多少の驅歩を要する。

しかし、福地から平湯迄はたらだら上りである。十九貫の鈍重な身體はさうさうは運ばない。私はまた平湯の入口で山伏の湯と云ふ湧泉地に地草（みちくさ）を食つて了つた。

山伏湯まで來ると高原川はもう狭い山間の溪流となつて居

る。湯こそ川岸の上にあるので、湧出の區域は可なりに廣かつた。

浴槽もあり、村主の家もそこにあるのだが、溫泉宿ではない。資本がないから宿屋商賣は出來ないんだと、目のしよぼ〳〵した主人が呟いた。

しかし、此の湯の由來は古い。何でも三四百年以前に山伏がやつて來て、今ある湯壺の今一段高い處にある泉源を開いたのださうな。山伏の湯と云ふ名前は即ちそれである。僅かな區域内に七種の性質の違ふ溫泉が出るのだから面白い。味が濃いのもあれば、無味なのもある。色も赤いのがあり、半白濁のがあり、透明なものもある。溫度は湧出地で六十度と云ふ高溫があり、また四十度と云ふ低溫のものもある。そして盛んに湯氣の立上る湯の池に、緋鯉が悠々と泳いで居る。驚いて溫度計をつけて見たら、それは丁度攝氏の三十度であつた。

「十一」

とうとう、平湯に來て了つた。

むかし、武田信玄の別働隊が飛彈に亂入して、險難毒霧に苦しめられ、傷病相次いで生じたとき、とある山陰に白猿の浴するを見て、この地に靈泉あるを知り、一種の野戰病院を設けたと云ふのが此の平湯である。

白猿の方はどうだか分らないけれど、四面は峻嶮な山にあり、その中にすぽりと落ち凹んだコップの底の様な土地だから、風も比較的溫からうし、雪も比較的少からう。傷病兵の休養地としては、誠に適當な安慰な土地であつたに相違ない。

信玄の兵に安慰なら、凡ての人間にも亦安慰であらねばならぬ。特に此は海拔四千尺の地點で翠微の際だから、夏は涼しい。湯も亦數ヶ所は湧出して湧水量も豐富である。夏の湯治場として昔から飛彈山中の一名所であつたことは云ふまでもない。

平湯は乘鞍の北麓で、その一合目である。高山からは八里八町、舟津からは九里十三町ある。信州方面より入るには松本―島々―稻核から乘鞍を越しても來られるし、上高地からは安房峠を經て三里半である、私が來た蒲田からも四里には足りない。

溫泉宿は十軒ばかりある、私が泊つたのは、村山館と云ふ一番奥の正面の家で、東京からの旅客は大低こゝに泊るらしい。私が通された室には柳敬助氏がつい朝まで居られたとかで、荷物やカンヴスがまだ置いてあつた。

柳君のカンヴスには、柔かな綠の美しい色彩で、山の斜面が描いてあつた。しかし山を描きに來た柳君が、まさかに此の飛驒の山中で老教授の死闘を寫生しやうと思はれなかつたらう。

「十二」

話はかうである。

そのとき六十一になる一高の老教授小島憲之氏は、十六になる令嬢を伴つて、上高地から槍の登山を企てた。矍鑠たる老人が花のやうな令嬢を携へて、萬古の雪に杖ついた風貌は想見するに餘ある。槍の登山は首尾よく果して、それからこの平湯に來られたのである。ある日翁はこゝから程遠からぬ大瀧見物に出て行かれた。するとこのとき俄に腹や胸が痛み出して、やつと宿までは歸られたが、苦悶は愈烈しうなつて周圍のものは騷ぎ初めた。しかしこゝには醫者は居ない。三里先の一重ケ根に怪しげなのが一人あるばかり、高山までは八里に餘る。不取敢一重ケ根に使を走らせてその醫者を招いた。駄馬に乘つてとぼ〱とやつて來た醫者は二本の注射を試みて、御大事ではありませんと云つたまゝ歸つて行つた。しかし容體はそれから急變した。そして飛電に驚かされて旅立つた令息と一高の校醫が、やつと島々に達したとき、第二の凶報は令息の手に渡されたのであつた。

山又山を踏分けて、親一人子一人の寂しい旅のやどりに、唯一の杖とも柱とも縋りすがつた父を失つた令嬢の心はどうであつたらう。

「偉い御孃さんでがしたよ。涙一つ落さないで、いゝちやんちやんといろんな指圖をなさいましたよ。感心なものだね。年から申せば、まだほんの子供さんでしたがね………」

つくづく感じたらしい宿の若女房が、飯の給仕をしながらこう話してくれた。私は急に食つたものが咽につまるやうな氣になつた。

米國の哲學者ゼームスは、人間の力が極度まで費されたときそこに新しい力が湧いて來ると云ふ事を說いたと記憶する。令孃の悲痛はこの時極度に達したのであらう。いや極度以上に出たのであらう。そしてこの十六の小娘にも周圍の人々を驚嘆せしめた不思議な力が湧いたのであらう。私はむしろその悲の極みを想いやつて胸迫る感に堪へなかつた。

柳叢伯が此の悲痛な令孃の前に、冷たい死顏を寫生されたのは此の時であつた。そしてこの寫生畫が間に合はなかつた人々の爲には、無二の記念となつたのである。

「十三」

平湯の湧泉は無色無臭の炭酸泉で湧出地は、宿の東の少し隔つた處にある。非常に溫度が高いので、村の人は此の湯で菜葉なんどを煮て居るのである。

小島翁と令孃の哀話は、つひ去年のことなのだが、ずつと昔の平湯には今一つロマンスがある。そしてそれが今日では新し

い木の香の匂ふ薬師堂で記念されて居る。薬師堂の入口にある標柱にはかう書いてあつた。

むかし尾張の國の大名が此地に來て、宿の美しい小女を愛し、親達にたのむで貰ひ受け連れ歸りました。親達も年を取つて居るし、生きて居るうちに一度會いたいので、その後はるばる女の居る處へ訪ねて行きましたが、大きな御殿の中でとうとう一日中あふ事が出來ず泣く泣く歸りました。その時娘が薬師の金の像を親達に送つて、これを私のかはりと思つてくれと云つて慰めましたのを、歸つてから御祠を建てゝ祭りましたが、いろ／＼とあらたかな事が度々あつたさうです。

いかにも山の湯の宿に適はしい物語で、安らかな平和の沈滯して居るこの薄暗い平湯に、一抹の紅をさした趣がある。

そこの別の標柱には、平湯八景と云ふものが記してあつた。湯の平の秋月、中島の螢、四つ嶽の暮雪、向山の紅葉、白谷の寒林、高原橋上の夕照、笠岳の初雪、平湯大瀧がそれである。しかし、こんな月並な八景沙汰よりも、平湯に作ふ眞の趣は、何と云つても、乗鞍岳の大觀である。

「十四」

乗鞍岳は、北日本アルプス連山の南端に大闘然と控へた大山で、標高三〇二六・三米突。山上には舊火口壁や火口丘の群簇起伏し、その間々には[illegible]、其の壯大は槍よりも優れて白馬に次くと云はれて居る。特にも頂上の高臺に、配置よく點在する七つの火口湖は、冷徹で幽邃で、天上の宮殿から墜ちて來た寶鏡かとも思はれる様に美しく輝いて居る。

しかし乗鞍は懷が深くつて裾の廣い山だから、槍や穂高のやうに、他から仰ぐには適しない。乗鞍の山容は險峻ではなくて尨大である。だから、どうしても登つて見なければその全貌の趣を味ふ事は出來ない。平湯から一日で上下出來るし、山上に一泊すれば、悠々と全山の勝を賞美する事が出來やう。案内者の賃金は一日二圓の規定であるさうな。

私が乗鞍に登つたのは、平湯から白骨に越へたときであつた。山上で物凄い暴風雨に會つて、いやもう散々な態、桔梗ケ原の紫の海も鶴ケ池の白妙も碌々味ふ餘裕もなく、生命からがら頂上の石小屋に逃げ込んだに過ぎなかつた。山神の狂臨山暴れの物凄さをつくづくと味つたのも此の時であつた。

焚火に濡れ着物を乾しながら、寒さと恐しさに慄へて居る私を見返りながら、案内者がかう云つた。

『槍や穂高は険阻だから、却つて間違は尠いけんどな、此の山は懐が廣いから、どうかすると人を喰いますだお。』

成程、一度濃霧に會したら、とても方角がつくものではない。熟練した案内がなければ、人里には出られさうにない。成程人を喰ふ山である。しかしそれだけに肌觸の軟な美しい山である。

乘鞍から下山の道で、とある岩壁の蔭に寢て居る人間がある。散々山荒に威嚇された私は、それが不幸な山の犧牲ではないかとはつとした。しかし近づいて聞けば、山々を經廻る行者なのである。

「御山が荒れるからな、こゝに避けてるんだよ。暴風雨が濟んだら登るだあ」

彼は全身を豪雨に打たせながら、水の溜つた凹みに寢込んで平氣さうにかう答へた。私が行者と云ふものの頑健と苦惨を初めて知つたのは此の時であつた。

『十五』

白骨溫泉の宿に着いたのは、もう灯し頃であつた。薄暗い家に浴客が立て込んで、朦々とした浴漕からは、魚の腸の腐つたやうな蒸せたやうな硫氣が鼻をつき上げた。

白骨に對する私の印象は、陰欝と混濁と云ふ二語に歸する。必しも、それが、濡れてほとびて疲切つた身體を引摺つて行つた氣分の故ばかりではない。雨の夕の壓へつけられたやうな佗しさばかりではない。此の宿について居る客觀的存在である。

白骨は安房山の東麓湯川に沿ふた谿間の狹隘な別天地である。溫泉宿は四軒あつてその外に家はない。私が泊つた湯元館は綺麗ではないけれども構は大きい。樂に百人位は泊れよう。

こゝはもう信州の安曇村で、平湯と共にこの邊の湯治場となつて居る。平湯よりは出入が淺いから信州方面飛彈方面からの浴客が非常に多い。近頃では東京方面からも可なりの客があるさうな。松本からの順路は、島々稻核を經て、野麥街道を西進し、奈川の渡から右に梓川の本流を遡るのである。此の間の梓川の奇巍と奔流の美で、日本に於ける最上級の美谿を形つて居る。白骨近いあたりには、鍾乳洞もあつて、こゝの湯治客のよく遊びに行く處だ。

宿の揚手には、安房山の横腹を這ひ、燒岳の裾を巡つて上高地に通ずる一路がある。山毛欅や樺の密林が鬱蒼として、熊笹の間には、時とすると、子を連れた巨熊を見るさうな。私は豪雨を冒して、此の間路を横り、山上から崩れ落つる大石小石の凄しい雪崩に屢々膽を冷した。

白骨の湯は、白く濁つた硫黃泉で、浴槽に於ける溫度は四十四度であつた。浴室は宿の軒續でつまり內湯である。そして浴槽の中に丸太が一本渡してあつた。どうするのかと見て居ると

それに足を乘せて背中を充分に湯に沈めた男が、快げに鼻唄を唄ひ出した。

白骨の宿賃八十錢也。平湯もさうであつたし、蒲田もさうであつた。日本アルプス溫泉地宿料の標準は、先づ八十錢と見れば大差はなからう。

「十六」

白骨を出た私は、更に方向を一轉して中房溫泉を訪れた。

中房は信州有明村の內で、燕岳と有明岳とに挾つた中房川谿谷の底にある仙境である。信濃鐵道の有明驛から入るのが順路で里程は六里、道路は坦々として何等の危險もない。沿道の風物は、平原から森林にそれからまた峽谷にと云ふ風に變化するので、旅路の單調を破つて甚だ愉快である。有明山南麓中房川峽谷の森林帶には多くの光蘚があつて分布區域が里餘に亘つて居る。

私が中房に來たのは、此の正面入口ではなくして、例の通り搦手からの逆落であつた。

白骨から再び上高地に歸つた私は、それから槍ケ岳に上つた。そしてその穗先の尖端から白雲の大波に泛きつ沈みつして居る日本アルプス群峯の大觀を恣にしたとき、私はつひ脚下に座つて居る一つの山の美しさに打たれざるを得なかつた。

見ゆる限の山々が肩を怒らし亂杭齒を剝き出して力み返つて居る中に、これはまたひとり、素直な、淑しやかな輪廓を廻らして、折からの旭にその眞白な膚を染めなして居た。そゝり立つ奇岩もこの山にあつては、程よい調和を保つて居る嶺の巖は黃金を含んだ瑪瑙のやうに燦いて、薄霧の裳は紫にもつれた。

之れが中房溫泉の頭上に聳ゆる燕岳なのである。私は密に彼女に白拍子岳の名を與へて獨り頬笑んだ。

槍から見えた燕岳は、つひ一足飛に飛んで行けさうにも思はれたが、行つて見れば二日がゝりであつた。そしてその途中が二の股小屋の野營、東天井大天井の嶺傳ひと云ふ、この時の旅での最も愉快な一節となつたのである。この樂しい縱走の終が燕岳で、それから急坂を馳せ下つて、中房に着いたのであつた。

「十七」

中房は白骨と同じ樣に、人里から全くかけ離れた別天地である。溫泉宿の外に何にもない。しかし白骨の混濁した憂鬱な趣とは反對に、甚だ明るい澄んだ感のする所である。小區域に小じんまりと納つて、こゝだけの天地に調和のとれた、整つた風趣を保つて居る。

宿は唯一つだけだけれども、棟を異にした新舊大小のさまざまがあつて、長滯留の湯治客にも山登の一夜泊にでも、土地の人

にも都の人にも、程よく適うやうになつて居る。周圍の山川は殘らず此の宿の庭と云ふべきだが、此の宿だけの領分にも可なりの庭がある。そしてその庭の內湯の湧くところが幾ケ所もあつた。

いやもう中房と云ふ所は、湯の釜の上に出來て居る樣な土地である。何處を堀つても屹度熱い湯が吹き出しさうに思はるゝ程、湧出地の數が多く區域が廣い。從つて各棟每に內湯があつて、別に獨立した浴室も建ててある。泉質は、無色透明の硫黃泉で、溫度が非常に高い。湧出地に行けば、卵も煮る事が出來るし、魚さへも煮らるゝのだ。しかもそれが手輕に出來るのだから白炊者には面白い。

私はこゝで、初めて蒸風呂と云ふものを經驗した。堅く閉めきつた一室の、中は六疊ばかり、石疊の上には蓙が一面に敷いてある。一方の壁の下方に小さな窓があつて、それから外の空氣を吸ふ事も出來るやうになつて居る。

飛込んで見た時には何が何だか分らなかつた。湯に入つた感とは逆ふ。却つて冷やつとする位であつた。しかし、じめ〳〵した蓙の上に腹這つて石の枕に顎を載せて暫く凝として居たら、何處ともなく溫味が全身に泌み亘つて、汗の出るやうな出ない樣な妙な工合で、全身の筋肉が蕩けさうだ。しかし初經驗の私はこの濃厚な蒸氣の中に、長い事は我慢は出來ない。頭が茫として、息が苦しくなる。窓の口を開いて冷たい外氣を吸込んで見たらすぐに治まつた。仰向になつて寢て見る。今度は魂までも蕩けさうになつて來た。夢の中で夢の破れぬ苦しみ悶へて居るやうな、跳ね返りたいにも力がなささうな、叫ばんにも聲が出なさうな、魔女の懷にでも壓へられて居るやうな、薄氣味の惡い悅と、悅びの中の不安とが、不可思議な觸感となつて、全身に漲り亘つたのである。

中房の標高一四六二米突、宿料はこゝも八十錢、荷運人夫や山案內の傭賃も、上高地よりはいくらか廉い。

「十八」

日本アルプスの山間溫泉で、まだ私の行つて見ない處はいくらもある。

中房から燕岳を越へて高瀨川の峽に下れば、葛の湯と云ふのもある。大町から入るのが順路で、俥の通ふほど開けた山路が僅に三里ださうな、此の溫泉地から見る北アルプス中部の山々も美しからう。湯も中房と同じ透明な硫黃泉で宿の程度も似たものと聞いた。

蓮華溫泉は白馬岳の北麓にある純然たる山中の溫泉である。白馬岳から嶺傳にこゝへ行つて、それから糸魚川の方にぬけて

見るのも面白い旅であらう。

立山温泉は、立山連峯の南麓、常願寺川の畔にある。信州方面よりする立山登山の策源地である。例の佐々成政が雪中乘越の壯擧を試みたと云ふさらさら峠（ザラ峠と今の地圖には書いてある）は此の温泉の東一里ばかりの地點である。立山連峯は日本北アルプス偉觀中の偉觀で、雄山が最も高く劍山が最も堂々として居る。積雪の神經を搔廻したやうなカールの美觀はこの山が最も多い。

しかし是等の温泉にも勝つて是非とも行つて見たいのは、黑部峽谷の三温泉、祖母谷と鐘釣と黑薙とである。黑部の峽谷は日本にあつて最も雄大な最も幽玄な大峽谷と稱せらるゝもの、その峽間に點在する三温泉に、また特殊の趣の存する事は疑ふべくもない。

當年に於ける私の旅行は、この黑部峽谷の三温泉を目標にして、見殘した如上の諸温泉を歷遊する計劃である。そして、南アルプスの諸温泉、即ち八ツ岳北麓の本澤温泉、赤石岳の登山基點たる小澁の湯、白峰登山の策源地たる西山温泉等の見聞記と併せて、此の拙い繪卷を完結したいと思ふ。

山高きが故に尊からず、湯あるを以て尊しとする私は、瑞西や伊太利のアルプスよりも日本アルプスの方が遙に嬉しいと思つて居る。必ずしも日本人の身贔負ばかりではない。

日本に生れて山の温泉かな

奉與謝蕪村書

野口米次郎

與謝蕪村君、君は僕が常に個人的面識を得たいと希望する人の一人である。偉い人間は遠方から見よといふ言葉があるが、一尺ばかり離れた場所で君を直接見ても、僕は決して君に失望しないであらうと信ずる。

早や二十五年にもなるが僕が市俄古に居た時分のことである。君は市俄古といふ場所を想像することが出來るか？ 恐し

い大仕掛で豚を屠殺する一事だけでも米國で有名な都會だ。君は豚を食つたことは恐らくあるまい。然しある意味に於て支那冠れした君が、豚の味を知らなかつたとは不思議だ。よし君の時代にも今日のやうに豚肉が流行していたにしても、君にはそれを買ふことが出來なかつたかも知れない。聞く所に依ると君はいつも貧態で不遜な妻君（文學者や藝術家の妻君は得てこの種類の女であることは君の時代も今日も相違がない）に罵られて、一本の釣竿を肩にして水邊を彷徨し、一尾の魚を得なかつた時は妻君の怒を恐れて歸家することが出來ず。門人の門を叩いて流宿したさうだ。僕は二三十年も以前の人が、是れ實に詩人的生活の好摸範だと稱賛したやうに、この事に左程の意味を發見しないものだが、斯る不都合な妻君を君がじつと辛棒して持つた所に多少君の性質を想像することが出來ると思ふ。市俄古のことから君の妻君のことに及んで、僕は君に失禮した。許してくれ給へ。

二十五年前僕が市俄古に居た時、ある新聞社から僕が長敬する十人の文學者を語れといふ注文を受けた。僕は君の名前をその中に入れて新聞社に答へた。僕はその新聞社から折返して蕉村とは何物ぞといふ質問に接した。僕は君が『凉しさや鐘を離るゝかねの聲』の作家であると答へて『原詩は十七文字しか無い一寸法師的詩形であるが、その意味は外形程短いもので無い。晝間と夜間に響く鐘聲の區別さへも容易に知ることが出來る位の微妙な感受性の人であるならば、その人は即座にこの十七文字の美を感知することが出來るであらう。作家は何時鐘聲を耳にしたかは我我に語つて居らないけれども、それは夏の朝まだき、世界も人間界も共に全い靜謐な境地にある頃だと了解することが出來る。かゝる朝まだきに目覺めたならば、安靜に入つた身體は自然にその聽官を二倍も敏捷ならしめるであらう。そして思ふまゝ心持よげに撞木を離れる鐘聲に對しても一種の清冷味を感ずることであらう。』恐らく市俄古の薄暗い煤烟のしたで君の名前が語られたこれがそも〳〵の最初であつたであらうと僕は信ずる。從つて君を、少くも市俄古の人間に紹介した名譽は當然僕が貰つて然るべきだと思ふ。然し市俄古で、君の凉しさやの名吟をその當時幾人か果して了解し得たことであらうかは僕の知る所でない。二十五年前だ……今日でこそ市俄古は米國に於ける新詩壇の本場であるが、前いつた如く單に豚の屠殺場といふ點だけでその存在を認められて居たに止つた時代のことだ、どうせ詩に批評眼を持つた人間が居らう筈は無かつたと見て大差無い。僕が君の名吟を語つたとてそれが何うして理解されやうぞ。

蕪村君、僕は外國で君のこの名吟を再び語る名譽を持つた。時は六年前。場所は古色蒼然と苔蒸した牛津のモーダレン大學の講堂。この牛津の冬生活は時間々々に鳴出す寺院の鐘と重ねる酒杯が面白く絡みやつた生活である。僕は『半ば僧侶で半ば中世紀の裁判官』みたやうな蕭然たる樣子の大學教授を前に並べて、君の涼しさやの名吟の說明をした。鐘にちなみのある是等牛津大學の先生連にして君の名吟を理解することが出來ないとすると、外國何處へいつても君の俳句が了解される筈はないと僕は思つた。幸にして彼等は君の作を理解し得たやうにも思はれた。僕は君の名吟を通して日本に於ける俳句といふ詩論を述べたと思ひ給へ。僕の俳句論はいつも芭蕉と君蕪村との間をいつたり來たりして居る。僕は君の『五月雨の空柱や老が耳』を擧げて、それを米國の女詩人リース孃の一詩と比較して、如何に日本の詩は『言葉を捨てるか』の一事に懸つて居るかを說いた。僕は語つた、『リース孃に對して當然拂ふべき尊敬は持つて居るが、孃にしてその詩を歌ひ初めるに Oh, gray and tender is the rain………　なる平凡な起句を以てせなければならぬに於ては、米國の女詩人たることは憐れむ可しであると云はねばならぬ。僕は日本人として惜しげもなく、初めの三聯を犧牲にして殘る最後の一聯を全き金剛石の如く十分に無比に輝かしめたいと思ふのである。日本の詩の殿堂では說明は禁斷である。其處では四疊半の茶席即ち想像の住所に於ての如く、たゞ雅やかな蒼褪めたさゝやかな暗示（リース孃の歌ふ雨の樣な幽靈的な）が僅に息づくことを許されて居るのみである。此米國人の詩的個人格とその詩調の秘訣は、精髓の外一切不必要な分子を拒否する點にあると云はれて居るけれども、その拒否の程度が我我日本人にはまだ〳〵物足らぬ。僕が拒否を餘り多く進める結果として不可解に落ちると非難するものがあるならば、僕はたゞこう答へる……眞の詩は、秘められてこその甘やかな歡びの保たる可き靈の日記が、發する二三語だけて十分な眞の祈禱、たゞ自分の心に對する悲哀と歡喜の記錄たる可きものである。今リース孃の雨の歌に蕪村の「五月雨の」の句を比較して見給へ。この句に依つて僕は直にしと〳〵降る五月雨と空柱とを想像させられる。檐から垂れて居る竪桶に詩人蕪村の世路に疲れた老ひた耳が醒めたのである。リース孃はその詩に Hundred things,and more that Come in at the door と歌つて居られるが、蕪村は口にこそは云はぬけれども、正しく彼の心はその詩情を解し感じて居たのは明らかである。まことに諸君にして若し書いて無い言外の意味が直に讀めぬ以上は、諸君は全く日本詩歌の埒外にあるものと云はねばならぬ。』こうゆう

譯で、實は君を借りて日本俳句の爲め大に語る所があつた。

千八百〇九年に生れて千八百四十九年に死んだ米國のポーが、その詩論に叙情詩を外にしては眞實の詩が無い、長い叙情詩があるとするとそれは短い生命の感觸が連鎖されたものだといつて居るのは、今日の僕の思想を半世紀前に文藝上では無定見で無批判であつた米國で語つたものである。米國ばかりで無い、その時代の西洋では、低級な樂天的な理想で人生の意義が稀薄にされて居たやうに、文藝上詩歌は今日のやうに獨立的存在が認識されて居無つた、云ひ替へると詩歌が無意識に漠然と無邪氣に不得要領に散文の域内を彷徨ついて居たのである。又散文も詩歌にその本領を犯されて平然として居たものである。然るに嚴肅な文藝批評と近代の科學的分類法の鋭敏さの力で、過去の時代で詩歌だと許されて來たものが今日ではその埒外に放されて居る。つひ近頃まで詩歌の中の一として認められて來た所謂叙事詩は、今日では嚴格な意味の上で詩歌で無いことに成つて來た、たゞ詩形を存して居るのみの散文の一種である叙事詩は純な詩でも無ければ又散文でも無い。詰り合成的墮落の文藝であるとなつて來た。僕がウヰトマンの文字を拒絕したいと思ふ意味もその點からである。又近くはメスフイヰールドの一時は人を誘惑し人を激動せしめた諸作に對しても、僕は熱烈な賞讃を持つて居らないことも此處で白狀するに躊躇せぬのである。從つてホーマーのイリアツドでも、又ウオヅウオスのエキスカーションでも、乃至はテニソンのアイデイルス・オブ・ゼ・キングでも、又ロングフエロウのエバンゼラインでも、僕は悉く眞實の詩とは受取らないものである。現實な人生の描寫の權威を持たねばならぬ物語としては、彼等が詩に與へた多くの讓歩は寧ろ悲慘な現象だと見ねばならぬと信じて居る。實際に於て純一な嚴肅な文藝から逃げやうとする公衆が、前記の諸作をその時代々々で歡迎したことは、無邪氣な文藝的享樂の追求と見るべきである。その點から見ると今日メスフキールドの叙事詩も俗文學と見ねばならぬ。又今日の嚴格な文藝論は彼に永い生命を許すもので無いと信ずる。詩界に於ける今日西洋の批評は、少くも半世紀以前のポーの評論まで進んで居ることを僕は愉快に思ふのである……それにしても、日本は詩歌の上では隨分世界に比類無い點まで進んで居たのである。

今日西洋に於ける評論が、日本の俳句の詩論まで進んで來たのである。與謝蕪村君、君は僕と共に此處で一つ酒杯を擧げることを躊躇するもので無いと信ずる。西洋の詩は、いづれも近い中に君の俳句まで進んで來るものと見て大差ない。君ばかりでなく、芭蕉に於てもさうである。實際今日西洋で已に芭蕉

の研究者が少くない。追つては西洋に澤山の蕪村研究者が現はれて來るであらう。君の西洋に於ける將來は非常に多望である。

與謝蕪村君、一つ酒杯を擧げやう。

我我が高い山に登ると眼界が漸次に廣まつて來るに從つて、この自然の現實に接して不思議な機を感ずる、その時の呼吸の苦しさは則ち聲無き驚嘆の詩歌で、刹那のその感觸が眞實な叙情詩である。電光の如く來つて又電光の如く去る、待つて來らずして期せずして來るその瞬間の感觸が叙情詩である。蕪村君、君も君の優秀な俳句はそういう場合の製作に懸つて居ると僕は信ずる。そうで無ければ眞實な詩として君の俳句に價が無い。僕は嘗てこう書いたことがある。「彼等は思はざるに突如として詩歌の音嶺を突貫する自發的自然の聲である。その最善最良なる表現は勿論、暗示の強勢乃至暗閃であらねばならぬ。もと詩歌の領域に於ては、所謂文學上の表白法は第二義的の問題であるが故に、詩歌の聖苑には俗に主觀的とか客觀的とかいふものゝ嚴密な境界線がある筈のもので無い。見給へ、或る俳句の如きは一見客觀的に見へながらも、しかも、その作家がその取扱へる題材に對し最も充實した正確選取を具現して居るの德からして、又直に主觀的に底を徹して居る。評家は或は之を罵つて主客兩觀の斯くの如き交錯は、詩興を蹂躙したものだといふかも知れぬが、此の唯一點こそ實に日本の詩歌が無比獨特の自由な天地を贏ち得て居る所以である。この自由が又即座に自然の萬象と抱擁し得るのである。……若し彼等に目的ありとするならば、その目的は決してその咏出された事實と實際の關係を持たぬ場合さへも多い。然してその目的は作家が如何なる詩的地位に起ち居るかの上に一道の光明を投げやうとするのである。次の如くいふと或は西歐人の誤解を招きやすいかも知れぬが、我が日本俳句詩人が第一義とする所は、恰もウヰルリアム・ブレークの或る作に於ける場合の如く、態度の詩人となる事であつて、その詩は讀者の聰明なる同情の力でその生命を發揮せんとするのである。「若しも斯かる僕の理想中の俳句詩人の希望と目的が西洋の詩人が正當なものであると認めると、必竟それは西洋の今日の詩人が如何に日本詩人少くも俳句詩人に接近して來たかの證左と見ることが出來る。蕪村君、僕は君の名吟を英國の詩壇に紹介して、一般の西洋人に對して有利な暗示となり且つ精神上のプロテストと成つたことを非常に喜んでゐる。僕の詩論を讀み又僕の講演に臨んだ西洋人は確に君の名前を記憶し、又君の作つた俳句に異常な詩の趣があることを承知したに相違無い。勿論僕は君を紹介したといふ事實に特別な誇を持つ

て居るので無い。たゞ君の俳句が彼等西洋人にさへ理解されるやうな機運になつて來たことを愉快に感ずる次第である。

與謝蕪村君、君の時代も今日我我の時代同樣に散文的生活が無暗とでしやばつて、詩的領域を脅したに相違ない。そして君は純一な詩歌の本領を自覺せしめて、輝いた權威ある希望で詩を色取つた偉人である。決して僕は君に阿諛するもので無い。僕は君の詩人としての價値を相當に價付けるもので、如何に僕が君を賞讃するがらとて、決して君を芭蕉の地位まで高めるもので無い。然し君が所謂天明の改新を大成して詩歌の純一性を完成させた大な功勞を誰が否定することが出來やう。君は恰も科學者が金屬を分類するやうに、詩的分子を散文分子から全く分離させて其の間に高い塀を築いた。君の仕事は君以前又君以後の時代に顯はした偉大な詩人がした仕事と少しも異つて居らない。僕は詩歌の生命を嚴格な意味で何處までも獨立せしめる爲め、一面散文的生活をも尊重するものである。蕪村君、君は米國の詩人ウヰトマンの名前を聞いたことがあるか。彼は文字の上又思想の上にも詩歌と散文とを混合させて、結局はその兩者の獨自性と色彩を傷付けその特調に墨を塗つた男だ。僕は深く從來の東詩から詩歌の生命を解放したウヰトマンの努力に對して非常な感謝を持つて居るものだが、彼が散文を放恣ならしめ又その守るべき領域を忘れしめた點を大に遺憾に思つて居るのだ。僕は生活上に散文的分子の利益と慈愛とを感ずれば感ずるほど、實に一方に於ける詩歌の獨立と自由とを尊重して、その兩者を全然分離せねばならぬと信じて居る。そして彼等兩者が立派に分離の實を證明することが出來るのは彼等相互に完全な明瞭な了解が成立して、それ〲自分の守るべき本領を發揮して他の特質を傷付けない點にあらねばならぬと思つて居る。かういふ工合に僕が散文と詩歌の兩部に分類して論じたならば、人は僕を二元論者であるといふ非難があるであらう。若しさういう誤解を招くとすると、それは僕の興味が物象の變化ある色彩を見てあれもこれもゝの變化の下に不變無終に流れて居る同一の音律的生命を餘り多く語らないからであらう。人生は緊張した想像と凝縮した勢力の結合して藝術たることが出來るけれども、藝術を取つて以て人生の全部と見たくない。詰り散文も詩歌たり得る場合が多いけれども、詩歌は結合して散文と同一狀態でないと信じて居る。詩歌と散文とその發想の生命に於て同じ根から出ては居るに相違ないが、その表現の結果は異つて居ると思ふ。蕪村君、君の俳人としての態度も僕同樣ぢやあるまいかと思ふのである。

蕪村君、僕は詩歌の世界では東西兩洋の區別を認めないもの

である。若し詩歌にして上乘の作である時は、假令其處に外面上特別な相違があるとしても、內面的精神に東西の不同がある譯が無い。君がもし今日生きて居たならば、如何によく西洋の詩を理解する俳人であるであらうと僕は信ずる。僕が牛津講演で君の作を擧げて俳句論をした時、彼地の理解ある人の頭腦に君の作品が何んなに明瞭な印象を與へたかを思ふと、六年後の今日に至つてもその愉快を忘れることが出來ない。僕は君の『遲き日のつもりて遠き昔かな』をサベージ・ランドーの名句"I warmed both hands before the fire of life; it sinks, and I am already to depart"に比較した。僕は『詩人蕪村は表面上過去の追憶にのみ止つて居るが（詩的表現の客觀性は上乘なるその詩の効果で作家の主觀性を明白に啓示して居る）、運命の召喚に遇へば已に出發の用意は出來て居るといふ意味は、讀者にして詩の語らざる靜默の半面を讀み得る精神的天賦の豐富なるに於ては明かに了解されるであらう』とつけ加へた。それから僕は君の『公達に狐化けたり宵の春』や『春の夜や宵あけぼのゝその中に』を擧げて、日本春陽四五月の夜は如何に濃艶な自然の呼吸を表示するであらうかを說いた。そして君は如何にも山紫水明で千年の歷史ある舊都の俳人であることを告げた。僕は君の『さしぬきを足でぬく夜や朧月』、『春雨や綱が袂に小でうちん』又『春風のさす手引く手や浮人形』などの名吟を讀むと君の色ぽい情調に誘惑せられざるを得ない。これ等の句は君の何時代の作品であるかは知らぬ。恐らく君の三十五六歲頃の作であらうとも想像される。實際同じ春の句にしても、『垣越にものうち語る接木かな』とか或は又『春の海終日のたり〳〵かな』に比較すると、作の時代に多少相違があるやうにも感ぜられる。兎に角前記諸作が我我に運ぶ濃厚艶麗のうちに一味の薄い寂寥を暗示する稀有な情調に接すると、僕はいつも抱一上人の繪畫を想起せざるを得無いのである。少くも是等の作は君が得意とした文人畫とは何等の關係が無いものであると僕は斷言してはゞからない。勿論君に二面があつて、その一面は抱一式岩繪具の情調であつたに相違ない。卽ち君に純日本式情調の漲る所があつたに相違無い。そして他の一面は澹泊淸楚な水繪具の趣味であることはいふまでも無い。

　與謝蕪村君、君の寂寥味は芭蕉のそれとは異つて居る。『さびしさのうれしくもあり秋の暮』『寒月や衆徒の群議の過ぎて後』、『起きて居てもう寐たといふ夜寒哉』。あるはまた『秋の夜や古き書讀む奈良法師』等の句を見ても、其處に寂寞をどん底にまで極めずに人情味の餘裕を保つて居る。君は必ずしも骨を嚙むやうな『最後の寂寞』を恐れたのではあるまいが、君の京

藝術情調は禪僧的寂寞から巧に逃れて居る。今君の作として最高度の寂しさを表現したものと思はれる『柳散り清水涸れ石ところ〴〵』や又『蕭條として石に日の入る枯野かな』の句でも、之れを芭蕉の句に比較するとその間に非常な相違があることを感ぜざるを得ない。君の春の俳句に『春雨や暮れなんとしてけふも有』、『行春やおもたき琵琶の抱き心』、『日はくれよ夜は夜明けよと鳴蛙』或はまた『菜の花や月は東に日は西に』等があつて、艶美のうちにも侘びしい靜寂の趣をふくませて居ることはいふまでも無いが、君の性質として感情を極點まで走らせることが出來なかつたやうにも思はれる。其處が元祿時代の江戸の俳人の頭領たる芭蕉と、天明時代の上方の俳人たる與謝蕪村との相違して居る點だといふことが出來やう。

僕十五六年前米國から歸つて間も無く京都を訪問して、一友人と共に君に關係ある金福寺を見舞つたことがあつた。その時僕の友人は、こゝは『花守は野守に劣るけふの月』の趣で無く『うき我を寂しがらせよ閑古鳥』の芭蕉の姿を想起せしめる地だと僕に語つた。其時僕はこの言葉を深く了解することが出來なかつたけれども、今日多少たりとも君を理解することが出來るやうになつて、僕の友人は確に眞實な言葉を吐いて居ると思はざるを得ない。

與謝蕪村君！君は芭蕉の如く寂寞に骨や肉を噛まれ、そのうちに自分を捨身の態度で投げて居らない。君は『門を出れば我も行く人秋の暮』や『秋風や酒肆に詩うたふ漁者樵者』の作者で、寂寞を藝術的に眺めて居る。

蕪村君、君を僕が初めて知つたのは隨分と昔のことだ。僕が十九か二十歳の頃、偶然に子規が書いた『俳人蕪村』を手に入れた以來のことである。僕はミラーの山莊に居て、何んなに君の俳句を讀んだであらう。又君の作品を味つたであらう。僕が君の繪畫に接したのは僕が歸朝してから二三年經てからの事件であつたのである。僕嘗て君が書いた書畫戲之記なるものを讀んだ。其の眞蹟が今尚ほ京都の某所に傳へられて居るさうだから君の書いたものに相違ない。『我に妻子眷屬無し書畫をもて妻子眷屬とす。我に朋友無し書畫をもて朋友とす。我に金錢無し書畫をもて金錢とす。我に衣服無し書畫をもて衣服とす。我に家くら田地□林川等無し書畫をもて家くら田地□林川とす。吾遊所へゆかず書畫交易俳諧をもて遊所とす。吾に無師古今の名畫をもて師とす。吾地獄極樂をしらす書畫をもて地獄極樂とす。予天下の法を守りて佛神の像畫を安置すといへどもあへて祈らず我心體を以て神佛とす』る　それに『花七日皈食はすとも書畫の會』『長き日を書畫に迷ひて十二月』の二句が添へてある

文の最後の二箇條は僕の氣に入つた。又書家要略にも、『曾て畫室を構へ、妻子と雖も妄りに入るを許さず、思を構へ圖を審び唯た神想の散亂を恐れ、畫室に入れば卽ち三昧に入る』と書いてある。少くも五十歳以後の君『たれでも五十の坂を越すと人間努力の上に一轉化を見るのが普通だ』は、書畫三昧に入つたと想像される。然し君の書畫戲之記の第一箇條に『我に妻子眷屬なしとあるが、君に大雅堂のやうな琴瑟相和した家内が無いといふ意味ならばそれで差支ない。僕は君のことを書いた書物のなかに君の所謂狡黠不遜な妻君のことを讀んだことがある。君の歿後君の妻君は君の繪の價値が擧つたことを知つて、何んとかいふ男の手にあつた君の繪を胡麻化しとつたことさへ何にかの本のなかで讀んだことがある。して見ると君の妻君は隨分と不都合な女であつたと思はれる。君が『我に妻子眷屬なし』と語つたのも尤もだとさへ感ぜられる。要するに君の前記の文は已に戲記とさへ名乘つてあることでもあり、君が書畫を生命の中心としたことを力說したものに過ぎぬと見ればよいのである。道立が書いた吊文に據ると君の門戶は五十歳頃から賑ひ初めたとあるが、それは俳句の爲めか或はまた君の繪畫のためであつたか。今日殘つて居る彼の俳句から想像すると、概して五十歳以前の情調だと思はれる、——その情調に若い豐饒さがある。恐らく君の詩歌の人否な俳人としての眞生命も、君の五十[illegible]で大略その終結を告げたものと見ることが出來るかも知れない。そして君は君の努力の範圍を繪畫の上に擴張したのではあるまいか。

聞く所に依ると君の五十歳以前は貧乏であつた。繪を描く爲めの絹さへ買ふことが出來なかつたさうだ。君は畜錢を醵つて萬一を僥倖せんと計畫した所、門弟共はこのことを聞いて共屏風講なるものを組織して君が繪を描く爲めの材料に事缺かないやうにしたさうだ。そして成つたもの丶一點が、今日君の作として有名な野馬の圖だといふことだ。この圖は蕭何追韓信圖幷に玄德風雪訪孔明圖と共に、苦心經營罩思苦慮の餘に出來上つたもので所謂努力の繪である。この種の繪は君の文學とは全く無關係の製作だ。ある批評家はこの繪が構圖上の無統一と作が持つて居る匠氣を特に非難して居る。元來支那の繪を模造したもので君の俳句が出して居る飄逸磊落の情趣や靜寂簡素の情調がある筈は無い。かういふ結構散漫で多少煩厭の感ある繪畫を見るといつぞや三越の俳畫展覽會に出て居た漱石氏の南畫を想起せざるを得無い。人間も五十の坂附近へ來ると無暗に何かなし努力を自慢したくなるものだ。これから一轉化しやうとする中間の仕事としては決して非難すべき程のことでも無く、又經

驗上の過程としても意味があると思ふ。

與謝蕪村君、君は竹田から『春星諧不正』(然かるに大雅正而不譎とある)の評を受けたそうだが、竹田は何うゆう君の繪畫の上でこの評言を下したものか僕には分らない。『蕉門十哲』とか『三十六歌仙』とかいふ君のカリケチュアに對して、竹田が支那被れした修辭辯から罵つたものかと思ふと、さうで無い。――竹田はかう書いて君をこの飄逸な滑稽畫の上に認めて居る『元祿間、芭蕉嵐雪其角輩、以俳諧歌鳴、春星撰三十餘人、自圖其像用減筆法、近日畫史所寫人物、面孔鬚眉以至衣摺縐紋用筆行墨、簡便巧黠、別開一體、與古不同、蓋春星作之俑。』竹田が『全然明人』の筆として賞讃したであらうと思はれる君の繪に、『春溪歸漁圖』とか『竹溪圖』とか何んとか詰らない題目が附いて、何れを見ても似たりよつたりした文人畫が澤山ある。君が俳句の上で春と秋に卓越した如く、君の繪畫も矢張り人情味と靜寂の趣味が絡合つた春秋の風景に勝れたものがある。『蕪村は狂怪求強者』とか或は『蕪村は老獪』とかいふ評語は果して何ういう意味だかは知らないけれども、君の繪を見ると君はこんな風景に觸れてあの句を得たのであるまいかと想像される場合がある。君の繪畫は南畫といふ藝術の範圍に屬するものであるが、必ずしも君の繪の全部が竹田を喜ばしめるやうな支那臭いものばかりでも無い。大雅をたゞ上の神として君を下界の仙と看做し、君に俗氣多いといつてある連中は取らぬといつて居るそうだが、僕は其處こそ君の本領だと思ふ。下界の仙たること頗る結構である、――君の繪がさうなつて初めて君の文學と合一することが出來るのである。君の繪畫は君の仕事の延長である。僕は必ずしも君の詩歌を君の繪畫に求めやうとするもので無い。又君の詩歌と君の繪畫が全然異つて居つても少しも差支ないとも思つて居る。

僕自身としては、君の俳句と繪畫の優劣論を避けたいと思ふ。

蕪村君、僕は近々米國へ再び渡つて、彼地の講壇で再び君の文學を語る機會があると思つて居る。目下僕は米國講演を書きつゝあるので、君を充分に評論する時間と餘裕を持たないことを殘念に感じて居る。今はこれで失禮する。重ねていふが僕は君と個人的面識を得たならば何んなに愉快であらうと思つて居る。左様なら。

再び柔道私見に就いて述ぶ

講道館四段　小田常胤

昨年十二月號中央公論紙上に掲載した「柔道改革私見」なる拙文は、其後講道館の先輩並に有段者諸君の一部人士間に圖らずも問題を惹起した結果、幸にも茲に自分の主張に對する多くの批評を聞く事を得、又嘉納師範からも親しく訓諭せらるゝ處あり、爲めに大に悟る處があつたのである。

併し自分の主張に對して論難攻撃せられた人のうちには、自分が拙文なりし爲め其意を充分盡し兼ねた結果、多少の誤解を招致したかの如く思はれる、而し此誤解の多くは實に自分の主張せる處の不足を補ひ、又或る意味に於て自分の主張に對して裏書して呉れたやうにも思はれる。

自分は先に述べてある如く、講道館は、柔道の世界的大本山であると確信して居る。故に講道館の盛衰は將來柔道の發展に大關係を有することであつて、其講道館の有段者の一員としての自分は、講道館の從來深甚の恩義と、其の發展に對する大職と義務とを負ふてゐる事を忘却してゐない事を聲明し得るのである。從つて自分自身は非常に熱心なる柔道の研究者にして、且つ宣傳者たるの使命を有するもので「柔道改革私見」なる拙文の發表も畢竟今後講道館の隆昌ならん事を祈り、柔道の效果をして益々大ならしめんとの微力なる誠意によつてなしたる結果である。

三千年以前印度拘尸那竭國に於て、釋迦が、涅槃に入らせらるゝ三月以前、佛法滅盡經を說かれた時、法の滅盡に對して悲愴悔恨したといふ、四部の佛弟子達は、無上聖眞道を發し、又釋迦滅後の信者をして佛法護持の爲め常に發憤努力せしめた事を思はねばならぬ。

現代柔道は嘉納師範に依つて祖述され、大成され、既に世界的に發展普及してゐる。今や人類幸福增進の上から見ても如斯發展をなした事を大に祝賀せねばならぬ事であつて、今後斯うした發憤努力を必要とする場合機會は益々多くなると確信する。

柔道の精神は、技の熟達に依つて能く發揮し得るものである

といふた自分は、單に其意味に於て、柔道修行の發足點は是に立脚せねばならぬといふ主張に變化はないが、講道館員として、」且つ柔道の發達に努力する宣傳者とした場合は、技に自ら其間多少の思考を要する事であつて、此際身體の鍛錬、精神の修養、技の熟達等、斯道の將來が現在以上世界的に評價せられ尊崇せらるゝ必須條件として是非共必要な事で所謂柔道の理想そのものも此三者を均等に見るは寧ろ必然的であると思ふ。

以上は自分を目して講道館のプロテスタントであるかの如く思つてゐるらしい人達の爲めに一言辯じ、更に多少重複に渉るようであるが自分の主張を述べる。

單に學問といふても其間種々の科目に分かれてゐる。而して其科は更に又幾種かの分科に依つて成立されてゐる。其分科の或一小部分の研究は又其科に對し、亦更に學問といふ廣い立場から見ても是非共必要な事項であるべき筈である。

如上の理由によつて、人類福祉增進といふ如き大なる柔道の目的、即ち均等なるべき身體の鍛錬、精神の修養、勝負術の熟達等の三要項を、更に三分科として取扱ひ得べきは當然の事であつて、又其一分科に就ても其發展向上の爲め種々の研究を必要とすべきであると思ふ。

例へば技の優劣、勝負術の熟達の如きも、歐米各國に於けるレスリング、ボキシング、支那に於ける蹴法、拳法、我國の相撲との比較研究及び之に對する試合法等、又投業を主とするもの、當身殺活を主とするもの、抑込を主眼とするもの等が必要な事は勿論であつて、更に一技に就ても永岡七段の横捨身、三船六段の隅落の如き、他の人の企圖し得ざる深甚の研究が必要なる事であつて、身體の鍛錬、精神の修養等の如き、又各其方面に熱心なる研究を必要とすべきであると思ふ。

醫學を修めた人も、更に内外科、小兒科、耳鼻咽喉科、眼科、婦人科、皮膚科等の内自己が適當なりとする科に向つて更に專門に研究する如く、柔道の修行も或專門の方面に向つて研究する事は、柔道の發展向上の爲めに必要であると思ふ。

自分は講道館柔道教員養成部卒業後、技の研究、勝負術の熟達に身を委ね、幸福にも自分としては適當なる科を選定したりと思惟してゐる。併かし自分は柔道教師として立つ場合は、素より講道館の大精神に法り三科均等主義であるけれども、自分自身今後とも柔道發展の爲めには、粉骨碎身益々此の方面に對する研究の歩を進める積りである。

中央公論に掲載した「柔道改革私見」は煎詰めて、「人間は一種の生物なるが故に、人生を研究するに當りて生物學を發足點とせねばならぬ」といふ生物學者の說と同一であつて、これに

對する幾多宗教家其他の反對者の出現すべきは當然の事である。

勝負といふものを主眼として研究する自分自身からは、其の主張が餘り熱心なりしだけそれだけ、他方面の熱心なる柔道研究者の反對を招致した事であると思ふ。

併かし一歩退いて考へた時、此等專門的研究者の主張も要するに柔道そのものゝ健全なる向上發展を期する爲めであつて、各反對の主張は、百尺竿頭更に一歩を進めた時、各反對者の主張に贊成の裏書をしてゐると思ふ。

自分は勝負術技の熟達といふ事の研究が或る滿足を得た時、其後更に精神の修養、身體の鍛錬といふ方面に向つて研究しようと思つてゐる。

筆を擱くに當り前柔道改革私見に於いて、勝負實力主義を高唱せんと努力した結果、筆に任かせ聊か思慮淺大なる先輩を論難攻擊せし事を謝す。

新聞通信社に於ける講和特電の成績

大井町住人

講和會議も青島問題の所分決定と共に、我日本にとりては第一の段落を見た觀がある、隨つて巴里特派員を有して居る日本の新聞通信社も之によりして第二次の作戰に入らんとしつゝある。此際之等日本の新聞通信社の巴里特派員より打電し來る所謂巴里特電の成績を概觀するのも、時節柄少しは讀者の趣味を喚ぶ事と信ずる。

日本から巴里に社員を特派した新聞通信社は大阪朝日、大阪毎日、萬朝、報知、國民、時事、都、アドバータイザー、國際、電通の諸社であつた、今度の巴里會議に對し東西の新聞界を通じ最も奮發の決心をしたのは、大阪朝日と大阪毎日（東京朝日東京日日）の兩新聞で噂に依ると、兩者とも十五萬圓の電報料を投ずる決心であると傳へられた、朝日では當然杉村楚人冠が行くべきであつたを、例のゴタ〳〵問題で杉村の社內に於ける勢力は非常に微弱となり、西村內閣と共に復活した土屋元作が

巴里特派として派遣された。之に重德來助、渡邊誠吾の兩社員が參加し、少しく遲れて西園寺侯と同船して、鈴木文四郎が増遣された。

大阪毎日では高石眞吾が特派され、上西半三郎、加藤直士の兩社員が其手下となつて巴里に陣取り萬朝は黑岩周六が例の春秋會のドサクサ騷ぎのため、半ば反抗的に出掛けた、そうして大住嘯風と石川半山の二人も一時巴里に落合つたが、それはホンの暫らくの間で、今では大住も石川も英國あたりに居るらしく、石川は頻りに大刀献上のため奔走し講和問題等はテンデ頭に無かつたらしい。

國民からは馬場恒吾が行き、都からは黑岩の秘書格で大谷誠夫が行つた。時事新報からは大西理平と伊藤正德の兩名、報知からは初め松原傳吾が特派され、ズツトを經てから添田社長が視察旁巴里に向つた。アドバータイザーからは秋元俊、電通からは上田碩三が牧野委員と同船して渡佛し、其後から重役の曾我祐邦が出掛けた。

朝日と毎日の講和に對する陣立は、誰も注目する處であつた。而して實際巴里から打電して來る特電を注意して見ると、朝日の特電にも、毎日の特電にもそれ〴〵特別な色彩があり、一長一短を免れず、直に何れが優つて、何れが劣るものとは斷言の出來ぬ點があるが、大體から見て、朝日も毎日も、餘りに競爭的に焦慮し過ぎたゝめ、電報の內容が事實を報道すると言ふよりも、寧ろ想像、觀察的の電報、及び講和會議の空氣を書く樣な內容の電報が多く、隨つて正鵠を謬つたものゝ非常に多かつたのは兩者のために、惜まねばならぬ。殊に山東問題で兩社の巴里特派員が如何に狼狽して居つたかと言ふことは、當時の電報に歷々と現はれて居り、のみならず大阪毎日の如きは、巴里に居る特派員よりも寧ろ本社の方が血迷つて居つたほどであつた。其最も著しきものとして、後に大阪毎日の靑島問題に關する特電の取扱ひ振りを掲げる。

大阪朝日と大阪毎日の大混戰にて、掛け離れた新生面を受持つて、ゆツたりとした氣分で、紙面に異彩を放つたのは、園侯と同船して渡佛した鈴木文四郎の電報であつた。朝日が鈴木を園侯の船に同乘せしめたのは、朝日としては大成功であつた。まだ講和會議なるものが讀者に眼新しい、其上全權主席たる、園侯の雪月花旅行を寄港地から詳しく打つたのであるから、此電報は殆んど朝日の特材料として取扱はれ、大阪毎日では此電報を餘程氣にしたらしい。

鈴木は外國語學校英語科の出身で、英語もかなり出來るし、人物も確であり、人好きのする質で、西比利亞出兵に人氣のあ

つた頃、鈴木は大谷將軍の軍司令部附として浦鹽に特派されて居つた男である。神戸から馬耳塞までの航海四十幾日かに、すツかり成功した彼は、巴里に着してからも、時々長文の電報を送つて居るが、鈴木の電報は朝日の特派員中最も際立つて整つて居る。英語の出來るため此方で飜譯し易いのも其一因かも知れぬが、兎に角鈴木は今度の巴里特派ですツかり實力を認められた様である。

大阪毎日は全紙面に社會部式の編輯方法を飽くまでも忘れないと言ふ心掛けを持つて、成るべく派手に／＼と努めて居る様に、巴里電報も亦極めて派手なもので、内容よりも寧ろパツとしたものを得ると言ふ方針に努めた傾きがある、譬ふれば上西の獨逸入りの特電の如き、布施勝治の露國首都に潜入せんとした、ヘルシングフオルス發電の如き、凡ての事に第一鞭を附けんとする大阪毎日の努力よりして生ぜる結果と言ひ乍ら、而も一面には如何にも派手な、そうして人目を牽くパツとした電報に向つて、憧憬して居るかを知る事が出來る。此上西の獨逸入りの電報に就ても、大阪朝日と大阪毎日との間に面白い暗鬪がある。

大阪朝日ではどうかして獨逸入りの記事を第一着に紙上に掲げて、日本の新聞界をアツと言はせたいと企て、鐵血生なる一社員を獨逸に潜入せしめた、大阪毎日の本社ではどうかと言ふ拍子に朝日に此企てあることを窺ひ知り、其裏を搔くべく、巴里に居る上西半三郎に打電して大至急獨逸入りを命じ、同時に金は幾らかゝつても構はぬから其記事は電報で打てと命じた、其結果として現はれたのが大阪毎日、東京日日に現はれた上西の獨逸入りの特電であつた、馬鹿を見たのは朝日で、鐵血生は上西より先に獨逸に入り乍ら、其潜入記を書面通信としたゝめ、うま／＼と上西のためにしてやられ、折角の計畫をフイにされて仕舞つた、朝日では獨逸潜入の計畫は毎日でも決して氣の附かない點であると、固く妄信して電報で打つ必要は斷じてないと多寡を括つて居つた、然るに毎日に見ん事裏を搔かれたので、朝日の編輯ではあの電報を見ると共に、地駄んだ踏んで口惜しがツたそうである、毎日では之ればかりでなく、上西に獨逸潜入を緊電すると共に、布施勝治をして露國首都潜入を企てしめた、布施は露國革命騒ぎまで毎日の特派員として露都から西比利亞方面に游弋して居つた男である、そうして布施の露都潜入はヘルシングフオース迄行つたゞけで、其先は甘く成功せず今では一寸行惱みの形にあるが而も布施のヘルシングフオースから打つた露都潜入計畫の電報も、確かに朝日の計畫に先鞭を着けた事を裏書した

朝日と毎日の暗闘は此様に激烈なるものがあつた、抑々青島處分問題に就て國論沸騰し、新聞界を注視するものは、どの社の特派員が一番早く青島處分決定の電報を成功せしむるかと、非常なる興味を以て各社の特電に注意した、一面特派員を出した新聞通信社では、是非共此電報に成功せしめなければ、特派員を出した面目を潰すとあつて、高い電報料をも厭はず、特派員に訓電を發して他社より遅れるな、號外に成功させよと、鞭撻督勵に努めた、而して其結果は如何、日本電報通信により見事成功の榮冠を奪はれ、朝日は之に遅るゝこと八時間、若しそれ大阪毎日では實に一大醜態を現出して、講和會議に對する同社の努力の過半以上を自らの鐵槌によりて破壊し去つたのは、同社のため返す〳〵も惜しいことであつた。

電通の青島問題解決の公報は一日の未明に、無線電信に依り受信され、午前八時頃までには全國の新聞社に向つて配信を了つた、電報通信講和特電として大阪新報が號外を出した、其電報には『公報に依れば』と明記してある、朝日と毎日の焦慮は見るも氣の毒な位であつた『どうしたのだらうか』『公報を打たぬ譯はないが』『電報が途中に引掛つて居るのだらうか』等言ふ愁語が、朝日の編輯でも、毎日の編輯でも幹部の間に交換された、すると其日の午後三時頃に朝日に同様の電報が入り、朝日は號外を出したが、毎日へはとう〳〵其日は何等の電報が入らず、一面外務省では電通の特電も、朝日の特電も本當だらうと半ば公式に是認するし、旁毎日の苛立ち様は實に社外のもの想像以外であつた。

然るに二日の午前十時頃毎日は突如號外を出した、其號外は巴里特電であつて、其電文は『青島問題は非常にこんがらかつた結果、危機の最頂絶に達した、迚も圓滿なる解決は六ケ敷い』と言ふのである、其日の各紙の朝刊には青島問題の主張貫徹は殆んど確的なる如く傳へられたるにも拘はらず、毎日此が號外を出したに就ては、餘程の確信がなければならぬ、すると電通の電報も、朝日の電報も嘘であるか、外務省の樂觀もあてにはならぬかと、一部では此號外のために動揺され、株式界も少し氣を折られた形であつたが、それと殆んど同時に外務省では山東問題解決の公報到來の發表をした、數時間後の大阪の夕刊新聞には此發表が大々的に掲載される、大阪毎日でも此發表を掲載せぬ譯には行かぬ、而も今朝に出した號外を本紙に再錄せぬと言ふ譯にも行かず、苦心慘憺の結果、毎日では其日の夕刊に外務省の發表と、號外とを二ツ並べて出した、如何に其紙面の見苦しかつたかよ、之れ全く大阪毎日本社の幹部が常識を逸つた血迷ひの結果である、そうして此特電は東京日日へも移電され

たが、流石に東京日日は冷靜を喪はなかつた、暗から闇へと葬り去られ、勿論號外等は出さず、其電報は其儘紙屑籠に投り込まれたのであつた。

靑島問題に成功した電通の巴里特派員は曾我祐邦と上田碩三の二人である、曾我は電通の重役で樞密顧問官曾我子の長子、靑年時代に砲兵士官として佛國に在學すること七年、佛語にかけては日佛協會の第一人者と言はれ、巴里には彼の留學生時代の友人が、目下大分樞要の地位を占めて居る。上田は東京高商の出身で英語も達者であり、精悍な負けぬ氣の男である。電通は既に數年前から米國の合同通信と電報の交換をして居る。合同通信は米國でも有名な機敏な通信社で露國に革命勃發時も、ルーターより四十時間も早く日本へ電報を送り、米獨開戰の時も亦ルーターより餘程早く報道した、其合同通信社で最も機敏な記者と言はれて居るキーンと言ふのが、目下巴里の合同通信支局詰となつて專ら講和電報を取扱つて居る。電通と合同通信とはこう言ふ關係に在るを以て上田はキーンと相提携して材料を蒐集する上に非常に便宜があるに相違なく、殊に曾我は佛語に堪能であり、今も言つた樣に相應知己も多いので、佛國の要路からも材料を得るの便があつた。既に默々として秘密を以て外交の妙諦として居る日本の委員から材料としての片言隻句をも得る能はざる以上、日本の特派員は勢ひ英なり、米なり、佛なりの方面より材料を取らねばならぬ、そうして電通の成功はこうした方面に對する喰ひ込み方が深かつたゝめであるかも知れぬ。

國際通信からは社長のケネデーが巴里に行つた、國際通信は流石に外電專門の通信社だけあつて、其取扱ひにかゝる語數は他の新聞社や通信社の及びもつかぬ程であつた。而も其電報の多くは米國新聞局から一種の米國主義のプロパガンダとして無料で送電するもので、語數は多いが其割に金はかゝつて居らぬと傳へられて居る。そうして國際聯盟の電報も、講和條約全文の電報も、語數は何萬語と言ふ恐ろしい長電であつたが、國際通信は凡て、米國の新聞局から特別なる便宜を以て受電して居るから費用はかゝつて居らぬと言はれて居る、こう言ふ米國政府の保護を受けて居る國際通信社の事であるし、兎に角社長のケネデーが行つたことであるし、國際通信の電報は乾度成功するだらうと衆望を囑されたるにも拘はらず、國際通信は今度の講和電報に於て全然失敗をした、其著明なるものは五月十二日巴里發の『國際聯盟委員會は人種平等に關する日本の修正案を採擇せり』と言ふ電報で、時恰も國民は人種案に對し非常なる興味を以て居つた際とて朝日は此電報に信用を拂ひ直に號外を

行した。然るに三時間を經過せずして更に國際は其取消電報を送つて來た。迷惑をしたのは朝日計りでない。其時既に右の人種案採擇の電報は夕刊に掲載された後であつたゝめ、それ等の新聞は取消社告を出さねばならぬ羽目に陷つた。

更に五月二十五日に國際は巴里發電として『四頭會議は山東問題に關する日本の要求聽取を打切る事に決し、獨逸租借地に對する日支兩國間の權利解決は之を後日に讓る、と言ふに一致決定したり』と言ふ決定的の電報を送つて來た、時恰も山東問題で新聞社の神經が尖つて居つた際とて、取敢ず此電報を初號標題で掲げた新聞も尠くなかつたが、之も全然虛電であつた。嘗てルーターは米國大統領改選の時、ヒユーズ氏當選を報じた。而して其時は未だ開票は全部終了せず、それよりして兩三日後開票終了、其結果はヒユーズ氏にあらずして、ウヰルソン氏の當選を見たのであつた。苟くもルーターとも言はれる大通信社がこう言ふ輕卒な電報を打つたに就ては尠からず批難があつたが、ケネデーの今回の講和特電に就ても矢張りこうした過失の多かつたのは、國際通信のために惜まねばならぬ。

時事新報は特派員の電報よりも、寧ろ書面通信に重きを措きつゝある傾向あり、特電としては目立つたものを認め得ない。國民の馬場の電報は事實の報道よりも寧ろ評論的に傾き、萬朝では黑岩社長よりも、石川、大住よりも一切電報を打たせぬことゝし、講和特電は帝通から買つて居る、其代り石川なり大住なりの書面通信は、他の特派員の送つて來るものよりも異彩を放つて居る樣に思へる。

報知の松原もボツリ／＼電報を送る位で主として書面通信に力を注ぎ、矢張り帝通の講和特電を買つて居る。都の大谷は殆んど都と交渉のなき如く電報は勿論書面通信も滅多に見當らぬ。アドバーの秋元は讀賣と帝通の書面通信を依賴されて居るらしいが、片手間の仕事とて力の入らぬのも無理がない。

要するに今度の講和會議で新聞社の實力、通信社の實力、そうして夫れ等の特派員の實力も亦遺憾なく民衆の裁判を受けた形に在ることは、否定することの出來ぬ事實であらう。

人物評論（一〇六）

新舊東京府知事と現東京市長



▽新舊知事と市長

鵜崎鷺城

候補者についていろ〳〵取沙汰を傳へられた東京府知事は、案外早く人選が定まつて阿部浩氏の任命となつたが、阿部と云へば直ちに市長の田尻博士を聯想する。昨年の春東京市長を選

定するに當つて、詮衡委員中には阿部を押し立てる一派と、田尻を擔ぐものとがあつて、兩方テッパリの形となつたが、終に田尻が多數を以て當選した。斯う云ふイキサツのある阿部と田尻が一は府知事として、一は市長として、同じ建物の中に顏を見合せることになり、而も敗けた方の阿部が法規上市長を監督する位置に立つたのは、偶然ながらも不思議な廻り合せである。阿部も田尻も前任者が死んだので其の後任となり、而して前任者は井上といひ奥田といひ、いづれも名知事名市長として令聞があつた。井上の死んだのは實に惜んでも餘りあること、而も普通の病死と違ひ、公共事業の爲めに客を呼んだ最中に倒れたのは職に殉じたことになつて一入同情が集り、府が府葬を以て其の功勞に報ひたのは故あることである。一昨年十一月號の中央公論に我輩は「井上知事と岡田警視總監」の一篇を掲げ、井上について論じたが、其の中の一節に井上は圓滿にして常識の發達した人物で議論を好まず、覇氣を有せず、ナダラカで常軌に從つて行く。其の形貌風采の如何にも貴公子然たる如く、其の爲人も品好く出來て人に不快を與へるやうな點は微塵も無い。尤も長い間役人で通したから役人氣分がないでは無いが、吏臭が表面に顯はれて居る程でない。內務省の參事官、局長としては長官から充分安心と信頼を置かれた。恐らく東京府知事としても其の職責と權限を自覺し、知事として爲すべき事を爲すの伎倆に闕し不足は無いだらう」と書いて置いた。此の我輩の井上に對する觀點は死に至るまで此の二年前の批評と少しも變りは無い。彼は初め我々が期待した以上に府市の爲めに盡し、而も時勢の趨くところと社會の風潮を察して常に一著手を執ることを忘れなかつた。歷代の知事中井上程眞面目で頭のシッカりした人は無く、特に民衆の生活に對する理解及び社會政策上の知識は、尋常一樣の牧民官と選を異にし、嘗て內務省時代に專心研究したところを實際の上から行ふた。

彼が生きて居れば社會救濟事業に着々成績を擧げ、東京府の爲めにいろ〳〵貢獻するところが多いに相違ない。啻に知事としてならず、今後何職に當つても有用の材たるは彼を知るものの等しく認むるところで、今までの順序で進めば將來內務大臣の位置を贏得る丈けの可能性は充分にあつた。多年內務省に在て內務行政に通じ、特に思想問題や生活問題に一隻眼を有つた彼は內相として或は適任であるかも知れぬ。是れからと云ふところでアノ若さで死んだのは、一東京府の爲めのみで無く、國家の爲めに大損害である。前任の井上が總ての點で評判が好かつた丈けに、東京府が如何なる人を後任に迎へるかと云ふことは隨つて世の注目する所となつた道理である。

賢夫人の後へ行けば十人並みの良妻でも先妻に比較されてアラが見えるのが普通である。況んや後妻が良妻と云ふ方で無く、何度も出戻りのスレカラシ女と云ふのでは猶更アラが目につく道理である。井上が人物に於ても仕事に於ても令名を博し、而もアンナ死に方をして皆から惜まれて居るところへ、阿部が二度の勤めで後任になつたのは、多少此の觀がありはせぬか。

阿部の任命は然し意外とも云へるし、又た必然の結果とも云へる。床次君は従來の内相と違つて知事更迭の方針を人材主義に置き、因縁情實に拘泥しないと云はれて居るから、知事と云つても東京府知事は普通の地方官と違ふし、特に井上の後釜と云ふので一層の詮衡に注意するだらうと思ふたのに、人もあらうに世間から忘れられた黴臭い老骨を持出した所から云へば、何人も意外の感じがする。然し一方から云へば現内閣の下に於てする任命である以上、勢ひ政友會に深い關係のある人物を擔ぎ込むだらうとは、初めから想像が附かぬでも無かつた。此の政友會本位と云ふ點よりせば、阿部の復活は結局其の邊に落ちつくと云ふ所である。

阿部は元と伊藤系の一人で、伊東巳代治に善く、特に原とは同郷と云ふので切つても切れぬ仲である。斯うした關係から政友會と密接な結附きがあつて、古賀廉造などとも親しい。前年阿部が東京府知事を罷めて洋行するとき、古賀も一緒に出懸ける筈であつたが、例の贋札事件で中止したと云はれた。阿部の官歴は一度内務省社寺局長になつた外は富山、群馬、千葉、新潟、東京の順序で知事を勤め、特に千葉縣が一番任期が長かつたと思ふ。所が阿部も衆議院の議席に着いたことがあつて二回選擧を經驗して居る。初めは明治二十五年選擧干渉の私生兒として出で、次は二十七年伊藤内閣のときで、共に岩手縣内第二區より立ち、伊藤系の吏黨議員であつた。第一回は直ちに解散になつたが、二回目は二十七年より三十一年まで續き、それから再び仕官して知事稼ぎをしたのである。前回の東京府知事は明治四十二年丁度原の内相時代（第二西園寺内閣）で、原の手引きで千家尊福の跡へ行つたのであるが、大浦が第三桂内閣の内相になるに及んで、政友系の地方官を一網打盡的に首斬つたとき、阿部は原幕下の隨一と云ふので直に逐ツ拂ひの辭令を受けたのである。而もそれが大晦日の前日であつたと云ふので、今でも其の時の無念であつたことを述懐して居る。それ以來彼は浪人生活を送つて失意の境遇にあつたが、昨年市長運動をして田尻派の爲めに彈き飛ばされ、泣面に蜂と云ふところであつた。彼の市長運動には原も多少尻押をしたらしいが、主として

伊東巳代治が後楯になつたのである。

阿部が大浦の爲めに逐はれてから、原も彼を復活させて遣りたい腹は常にあつたが、山本内閣時代は洋行中であつたし、寺内内閣のときも又た現内閣になつてからも今更地方勤めをさせるのは氣の毒だし、さりとて親任官の位置もないし、一寸其の遣り場に困つた。今度好い穴が出來たから、マサカ出尻への面當でもあるまいが、市長運動に失敗したのを氣の毒に思ふて東京府知事に推薦したのである。床次には別に意中の候補者があつたが、阿部も氣の毒だからと原から因果をふくめられて不本意乍ら納得したのかも知れぬ。孰れにしても阿部は原の手から天降つたのである。それにしても一度首になつた上に市長運動で味噌をつけた曰く附きの男を引ツ張り出した原の氣が知れぬ。

東京府知事は二度目であるから、初めて飛込んだのと違つて多少勝手も分つて居るし、現内閣との結附もあつて、都合の好いところはあるが東京府政も以前と違つて、問題が多い丈けに面倒になつたし、新に彼れ自らも云つて居る如く、大正二年と今日とは社會が進歩し、隨つて高等政策に關する事にも知事として指を染めなければならぬことになつて居る。それ故に是れからの東京府知事は今迄のような單純な頭では意義のある施設は出來ない。阿部は別に正式の學問をした男では無いが、世渡りの才があつて腰辨から段々成上つた男である。岡山縣の屬官を勤めて居たとき、縣廳側で開いた伊藤招待の宴席で、彼は裸踊かステヽコを踊つて御機嫌を取つたのが元で伊藤に引立てられ、其の關係から伊東とも結附きが出來たのである。彼は花屋と云ふ待合の主人になつて、伊藤や巳代治が遊びに來ると女の取持をしたりして意を迎ふるに餘念がなかつた。原とは[illegible]友達にせよ、親分扱ひをしてシツカリ喉首に喰入つて居る。[illegible]合に一寸面白いところはあつても、人物上の品位が缺けて居る。世故に長じ、目先きが利き、常識があつて如才なく立廻り一種の手腕はあるが、餘り人受けが好くない。待合などに關係したり磊落な風を裝ふたりするので、一寸豪快な人物のように見えるが、實際は非常な俗物で帮間的なところがある。

第一回のときは四年間に是れと云ふ特別の治績は無く、大正博覽會の開催、知事の交際費計上の外に御馳走政略が記憶に殘るのみである。今度は如何なる抱負を以て府政を執るか知らぬが、迚も名府知事たることは覺束なく思はれる。阿部と井上には對照すべき點が多いが、先づ年配に於て一は四十代で、一は七十に手が屆かんとして居る。井上は人格を認められたが、阿部は人格が餘り面白くない。一は新しい頭で仕事をして眞氣[illegible]範つて居たが、一は頭が古くなつて仕事の上に熱を有つて[illegible]

を取り過ぎて居る。全然不向きと云ふ様では無いにせよ、前任者に較べると大分役者の段が落ちる。

今日は大學で新教育を受けたものが殆んど地方官の全部を占め、阿部と同時代に知事になつたものは大概引退した。東京府知事も井上は勿論其の前の久保田清周も大學出身のチヤキ〳〵で、宗像政が古い型の知事の最後だと思ふたのに、今度阿部が二度の出をしたので、何だか府政が逆轉したような氣がする。阿部も最早大分の年配であるし、大學出の若手の間に交つて何日迄も知事商賣するのも能では無からうし、特に年配閲歷から云へば、床次よりもズツト先輩でありながら、其の下風に立つて命令を受けると云ふのも餘り氣の利ひた話で無いから、寧ろ貴族院に隱居して安樂に餘生を送つた方が好さゝうに思はれるが、未だ其所まで解脱が出來ぬと見えて今度も内々原に運動したかも知れず、自ら運動せぬまでも二つ返事で飛附いたのである。彼は知事に始つて知事に終るように運命附けられた男で結局東京府知事以上に出るべき機會はなからうと思ふ。

東京府市は知事といひ市長といひ、人間の頽廢期に入つた物が頭を並べて、恰も老人の捨場所のように見える。田尻にしても初めは非常な人氣で迎へられたが、市長になつて今日に至るまで、田尻で無ければ爲し得ないと云ふ程の特別の仕事をしたことも無く、東京市長としては不足に思ふものが多い。昨年秋の米騷動のときは經濟問題に關する知識經驗ある人だから、市民を首肯させる丈けの施爲を示すだらうと思ふたのに、實際はノンキに構へて居たので、市長は何をして居るかと非難するものもあつた。一方の井上知事が能動的であつた丈け一層目に附いた。無爲にして化すると云ふのは昔の事で、今日は何なり仕事をしなければ治まらぬ。田尻は大に爲すと云ふ抱負があつて市長になつたのか、又た彼を推し立てたものも大に爲すあるを期待したのであるか、若しさうとすればドチラも其の通りに行つて居ない。田尻の奮發が足らぬ點もあらうが、矢張實際の局に當つて見れば周圍に制せられて思ふようにならぬのかも知れぬ。又た周圍のものも特別に爲す所あるまでに市長を後援する力が足らぬのかも知れぬ。然し初めから彼に大きな働をさせようとして市長に迎へたとすれば間違ひである。彼は會計檢査院でコツ〳〵決算事務に當らして置けば無難だが、仙人の親類見たような彼に、市長の俗務を執らせたり、テキパキ仕事をさせたりするのは少し無理な註文である。東京市長は子爵法學博士の肩書たけでは勤まらぬ。駄洒落や豆糟飯では市政の機能を働かすことは出來ぬ。唯それ單に看板として市長に据ゑて置くと云ふことならば賣り物の北雷先生は高い看板料を拂ふ丈けの値

打はある。然し北雷先生も特別に爲すところ無く、誰れが市長になつても出來るやうな事をして、唯だ看板だけで一定の任期を過すようでは、一向市長になつた效の無い譯だが、先づ此の調子では、看板と云ふ所である。

阿部が知事に任ぜられたと聞いて田尻は、一方が阿部豐後守なら自分は大久保彦左衛門だと云つたさうであるが、去年の事を想へば兩人とも妙な氣もするだらう。と云つてドチラも掛けて居るから睨み合ふやうな心配はあるまい。寧ろ田尻の方が阿部を馬鹿にして掛るだらう。然し一は學者で一は無學、一は仙骨があつて一は俗物の相違はあつても骨董品たる點に於て別に變りは無い。それにしても原首相が單に同鄕、舊友、同系の關係から阿部の骨を拾つたのは、其の日其の場限りの頭で事を捌ひて行く現實主義を暴露して餘りありはせぬか。

▽好一對の茶飲み友達

前田蓮山

▲阿部府知事は原首相よりも三つか四つ年上だと思ひますが、一實はモウ出ない方が可かつたんですよ。併し決して老朽と云ふのぢやありません。年齡こそ七十に近いですが、頭腦も元氣もなか／＼確かなものださうです。田尻市長よりもズツト働けるだらうと信じますね。物價騰貴問題などで帝都は一入大切な場合ですから、充分愼重に人選した結果だらうと考へます。

▲田尻市長でも阿部府知事でも、決して老朽ぢやありません、寧ろ老熟と言つた方が宜いでせう。田尻市長と尾崎行雄君と孰れが働き手かと言へば——勿論市長としてゞすね、演說家としてゞはありません——寧ろ田尻市長がましかも知れません。前知事の井上君と阿部君とを比べると、一長一短、容易に優劣は斷じられますまい。阿部君には井上君のやうな新智識はありますまいが、其の代り老功であぶな氣がないですからね。

▲併し東京府知事位は、必ずしも阿部君を煩はすまでもなく、モツト若い人で適任者は幾らもあります。東京市長でも然うで、田尻子を引つ張り出した市會も市會なれば、之れに應じた田尻子も田尻子です。又た阿部君を選任した政府も政府、之れに應じた阿部君も阿部君だと言ひたいですね。

▲併しですね、世の中は複雜なもので、局外から考へたやうに單調には行きません。當事者には當事者としての理窟が充分にありませう。殊に阿部君の場合は、地方官の交迭を行つて間もない時で、出來ることなら現知事を動かしたくなかつたと云ふ

ことも推察しなければなりません。既に現在の知事を動かさないと云ふことに局限すると、實に免職になつた連中に適任者を求めると云ふことも、考慮の中に入るべきですが、此等の連中と阿部君とを比較して阿部君が劣つて居るとは言へますまい。勿論年齢は阿部君が老人でせうが、役人を年齢順で若い方から採用しなければならぬと云ふ法はありませんからね。又た免職になつた連中も、今更オメ／＼と受ける者はありますまい。其處は如何に役人でも意地と云ふものを持つて居ます。

▲段々指折り數へて見ると、單に手腕の點なら若い適任者が幾らもあるにはあるけれども、此の場合、四圍の事情の中にシックリと挿入すべき人物は甚だ少ないのです。世間には原首相と阿部君が同郷人で兄弟のやうな仲だから、原首相が床次内相に阿部君を押し付けたのだと言つて居る者もありますが、勿論其れも原因中の一つには違ひなからうけれども、決して其れが全部ではないと信じます。

▲原首相は寔に情誼に厚い人で、農商務大臣秘書官時代から出入りした小さい藪醫者を總理大臣となつた今日まで唯一つのかゝり醫者として居る位、私人として寧ろ涙が多過ぎる程に多いのですが、其れでもなか／＼公私を混同する人ではありません。古賀廉造君でもあの人が支那紙幣事件で困つて居たのに同情して救ひ上げたのでせうが、古賀君とて無能で職に堪へない人ではない、手腕力量の點に於て不適任でない以上、自分が信用する人物を採用するのに、何の不思議もないぢやありませんか。大都市の行政を誤れば内閣の生命をも危くするのですから、迂濶に人選は出來ませんよ。

▲誰れでしたか、自分の子供を最適任者として推薦 たと云ふ話しがありますね。世間には「あれは自分の親族だから、自分の口から推薦すると世間の誤解を招ぐ」と言つて、故らに因果を含めて辛抱させたり、或は狡猾な者は人の口を借りて推薦すると云ふやうな事がありますが、之れは實にくだらぬ遠慮だと思ひますね、イヤくだらぬ遠慮と笑つて許して置けないこともある。例へば總理大臣を推薦する場合の如き、元老達に斯う云ふ風なことがありとすれば、其れは國家に不忠です。

▲阿部知事は若い時から元氣者で機略に富んで居たさうです。曾て鐵道廳事務官を勤めて居た時分に、時の鐵道長官井上勝子が阿部君を陥らうとしましたが、之れを探り知つた阿部君は、或宴會の席上で、井上子に喧嘩を吹きかけ、亂暴にも井上子の横顔を張り飛ばしたものです。

所が其れが爲めに阿部君は却つて首を繼ぎ止めることが出來ました。長官をなぐつて免職を免がれたと云ふのは不思議です

が、其れは井上長官が『今阿部を免職すると、井上がなぐられた意趣返しだと世間に言はれる』と思つたからだと思ひます。身を捨てゝこそ浮む瀬はあれと云ふのは此事でせうね。

▲井上長官の方が阿部君よりも先きに辭職し、阿部君は松本局長時代まで居殘つて居ましたが、明治廿六年六月に内務省に轉じて社寺局長になりました。時の内務大臣は井上馨侯で次官は渡邊千秋氏でした。此の榮轉は原首相の盡力でしたらう。當時原さんは外務省通商局長でしたが、原首相と井上侯の間柄は人の知つた通りです。

▲當時の縣治局長が江木千之君、警保局長が過日死んだ小野田元凞君、土木局長が古市公威君、衛生局長が後藤新平男でした。其れから二十九年一月に群馬縣知事に轉じましたが、時の内務大臣は野村靖子、次官が松岡康毅男で、原首相は外務次官でした。

▲群馬縣知事としての阿部君は大層な好評で、在職僅々半歳餘りで千葉縣に轉ずる時には縣民の留任運動があつた位いです。喧嘩早い所が上州人の氣に入つたのかも知れません。當時田尻子は何をして居たかと云ふと、大藏大臣渡邊國武子の下に次官をやつて居ました。田尻子は官歴は阿部知事よりズット古く、明治十九年には大藏省國債局長になり、銀行局長、主税局長を經て、阿部知事が社寺局長になつた前年、即ち明治二十五年に大藏次官に陞つたのです。何しろ阿部君は盛岡人で一旦は朝敵となつた人の子、田尻子は薩州出身ですから、比べものにはなりませんよ▲併し政治家としての手腕は反對に阿部君の方に軍配が上りませう。田尻子は學者としては偉いですけれども、政治の方は不得手です。大藏次官としては功勞があつたでせうが、トテモ大藏大臣になる器ではありませんね。阿部君は内務大臣としても不足はありますまい。原首相と同時に政友會に入つて居たら、モウ大臣になれたかも知れませんけれども、千葉縣富山縣と地方を廻はつて政界の中心と遠ざかり、二度目に千葉縣知事となつて居た時に政友會が創立されましたが、阿部君は却つて伊東巳代治子などに接近して四疊半的の氣焰を吐く位なことで、其の後新潟に轉じ、原首相が初めて内務大臣になつた時、東京府知事に榮轉しました。

▲なかく強情者で、相應に腕力もあり機略もある人ですけれども、何うせ大きな器ぢやありませんよ。妾に料理屋をさせて納まつて居る位ですからね。性格は原首相よりも寧ろ巳代治子に近いかも知れません。巳代治子に近いか何うかは別問題としても、原首相とは大に異つて居るやうに見へます。強情な點は東北の風土柄とも言つて可い位で、原首相とも共通點があるけれ

ども、大體の型が異つて居ますね。

▲安廣伴一郎君は阿部君の後任として社寺局長になつた人ですが、之れは阿部君よりも悧巧で御上手者で柔順ですから、今は樞密顧問官として樂隱居の身分になつて居ます。實は已代治子でも阿部君でも中途半端ですよ。伊藤公と殉死する誠意も度胸もなく、然ればと言つて山縣公や桂公に信用されるほど柔順でもなく、とう〳〵充分に延び得なかつたですね。實は智慧が勝ち過ぎるのです。智慧が小さいと見ても可いですが、小さい智慧を持つた人よりも、寧ろ智慧を持たない者が出世して居ます。

▲併し阿部君は、小智慧とは言つても平大臣位にはなれる力量を持つて居るでせうが、何うも官僚臭が抜けたいやうですね。曩に田尻子と市長を競爭した時にも、あれでは何うも民衆の人望は得られません。田尻子の方がズツト民衆的ですね。

▲立憲國の官吏は民衆の愚論を謹聽するだけの雅量を持たなければ不可ません。人にも利用されるだけの度胸と同情とを持つて居なければ不可ません。利用すると云へば聊か語弊があるかも知れませんが、要するに自身が他人の犧牲になるだけの情操を持つて居なければ、人も犧牲的に働いては呉れませんよ。

▲曹操は『我人に背くも、人をして我に背かしめず』と言つたさうですが、夫れは奸雄の贋言ですね。阿部君などにも斯う云ふ風の傾向がありはしませんでせうか。自分の聰明をのみ恃みとして人を馬鹿にしたり、或は他人は利用されるだけ利用するが、自分は爪の先き程でも人から利用されまい。自分は人を犧牲にするとも、人に自分を犧牲にさせまいと云ふ風な性質がありはしませんでせうか。

▲私が新聞記者としての經驗を申しますと、斯んな人があります。自分が新聞に善く書かれたいと云ふ必要が起つた場合には、多忙な時間も惜しくつて新聞記者に面會し、チヤホヤと愛嬌を振り撒くけれども、一旦新聞に用がなくなると居留守をつかて面會をせぬと云つたやうな人があります。之れは官僚出身の人に多いと云ふことを同業者達も言つて居ますが、實に利己的な憎らしい態度ぢやありませんか。是れは決して阿部君を指して言ふのではありませんよ。

▲併し阿部君は孰れかと云ふと、斯う云ふ風な傾きがありはしないかと想像されますから、充分注意するが宜いでせう。人間は同情心が深くなければ社會生活は成り立ちません。田尻市長は御子さん達に『自分は習慣で粗衣粗食して居るけれども、御前達は俺の眞似をしなくとも宜い』と言つて居られるさうですが、之れは實に同情のあるゆかしい話しです、凡そ此の調子でなければ政治は出來ませんよ。寺内前首相などは國民を蔑く

分の型に入れやうとするから失敗します。田尻市長も御子さんに對してわかるやうに市政に對してもわかつて貰へば善いですが、あれで頗る毛嫌ひをする人でしてね。兎角老人はわからんものです。

▲府の老人と市の老人と、どちらが能くわかるか、どちらが手柄をやるか、どちらが冷水を多く飲むか、一寸面白い見ものですね。府の老人は積極的男性的で、市の老人は消極的女性的、即ち府の方は爺さんで市の方は婆さんですね。好一對の茶飲み友達が出來たわけですが、爺さんも婆さんもまだなか〳〵色氣があるから、時にはりんき喧嘩が開かれるかも知れません。

▽新舊東京府尹と田尻市長

鐵拳禪

一

形を變へた官僚の傀儡師に叩き出された、新任東京府知事の阿部浩は、情實の函からにゆつと古顔を突き出して、物褻い笑を洩した。府弊を以て報いられた前任者の法博井上友一に較べると、美人と醜婦ほどの差が、その縹緻の點に發見された。

美人の歿後に迎へられた後妻は、縦令より以上の美人であつても、より以下に評價され、兎角不足を數へ立てられるが例であつて見れば、醜婦の居づらさは果してどんな者であらうか、殆んど想像に餘りある。その居づらさを、じいつと辛抱して、辛抱し抜くだらうと、特に目星を著けられて選任されるのだと善意の解釋を下す者のある處から見れば、又そんな風にも見られるであらう。が併し、阿部が先年不評判で追ひ出され、出戻りの儘何處へも嫁入せずに居たのが、再び先夫の許に歸つたやうな姿で、その不評判を取返すだけの何事をも成して居なかつた。唯がみがみ呶鳴る舅姑のくたばるのを待つて、最う餘炎のさめた時分と、世間體の氣兼から開放されて、勢よく乘込んだと云ふ風であつた。其處に世人の同情を贏ち得るだけの何物かがあれば、自然に人氣も集らうと云ふものだが、それが先づ有りさうにも思はれない。醜婦の醜が愈よ目立つて見えると云ふやうな處もある。彼れ自身としては素より最う一度歸つて、以前の不評判を償ふだけの事はやつて見たいと云ふ腹はあらう。宮城縣知事の森正隆もそんな腹で、白頭首相の袖に縋つて希望を達した。阿部も亦同一筆法で、白粉をこてこてと塗り立て、何程か縹緻も引立つやうにと心掛けて、自動車を飛ばしたので

あつた。大隈内閣に棄てられた者が、斯うして二人までも原内閣に救はれて、前任地に舞ひ戻つた。

特に目星を著けられて選任された意味はその辛抱強さに非ずして、今秋に迫つた府縣會議員選擧に對する實際上から考慮され、能くその任務を盡し得べしとされたるにありとも稱される。阿部は白頭首相と同郷で、一寸先輩格で威張れるやうな筋合になつても居り、それに身を屈したと云ふ譯でもあるまいが、白頭首相が内相の時分に東京府知事の職に在つて可なり努めた者であつた。確か明治七年岡山縣に出仕して居た時分、公伴藥徹迎會の席上で裸踊をやつて、來會者一同の度膽を抜いたが、その廣告的餘興が莫迦に公の氣に入つて、中央政府に拔擢された。それが立身の階梯となつて、府縣知事にまで躋進したのだと云ふ逸話のある程、彼れは滑稽味もあり、又度胸も据つて居た。清濁併せ呑む底の雅量は何うか知らぬが、その人間的氣分に於て輕重併せ得たやうな處があつて、時には瓢輕な一面を見せ、時には鈍重な他面を現はす。滑稽味の勝つ時は、世辭愛嬌が湧出浮動するが、蠻殼風の多量な時は、意表外な豪放さを發揮する。だから、彼れの何處かに茫漠たる處がありさうで、さう大きくも見えないのは、稀薄な調子が邪魔をするので無いかと思ふ。役人をして彼れ位の年勞を積んで、彼れ位の地歩を占めれば、大臣候補になつて新聞辭令位は受取るのだが、彼れに限つて然うした評判を未だ曾て立てられた事がなかつた。偶まそれは政界に野心の無い證據だと云ふ事になるかも知れぬが、併し餘り勢力のある、芳しい人物でも無いと云ふ事を、暗に語つて居るので無からうか。

二

井上は明治四年生れで、嘉永五年生れの阿部よりはずつと年も若く、その揺籃の時代も違つて居た。阿部の古い頭では、如何に新時代の思想を理解しようとしても、何うしても理解を妨げる錆著があるやうである。それでも彼れは、閑地に就いてから、すぐ歐米を遊歴して、慈善事業や公共團體の事を研究して來たから、是等に關する新智識も多少の參考になるだらうし、社會政策には十分の考慮を拂ふ積りだと云ふやうな事を云つてゐるから、彼れ自身は再び若返つて、老朽の髓に活力を吹き込んで、一花咲かせる意氣込で居るのであらう。して見ると、彼れが歐米視察は、彼れが再び東京府知事たるの下準備、乃至官界に復活する色揚であつたやうにも聞えるが、最初より豫期して與へられので無く、偶然に得た機會だらうと思はれるから、彼れは老朽に關はらず、新智識の攝取慾だけは持つて居たと見ることが出來る。但し錆著いた觀察は、往々新思想の理解を誤ることと

がある。さう云ふ點になると、井上の方が新時代の教育を受け、新時代の空氣を純な心持で呼吸しただけ、比較的能く理解することが出來た。尤も官僚式な處があつた。が、何うして新しい道を切り開いて行からうと云ふことも考へた。そしてそれを著々實行しようとし、若くは實行することに努力を惜まなかつた。

彼れは明治二十六年帝大法科を卒業してから二十年間と云ふもの內務省の飯を食つて居た。夙に歐米を視察して、地方自治及び慈善事業、感化事業の研究に沒頭して居た。大した成績も擧らず、又それ程有效なものとも思はれないが、報德會や地方青年團などを設け、模範町村の表彰などを始めた。それは飜譯的な、形式一片のものだが、それにしても地方自治の鼓吹や、一寸目先を變へた興味の刺戟にはなつた。模範村と云ふ熟語も、彼れの新に作つたのであるが、今日では註釋を要しない程普通な言葉となつた。その言葉の普及した程の成績が擧つて居ないとしても、彼れの努力はその新熟語の普及に由つて報へられた。が、彼れは何か新しい試みをやつて見ようと云ふ、動もすれば新規に走る弊があつて、淺く鋤は加へるが、それ以上に深耕して、弊根を芟除し盡すと云ふやうな、徹底的に掘り進んで行くことを仕なかつた。餘りに表面上の整理に囚はれ、美名に醉ふと云ふ風があつた。

功

彼れが神社局長から東京府知事に轉じてからの遣り口も、內務省時代のそれと餘り違はなかつた。矢張慈善事業とか、社會政策の實施とか、さうした方面に興味を持つて、その興味に引摺られて行つた。商工奬勵館の創立、公設市場及び簡易食堂の設置などが實現されたが、それも表面的なもので、先つ型を示したやうな者であつた。更に一歩も數歩も進んで、一般生活の改善なり、産業上の革新なりを行はねばならぬのだが、それでは力及ばなかつた。併し當面的施設、一時的救濟は、他の府縣などよりは率先してやると云ふ風で、昨年米暴動の際なども生活の不安を少しでも緩和しようと、研究的に諸種の方策を講じたのであつた。それが彼れをして名府尹たらしめた一因かも知れぬが、最初の府葬者たる最高級の名譽を與へたのは、彼れの死所を得た事にあつた。も少し詳しく云へば、彼れが平素の抱負を實現した社會的事業に盡力して呉れた人々を帝國ホテルに招待し、その招宴の席上で一場の演說を試み、演說半ばに卒倒して終に起たなかつたと云ふ其事に、痛切な同情が集つたのである。彼れが職務の爲に最後まで盡したのが、恰度勇士の戰場に斃れた概があつたからである。今若しそれを拔きにして、單に府知事としての治績の上からのみ論じたならば、彼れには可なりの非難があり、彼れ程の働きをした人物が以前にもあつた事

云ふに相違ない。彼れは最初の府知事だが、必ずしも名府尹として空前の人物では無かつた。

井上は手腕家と云ふよりは、八方美人主義で、可成的圓滿に事を運んで行かうと云ふ風の人であつた。一氣呵成的に、才氣と手腕に任せて事務を裁斷するよりも、徐々に堅實に、而して熱心に黙務を見た。難關を突破するよりも、難局を切り開くべく研究に最善を盡すのであつた。其處で衝突すべき事も、餘り衝突せずに通過した。阿部も或意味に於て八方美人主義とも稱すべき帮間味はあるが、聊か恬淡に缺くる所がある。何うも悪どい下手な曲藝を見るやうな感じがある。それは彼れが性格の發露であつて、人物その物が氣韻なり、情韻なりに乏しい爲でもあらうが、社交上に就ても、對府會策に於ても、他を魅了するに八方美人主義の骨を得ないからでは無からうか。彼れは特に濃厚な政黨的色彩を帶びて居ないが、白頭首相との私的關係上、又今次拔擢された徑路上から見て、政友會に非常に近いものと推測される立場にあり、又實際に於て政友會に近づいてゐる。

三

昨年東京市長選擧の際、一派から擁立されて、他の一派からは排斥された。それは彼れが人物手腕に對する疑問にも發足してゐるが、又彼れに政友會臭味があると云ふ處からも來て居た。若し彼れにその臭味が皆無であつたなら、或は他の一派から排斥されずに濟んだかも知れず、又熱心に政友會系の一派から擁立されなかつたかも知れぬ。が、それが有つた爲に、双方共に意固地になつて、對抗戰を演ずるに至つた。その結果は、現市長たる法博子田尻稻次郎を擔いだ者の勝利に歸した。さうした關係から、阿部は田尻に、してやられたやうな不快を持つて居た。機會さへあらば、再び東京府知事となつて、市長選擧に敗れた恥を雪ぎたいと思つて居たに相違ない。處が、機會が到來して、田尻が市長の職に在る間に、府知事の椅子を占めることが出來たのである。

田尻は駄洒落を言つて居て、さう大した洒脫な人物とも思はれず、却て煙たがられるやうな處がある。併し奇矯な變物と思はれて、一種の才物たるを失はない或物が、閃々として人の眼に映ずる。その老體たる點に於て、阿部と共通した古さを持つて居るが、阿部程に老朽扱もされず、又廢物視されもせず、何かまだ働きの出來さうな活力が、潑溂として躍つて居るやうに思はれたりする。それは彼れが學問の力である。彼れはその强味を持つた處から、實際働きが出來ないでも、働きがありさうに思はれる。尤もその爲に信望もあつて、市長に推薦されたのであつたが、市政局に當つて見ると、何うも旨く行かぬ。彼れが安

價生活を鼓吹して、豆粕飯を普及しようとしたのでさへ、この米價暴騰の世の中に行はれないのであるから、他は推して知るべしである。動もすれば市會の反對に會つて、排斥の聲が湧いて來る。かうして彼れが理想は、實際の裏切る處となつてゐる。職務を見るの熱心は、井上の熱心にも劣らなかつたが、その熱心に報ゐられるだけの成績は擧つて居ないのである。

阿部は井上の計畫を踏襲して、社會政策の實施に骨を折るやうな事を云つてゐる。その點になると、富豪から擁立され、貴族の地位にある彼れは、その上を越して「平民の爲」の政策を實行し難い事情かある。阿部と如何程反りが合ふかは疑問である。

▽阿部と田尻

文學博士　三宅雪嶺

（一）

田尻子と阿部氏と、偶然の事から一種の喜劇を、東京府民及び一般世間に見せる事になつた。昨年の春、東京市長の選擧があり、阿部氏が候補に立つたに對し、遽かに田尻子を押立て、マンマと之を蹴落して了ふた。阿部が立たねば田尻が押されたか何うか解らぬ。田尻は老年の故を以て會計檢査院長の職を辭したので、順序として新に公職に就くべきでない。當人自らは兎も角、世間では眞逆か市長に成らうとは豫期しなかつた。所が曾て東京府知事で兎角の評あつた阿部を、奥田の後にするのは何となく面白く感ぜぬ。そこで奥田の先輩とも見るべき田尻を持つて來る方がよからうとて、多數は無論之に贊成した。田尻は性格と云ひ、經歷と云ひ、東京市長として適當とせねばならぬ。がいよ〳〵市長職に就いた所では、人が餘りに希望を置いたが爲めか、幾許も無くして失望の言を發するに至たり、あれではねえといふやうな事になつた。其評判の稍々如何はしい所へ持つて來て、府知事井上氏が俄に病歿し、其跡釜へ阿部を据える事になつた。

（二）

普通ならば今更ら阿部を持つて來るなど、種々の物議を招く所である。四十九歲の井上の後へ六十八歲の老人を持つて來るとは何事であるか。井上は人も正直であれば、學問も有り、それで才が無いではない。其所へ俗才一點張りの阿部を持つて來るなど、何といふ心掛けかと云ふ所である。が、阿部に取つて幸な事には、學者先生が餘り當てにならぬ事が田尻の市長で證明されて居る。評判の田尻を持つて來てもあれである、寧ろ世才

に長じ、膽力の据り、テキパキ物を捌いて行くのがよささうであると云ふやうに傾く。老朽とか何とか云ふが、若いのにも思ふた程結構なのが無い、阿部は案外飾り役かも知れぬと云ふやうになつた。昨年物の美事に田尻に抛げ付けられた阿部が、今度田尻のいさゝか不印といふ所で大手を振つて府廳に乘込み、知事と市長と同長屋の挨拶振りとなつた。もと〳〵當人同志何の譯合あるのでなく、逢つて見れば老人同志、何事もありようがない。双方共に如才なく、肥つたのと痩せたのと、肚が有るらしいのと學問が有るらしいのと、對照に興味が有るだけである。何れも世故に長じて、大抵の事で動ずる方でない。時々駄洒落で若い連中を笑はすやうな事があらう。

（三）

田尻、阿部の二人が思ひ懸けない事で立廻りするやうになつたが、原首相及び床次内相が阿部を府知事にしたのは、多少の内情あり、殊に原氏に於て何か好い官職を與へたいとの意あつての事であらう。又阿部の腕を見込んだ所もあらう。政友會の爲めに働くといふ事を考へて居らう。場合によつて遠慮會釋ない事をすると思ふ。總選擧に何を爲る乎、其邊は安心が出來す、政友會の方で安心して居らう。之等は皆自身又は自黨の利益に關する事であるが、眞に東京府の爲めに種々計劃し實行し一貫ひたい所もあらう。原は內閣に學者連を入れぬと同じく、餘り學者連を好まず、亦之を當てにせぬ。官僚は物事を型に嵌く方で、文官試驗で經上つて來た者を重寶がり、正則の教育を受けた者に新智識を要する國務を托しようといふ事になる。大學卒業生で事務の經驗を積んだ者に越した事がないとする。原は其邊で多寡を括り、大學の教育が何程の益あるかといふ位に思ふて居る。遞信大臣は野田で澤山、餘計な物を讀まなくても可いとする。故井上府知事の能力を認めて居るが、實は聊か飽き足らぬ所がある。好い人であり、學問もあり、着眼も好いが、今一際やつて貰ひたいといふ氣が有る。やはり、阿部の方が腕の冴えた所が有りさうに思はれる。憖ひ學問あるよりも、大抵の所でどし〳〵運んでくれる方が望ましいとする。原に取つて阿部は竹馬の友どころか小供の時分に哥兄株であり、阿部も原の出世と共に出來るだけの力を之に注いで居り、原の言ふ事なれば如何なる事をも決行するを辭せぬ。

（四）

東京府は全國の中心たる地でありながら、最も重要なる部分は自治體なる東京市に屬し、府知事は市長の上に立つべきであつて、往々其下風に立つ。井上も田尻に特別の敬意を拂はずには居れぬ。田尻となつては別段六つかしい事を云はぬにしても、

原に於て勝手な事を云へず、床次にしても御師匠扱ひせねばならぬ。事がやゝ臆劫になる。其所は阿部を府知事に押付けて置けば、必要次第どしく\やつてのけ、田尻でも何でも構はない。田尻に取つては内相よりも府知事が厄介な者となつて來た。同じ長屋に居りながら、阿部は事によつて怒鳴り付け兼ねまじき有様である。阿部は學問が無くても、さう解らぬ方でなく、時として逆捻ぢに理窟を捏ねたりする。喧嘩の損位の事は心得て居るが、阿部の役目は東京府知事の位置を重くするに在ると見て居らう。府知事として何を爲す乎、市長と適當であるか如何か、物好奇連が興味を持つて待つてゐる。

（五）

それはそれとして、奥田男の後に田尻子が東京市長となり、井上氏の後に阿部氏が東京府知事となつたのは、コンストラストの好一對である。老朽淘汰、何でも少壯者に限るとし、帝大で教授の停年を六十歳に極めようとして居る時に、七十歳又は八十に手の屆かうとする老人を劇職に就かしめる事、いさゝか奇異とする。阿部氏は佛國首相のクレマンソーが七十八で劇職に居り、自分も堪へられぬ事ないと云ふたさうであるが、此調子では老人の氣に入るであらう。帝大教授も停年制度が何處まで行はれるか、覺束ない。之と云ふのも少壯者に元氣有るべくして無いからである。假りに阿部氏を不適當とし、何人が一層適當であるか。何處ぞの知事を轉任させて來ても、數年後は格別、今日より適當と請合ひ得るのが無いではないか。之れを見ても少壯者の奮發が肝要である。

（六）

府知事が阿部豐後守ならば、市長は大久保彦左衛門であると田尻子が云ふのは駄洒落の外に意義が無い。若し阿部浩が原の爲め、政友會の爲め、是が非でもやり通すといふのを、隅田の洪水を馬で乘切る所とすれば、甚だ好くない豐後守である。人の妾の世話する位の豐後守である。彦左衛門も弱い者に衝當り、強い者に衝當らぬ彦左衛門とあつては、此豐後守と釣合ふかも知れぬ。けれども老人と云ひ狀、上に八十二歳の山縣公、及び大隈侯があり、更に年長者として松方侯がある。田尻子及び阿部氏、若い積りで思ひ切り發憤努力して然るべきである。二人の何れが成績あるか、今後の相撲勝負は其成績を以て決する。二人共に面白い相撲を見せて貰ひたい。之れ啻に二人の爲めのみでなく、東京市の爲め、東京府の爲め、更にそれ以上の爲めである。

時論

獨逸の將來と講和の前途

法學博士　吉野作造

獨逸に關して昨今我々の間に問題となつて居るのは（一）中心勢力が何處に安定するか（二）講和條約の調印を承諾するかの二點である。此二つの問題が互に關聯して居ることは云ふまでもない。

獨逸の政界の現在の中心は所謂エーベルト、シヤイデマン一派の手にあるのであるが、併しなかなか難境に立つて居ることは日々の新聞電報によつても明かである。六月十二日を以て召集された國民議會に於ける形勢が此一派の政治的基礎をどれ丈け固めるかも今の所容易に分らない。革命の後はどの政府もいろいろの難關に遭遇することは、獨り獨逸のみに限つた現象ではない。昔ならば此等の紛糾は一旦強力なる武斷主義者によつて纏まりを付けられたのであり、從つて又古い歷史の教訓に執著するものは、今尚革命後に於る那翁の輩出を必要と說くのであるが、併し斯の如きは今日の時勢の許す所ではない。流行の袁世凱も此時勢の變に盲目であつたが爲めに失敗した。今日では面倒ではあらうが、何時までも國民の信任の上に徐ろに鞏固な基礎を築き上げなければならない。それ丈け獨逸は當分なかなか容易に安定を得ないであらう。又さう云ふのが當然でもある。

只併しながら若し今のエーベルト、シヤイデマン政府にして首尾よく講和問題に成功するなら、之によつて大いに其基礎を固うすることが出來るだらうと思ふけれども、條件が又あゝした深刻を極めて居るのだから容易に調印を承諾する譯にも行くまいし、調印をすれば講和問題を首尾よく解決したと國民に誇る譯にも行くまい。從つて講和問題も一寸片が附かず、爲めに政府の腰も据らないと云ふのでエーベルト、シヤイデマンの地位は一層不安定を極めて居る。

エーベルト、シヤイデマン一派の勢力がぐらついて居る」

ふ事は、他の一面から云へば反對派が相當に跋扈して居ると云ふ事を意味する。反對派と云へばプロリタリアートを根據とする過激派か又は地主貴族を中堅とする保守的反動派かである。穩和社會主義を標榜する現政府が倒れたとして、右の兩派の何れか起つて紛糾した時局を收拾するの能力を有するか。

傳ふるところに據れば過激派もなか〳〵勢力があるやうだ。併しながら獨逸の過激派はどんなに盛んになつた所で露西亞の如くなるを得ざるは疑ひを容れない。人動もすれば獨逸も露西亞のやうになるとか、又獨逸と露西亞と結託して過激思想は非常に大きな怖るべき勢力となるだらうなど〻說くものがあるけれども、之は全く妄想に過ぎない。過激思想に對しては農民の大部分と教會の反對あることを忘れてはならない。戰前に然りしが如く戰後に於て亦此點に大いなる變り無きことは、去年の暮以來獨墺を縱橫に驅け廻つて居る例のメーソン君の通信にも出て居る。本年二月の總選擧の結果が獨立社會黨、多數社會黨の双方を合はして尙半數に達しなかつた事實を見ても、保守派の凋落が思つた程の凋落でなく、自由派の進展が又思つた程の進展でなかつたことに驚かされる。戰前に於ても社會黨の巢窟は主として大都會であつた。都會は一時的運動の策源地としては適當である。けれども、それが永久に國家を動かす爲めには田舍の隅々まで行き渡らなければならない。此點は獨逸の露西亞と其國情を異にする點である。故に時勢當面の產物として過激派はもう少し位勢力を增すではあらうが、獨逸の天下が確實に彼等の勝利に歸するの日は遂に果して來るであらうか。假りに一時彼等が天下を取つても結局彼等が其態度を穩和にして其絕對的の非妥協的態度を捨つるにあらざれば其天下掌握を繼續することは出來ない。

そこで問題は假令一時でも過激派が大いに勢力を振ふ事があるかと云ふに、それは主として繋つて講和條件の程度如何にある。前號に於て我々の指摘した如く、餘りに酷に失すれば過激派が頭を擡ぐると云ふ事にならぬとも限らない。

保守派の凋落が思つた程の凋落でないと云ふ事は反動的勢力の今尙多少の地步を占めて居る事を語るものである。ヒンデンブルグの勢力の今日尙著しきもの あるは メーソン君も說いて居る。同じく革命が起り、同じく王政が顚覆したからと云つて獨逸を露西亞と同一に見るのは大いなる誤りだ。且つ又スパルタカス團の亂暴が反動的勢力の勃興を助けて居るの事實を見逃すことは出來ない。何故なれば過激派の勢力が極度に發展するにあらざる限り其勃興は又同時に正反對の勢力勃興をも促すも

のであるからである。併しながら此派が再び獨逸政界の主人公となることは出來ないだらう。總選擧の結果に顯はれた所を觀ても、彼等の勢力はやつと全體の四分の一弱に過ぎない。殊にどんなに藻掻いでも再戰の絶對に不可能なる以上、彼等が社會黨の勢力を凌ぐことは斷じて想像の外にある。

結局はエーベルト、シャイデマンの一派が――此兩名が表面に立つと否とは別問題として――獨逸を支配すべきは疑ないと思ふけれども、差當りどう變るか、又安定を見るまで政界にどんな波瀾が起るかは講和條約の模樣如何が大いに關係する。

對獨講和條約はどうなるか。聯盟側が極力主張を枉げざれば固より調印の外はなからう。どうしても讓歩しなければエーベルト、シャイデマン政府は聯盟國の手に獨逸國其物を投げ出すといふ說もあるが、之とて只エーベルト、シャイデマンが屈辱的條約締結の責任を避けんとするまでの事で、獨逸の屈服に畢るものたるは同じ事である。此結果がボリシェヴィズムの一時的流行を來たし、聯合國も亦爲めに之に煩累さるゝは前にも述べた通りである。

幸か不幸か、聯合國側に熱心なる條件緩和の運動が昨今起つて居る。之がどれ丈け實際上の效果を奏するやは今の所分らないけれども、全然無効に終らざるべき事も亦明かである。予輩の觀る所によれば此運動は已に三つの方面から起つて居ることを認めなければならない。

第一は責任ある政治家の側からである。米國が初めからあんな過酷な條件を持ち出す積りでなかつた事は已に人の知る所、英は昨今に至り大いに寛大論に傾いたと傳へられて居る。ウイルソンの十四ケ條の宣明を枉げてあんな過酷な條件を立つるやうにしたのはクレマンソーであると云はれて居る丈け、佛が主として緩和說に反對して居るやうだけれども、英米二國が段々反對の方向を執らんとしつゝある事は我々の見逃し能はざる點である。

第二は直接政治に責任無き各國の識者階級運動の火の手が起らんとしつゝある。六月十三日「東京日々新聞」の報ずる所に據れば、英國に於ける政界並びに敎界の知名の元老連署してウイルソン並びにロイド・ジョーヂに書を寄せ、獨逸の抗議に對し公平にして同情ある考慮を拂ひ、讓歩すべきは進んで讓歩し、彼をして脅迫によらず喜んで調印せしむるやうにしたいと獻策したといふ。此外英國では自由黨の多數は無論の事、統一黨内にも講和條約反對論者が頗る多いといふことである。

同じやうな事は他の國にもある。我日本でも識者階級の間こ

は隨分之と同じ傾向を明示せるもの尠くない。尤も中には只何と云ふ譯無しに仲間の者に澤山の分前をやりたくないと云ふ妙な考から出たものも無いとは云はれないやうだ。何となれば彼等は日本の立場を主張する時は可なり猛烈な利己心を暴露して居つたからである。

第三に最も著しいのは各國の勞働階級から起る所の運動である。六月十一日の新聞にあらはれた電報に據れば、英佛伊三國の社會黨首領はミラノに會合して、現在の對敵條約に反抗するの目的を以て全世界の社會主義者を糾合すべきの決議をなし、其方法としては多分二十四時間の總同盟罷業をやるだらうと云ふのである。其結果にや各國の勞働界は昨今著しく不安に襲はれて居る。亞米利加の勞働不安、佛京巴里に於ける四十萬人の同盟罷業などは他にも原因はあるだらうけれども、勞働階級が帝國主義に對する挑戰たるは明白である。英吉利の勞働黨の如きは現に聯合國にして獨逸に對し少しでも強制がましき態度に出づる於ては直ちに總同盟罷業をするぞと脅かして居る。我輩は前號に於て講和條件の過酷なるを指摘し、聯合國自ら適當な點まで之を低めない以上は、自分自身の勞働者の間から緩和運動が起るだらうと觀察したが、此豫見が段々事實となつて現はれんとしつゝある。

此等の點を考慮に入れつゝ講和條約の將來を思ふ時、其最後の決定を見るまでにはまだ〳〵いろ〳〵の波瀾が有るやうに思はるゝ。けれども當局の使臣は此方さへ讓歩せねば結局獨逸は調印するものと極めて前途を樂觀して居るものゝやうに見ゆる。日本の使臣も八月九月までには歸朝するぞと、どん〳〵電報を寄こして居るが、まさか結末を見ずして歸るのでもあるまいから、之で萬事結了と樂觀して居るのであらう。

勞働不安の世界的流行に覺醒(めざめ)よ

此頃西洋から來る電報の中、講和會議に關するものを除いて最も我々の注意を惹くものは各國に亙る勞働不安の報道である。而して人多くは此現象を解してボルシエヴイズムの流行となすけれども、之れ必ずしも全局の眞相を道破したものと云ふ事は出來ない。

所謂勞働問題を從來のまゝに放任して置く以上、或は之に關して僅かに小刻みの微溫的施設をなすに止る以上、益々自覺を強め勢力を張りつゝある勞働階級夫れ自身から不平不滿の聲が

叫ばるゝは當然である。必ずしもボルシエヴイズムの感染を俟たない。

勞働者の騒ぎが少し强くなると漫然として之をボルシエヴイズムと罵る。當然の要求を相當の方法で主張することは如何に猛烈にやつてもボルシエヴイズムではない。ボルシエヴイズムのボルシエヴイズムたる所以は秩序を無視し、進化を無視し、一足飛びに希望を達し、理想を實現せんが爲めに革命的直接行動を取る所にある。少くとも此考に人々を昂奮せしむるが爲めに、秩序を重ずる心、進化の理法に從ふの氣持を排斥し、之に對する不信嫌惡の念を鼓吹せんとする所にある。勞働運動は何時でも斯う云ふ方法でなさるゝとは限らない。尤も勞働階級の當然の要求に對して社會が餘りに頑迷な態度を取れば自然に彼等の説が過激になり、從つて社會も亦益々之を容れ惡くなり、兩者の距離が遠くなれば遠くなる程暴行に訴へても其目的を達せんとする勞働者の決心が强くなる。勞働運動がボルシエヴイズムとなるか否かは大部分勞働者の要求に對する社會の態度如何によると云つていゝ。今の所英米佛伊等の勞働運動がボルシエヴイズムの色彩を帶びて居ると云ふ斷定は未だ下し難いやうだ。

尤も此等各國に於ける勞働運動に氣勢を添へたと云ふ點に於ては露西亞の過激派與つて力ありと云はねばならぬ。只併しながら今日の勞働階級の要求は、其根本に於て資本家階級の無下に反對し得ざる程公明正大なものである。昔の勞働問題は資本家に對する自家利益の主張であつた。今は勞働者にも亦人としての完全なる待遇を與へよと云ふ社會的立場に主張の根據を置いて居る。少くとも此主張の正當と認められて居る以上、勞働運動はボルシエヴイズムまで行かなくて濟む。現に昨今の勞働不安の根本要求も或は勞働條件の改善とか、或は勞働組合幹部の專制的組織に對する改正の要求とか、兎に角對手方の絶對的撲滅を目的とする運動ではない。實際運動として之がボルシエヴイズムたらずして終るかどうかは、非常に昂奮して拳を握りつめて爭論して居るものが、つひに腕力に訴へずして濟むか否かと云ふと同じ、く局外者の容易に斷定し得ざる所であるけれども、對手方が露西亞の舊官僚のやうな頑迷なものでない以上、我々に多少前途の見定めが付かない事もない。

併し何れにしても昨今勞働問題が世界的に大いに矢釜しくなりつゝあることは疑を容れない。

勞働不安は右の如く各國共通の現象であるけれども、吾人は此間に自ら强弱の差別あることを見逃すことは出來ない。之も矢張り一般經濟界の發達の程度に伴ふので、此點に關する所謂

後進國は勞働問題に就いてまだ夫れ程形勢が逼迫してゐない。斯くして我國に於ては此點に就いて識者の多くは稍々安心して居るやうな傾向のある事も亦隱し難い。成程近頃資本對勞働關係の問題が、頻りに言論界を賑はして居る。世界大勢の影響は遠い我國も免れない。とは云ふもの丶果してどれ丈け眞劍の討究と解決が彼等の間から提供されたか。之を考へると、我國の識者は流行に乘つて問題を問題としたと云ふ事以上に此問題をどれ丈け痛切に考へて居るかゞ疑はれる。併しながら之が果して安心して居らるべき問題であらうか。

現今世界を不安ならしめて居る勞働問題は見樣に依つては各國個々の内政上の問題である。けれども勞働問題なるものは本來共通運動を國内的に限つては斷じて成功するものではない。何故なれば彼等は彼等の要求が幸にして國内に容れられても隣りの國が依然舊態を改めざる以上、勞働條件の改善に伴ふ生産費の增加、之に伴ふ經濟的競爭上の不利と云ふやうな事情から其國全體が隣りの國から著しく壓迫さる丶事になる。隣りの國が果して同じやうな態度に出るかどうかの懸念が何時でも殘念ながら各國勞働運動の鋒先を鈍らしめて居つた。故に勞働運動は恰度戰前に於ける佛蘭西の社會黨が豫ての黨是たる「軍器彈藥工場に於ける同盟罷業」の斷行を決議するに方つて、世界各國が同時にやるならばと云ふ條件を附け加へられたと同樣である。從來は何事につけても國際協同と云ふ事はなか／＼六づかしかつた。併し今日のやうに曲りなりにも國際的精神が勃興する事になれば、彼等が彼等の問題を世界的に解決しようと努むるのは當然である。其最も極端なる例は露西亞過激派の世界的宣傳の運動であり、之に次いでは講和會議に於ける勞働規約の國際的制定の企てがある。此等は何も勞働者の道樂にやつて居ることではない。勞働者の自覺に伴ふ彼等の獨立人格の主張と云ふ極めて深い所に根抵を置くものである。何となれば勞働問題を世界的に解決せなければ彼等に與へらるべき「人として完全なる待遇」は常に威嚇を蒙るからである。巴里の會議に於て我國の委員は國情の異を說いて勞働規則の除外例を求めたと云ふ事あるけれども、例令一應は通つたにせよ、勞働問題を全體として考へる時に除外例の承認は畢竟自家撞着である。若し妄りに強く除外例を主張せんか、彼等は勞働條件の不完全なる國の產品に對し關稅を課すると云ふやうな方法で自衞の途を講ずるかも知れない。米國倫敦駐在帝國總領事の報告に依れば同國の勞働黨は日本の勞働狀態に關して質問書を出したとの事である。之れ如何に自覺せる一國の勞働者が他國の勞働條件に深い利害を感じて居るかを示すものである。斯う云ふ點からして予輩は我

野男の除外例の主張が認められたと云ふ事に安心して、今日倘勞働問題の講究解決を等閑に附して居るのを見て、將に來らんとする大暴風雨を前にして何等準備する所なき暢氣さに驚かざるを得ない。

勞働問題が本質上世界的性質を帶びて居ると云ふ事は當然勞働者階級に最も深き世界的精神を植えつけなければ止まない。此點に關して案外に蒙昧な日本の勞働者を觀て歐米のそれを類推してはいけない。歐米の勞働社會は斯う云ふ所からして何の問題であれ、彼等が國際的に共働し得る機會があれば直ちに之を捕まへることを過たない。斯くして更に彼等は一層其國際的精神を强める。此點に於て見逃すべからざるは、最近彼等の間に對獨講和條件に對する共同の反對運動が猛然として起つたと云ふ事である。一體今度のやうな過酷な條件はウイルソンの素志でもなかつたし、又國際協調主義の精神にも背く。國際協調主義の精神に促されて開かれた講和會議に各國から派遣された政治家の多數は國家的爭覇時代の舊夢から全く醒めないと見えて講和條件の討議を目茶苦茶にした。されば今度の對獨要求の如きは或意味に於て國際主義に對する軍國的國家主義の横暴を示すものと言つていゝ。之れ國際主義を以て初めて自家階級の滿足を徹底せしむべき各國勞働階級の堪ゆる所ではない。之れ彼等が期せずして反對の運動を起した所以である。而して今や段々各國の此等の運動は互に相聯繫して侵略的支配階級に挑戰せんとするの趣あるが、予輩は之を指して横斷主義の縱斷主義に對する對抗と云つて居る。國と國との縱の對立觀を基礎としての議論が勝つか勞働階級と資本的階級との横の對立觀を基礎としての議論が勝つか。孰れが勝つても資本家階級の連合の出來る見込はないが勞働階級の世界的連結は斯くして大いに促進さるる事丈けは疑を容れない。而して此事が一般勞働問題の世界的共同解決の機運を更に大いに增進すべきや又疑を容れない。

何れにしても勞働問題のもつと適切な將來は極めて近き將來に之を期待すべき理由がある。勞働者の智識も低いとか、資本家と勞働者の間には溫かい古來よりの美風があるとか、一般經濟界の發達もまだ其程度に達してゐないとか、我國特有の原因を數へて勞働問題解決の眞の切迫を見るまではもう少し間があるなどゝ安心して居るならば大いなる誤りである。

支那に於ける排日事件

學生に依つて口火を切られた支那の排日運動は昨今各地方に蔓延して遂ひに暴動の形を取つた。在留日本人に誰れ彼れの區別なく、無意味の危害を加ふるに至つては殆んど狂亂の態と言つていゝ。而して之れ偶々一方には中央地方の官憲の無力、他方には上下を通ずる民衆訓練の欠缺を暴露するものであつて、支那其者の爲めにも頗る憂慮すべき事柄である。

さはれ暴動の形を取る以上は我々としては斷乎として適當な自衛手段を執るに躊躇すべからさは言を俟たない。只之に關聯して我々の呉れ〴〵も注意しなければならないのは、一時の憤激に乘じて無謀の擧に出て、日支兩國の將來の親善を損ふべからさる窮地に陷れざらしめん事である。將來に於ける親善の回復を可能と信じ、又必要と認むる以上、我々の支那に對して取るべき方策は厭く迄も愼重に考慮しなければならない。此點に就いて差當り國民に訴へたい事は二つある。一つは膺懲の師を送るなど〻云ふ間違つた考に動かされざる事である。も一つは支那の政府自身をして暴動を取締らしむると云ふ所から再び北方軍閥派を援助する結果を生ぜしめざらん事である。支那の時局を收拾するの最良策を彼國に於ける軍閥の援助にありとする暴論は今日尙官界の一部に有力である。此等の一派の陰險なる運動に乘ぜられて一時の憤激に昂奮せる國民が援段政策の復活に裏書するが如き事あらば、之れ實に第三革命以來の支那の內亂に又もや油を注ぐものに外ならない。東洋の先進國を以て居る以上排日運動がどんなに狂暴を極めても、何處までも冷靜なる態度を失つてはいけない。

支那の問題をどう始末するか。此問題を愼重に攻究するに際して第一に見逃してならぬ事は、昨今の運動が支那國民の自發的運動なる事である。日貨排斥など〻云ふ之れまでも屢々あつた。而して其多くは官界商界の有力者の煽動によるものであつた。今度のも亦之れと同じやうなものであらうと考ふるのは怪むに足らないけれども、之れ實に時勢の變遷を知らざるものである。

尤も今度の運動は世間の傳ふるが如く林長民の一派が煽動したものであるかも知れない。梁士詒の一派乃至在留英米人の助勢もあつたらう。予輩は此等の點に關する報道を餘りに誇大に過ぐると認むるものであるけれども、又全然之を打ち消さうと

するものでもない。支那に於ける日本對英米の經濟的葛藤は隨分久しいものである。日本的勢力の失墜を導くべき絶好の機會を彼等が捕へたからとて何の不思議もない。我々から見て怪しからんには相違ないが、單に之れ丈けで民心の動揺が生ずるものなら日本の方でも同じ方法で之に對抗し、排英米熱を起し得ざるまでも少くとも排日熱位は止められさうなものだ。排日熱は起し易い、排英米熱は起し難いと云ふなら、其處に國民的運動の起るに就いて煽動以外に何物かの潜んで居ることを認めざるを得ない。此處を考へて見ると今度の運動に就いて外人の煽動呼ばりなどをするのは抑々末の末である。

若し夫れ林、梁諸派の煽動の説に至つては固より支那に珍らしい事では、ない。支那のやうな國情の下に於ては一旦勢力の地位に上れば其地位を利用して益々勢力を堅め、陰険な方法で之を倒す外に勢力回復の途が政敵に殘されて居ないから、立憲政治の精神が徹底し一切の政爭が道義的に行はるゝやうになる迄は、煽動誘惑と云ふ現象は跡を絶たない。今度の運動が假令直接に彼等の煽動によ由て起つたと言はないまでも、少くとも彼等は之を反對派を陥るゝに利用したと云ふ事はありさうな事である。併しながら之れ丈けで今日現に見るが如き大騷動が起つたと云ふならば之れ亦大いなる誤りである。

支那の人民は昔は政治的に頗る無智であつた。之を動かすも又之を止むるも政治家の意の儘であつた。併しながら時勢の進歩のお陰で今日彼等は呉下の阿蒙ではない。尤も何人にも煽動されずに獨りでに起ると云ふ程までに開けても居ない。どんなに必要が切迫しても口火を點けるものがなければ容易に動かないが、併し動く丈けの素質が出來て居るから、必要な煽動者さへあれば何時でも起る。が然し一旦起つた以上は、煽動者の思ふ通りにのみ動くものでない事は十分に之を認めて置く必要がある。之は獨り支那に限つた事ではない。大風の吹く時に火を附けるやうなもので、犯人はたつた一二軒を燒く積りであつても、彼に依つて點けられて火は心ずしも夫れ丈けでは止らない。軍閥者流が滿洲や西伯利に行つて政治上社會上之れ／＼の結果を生ぜしめんとして有力な一二の人間に何等かの薬を施し而かも其結果が常に失敗に歸して居ると聞いて居るが、夫は必ずや此點の認識に誤りがあつた爲めであらう。要するに支那の現在の運本は誰かの煽動によつて起つたものであるとしても今日の運動其物は決して煽動者其物の運動ではない。誰れ其れが煽動したからと云つて一生懸命非難の聲を其處に集中するのは四方八方に燃え擴がつて居る火を消さんとして火元の穿鑿を責むるが如きものである。

要するに今日の運動は國民其物の運動である。而して國民は何を目標として此運動に熱中して居るか。一つは外國の侵略主義の排斥である。一つは國内に於ける專制的官僚主義の排斥である。而して我日本は偶々外來の侵略主義のチャンピオンであるとせられ、又所謂親日派と稱せらるゝ三四の青年政治家が官僚主義の元兇と認められたが故に此運動の鋒先は日本に向つて來た。排日の形を執るのは我々の甚だ忌々しく思ふ所であるけれども、其奥に潜む彼等の抽象的主張に至つては我等の大いに同感の意を表する所である。

であるから如何なる方策を以て彼等に對するにしろ、(一)彼等は英米の煽動に乘つて居る、又は林・梁等の政治家に利用されて居る、馬鹿を見ないやうに注意し玉へなどゝ云ふ丈けでは彼等を納得させる事は出來ない。(二)所謂曹、章、陸等の親日派を苛めた故を以て日本其物に對する根本的反感の表示なりと呶鳴るのでも亦彼等の納得を買ふ事は出來ない。(三)若し夫れ北方軍閥を助けて此際此國民的運動を撲滅せしむべしとの說に至つては策の最も拙劣なるものである。(四)我等は對支政策に於て斷じて御用商人主義を捨てなければならない。狡猾なる御用商人は其出入する役所の要路に、醜陋なる手段を盡して必ず一人二人我儘の言へる對手を作つて居る。公明正大な競爭を回避するは勿論、時によると直接間接の惡辣な援助を與へて異分子を役所の要路から押しつけしむる。支那の國民は日本の對支政策を此御用商人主義となし、曹、章、陸を以て御用商人に致されたものと認めて居る。其間に醜穢な結托があつたか無かつたは別問題として、兎に角官規を振肅するの必要ありと云ふのが今度の運動の一つの目的である。此間に誤解があるかどうかは暫く別問題として、我々は日本の名に迷つて御用商人を庇するの誤りに陷つてはならない。

我々は支那の言分にも相當の道理のある事を認める。けれども、何分昨今のやうに一から十まで排日々々で押し通されては困る。も少し冷靜になつてどうすればいゝのか具體的の案を提出して貰ひたいと考へて居る。日本にも支那問題で隨分熱して居るものが少くないが、我々は冷靜なる隣邦識者の公明なる提案に對しては冷靜に考慮する丈けの準備を有つて居る。斯くして兩國國民の間に眞の諒解と適當なる解決の成立せんことを希望し且つ期待するものである。

小題小言七則

◉日支大學の聯繫

支那の排日は侵略の日本に對するものである。只彼等が一概に日本排斥を唱ふるのは日本に侵略の日本と平和の日本とあることを知らないからである。支那が日本を排斥する爲めに擧ぐる所の理由が全部當つて居るかどうかは別問題として、尠くとも其批難の大部分は平和の日本の與り知らざる所たるは言ふまでもない。侵略の日本の爲めにどれ丈け煩はされてあつたかは我々が多年國內に於て之に對抗して來た事實にも明かであらう。平和の日本を代表する我々は、支那の排斥を受くる何等の理由なきを信ずるのみならず、却つて彼等の本來の精神に大いに共鳴するものあるを認むるものである。尤も支那にも不純不逞の分子あるは我國にも之れあると同じ事である。此等は自然共亡び行く運命を辿るに任かしていい。只双方の健全なる分子に至つては、共に相聯繫して東亞の將來を語ることが出來ると確信する。此確信から見れば此頃の排日の風潮の如きは殆んど云ふに足らぬ。斯う云ふ確信に基いて東京帝國大學と北京大學との有志の間に特別の交涉があつたが、最近北京大學より當方の發案に對し大々的贊同の意を表し、協同の運動が遠からず北京及び東京に於てあらはるべしと聞くに至つては、我々は最も熱心に此計畫を歡迎せざるを得ない。尙之に關聯して吾人は再び蔡元培君を總長に迎へんとする學生一般の希望に同情し、又兼々學生輿望の中心であつた陳德秀君が「北京市民宣言」を頒布したるに由つて官僚軍閥の毒牙にかゝりしを遺憾とし、一日も早く釋放されて淸議公論の發表が隣邦に於てももつと自由に許されんことを希望する。

◉水原虐殺事件

外字新聞の猛烈な攻擊に依つて初めて我々に知られた水原に於ける驚くべき虐殺事件は、過般憲政會有志の首相訪問の際の會談に於ても政府自ら認むる所の事實なる事が明かになつた。果して然らば之れ實に許す可からざる人道上の大問題たるは言ふを俟たない。之を如何に處置するかは目下政府に於ても講究中であると云ふことだから今深く之を追窮しない。只之に關聯して予輩が茲に國民の反省を求めたい點は、或新聞が某軍人の談として「同じやうな虐殺を水原で實は彼等鮮人が我憲兵に加へた。獨り我軍人を責むるのは片手落だ」と言つた事である。鮮人がどう云ふ譯で憲兵を虐殺したかの動機は茲に問はない。けれども彼等もやつたから俺もやるのだと云ふ理屈は無い。報復は大國民の愼むべき所、況んや彼はもと身に寸鐵を帶びざるものなるに於ておや。兎角我國の官吏は鮮

人を同化する〱と云つて却つて彼等に同化されて居る事實が多い。彼等が虐殺で來るなら此方からも虐殺で行く、さうする事が彼等を威服する所以だと考へるなら是れ即ち彼等の考へ方に同化されたものではないか。又聞く所に據れば朝鮮の道長官の如きは土民に臨んで威張ること、丸で昔の大名のやうだと云ふ。斯うでなければ官吏としての威厳が保てないと云ふのであるが、分不相應に威張ることに依つて僅かに官吏の威信を保つと云ふのは之れ取りも直さず朝鮮の弊風に我れ自ら同化されたものではないか。本當に同化しようと云ふなら形式で威張らなくとも鮮民が心服するやうに仕向けて行かなければならない。同化政策に對しては我輩根本的に疑を有つて居るけれども、假りに之が適當の政策だとしても朝鮮の官吏の遣り方は目的夫自身に裏切つて居る。

◉朝鮮統治の國民的支配　日本の政治は議會其他の立憲的諸設備に依つて陛下の有り難き思召に依り國民の支配の下に置かれて居る。而して朝鮮の統治は我々國民に最も利害關係の深い大事な政治問題なるが故に、之をも亦我々國民の支配の下に十分に監督せんとするのは當然の要求でなければならない。不幸にして官僚政治の多年の弊害は内外庶政の國民的支配は内地に於てさへ十分でない。けれども段々時勢の進歩により我々の言論は昨今多少の影響を實際界に及ぼす事が出來るやうになりつゝある。我が朝鮮の統治の如きも少くとも之と同じ程度の影響を我々の自由なる批判に依つて與へ得るやうにして置きたい。然るに意外千萬にも朝鮮の政治は、政治に對する國民的支配と云ふ見地からすれば全然治外法權の域である。單に之れ丈けでも時代後れの惡政なることは一點の疑を容れない。其上統治の實權は上から下まで殆んど武人の手にある。武人は政治家でない。植民地は武断を以て之を治むべしとしたのは何百年かの昔の夢、今日に於ては微妙なる民族心理に通ぜる特殊の教養を積んだものでなければ植民地の統治に當らしむべからずとなつて居る世の中だ。天下恐らく最も大事な地位に最も不適當なものを當てた事、我が朝鮮政府の如き例は無からう。之を根本的に改革するのは前號にも述べた言論の自由と共に朝鮮問題解決の上に横る焦眉の急である。

◉所謂「官廳の威信」に就いて　六月初めの諸新聞に次のやうな記事が表れて居つた。曰く、現内閣は數ケ月前より朝鮮總督の任命に文武併用主義を採用せんとし、着々其歩を進めつゝあつたが、恰かも暴動が起り、爲めに併用主義を取れば暴動が其効を奏したと云ふが如き形となり、面白からぬ惡例を將來に貽すの虞れありと云ふので此案も頓挫して居る

上。予の知る或る縣の某郡長無能で且つ非常に評判が惡い。當局之を處分せんとして居る所へ恰度地方有志數名事實を具陳して轉任を求めて來た。其處で當局の言ひ分が面白い。どうせ移さうと思つて居つたけれども、人民の運動の結果轉じたとあつては運動さへすれば何んでも聽かれると云ふ感情を人民に抱かせる虞れがある。之れでは「官廳の威信」が立たないとて亂暴な郡長も今尙其地位を保つて居る。學生がストライキをする。假令道理が學生にあつても之に屈したとあつては先生の威信が立たないと云つて厭く迄學生を威壓し、又極力排斥の的となつた惡教員を曲庇する。之れ皆「官廳の威信」と云ふ一言で是認せらるゝ所の惡弊である。お陰で惡官吏は他日餘熱の冷めた時他の理由で處分さるゝまで其地位を保つことが出來るのみならず、處分の原因も先に問題になつた失態の爲めと云ふのでないからマンマと責任も免れる。「官廳の威信」は官吏には非常に便利だが、國民の迷惑は此上もない。併し上官の命令には絕對に從ふものと敎へて天下の秩序の保たれた時代は遠き封建の昔の事では無い。今日立憲の世の中になつて封建時代の政治論を持つて來るのでは益々社會を混亂せしむる丈けである。何時如何なる場合にあつても紛亂を收むる最良の方法は道理をして最後の勝利者たらしむるにある。學生の言ひ分が正しいなら何時でも之に從ふ。茲で道理を勝たして置けば他日學生の言ひ分の正しくない時容易く之を取つて抑へることが出來る。道理を無視して頑張ればこそ人民も理非の判斷を超えて反抗する。斯くして已むなく民間の威壓に屈すれば人民は理が非でも押し通さうと云ふ氣になる。斯うなつては困るからとて人民の言ひ分は一から十まで聽かないと云ふのは自家撞着ではないか。「官廳の威信」は「道理」と云ふ基礎の上に築いて初めて鞏固なるを得る。今の官吏は皆威嚴の置き所を間違つて居る。惡いものがあつたら何時でもやめる。失態があつたら總督であらうが大臣であらうが必要に應じてどん／＼罷めた方がいゝ。

◉公正會の前途を祝す

日本の支配階級が上下を通じて因循固陋の弊習に馴んで居る間に、而かも因循固陋の源泉とまで認められて居つた貴族社會の一角から公正會の發生を觀たのは我々の最も痛快とする所である。已に互選男爵議員五十餘名を集め、更に各方面に擴張の餘地ありと云ふ事であるが、假令んば五十餘名に止つても彼等の間には確かに一種鬱勃たる自由な進歩的な生命の潑剌たるものあるを認むる。生命ある運動の前途は數の高には拘らない。何故なれば其反對のものまでが陰に陽に大いに其刺戟を受け開發を促さるゝからである。此會の幹部の中には私交の上、又主義の上我々の友人同志

も少くない。其前途に多大の希望を囑し、且つ其將來に於ける發展を祝する所以である。

◎公設市場案の蹉跌

昨今米騷動の際臨時救濟會よりの寄附金の剩餘四十萬圓の處分に就いては公設市場を設くべしと云ふのが一般の輿論であつたと思ふ。けれども市參事會では之を眞面目に問題とせず今日まで放任して來たのであるが此上放任する譯に行かない事情があつて、六月十三日之が審議を求むる事となつた。市の當局者の考では若干の簡易食堂と市内十七八ケ所に公設市場を設けたいと言ふにあつたさうだけれども、いよ〳〵市參事會の議に上ると公設市場案は一溜りもなく蹂み躙られ簡易食堂を作ると云ふ事に決つた。而して斯かる決議を觀た所以は公設市場の設置の爲めに打擊を蒙るべき商人の反對を怖れた事にあると認められて居る。公設市場が物價調節に缺くべからざる方策なることが學界の定論であり、内務省地方局長までが六月十一日各地方長官に宛て市場設置奬勵の通牒を發して居る際に、而かも大阪や名古屋や之を設置して頗る良好の成績を擧げて居る實例があるのに、獨り東京のみ之を否決し去つたのは實に我々の意外とする所である。之よりも更に意外なのは此亂暴な市參事會員の處置に對して二百萬の市民が平然として何等責むる所なきの態度である。

◎友人の好意に對して

僕の此頃の言論が二三の方面から非難され、惡罵されることに對して、相當の辯明をしたがいゝではないかといふ好意的忠告を與へられる友人が澤山ある。僕の此頃の言論にして世間批難の的となつて居るのは主として次の三方面である。一つは官僚軍閥の攻擊である。一つは支那朝鮮の問題につき公平正當なる解釋を以て國民を警告することである。も一つは歐米殊に米國の態度に關する武斷を排して國民の世界的見識の開發に幾分貢獻せんとする事である。僕自身の智見の狹きより來る誤謬は別として、思に所僕の誠意は斯くして幾分でも日本國民の文化的向上に貢獻せんとするに外ならない。而して之に對する各種の非難をよく考へて見れば愚にもつかぬものが多い。官僚軍閥の末派が例へば我々を國賊呼ばりするのは、恰度赤ン坊が自分の氣に入らないものを親兄弟の見境なく馬鹿々々と云ふやうなもので本氣になつて對手にする譯に行かない。支那朝鮮の言ひ分に同情して日本の非を擧げるのが惡いと云ふのは自分の言ひ分は理が非でも通すのが國家の面目だとする封建の餘弊に外ならない。若し夫れ英米の美點を擧ぐるのが癪に障ると云ふのは、他所の婦人の縹緻を褒めたからと云つてやゝもすると亭主の胸倉をとる嫉妬燒きの類ひで之を對手にする丈けが此方の器量を下げる。之を辯難論爭するのが眞に世の爲め人の爲めになることなら、僕不肖なりと雖も敢て之を避くるものでないことは之まで幾多の例によつて友人諸君の認めらるゝ所であらう。只蒲柳の質、活動心に任せず其上公私共に可なり忙しい軀だから議論をするにも對手を選ぶ位の事は大目に見て頂きたい。

蘆花 徳富健次郎著

みゝずのたはごと

第八十五版

過る六年間土の洗禮を受けて武藏野の孤村に鍬をとれる著者が折に觸れ興に乘じて筆を走らせし即興のスケッチ、短篇小說、瞑想、書翰、紀行等を集む。

清新なる田園の小景……
詩化せられたる教訓……
淚を含む笑に滿てる物語……
有象より無象に通ふ神秘の暗示……
平淡の中戰慄すべき恐ろしき說話……
巻中に充滿す

都會住者は讀んで麥の穗末を渡り來る暮春の薰風の如き自然の氣息に接せよ。田舍に住む人は之れに依つて新に吾周圍を見るの眼を開け。九葉の寫眞版は本文を助けて說話の舞臺を讀者の眼前に躍如たらしむ。

縮刷判紙數約七百頁　定價金壹圓卅錢（郵税八錢）

蘆花 徳富健次郎著

小說 黒い眼と茶色の眼

第廿三版

是れ不如歸の著者、『思ひ出の記』の著者、『みゝずのたはごと』の著者が、其三十年前同志社學生時代に於ける戀物語なり、破れたる初戀の慘憺たる一告白なり、聽說、著者此告白を江湖に公にするに當り遲疑逡巡、稿を換くこと實に再度に及べりと、其如何に眞摯にして謹嚴なる發表なるかを知るべきなり、此書によつて著者は其年來秘め置ける著者最奧の心事を語り、世間は未だ曾て窺ひ知らざる著者の一生面に接見せん

四六判紙數約五百頁　定價壹圓五拾錢（郵税十二錢）

發賣元　東京市銀座通新橋際　新橋堂小賣部　振替東京四三六四二番　電話銀座五九一一番

◎衛生新報主筆醫士 伊藤尚賢先生著

醫學的秘傳百法

縮刷形クロース製本　定價金壹圓　郵税金八錢

有ふれたる無効有害なる禁厭的のものにあらず醫學上奏効確實なる秘法百種を輯集せるものなり

小兒病參考書

- 瀨川醫學博士述　增補訂正　實驗上の育兒　上卷價七十五錢　下卷價七十五錢　郵税各十二錢
- 瀨川醫學博士述　育兒及虛弱兒の養育法　價金八十錢　郵税金八錢
- 佐藤醫學士述　生殖より育兒迄　定價金壹圓　郵税金八錢
- 豐福醫學博士述　小兒傳染病の話　上卷二十錢　下卷二十錢　郵税各二錢
- 唐澤醫學博士述　小兒病の話　價金二十錢　郵税二錢
- 衛生新報社編纂　兒童健康增進法の話　價金二十錢　郵税二錢
- 豐福醫學博士述　通俗　小兒病治療養生法　價金三十五錢　郵税四錢

東京市芝區二葉町九番地　新橋堂出版部　電話新橋一九一九番　振替東京二〇〇番

新刊

片隅の幸福

生田春月氏著

菊半截約三百頁
優麗高雅の美本
定價八十錢
郵送料六錢

嘗つて感傷の春の悲み、果敢なき戀の憧れ、靈魂の秋の痛みを歌つて日本のハイネを以て稱せられたる著者。今その青春時代を散文詩もて描き歌へる優婉の文字を集め。これに最近深く人生問題に思ひを凝らせし餘になる、謙遜純潔なる心が、いかなる不幸にあつても、その小さき片隅に幸福を見出し得べきを說ける、詩的哲學を加へて此一卷をなす。凡ての眞劍にして情熱ある青年諸子に敢て此の慰籍の書を推薦せんとす。

◇目次◇

新刊

世界革命史論

內山省三氏著

四六版總革五百餘頁
定價一圓八十錢
郵送料十錢

（東京　江原書店發行
越山堂發賣）

佛露獨三國の革命を中心として中世紀末以來現代に至る民主思想發達の徑路を叙し人類生活の變遷を明にせるもの卽本書也之を繙けば現代のデモクラシー運動が何處に源を發せる乎如何に發達して今日に及べる乎將來那邊に歸着すべき乎は歷々掌を指すが如きものあらん今の時何人も必讀を要す。

生田春月氏編

日本近代名詩集

■六版■

定價八十錢
送料六錢

生田春月氏編

泰西名詩名譯集

■五版■

定價九十錢
送料六錢

東京神田猿樂町
電話本局一三一九二

越山堂

振替口座東京一二九五四番

ビー、デー、エム、エス、エー　小平國雄先生新著

最新刊

デモクラシーと帝國の前途

●本來デモクラシーの理論や政治的使命を力説したる者はあれど未だ其理論と實際とを詳説した者はない本書は著者がデモクラシーをよく消化して日本社會生活に適應せしめんと企圖し更に大和民族の自重を説き新イズムを提供して新日本を人類大に解放せんと試みた者である今や人心の動搖甚しき秋に方り眞に國を想ふ凡ゆる階級の士に向つて切に一讀を薦む。

●大阪朝日曰く澎湃たる時代思潮の到來となす愈出でて愈戸迷の感なくんば非ず本書述る所はデモクラシーが近代の發見に非ざる事及近代の國家及國民生活が此原則に據らざるべからざるを力説したるもの自覺自重の國民性はデモクラチックなる教育によつて養成さるべきを説く點最も要を得たり。

四六版總クロース新裝
定價一圓五十錢
郵税八錢

櫻の花と三味線と火事と喧嘩と花魁と伊達者女と旗本と大名小路祭など

江戸情調　江戸の傳説と批評

江戸傳説叢書

■本書體裁表紙は内容にふさはしき和紙木版色刷口繪及挿繪は傳説地を寫又は貴重珍書

定價四十錢税四錢
毎月一冊乃至二冊發行
割引六冊送料共貳圓四十錢

日本傳説叢書著者　藤澤衛彦氏執筆

一篇　八百屋お七

▲江戸紫の色に生れて海棠の蕾のうら若い可愛瞳の—

日本六十餘州の眞中に八百八町の戀を背負つて立つた崩ゆる情の美しい火のやうな女……その女の傳説と批評……

二篇　番町皿屋敷

▲一つ二つ三つ四つと皿數へに悲しみ歎くお菊傳説の—

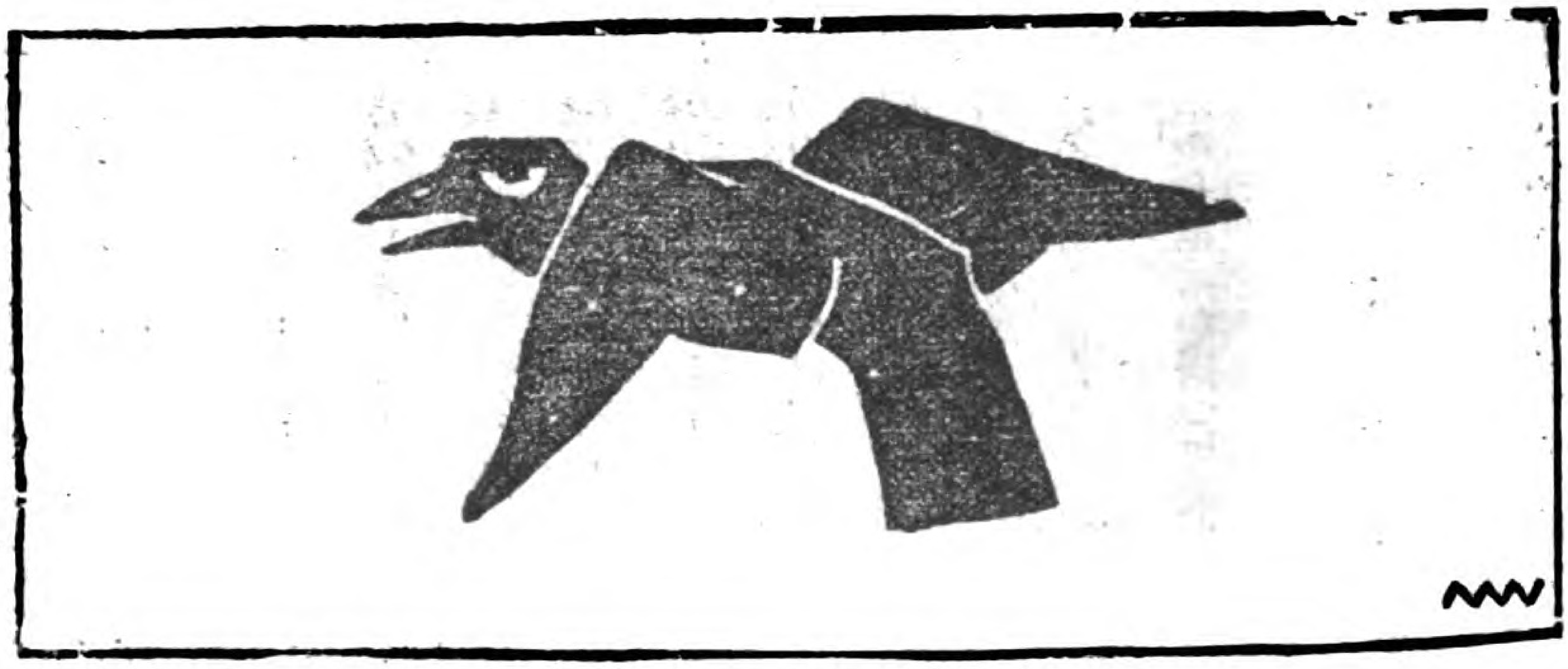
未だ血の色の穗のうちに薄の美しさを井戸に任してさて執拗なる怪を示した江戸に一人の呪ひの女その女の傳説と批評

三篇　吉田御殿

▲吉田通れば二階から招くしかも鹿子の振袖の千姫が—

累卵の危を後に大阪を立退頃から漸く妖麗な姿態を謠はれた牡丹の花が御朱殿の奥に男を魅する其行路の物語と批評

東京市神田淡路町　啓文館　電話神田二二一八番　振替東京四六三八〇



廓の唄

村松梢風

一

泪のやうな雨が、梧桐の幹を傳つてタラタラ流れてゐる。空も、屋根も、何も彼も皆同じやうな佗びしい鼠色にぼかされてゐる。

秋葉はぼんやり座つて硝子越しに外を眺めて居た。彼は、丁度地の底へ吸ひ込まれてでも仕舞ひさうな暗澹とした氣持に引きづり込まれた。まつたくどちらを見ても、生々しく破壊されてゐる自身の生活の跡ばかりだ。花びらが地に落ちて泥に塗みれてゐるやうな惨めな自身の姿を隨所に見た。

「かうして居たら、俺は最後にはどうなるだらう？」

かう考へると、彼の眼の前は直ぐに眞暗くなる。いくら踠いても駄目だ。斷崖から轉がり落ちる石塊のやうに結局は此の世の一番どん底迄沈んで行くのが自分に定められてゐる運命かも知れない——なんとなくそんな氣もする。

下宿の拂ひが久しく滯つてゐた。さうした當面の問題がしよつちう彼の頭を惱まし

てゐた。金策の當ては尠しも無い。「矢つ張り國へ賴んで遣るより外に仕方が無い」彼はとうからさう思ひながらも、破產してしまつた郷里の家にたつた一人で淋しく暮らしてゐる母の面影を浮かべると何うにも筆が執れなかつた。子を連れて生家へ歸つて居る妻の事で考へさせられることもあつた。妻からは偶に消息があつた。然し、妻の手紙といへば、赤ン坊がおできのためにむつかしがつて困るとか、あるひは妻自身が病氣で——心臟と胃腸が惡いと言つた——此の頃は鹽湯に入つて居るとかいふやうな彼の心を沈ませるものばかりであつた。彼は妻の國へ遣らうと思つて慰めの文句など並べた手紙を書きかけてみることもあるが、いつも中途で厭になつては止めて仕舞つた。今更好い加減な氣休めを言つた處で仕方が無いといふやうな氣持になる。心のうちで同情して居りながら、相手からは恨まれたり憎まれたりしてゐる方がまだしも氣易いやうに思はれるのであつた。

さうした揚句に、秋葉の心は識らず識らず紫の事を考へてゐた。「もう幾日位逢はないのだらう——？」彼は、紫の眼だの、唇だの、肌の匂ひなどを胸に吸ひ込むやうに描きながら考へた。締め付けられるやうな切なさと、身うちがカツと燃えさうな熱さを彼は感じた。しまひには泪が限りも無く湧いて來た。

紫から電話が掛つて來た。秋葉は自身の胸の顫ひを感じながら電話口へ出て行つて、慌たゞしい手つきで受話機を耳に當てた。

「モシモシ、あなた秋葉さん？　あたし紫——。どうも御無沙汰して濟みません。お變り有りませんですか——」

いつもの通りの調子でかう云ふ紫の聲が秋葉の耳に懷かしく響いた。幻想を追ふやうな眼つきをしながら、體をすこしくの字にして電話口に立つてゐる紫の姿が彼の眼に浮かんでくる。二言三言話すと、どちらも妙に言葉が杜切れてし

まつた。
「あのネ、實はすこしお願ひがあつて電話をお掛けしたのよ」と、稍あつて棠が云つた。
「何んです? 其の頼みといふのは——」秋葉は落ちついた調子に戻つてゐた。
「そら、いつか貴郎にお預けした指輪ね、あれが急に要る事があるから送つて頂き度いんですけど……」
「そいつは困るな——」秋葉は直ぐにかう答えた。
「それはお察しゝてよ。だけど、あたし是非あれが要るんだから、何んとかして頂かなきや困つちまふわ」
と、棠は押し付けるやうに云つた。その何時にない冷淡で皮肉な調子が急に秋葉を不快な氣持にさせた。彼は、唐突にこんな事を云ひ出した相手の心持に就いて咄嗟の想像をめぐらして見た。
「急にそんなこと云つたつて仕様が無いぢやないか——。一體なんであれが入用なんだ?」
「あたし大變な事があるのよ。それで是非要るんだわ」
「大變な事つて、どんな事なんだ?」
「そんな事玆で云へるものですか。——なんでもいいから、あれを返して頂き度いのよ」棠の言葉は、苛ら苛してゐるらしい險惡な調子を帶びてゐた。
「宜し。さういふことなら如何にも承知した」秋葉の聲は顫へた。
「ぢや、二三日うちに乾度お願ひしてよ。——左様なら」
と手つ取り早く云つて、カタンと受話機を掛ける音がした。秋葉は蒼白な顏色をして電話室を出て、自身の座敷へ戻つた。机の前へ座つてからも胸がワクワク躍つてゐた。彼は今棠の云つた言葉を何遍も心に繰り返して見た。それに

は、冷淡と邪慳の外に何物も無い。遠くへ離れて自分を嘲笑つてゐる棠の顔が眼に見える――。

「何かで誤解して居るのだらう――。否、それとも全く指輪が要るので慌てて居るのかも知れない――」こんな風に秋葉は解釋しやうと努めても見たが、それは何んの甲斐も無く直ぐに力を失つてしまふ。數限りない男を相手にしてゐる女の生活は、何時でも彼を不安の闇路に引つ張り込むやうな事ばかりだ。

小寒く、だらしなく降る雨が秋葉の心を一層暗くさせた。

雨の中に煙つてゐる街に、無數の燈火が花火のやうな尾を曳いて美しくにじみ込んでゐる。泥濘（ぬかるみ）の路を激しく搖られながら、秋葉は俥の幌の内からそれを眺めてゐた。かうして行く道筋の時間さへ彼にはもどかしいやうな氣がすると同時に、一方では棠に會つて總べての解決を早めるといふことが何んとなく恐ろしいやうな、臆病な心持を感じてゐた。茶屋に借金が溜まつてゐることを考へるとそれも氣が引ける。此の寒空に彼は外套を着てゐなかつた。

棠は珍らしく三味線を出して彈いてゐた。火鉢の側では新造のお房が猫脊をして新聞の續き物を讀んでゐる。

「おや、まあお珍らしい」と、お房は突然店の者と一緒にまた秋葉を見て吃驚しながら云つた。棠は三味線を持つたまゝつと起つて向うへ這入つて行つた。秋葉は其の跡へきちんと座つた。

「いらつしやいまし」とお房は丁寧に頭を下げて、しげしげ秋葉の顔を見ながら懷かしさうに「ほんとに今度は暫らくでしたねえ。いつでしたつけ、此の前いらしつたのは？」

「さあ何んでも此の月初めだつたから、まだ幾らにもならないだらう」秋葉は莞爾々々笑つて云つた。

「さうですかしら。なんだか一月も二月もお目に掛らぬやうな氣がしますわ。ほんとに御無沙汰して濟みませんでし

た。一度お伺ひしやう〳〵つて云つてたんですがね、なんですか、此の節のべつにそこらが具合が惡いもんですから——」

「しばらく——」と、紫は男の側へ座ると惡るく澄ました調子で云つた。

「でも貴郎がいらして下すつたんで、わたしも是れで安心しましたよ。やれ夢を見たことの、どうしたら思ひが通じるだらうなんてね、氣味の惡いことばかし聞かされるんですもの、わたしも大抵氣にして仕舞ひますよ」

お房は上り花を入れながらこんなことを云つて二人の顏を見較べてはニヤニヤ笑つた。秋葉は苦笑した。かうしたお房の調子が今日に限つて空々しく感じられる。紫は兩方の袖を胸のところで合はせて、すこし上向き加減に空とぼけたやうな顏をしてゐた。秋葉には、其の眼が自分を嘲笑つてゐるやうにしか見えなかつた。

「丁字屋へは寄らずにいらしつたんですか?」と、お房は氣がついたやうに訊いた。

「ああ、道が惡いから寄らなかつた」

「ぢや一寸電話で知らせて遣りませう。秋さん、召し上り物は何にしませう?」

「何んでもいい。然し、今夜は酒を吞むからね」

「へえ——?大層な勢ですこと」

お房はかう云つて笑ひながら出て行つた。

秋葉も紫も。どちらも默り込んでゐた。冷たい空氣が眼に見えない區劃を二人の間に作つてゐる。しまひに秋葉は、融和しない不快な氣分に堪へられなくなつて來た。然し、何か言はふとすると妙に自分の心持が言葉から逃げて仕舞ふ。

「此の頃は忙がしい？」から云つたあとから秋葉は直ぐに後悔するやうな氣持になつた。

「ええ、お蔭樣でぽつぽつ――」と、業は微笑ひを浮べながら云つた。

秋葉は直ぐにも歸つて仕舞ひ度いやうな苛ら立たしい氣持になつて居ながら、矢つ張り其の場に押さへ付けられてゐた。お房は電話を掛けて戻つて來ると、又もや隔意の無い調子で頻りに秋葉に話しかけた。秋葉は氣の乘らぬ容子でそれに受け應へをしてゐた。冷たい女の態度や顔つきを見ると彼は、あらゆる感興を唐げられて仕舞つた。酒が來ると、秋葉は平常飲めもせぬのに無闇に煽つた。

「そんなに上がつても宜敷いんですか」お房はしまひに心配さうな顔をした。

「大丈夫だよ」秋葉は笑つてゐた。

「此の節大抵お内にいらつしやるんですか？」

「いや、近頃は出てばかり居るんだ。仕事が莫迦に忙しくなつて來たものだからね」と、秋葉は眞紅な顔を耀やかして云つた。

「へえ――、それあ結構ですね。矢つ張り護謨の方の御商賣なんですか」

「さうなんだ。實は今迄資本の事で弱つて居たんだが、今度素敵な金主が附いてね。まあ是れで私も一と踏ん張りやつて見るつもりなんだ」

と、秋葉は調子に乘つて云つたが、直ぐにあとから自身を嘲笑ふやうな淋しい氣分に襲はれた。言へば言ふ程心の中の空虚（うつろ）が大きく擴がつて行くばかりだが、彼は何か喋らずにはゐられないやうな落ちつきの無い心持になつてゐた。

「お房さん、私は是から眞面目にならうと思ふ。何時迄道樂しても始まらないやうな氣がして來た」

「そりや、其の方がよござんすとも。お互ひに限りの無いことですからね。成る可く遠間にするんですね。其の代り花魁にだつて、以前のやうな我儘なこたわたしが云はせやしませんよ」

「否、遠間にも近間にも、何んだか馬鹿々々しくなつちやつたんだ。花魁買ひの面白さもくだらなさも一と通り解つて仕舞つたから、此の上同じ事を繰り返すのは厭になつたんだ」

「おやおや、大變な愛想盡かしですね。花魁、秋さんがあんなこと云つても宜敷いんですか」

「さうねえ――」紫は感興の無い調子でかう云つて向うを向いて欠伸をした。「血の道が起きてるのよ」

そして、握り拳で額を叩いてゐたが、ぷいと起つて廊下の方へ出て行つた。

お房は褥を取つて秋葉の着物を替へさせた。秋葉は仰向きになつて一人で寢てゐた。猛烈な酒の醉ひが全身に發して來る。さまざまの考へが疾風のやうに頭の中を荒れ狂つてゐた。

紫は枕元に座つて何時迄も煙草をのんでゐた。そして時々じれつたさうに煙管をはたいて見たり、ブツクサ口小言を云ひながら用も無い戸棚の中など掻き廻して見たりする。

「ああ睡い睡い。死に目が近付いたのかしら」かう云つて紫はポンと煙管を抛り出した。

「おい、何か大變な事が出來たつて話だつたが、一體どんな事なんだ?」と、秋葉はムツクリ起き上がつて云つた。

「何んでもいいのよ。あたしだけの事なんだから」紫は冷酷らしい笑ひを浮かべて「其の大變を聞きに態々來たの? 隨分御苦勞様ね」

「貴様は、本氣で云つてるんだな」

「それがどうしたといふの?」

秋葉はいきなり女の横面を擲り付けた。それでも紫は平氣な顏をしてゐる。ぶたれた頬に薄紅く血が上ぼつて來る。

「あたしは、貴郎にぶたれるほど惡いことはしないのよ」と、紫は落ちつき拂つて云つた。

秋葉は起き上がる拍子につい煙草盆を蹴飛ばして仕舞つた。灰や火が疊の上に散亂した。其の物音に駭いてお房が這入つて來た。

「まあ大變だ。どうしたんです？」

「飛んだ粗相をしちやつた」秋葉はかう云ひ捨てて廊下へ出た。風がガタ〱鳴つてゐる硝子戸に雨が降り付けて、戸外は眞暗かつた。それと反對に、並びの座敷は何處も彼處も明るい電燈が美しく障子を染めて、靜穩な世界を其の中に包んでゐる。秋葉の體はブル〱戰いてゐた。海のやうな戸外の暗がりを凝視てゐると、熱い涙がきりも無く湧いて來た。

お房は浪の花を掛けて頻りに灰の始末をしてゐた。紫は布團の上に座つて默つてそれを眺めてゐた。秋葉は一人で亂れ箱から着物を出して着始めた。

「あら、どうしたんです？」とお房が云つた。

「歸つちやいけないことよ。あたし話があるから――」

紫は側へ來て男の顏をじつと凝視めて云つた。其の眼にはあらゆる物を燒き盡して仕舞ひさうな劇しい愛情が燃えてゐた。秋葉は譯もなく昂奮して仕舞つた。憎いのか腹立たしいのか解らない。形容の出來ない一種悲哀の感情に打たれて、彼は無我夢中で女を突き飛ばした。

「まあどうしたんです？そんなに亂暴なことをしないで、わたしに譯を話して見て下さい」お房は駭いて、猛り立つ

てゐる秋葉を留めやうとした。

「お房さん、あたしや殺されても構はない。秋さんを歸さないでください――」

紫はぶたれても蹴られても、全く死んでも離すまいといふやうに男に噛(しが)み付いて泣きながら云つた。

二

ちぎれ／＼の雲が、後から後から際限もなく續いて空に漂つてゐる。太陽が折り／＼下界を覗いて、鈍い佗しい光を往來だの屋根の上に投げた。撒き水が地に凍りついて玻璃(ガラス)のやうな光澤を出してゐる。其處らぢうの日覆ひや暖簾がパタ／＼鳴つたり、板戸などがガタ／＼慌ただしい音を立ててゐる。小さな機械鍛冶屋の店からは、カン／＼と鐵をうつ音が悲しく響いて來る。天麩羅を揚げる匂ひが往來の眞中迄流れてゐたり、職業紹介所の汚れた暖簾の蔭から蒼白い男の顏がひよつこり現はれたりする。

秋葉は街をさ迷ひ歩いてゐた。彼は往來の二三間先きを凝視めて何か考へてゐるやうな眼つきをしながら、而も何んの目的も有たない人間のやうな力の無い足どりをして歩いてゐた。そして時々氣が付いたやうに立ち止つたり兩側の店の看板を見廻したりするが、直ぐに又顏を伏せて元のやうな足どりで歩き始める。かうした彼の顏面を、冷酷な風が擲り付けて行つた。然し歩いてゐる間は、有らゆる周圍の物象が彼の意識から離れてゐた。街は唯無意味に背後(うしろ)へ通り過ぎてゐる。

彼の腦裡には、いつか紫が彼に對つて話したことのある言葉が、それからそれと極めて自然に、丁度一つの物語りでも形作るやうに浮かんで來た。其の話をした時の紫の表情までが明瞭りと胸に寫つてゐる。

――あたしは十歳だつたからちつとも事情が判らなかつたの。お父さんは六ヶ月ばかしして仕事も休んでるでやう、あたし達にもまるきし口を利かないんです。すると時々お父さんの友達の人が來て長火鉢の側で何か面倒らしい話を始めるんです。それが氣になるんですね、あたしが。一遍こつそり側へ行つて話を聴かうとしたんです。するとお父さんが直ぐにあたしを目つけて「戸外に行つて遊べつて云つたに何故歸つて來た」つて恐ろしいこわい顏して叱り付けるんです。其の時あたしは子供心にも、是れは何んでも大變な事が出來たのに違ひないと思つたの。そしてお母さんはもう是れつきり家へ歸らないんぢやないかしらつて氣がしたの。でも其の時は叱られのがこわくつて、日が暮れる迄表で遊んでましたけど、お友達に別れて一人で家へ歸る時何んだか矢鱈に悲しくなつちやつて、仕舞ひにおい〳〵泣いちやつたもんだわ。――矢つ張りあたしの思つた通り、それつきりお母さんは歸らなかつたんです。それから直ぎでしたわ、あたしが牛込の家へ遣られたのは。兄さんは其の時分十四か十五だつたでしやうけど、矢つ張り奉公に遣られましてね、家ぢやお父さんと職人と二人ぎりでやつてたんです。――一體どうしてお母さんが家にゐなくなつちやつたんだか、餘程大きくなる迄判らなかつたの。それが漸う判つた時、――今だに其の時の氣持だけは忘れやしない――眞暗い穴の中へでも突き落されたやうな何んとも云へない氣持だつたわ。あたしは其の時程悲しかつたり情無かつたり口惜しかつたりしたことはないんです。唯もうお母さんが憎くて憎くて溜まらなかつたの。そんな人のお腹から生まれた自分といふものまで淺間しいやうな氣がして情無くて、情無くて夜徹し泣き明かしたことが幾度びあつたか知れないの。――處がね、其の後お母さんに一遍きり會つたんです。尤も會つたつても顏を見ただけですけど。あたしが十九の時、お父さんが死んだんです。其の時分には兄さんが家へ歸つてたし、あたしもどうにかやつてたから、割りに氣樂にや暮してゐたんですけど、矢つ張りお父さんは最後迄お母さんを憎み通したらしいんです。「あんな畜生同樣の奴は親ぢやないか

ら、俺が死んだ後でも決して足踏みさせるな」ってあたし達に云ひ置いて死んだんです。そんな譯だから無論報らせなんかしなかつたけど、何處かで聞いたと見えてお葬ひの時お母さんが來たんです。來ても家へは這入れませんから、近所の家に隠れてゐてこつそり送りをしたんです。でもあたしはようくお母さんの顔を見ましたわ。丁度十年會はなかつたんですが、其の時あたしは、自分の考へてたお母さんとはまるで別の人のやうな氣がしたんです。それ迄あたしはお母さんを憎い憎いとばかり思ひ詰めてたせいなんでしやう、お母さんてえと何となく憎體なやうな厭らしいやうな人に考へてたんですね。處が、會つて見るとそんな人ぢやないの、顔はあたしに似てゐましたけど、實に優しさうな人なの。二度目の人に子供が無いんだし、ちよいと薄手な方で齢も割りに若く見えたわ。あたし不思議なやうな氣がしてね、このお母さんがどうしてあんな大それたことしたんだらうと思つたの。それでお寺へ行つても隅つこに隠れてゐて、あたしと兄さんの顔ばかり覗いてるんです。あたしは其の時からお母さんが可哀相で可哀相で仕方が無くなつちやつたんです。——其の後人を頼んで出入りをさせて貰ひ度いつて來ましたけど、どうしても兄さんが承かないんです。男の考へはまた別でしやうけれど、人間つてものは段々考へが異つて來るものね。あたし今ぢやお母さんのした事だつてさう憎む氣になれないんです、自分だつて隨分それに似た覺えがあるんですものね。それア悪いこた極まつてるわ。だけど、人間てものは、其の悪いと思つてることをどうしてもしなけりやならないやうな場合が無いとは云へないんですものね——

秋葉は此の港の街を初めて訪るやうな氣がしなかつた。紫が生まれて、遊び廻つたりして暮らした土地だと思ふと、ゴミゴミした街のあれもこれもが、彼の胸に一種の愛着に似た心持を起こさせるのであつた。秋葉は紫の兄が住んでゐる家を見度かつた。彼女も永年起き臥ししたといふ其の家でも見たならば遣る瀨ない自分の心もすこしは慰められるこ

とがあるかもしれない……。

街の眞中を深い溝が通つてゐた。片側には學校の運動場や寺院の練塀などが續いてゐる。眞黒い溝水の上には、寒さにいぢけた櫻の木が哀れな姿を映してゐる。遠くからオルガンの音が絶え〴〵に洩つてくる。秋葉は其の音に魅せらたやうに、じつと路傍に佇立んでゐた。

空が俄かに重くなつて來たと思ふ間に、時雨がバラバラ降り出した。

三

其の晩は宵から客が立て込んで、あちらでもこちらでも割れ返るやうな陽氣な騒ぎが始まつてゐた。女達は誰れも彼れも活き活きした顔をして、廣い家の中をあつちこつち忙がしさうに體を動かしてゐた。

棠は、大廣間の顔出しを濟まして廊下へ出ると、座敷へは寄らずにバタバタ驅けるやうにして表二階の方へ行つた。西洋間まがひの装飾も何もして無い部屋に、秋葉が一人でぽつねんとして座つてゐた。

「まあ獨りなの、丁字屋はどうして？」棠は這入つて行くなりから訊いた。

「さつき迄居たんだが、電話が掛かつて來て歸つて仕舞つた」

「さう？　お客様をほつたらかして隨分失禮ね。――でも、今にお房さんが來るからいいわ」と云ひながら棠はしげしげ秋葉の顔を見て「貴郎痩せたのね。どこも惡かない？」

「體は丈夫なんだ」秋葉は兩手で肉の憔けた頬を撫ぜて見た。

「お前は肥つたやうだよ」

「さうよ。此の頃よくさう云はれてよ。何故でしやう苦勞はどつさり有るんだけど――」

から云つて紫は浮き浮きした聲で笑つた。秋葉は思ひ出したやうに

「お前も道中をするさうだね」

「ええ、明後日だわ。何んだか心配でしやうが無いのよ」

「何が――？」

「何つてこともないけど、何んとなく氣がかりだわ。――あたし、髪を立兵庫にしやうか、それとも下げ髪にしやうかと考へてるの。貴郎どつちがいいと思つて？」

「そんな事が俺に判るもんか」と、秋葉は苦笑して云つた。

「顔は松鶴さんが來てして呉れるのよ。舞臺と同じ作りですからまるで變つちまうわ。だけど、側で見るとお化け見たいで、あんまりいいものぢやないことよ」

紫は自身のことばかり興味を感じてゐるかのやうに好い機嫌で喋つた。秋葉は反對に陰氣な顔をして默つてゐた。笑つたり噪いだりしてゐる女の態度ほど彼の胸に淋しい氣まずい感じを起こさせるものはないのだ。「俺の心から此の女の事を取り除いてしまへば、俺の生活は無くなつて仕舞ふのだ。それが女はさうではない。何んのかのと云つても、矢つ張り幾らでも逃げ場を持つてゐるのだ――」彼はこんなことを考へてゐた。紫と自分との距離が、俄かに遠くなつて仕舞つたやうに感じた。

「明後日、觀に來て下さいね」

「お前の道中を觀に來いといふのかい？――そいつは眞平御免蒙らう」

「あら何故――？だつて貴郎に見て貰へなきやつまらないわ」

「つまらないことがあるものか。それを觀て喜ぶ人は幾らも有るんだ。――俺は、そんな立派なお前を見たかないんだ。金も出さずに、御見物に交つてお前の顏なぞ見てゐられるものか」

秋葉は險しい顏をしてから云つた。棠は急にまごつき出した。「氣に障つたら堪忍して、ね。あたし、そんな氣で云つたんぢやないのよ。ね、憤つち厭よ」

「憤りやしない」秋葉は仕方が無いやうな笑ひ方をした。

二人は妙に氣まづくなつて默り込んで仕舞つた。秋葉は矢鱈に煙草ばかり喫かしてゐた。近くの座敷で、下方を入れた陽氣なお座付きが始まつた。

「まあお房さんはどうしたんでしやう？呼んで來るから、一寸待つててね」

かう云つて棠は其處を出た。「どうしてあんなに氣六か敷くなつたんだらう？」廊下を歩きながら棠はそんなことを考へた。顏が窶れたばかりでなく、めつきり落ちて來た男の身なりなどが眼に浮かんだ。彼女は、足許からめり込みさうな重苦しい氣持になつた。

秋葉は眼を上げて邊りを見た。群衆の頭がウヨ／＼動いてゐる。生温い不快な人いきれが彼の身邊を包んでゐる。何時の間にか、後の方にも一ぱいの人立ちがしてゐる。

其處は廣い十字路であつた。仲の町の屋棟が、同じ高さに左右から一直線を走らせて來て、凸凹を極めた向う通りの屋根と其處で交叉してゐる。空は薄紅くぼかされて、絹のやうな光澤を見せて靜かに暮れさうになつてゐる。夜とも晝

ともつかぬ微かな明りが街中に流れてゐる。さうした中に、櫻の花が鮮やかな色を浮き出させてゐる。

秋葉は科人のやうな臆病な氣持になつてゐた。下を向いてゐても、誰かが自分の顏を見てゐさうな氣がした。退屈しのぎの周圍の無遠慮な會話や笑ひ聲が一々彼の胸を刳るやうに響いた。栄に對してあゝ云つた時の心持に僞りはなかつたのだが、矢つ張り今日となれば人に隱れてまでも此處へ來ずには居られなかつた腑甲斐ない自身を彼は顧みた。「こんな屈辱を忍んで栄の顏を見たとて何んになる?」かう云ふ聲が心の中で絶えず彼を叱つてゐた。

何の聯絡もなく、突然ある事が彼の腦裡に浮かんで來た。それは、近頃全然姿を見せなくなつて仕舞つたが、一時は廓で飛ぶ鳥落す全盛を極めた吉村といふ人のことであつた。吉村は日本橋邊のさる大家の主であつた。此の人の遊び振りは、何時でも人の眼を駭かせる豪奢なものだつたが、しかし何處迄も色氣拔きの趣向で、風流を喜び洒落を愛した幕末時代の通人といふ風格を具へてゐた。こんな風で自然吉村といふと、一概に女嫌ひで通つてゐた。處がふと妙な噂が立ち始めた。それは吉村がある女に熱中し始めたといふのであつた。最初は誰れもそんな話を眞に受ける者も無かつたが、さうした人々の信用を裏切るやうな事實が直きにおうぴらに現はれて來た。其の時分から吉村の遊び振りはガラリと一變して、最後には女を身請けしやうとまでになつた。然し年明けが迫つてゐた上に、他に男を持つてゐた女は、どだん場になると遁げを打つて仕舞つた。すると吉村は直ぐ樣別の女に手を出し始めた。かうして大通の金箔が遺憾なく剝げ落ちて仕舞ふと間もなく、吉村の家は破產して古く續いた店を閉めて仕舞つたのであつた。

秋葉はたつた一度吉村と口を利いたことがあつた。それはたしか秋で、蕭やかな雨の降つてゐる晩であつた。秋葉は茶屋の店先きに座つてゐる吉村の姿を見た。其の頃になつても、吉村は時々廓へ這入つて來るのであつた。最後に馴染んだ女が、妙な意地から達引いて呼んでゐるのだといふやうな噂もあつた。吉村はもう四十を一つ二つ越してゐた。

二子の著付けといふ見る影も無く尾羽打ち枯らしては居るものの、體だけはでつぷりと肥つて、柔和な顔ふちに何處となく上品な、洒脱な趣きが現はれてゐた。秋葉もかねて、顔だけは見知り合ひの間であつたから、吉村の側へ坐つて一つ二つ話しをしたのであつた。

「あなた方の時代は何をして見ても面白くて溜まらぬ時ですね。しかし、遊びはその面白い間にも切り上げないと止める時がありませんよ。道樂といふやつは、不愉快な、見つともない思ひをして遊ぶやうになつてから本統の味が出て來るものですからね――」

其の時吉村はにこ〳〵笑ひながらこんなことを云つた。其の言葉を秋葉は今思ひ出した。「これほど不愉快な、これほど見つとも無い話があらうか――」秋葉は、識らず〳〵吉村の豫言通りになつてゐる自身を顧みた。――大通から野暮へ逆戻りをした吉村の心持がはじめて胸に觸れて來る。彼は急に、吉村といふ人が懷かしいやうな氣持になつて來た。

群衆が突然どよめき出した。秋葉の空想は其處で斷絶された。鏘々として響く金棒の音が、夕暮の空氣を震はせて遠くの方から流れて來る。秋葉は正面を見る勇氣がなかつた。金棒の音が段々近付いて來る。

群衆の頭越しに、後光のやうに簪を挿した眞白い紫の顔がチラと秋葉の眼に這入つた。秋葉は冷水を浴びたやうに感じた。何故だかわからない――さながら此の世に有らん限りの羞恥と慚愧の念が、一度に己れの體をさして集まつて來たかのやうな感がした。

秋葉は殆んど無我夢中で人を押し分けて後の方へ抜け出した。そして夕闇の漾ひかけてゐる廓を、遁げるやうにコソ〳〵と出た。

四

お房は、四五日前から兄の處へ歸つてゐた。固疾になつてゐる心臟の具合が殊に近頃良くないので、暫らく靜養しなければ不可ないと疾うから醫者にも勸められてゐたのだが、いざとなると日柄を氣にして見たり、合憎客に居續けをされたり、レウマチで腰が痛かつたりしてつい愚圖々々延ばしになつてゐたのを漸うのことで拔けて來たのであつた。

其處は山の手の繁華な通りから一寸引つ込んでゐる靜かな屋敷町であつた。前に一寸した庭などがあつて、建物は古いけれど日當りと風通しの良いのを兄は自慢にしてゐる。十年ばかり前に女房に死なれたお房の兄は、お豐といふ十九になる末娘を相手に小女を一人使つて家作の上がりなどで氣樂に暮してゐる。

交際の乏しい此の家では、客の顏を見ることなども至つて稀れであつた。主じの仕事といへば、盆栽に水を遣ることと、毎日一度は碁會所へ顏を出して來ること位なものである。退屈すると謠ひの本など持ち出して、餘りうまくもない謠曲を獨りでうたひ始めることもある。其の昔は德川の御家人で、瓦解後は慶喜公のお供をして靜岡へ行つて暮らした時代さへある兄は、いまだに昔氣質の拔け切らぬ處があつた。漢籍を入れた本箱と並んで鎧櫃が飾つてあつたり、玄關の長押(なげし)には鎗が懸かつてゐたりした。

お房は寢たり起きたりして暮してゐた。一日二日は向うの事が氣になつてゐたが、ぢきにそれも忘れて唯暢び暢びとした氣持になつた。兄と二人で遠緣の親類の噂でもしてゐると、平素は殆んど忘れてゐるやうなさうした人達の事までがなんとなく懐かしく思ひ出されて來る。

たまさかからうした靜かな生活に觸れた時ほど、お房は沁々と自身の老ひといふことを考へさせられることは無かつた。込み入つた事情からはじめて廓へ遣られて禿を勤めた時分の事が夢のやうに思ひ返されたり、其のまま殆んど世間といふものを知らずに暮らして來た何十年かの廓の生活が全く長かつたやうに感じられたりする。普通ならば孫の幾人かも持つ可き此の齢迄何一つ纏まつた事も無くウハ〳〵と過ごして仕舞つたことを考へると、悔恨もあれば心細い氣持もする。心靜かに老後を樂しんでゐるといふ風な兄の境涯が羨ましくも思はれる。

「お前もいい加減に鬼を付けて家へ歸つて來ちやあどうだい。いい齢をしてあんな處にウロ〳〵してゐるのも餘り見宜いものぢやないぜ」

と云ふのが、何時でもお房の顏を見ると先づ兄の口から出る言葉である。五六年前に肋膜をわずらつて以來お豊が兎角に病身になつて仕舞つたので、兄は多少氣細くもあれば事實不自由な場合もあるので、お房が此處へ歸つて來たところで決して邪魔な人にはならないのであつた。此の前の花魁が廢業した時にも兄は頻りにお房に歸つて來るやうに勸めたのを「せめて自分の葬ひ金だけも稼いで來なければ」と云つて、又今の花魁に附いたのであつた。それが葬ひ金どころか、二三年此の方の不景氣に遇つて、何も彼も質草にして仕舞つた上に、今では自身の顏でした借金も可成りの額に上ぼつてゐる。

「と、詰まり、花魁の借金をお前が脊負ひ込んで居る譯なんだな？」

「さうです。其の代り貸しもありますよ。わたしの御祝儀は大概座敷の方へ立て替へてあるんですからね。是れも花魁が出る迄にや何んとかさせるつもりなんですがね」

「そんな事が當てになるもんか」兄は苦笑ひをして「お前だつて子飼ひからの吉原者ぢやないか、あんまり眼先きが

見えなさ過ぎるといふものだ」

「眼先きが見えないつて譯でもありませんがね、どうも成り行きで仕方が無いんです。一緒に暮らして見りやさう不人情な事も出來ませんからね。それあ隨分、賣れない人と見ると逃げ出して仕舞つたり、花魁が年長するのを平氣で見てゐるやうな人もありますがね、——どうもわたしは、そんな薄情な眞似は出來ないんですよ」

「それがお前の人の好い證據さ。そんなことを云つてた日には、親兄弟でも立て過ごしていかうつて人はどうするんだ？今時お前のやうに、花魁にばかり忠義立てをしてゐる新造は先づありさうもない話だな」

こんな會話が兄妹の間に取り交されることもあつた。

主は例に依つて午過ぎから碁會所へ出掛けて行つた。お豐が縫ひ物をしてゐる側で、お房は横になつて講談本を讀んでゐるうちに睡氣を催して來た。眼鏡を外して手に持つたまま眼をつぶつて居ると、眞青に繁つてゐる庭の草木の匂ひが風に沁み込んで靜かに流れて來た。

「叔母さん、お客樣よ」と、お豐は一寸手を掛けて起こした。

「誰？」

「秋葉さんといふ方がいらしつてよ」

「え、秋葉さんが——？」お房は吃驚して飛び起きた。「玄關に居らつしやるの？」

「ええ」

お房は眼をこすり〳〵玄關へ出て行つた。秋葉は麥藁帽子を手に持つて表の方を向いて立つてゐた。

「まあよくいらしつて下さいました。どうぞ――」

お房は元氣よくから云つて秋葉を座敷へ通した。座敷には煙草盆や座布團が出してあつた。

「一寸此の邊迄用達しに來たものだからね」

「さうでしたか、よくいらしつて下さいました。――なんですかもうすつかり夏のやうぢやありませんか。今日なぞ外をお歩きなさると暑い位でしやう？」

秋葉は袂から煙草を出して火をつけながら、お房の顏を見て

「病氣だといふ話を聞いたが、大層顏色がいいぢやないか？」

「有難う――お蔭樣で大分宜敷いんです。いゝえね、元々大した譯ぢやないんですから、對し否氣にして存分疲れあ癒るんですよ。それに歸つてからお酒を廢めてますからね」。

「へえー、そいつあ偉い奮發だね」

と笑ひながら、秋葉は持つて來た羊羹の箱を土産に出した。

「おやまあ濟みません」

とお房は手に取つて頂いた。お豐が茶を持つて來ると

「お土産を戴いたからお禮を申してね。こちらは、わたしがしよつちう御贔屓になる方なんだよ」

細そりとしたお房によく似た顏立ちで、束髮などにした山の手風の娘に對して、秋葉は對してれたやうな恰好で挨拶をしてゐた。

「靜かでいい處だね」と秋葉は庭の方など見廻して「しかし、あつちから來ると靜か過ぎて淋しいくらゐだらう

ね？」

「でも呑氣でよござんすよ。これで、わたしはどつちかつて云ふと靜かな處が好きな人間なんですね。それでね、此の子のお父さんにも嚴ましく言はれますから、もういつそのことあつちを廢めて歸つて仕舞はふかつて氣もするんですよ」

お房は、秋葉がどうして自分が家へ歸つて居ることを知つたのだらうと思つた。秋葉は近頃以前の宿を引き拂つて、或素人屋の離れを借りて住んで居た。秋葉が其處へ移つて行つた當座にお房は一度訪ねて見たことがあつた。小庭に面した其處の陰氣な座敷で、お房は小半日話し込んで歸つたのであつた。秋葉は何も仕事をしてゐないらしかつたが、お房に對しては、つとめてさういふ話題を避けてゐる樣子が見えた。それでも何かの話の端しから「所在が無いから三味線でも習はふかと思ふ」と、こんなことを云つた秋葉の心持もお房にはよく解つてゐた。

「あの方から、手紙でも差し上げたんですか？」

お豐がお辭儀をして茶の間の方へ引つ込むと直ぐお房はかう云つて訊いた。

「いや……實はね、昨夜あつちへ行つたもんだから——」

「まあさうでしたか？わたし留守で惜しいことをしましたね。——でも、あの方が喜んだでしやう？」

と、お房は相手の顏を見詰めて云つた。秋葉は何んだか憚るやうな容子をしてゐた。

「お房さん、一寸其邊迄交際つて呉れない？一寸話し度いことがあるから」

「參りましやう。ぢやあね、一寸着物を替へますからお待ちなすつて下さいな」

お房は新らしい銘仙の袷に着替えて、暫らく染めを怠つてゐる薄い髮の毛を撫で付ける眞似をして、秋葉と一緒にい

そいそして家を出た。

夏らしい明るい太陽が、高い石段を昇つて行く社の方へ傾いて、街には濃い片影が出來てゐる。電車路から向うの横丁へ這入ると、其の邊では待合だの藝者屋のやうな家ばかりが眼につく。格子の內から三味線の音が聞えたりする。湯歸りの女が、濃厚な香を路へ撒き散らして歩いてゐる。

「ちよいと秋さん、福の家は此處ですよ」

と、お房は露地の奥の方を指して云つた。秋葉も一寸足を停めて見た。家號を書いた軒燈が露地の入口にアーチになつてごちや〱懸かつてゐる。以前紫が此の土地に居た頃とりわけて懇意にした福の家といふ待合のおかみは、今でも時々客を伴れて紫に會ひに來たりした。仲の町でまだお酌の時分今の旦那に請け出されて、もう三人も子供があるといふすつきりした其のおかみの顏を秋葉も紫の處で見たことがあつた。

「此處ぢやどうだね？」

蒲燒の看板の出た家の前で秋葉は立停まつてから云つた。

「結構です」

秋葉は先さに立つて這入つた。裏の方へ向いた二階の、俳畫の半切が床に懸けたりしてある小座敷へ二人は對き合つて座つた。どちらも心の置けぬ暢んびりした氣分になつた。

「秋さん、羽織をおとんなさいな」

かう云つてお房は、秋葉が脫いたセルの羽織を疊んで床の間へ置いた。誂へた物が來ると、お房は女中を斷つて自分で盃を差したりお酌をしたりした。

「わたし？わたしはこゝんとこ禁酒ですからね」お房は手を振つて云つた。
「ちつとはいいさ」から云つて秋葉は盃を突き付けるやうにした。
「さうですか？」お房は笑ひながらそれを受けて手酌でついだ。
「お國の方は、別にお變りはありませんですか？」
「いや、私が相變らずこんな風で居るもんだからね、兎角言ふ事が絶えなくて困るんだよ」と、秋葉は苦笑しながら云つた。
妻は餘程前から里へ歸つて居たが、此の頃になつて突然離縁ばなしを持ち込んで來た。それに就いて相談し度いから是非一度歸國せよといふ書面を秋葉は母から受け取つてゐた。
「そんな譯で、此の頃に一遍田舍へ行つて來なけりやならないんだがね、結局は突つ張り離縁するより外に仕方があるまいと思ふんだよ」
「へえー」とお房は駭いたやうに眼を圓くして言つた。「奥さんも心から離縁なさつてもいいお積りなんでしやうか？」
「否、當人には勿論度胸の据はつた考なぞありつこ無いんだ。非常に温和しい代りに、何んでも自分の近くに居る人の言ひなりになるやうな女だからね。詰まり親達の量見次第に動かされてゐるんだよ」
「それぢや、奥さんがお可哀相ぢやありませんか。それにお子さんもお有んなさることですもの。お里の親御さんだつて餘りわからなさ過ぎるといふもんでさあね」
「然し、向うの身になれば無理のない處もあるだらう。それに一がいに離縁しろといふ譯でもなくつてね、私がこつ

ちを引き上げて田舎で鍬でも握る氣になりや無論問題は無いんだ。處が、それこそ私は死んでも厭なんだ。生れ故郷が何故かう嫌ひになつたんだらうと不思議に思ふ位なんだよ。其のくせこつちに居たつて別段面白い事がある譯ぢやなしさ、生若い自分の腕前にだつて近頃ぢや可成り見切りを付けてゐる譯なんだがね」

かう云つて秋葉は空想的な眼つきをした。突き詰めたやうな秋葉の言葉に對して、お房はどう言つたら善いか判らなかつた。なんとなく自分迄が一緒に暗い處へ引きずり込まれて行くやうな氣持になる。

「いつもいつも厭な話ばかり聞かせて氣の毒だね」と、秋葉は氣を替へるやうに云つて冷たくなつた酒をぐいと飲んだ。

「いいえ、飛んでもない――。然し秋さん、今のお話は、ようくお考へなすつた方がよござんすよ」と、お房は秋葉の顏を見詰めながらしんみり云つた。

夕陽をうけた光線が物倦げに室内に漾つてゐた。板塀の向ふ側で、飴屋がカラカラカラと單調な音を立てて子供を呼んでゐる。さうかと思ふと、突然何處かの藝者屋で彈き出した大薩摩の音が、邊りの睡氣を拂ふやうに威勢よく響いて來る。女に溺れて身を滅ぼして仕舞つた幾たりもの男の顏がお房の胸に浮かんでゐた。さうした人々の末路といふやうなことをお房は朧氣に考へさせられた。其のどれも是れもが、版に刷つたやうに同じ徑路を進んで行くといふことがお房に不思議な感じを起こさせる。又其の同じやうなことが、後から後からと限りもなく此の世に行はれてゐるといふのも何かの意味を持つてゐることのやうに考へられて來る。煎じ詰めた世界は何時でも寂しい味氣無いものだとお房は思つた。

「ゆうべは如何でした？花魁何か言つてましたか？」

とお房は態とニコニコ笑つて云つた。秋葉も「あははは」と付き合ひらしく笑つた。

「忙がしう御座んしたか？」

「いや、夫れ程でもなかつたやうだよ」

「さうですか――。どうも座敷ぢや相變らず閑で困るんですよ。花時だけは一寸キヤキヤしかけたと思つたんですが、直ぐに元へ戻つて仕舞ひましてね――。あの花魁が賣れないな不思議だつて世間ぢや言つてるさうですがね、何しろあの氣性ですからお客も續かない筈ですよ。まあ矢鱈に振るつて口ですね。それで莫迦々々しく勝手が强いんだから――。まず早い話がかうですからね。わたしが貴郎の處へお伺ひするでしやう――するとおきまりで變に花魁の氣嫌が惡いんです。それで言ひ草が可笑しいぢやありませんか。自由に逢へる人はうまいもんだ――て、かうなんですよ。馬鹿々々しい、自分の色にでも逢ひに行きやしまいし、遂々使ひに遣られて何かうまい理屈があるもんかつてね、わたしや憤りつけて遣るんです――」

紫の噂をしてゐるとお房の心は識らず識らず浮き浮きして來た。何氣なく話してゐる言葉が、紫の善い處も惡い處も總てが秋葉を想ひ詰めてゐる結果だといふやうに聞えて來る。

「お房さん、私はもう斷然あいつの處へは行かないことにきめたよ」と、秋葉は唐突に云ひ出した。

「おや、どうしてそんなことおつしやるんです？」お房はニヤニヤ笑ひながら「又花魁と喧嘩でもしていらしつたんですね？」

「喧嘩をするやうならいいんだが、もうそんな事は容々しくつて出來やしないんだ。お房さんはどう思つてるか知らないが、あいつはもう全く私の事なぞ想つちや居ないんだからね」

「そんな事があるもんですか。それこそ貴郎の邪推といふものですわ」
「處がさうでないんだよ、もう大概行く處迄行つて仕舞つたんだから、それが本統かも知れないんだ。私もいつそ其の方がサッパリしていいんだ」
「貴郎一人でさう極めて仕舞つたつていけませんよ。一體、ゆうべどうかなすつたんですか？」
秋葉は到頭昨夜の顛末を話し出した。斷片的に思ひ出しながら話して居るうちに秋葉は次第に昂奮して來た。昨夜の棠の態度は、最初から全然今迄とは違つて居た。「あなた一人がお客ぢやありませんからね」最後に棠はこんなこと迄云ひ出した。秋葉は夜なかに歸つて仕舞つた。
「それで貴郎がお歸んなさる時に、花魁は留めやしなかつたんですか？」
「留めるもんか。平氣な顔してゐたよ。私もね、大概なら笑つて居るつもりたんだが、ゆうべばかりは到底我慢も辛抱も出來なくなつて仕舞つたんだ」と、秋葉は遣る方の無い忿滿の情を顔に漲らせて云つた。
「まあ、どうしたつてことでしやう？それぢや貴郎が御立腹なさるも無理はありません。實にどうも呆れ返つて仕舞つた――」
と、お房はまつたく駭いて云つた。それにしても、矢張り譯が判らない。縱ひどんな事情があるかは知らないが、さうまで極端に走つてゐるやうな棠の心持がお房には想像が付かない。
秋葉は下唇を嚙んでじつと火鉢の中を凝視めて居た。今にも涙が溢れて出さうな感情の激動が彼の手先きを微かに顫はせてゐる。それを見ると、温和しい秋葉に對する同情がお房の胸に湧いて來た。
「わたしはどうも腑に落ちませんですがね……。あれ程貴郎の事ばかり言つてた人が急にそんなになる筈は無いと思

ふんですがねえ──。又いつかのやうに何か思ひ違ひをしてゐるんでせうよ。わたしがようく當人の意見を訊いて見ますから、もう一遍だけ勘辨して遣つて下さいましな。ね、お互ひに長い間苦勞して來たんですから、今更つまらない事で敵の末見たいなことを言ひ合はなくても宜さゝうなものぢやありませんか」

「お房さんの心は解つてるよ、だが、私はこんな事を機會にあれとも別れる方がいいと思ふんだ。家内も離縁していろんな關係を殘らず斷ち切つて仕舞ひ度いんだ。──そしてほんとの獨りぼつちになつて、墮落するなりどうなり思ふ存分な處迄遣つて見やうと思ふんだよ……」

秋葉は自然に誇張されて來る自身の言葉に感動して、涙をボタ／＼膝の上に落としてゐた。お房も吊り込まれて泣いてゐた。

「そんな心細いことおつしやらないで、もう一遍わたしに任せて下さい、ね。明日にもわたしやあつちへ歸りますから──若しも本統に花魁の心が變つてゐるやうでしたら──わたしにだつて考へがありますからね」

お房はいままで、幾度びかうした場合に遭遇したことか知れない。そして、かうした痴情のいきさつが、一層足搔きの出來ぬ深みへ双方を引きずり込むのだといふこともよく解つてゐた。だから二人の身のためを思ふならば、いつそ冷やゝかに傍觀してゐるのが一番親切な方法かも知れないと思ひながらも、お房にはそれは出來なかつた。

「兎に角明日は廓へ歸らう──」

明るい陽氣な世界を想像しながらお房はかう考へた。僅か四五日に過ぎない平板な無爲を極めた生活が莫迦に長かつたやうに感じられて來た。

電燈が點つた。まだ夕陽が眞面に小窓へ照り付けてゐる。二亙の光線が狹い室内で稜になつて入り亂れてゐる。秋葉

は女のやうに萎れ切つてゐた。

「さあ、すこし精出してお乾しなさいな」と、お房は元氣を出させるやうに云つて銚子を取り上げた。

五

過去に逢つた男の事が、ひよつこりと彼女の胸に上ぼつて來ることがある。まるで忘れてゐたやうな男でも、何かの拍子に思ひ出すと、其の當座は折り折り面影が甦つて來て、獨りで居る時など思はず其の人の事を考へさせられたりする。それにつれて、嬉しかつた事でも、悲しかつた事でも、腹の立つた事でも――男を背景にした自身の過去の生活の斷片が記憶の底から飛び出して來る。華やかと云へば華やかな、哀れと云へば哀れであつたさうした繪卷を眺めて見ても、それには滅多に感情を動かすやうな強い力は無くて、今ではどれも是れも同じやうに懷かしいものになつて居る。然し、一番餘計に思ひ出すのは、何んといつても永く關係した男の事である。夢中になつて逆上せた覺えのある相手でも、永續きのしなかつた男の印象は直きに薄くなつて仕舞ふ。どれ程淡泊な、或ひは冷淡な心持で對して居たつもりでも、永い關係の男には何處かで自分の心と深く絡み合つて居る謂はば忘れ度くても忘れられないやうなものが殘つてゐる。死ぬ程に惚れてゐたのが過ぎ去つて仕舞ふと夢を見たあとのやうにボカンとした氣持になつて、まして今では思ひ出しても何一つ心を惹かれるものもなく、あんな男の何處が良かつたのだらうと可笑しくなるくらゐなこともある。其の當時は何んとも思つてゐなかつた一寸した男の心持から尊い眞實を發見したやうに感じることもある。――過去の追憶に耽るといふことは、苦しい現實から遁れる一つの手段であるばかりでなく、其の中には樣々に考へさせられる事が籠もつてゐた。無自覺で過ごした間の事でも、或ひは全然不可解であつた事までも、追憶といふ靜かに澄んだ鏡に寫し

で眺めて見ると總てがはつきりと解つて來る。大きな事のやうに見てゐたものが非常に小さくなつて仕舞つたり、輕く考へて居た事が存外濃厚な印象をとどめてゐたりする。自分の方から惚れた男よりも、親切にして呉れた男の方が、餘程多くの懐かしさや未練を起こさせる。何時迄經つても心の底まで喰ひ込んでゐるものは、ただ男の眞實だけである。

一體男を戀するといふことは、どれたけの價値のあるものなのであらうか………？

そんな事を散々考へさせられた揚句には、紫の心は必ず秋葉の上に走つてゐた。直ぐに、生々しい感情に劇しく胸を掻き亂される。秋葉の事を考へると何んとも云へない暗い重苦しい氣分へ引きずり込まれる。頭の中が眞黑い雲で閉ざされて仕舞つたやうな感じである。

秋葉を憤らせて歸したりしたあとは、殊にさうした感が强かつた。自身の態度を反省しては、激しい後悔と心の呵責に苦しめられた。男の落魄に對する同情も胸に湧き上がつて來る。自分といふものだけが、今では秋葉の身にとつて唯一のものになつてゐることを考へると、其の幻をさへ破らせて仕舞ふやうな自身の仕打ちが如何に罪深い所業であるかを思はせられた。温い情を男の魂に注ぎ込んで遣るのが自分の義務であるかのやうに感じられて來る。

心のうちではかう思つて居るにも關はらず、偶さか來た秋葉に對して一寸した氣分のこじれからつい心にもない邪慳な態度を飛び出させて仕舞ふのを、其の場に臨むと紫はどうにも制禦のしやうが無かつた。或る場合には、陰氣な男の顔が、同情を起こさせる前にいきなり不愉快な感を與へた。又或る場合には溫和しい男の態度が腹の立つほど意氣地無く見えて來た。何かにつけて情人氣取りの男の容子が厭味に見えたり、愚痴と嫉妬で固まつて居る其の談話が辛氣臭くて溜まらなくなつたりする。さうして、優しい心持が忽ち影を潛して仕舞ふのであつた。秋葉が現在の境涯に落ちたといふことも、何も自分の責任ではないと辯解するやうな氣持にもなれば、いろいろな意味で、自身の體が太い絆で秋葉と

結び付けられて居ることを考へると、其の束縛から遁れて仕舞ひ度いやうな苛ら立たしい反感をも覺えて來る。彼女は悪いと知りながらもツケツケした態度を露骨に見せたり、いい加減な面當を云つたりせずには居られなかつた。それでも秋葉が耐らえて居ると、猶更傷いてゐる其の弱々しい魂を虐げて遣らなければ氣が濟まぬやうな不思議な程殘忍な心持が何處からか湧いて來る――。

紫は久し振りで秋葉の寫眞を出して見た。それは紫の處へ來始めの時分にとつた寫眞であつた。彼女とは僅か一つ違ひだが、境遇のせいか秋葉は實際の齡より四つも五つも老けて見える。絣物を着た溫雅な風采が紫の眼に何んとも言へず好い感じを與へた。彼女は思はず引き込まれて眺めて居た。――紫は、急に秋葉が戀しくなつた。彼女は直ぐに用箪笥の引出しから秋葉の手紙を何本も出して來て、一々それを展げては讀み返して見た。そして、其の手紙を受け取つた時の自身の心持や、それに關聯した樣々の事件を思ひ返して見た。簡單な文句の中にも男の眞情が溢れてゐる。紫は何がなし強い力で抱き締められたやうに感じて、思はずほろりとさせられた。

「今迄の男の中で一番深く自分を愛して呉れたのは矢張り秋葉だ――」

と紫は考へた。何んと云つて見た處で、自分と秋葉の間には切つても切れない深い縁が絡まつてゐるのだといふやうな氣がして來る。

秋葉は病氣上りで痛々しく窶れてゐた。顏色が無氣味な程蒼白くて、頰がゲツソリと憔けてしまつた。唇はどす黑い色を帶びてゐる。そして眞黑かつた頭髮が地膚の透ける程薄くなつて、汚ならしく赫ちやけてゐた。彼は惡性の病氣に罹つたのであつた。

「弱り目に祟り目といふやつさ」
秋葉は捨鉢な笑ひをうかべてから云つた。
「それでもう大丈夫なの？」紫は心配らしい顔をして訊いた、
「大丈夫かどうか判らないが、ここらでいいとして置くんだ」
「そんな事しといて、若しか體をこわしたら大變よ。——全體、浮氣なんかして歩くから悪いんだわ」
と、紫は卑しむやうな眼つきをして云つた。秋葉は何んにも云はずに唯ニヤニヤ笑つてゐた。それが紫には自分の言葉を平氣で肯定して居るかのやうに見えた。男の汚い一面を見せつけられたやうに感じて紫は厭な氣がした。
「お國の方はどうなつて？」
「うん、あれは到頭豫定通りさ」
「豫定通りつていふと？」
「離縁しちやつたんだ。もうすつかり談がついて、この頃荷物も片付けたさうだよ」
「まあ——お氣の毒ねえ奥さんが——」紫は痛ましさうな眼つきをした。
「氣の毒だけど仕方がない。俺は女房のために、いや親のためだつて自分を犠牲にすることは厭だからね。誰れにも束縛されずに自分勝手な生活がし度いんだから」
「隨分我儘だわねえ——」
から云つて紫は憎むやうな眼で秋葉を見た。彼女は次第に相手に對して反感を起して來た。我意の強い秋葉の言葉が薄情らしく聞えた。さうかと思ふと「幾ら強さうなことを云つたつて、矢張り女房にまで見限られた男ぢやない

か」と嘲つて遣り度いやうな氣も起きて來る。空想的で根氣の乏しい秋葉の性格が非常に頼りなく思はれると同時に、妻を離別したために、自分との關係に一層動きの取れぬ何物かが加へられて來ることを想像すると榮は不安になる。

「これから先きどうなるだらう――？」

から考へながら、あの寫眞の時分から見ると見違へる程品格の下つて來た秋葉の顏を榮は眺めた。

「時にお前に些し頼み度いことがあるんだが――」と、秋葉は躊躇しながら云つた。

「なあに？」

「お前にこんなこと言つちや氣の毒だが實は私も病氣や何やかで金を遣つちまつて弱つてるんだ。それでね、出來る事ならお前に尠し心配して貰ひ度いんだが――。それも長いことぢやないんだ。來月の末になれば私の方でも確かには入つて來るものがあるんだから」

「幾らばかし要るの？」

「五十圓もありやあいいんだ」

「五十圓――？そんなお金をあたしが持つてると思つて？」

「無論持つちやゐまいが、何んとかして都合が付かないかと思つてさ」

「都合の付かう筈が無いわよ。品物だつて大概貴郎の處へ行つてるんですもの――。融通になる物なんかもう何んにも持つてないわ」

「然し、兄さんとこに着物が預けてあるつて話だつたが、それで何んとかして貰へまいかしら？」

「まあ――それ迄持つて來て、あたしにお金をこしらへろつて言ふの？」

紫は呆れたやうな顔をしてから云つた。餘程以前のことであつたが、兄の處へ預けてあつた金時計を取り寄せて融通にした時、秋葉に向かつて「まだ着物が預けてあるからいさとなれば五十や六十は出來る」と言つたことを紫は思ひ出した。それをいまだに忘れずに居てこんな事を言ひ出した男の性根が恐ろしくなつて來た。「いくら困つたつて圖々しいにも程がある」紫は腹の中でかう思つた。

「兄さんだつて渡しつこないけど――。それぢやあんまり貴郎が無理といふものよ。第一、あたしの身分を考へて御覧なさいな」

「なに……是非つて譯ぢやない、都合が惡けりやそれ迄の話さ。唯ね、一寸相談して見ただけなんだ」と、秋葉は極まり惡さうに言ひ譯した。

「そんなこと相談して見るがもな無いぢやありませんか。縱しんばお金の出來る當てがあるとしたつて、座敷だつて借金だらけだし、あたしの苦しいことだつて解つてるぢやありませんか」

「解つた解つた。俺が惡かつたよ」

かう云つて秋葉は磊落に笑つた。然し彼は淋しかつた。紫に金の相談をするのが無理であることは自分でも解つてゐる。けれども其の無理な相談を切り出した彼の心持は、金の出來る出來ないといふことよりも相手から同情のある言葉が聞きたかつたのだ。唯一緒になつて紫にも心配して貰ひ度かつたに過ぎないのだ――。

二人は氣拙い顔をして向き合つてゐた。

六

夜更けの廓に限られた種々雜多な音響が束の間も休みなく起こつてゐる。まだ素見しがぞろぞろ歩いてゐる。張見世の女達の各を呼ぶ聲が雨の降るやうに聞える。半玉が可愛い聲で笑ひさざめきながら優美な鈴の音をさせて通つた。いろいろの物賣りが笛を鳴らしたり頓狂な呼び聲をあげたりする。廣間の方では陽氣な「奴さん」が始まつてゐた。五燭の電燈が、青い蚊帳の中を淋しく照らしてゐた。往來の方へ向いた窓から、涼しい風が飛び込んで來たては蚊帳をフハ〳〵動かした。

秋葉の腦裡には樣々の幻影が映つたり消えたりした。母屋を取り拂つてしまつた郷里の屋敷の樣が浮かんで來たり、靜かな母の寢顏を想像したりした。山の頂上に古い寺があつて、其の脇に明るい墓地が續いてゐる。松や杉の梢を風が颯々と吹き鳴らしてゐる下に、墓が累々として並んでゐる。先祖も、十年前に死んだ父も――彼の家の過去の總てが靜かに其處へ葬られてゐる。麓の村、白い帶のやうに流れてゐる川、其の向うに廣々と續いてゐる田圃、――さうした景色が秋葉の眼に現はれた。妻の里を訪ねた時のことを彼は思ひ出した。妻の病氣は餘程快い方で、透き徹るやうな色をしてゐる割りに面窶れはしてゐなかつた。彼に挨拶をする妻の顏には、感情を抑し包んでゐる冷たさとぎごちなさがあつた。彼は、二人だけになつてしんみり話し度かつた。縱ひこの儘永久に別れるにしても、せめて妻にだけは自分の心持を語つて置き度いと思つたが、家内の人々に妨げられてそれさへ叶はなかつた。彼は日暮れに近い野路を獨りで歩いて歸つた。二尺ばかり伸びた茅の叢が一面に續いてゐた。それが薄赤い陽を浴びて靜かに戰いでゐた――。

秋葉は今日で三日續けて此處へ來た。最早一滴の温かい血も殘つてゐないやうな女の態度が、胸を掻きむしられるやうな執着を彼に與へた。冷酷な女の眼が、惡魔の呪ひのやうな物狂はしさを彼の心に起こさせる。女の魂、女の肉――其の美しさでも穢らはしさでも、其の持つてゐる總てのものが怖ろしい力で彼を惱亂させてしまふ。彼の眼の前は常に

眞暗かつた。其の暗黒裡に紫の姿だけが炎々たる焔のやうに耀いてゐた。

曲りくねつた廊下を倦るさうに歩いて紫が這入つて來た。はでな縮みの浴衣に、黒地へ赤い線を現はした伊達卷を卷きつけたすらりとした姿、もみ上げから頸筋あたりの凄艶な感じが秋葉の眼を鋭く惹きつけた。漆のやうに艶々した結ひ立ての髮を氣にしながら、紫は蚊張を潜つて這入つた。

「まだ起きてたの？」紫は怪しむやうな眼つきをして、褥の上に座つてる秋葉を見て云つた。

「うむ………」

秋葉はかう答へたばかりで、腕組みをしたまゝじつと窓の外を眺めてゐた。植木の繁みの中へ、前の家の燈火が耀やく寶石のやうに織り込まれてゐる。

「睡たいから失禮してよ」

かう云つて紫は向うを向いて寢た。秋葉は矢張り身動きもしなかつた。切羽詰まつた感情だけが頭の中で混亂して、どう云つたら自身の心持が現はせるか彼には判らなかつた。

「おい、一寸起きて呉れ」秋葉は女の方を見遣つて云つた。

「なあに？」紫はぐるり向き直つて男の顔を見上げた。そして面倒臭さうに顔を顰めながら起きた。

「どうするの？あたし晝間寢なかつたから、睡くてしようがないのよ」

「お前、今夜は本統の事俺にを聞かせて呉れないか？」是れだけのことを言ふのに秋葉は非常に骨が折れた。言葉が喉でかすれて危く杜切れさうになつた。

「本統の事つて、どんな事？」

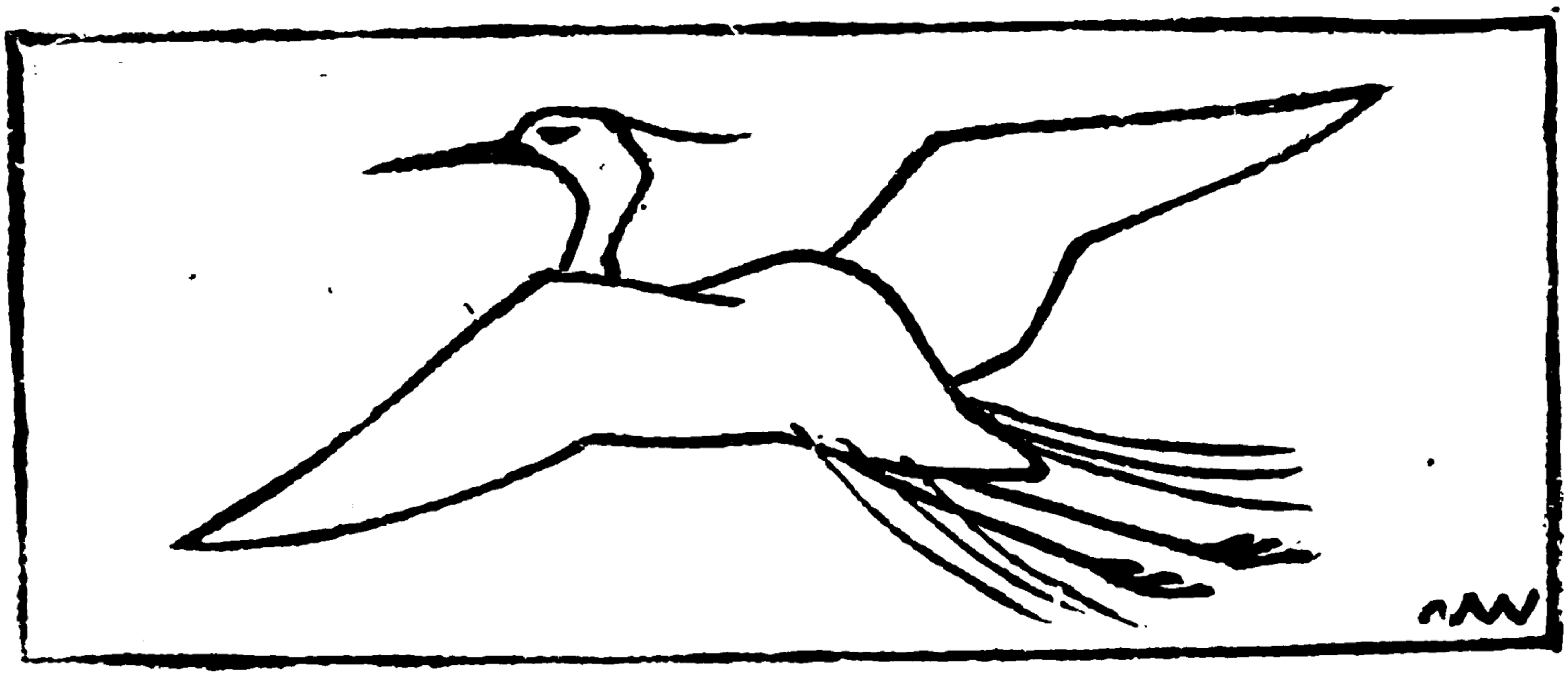
「俺の事をどう思つてるか、それを聞いて見度いんだ……」
「どう思つてるかつて……別にどうも思つちや居ないわ」
「すると、俺の事なんか問題にしちや居ないと云ふのかい？」
「随分面倒ねえ。いいぢやないの、あたしがどう思つて居たつて？」と、紫はじれつたさうに云つた。
「いや、俺はそれで自分の考へを決めるつもりなんだ。だが俺にも判つてないことはない、お前は俺に愛想を盡かしてゐるんだ」
「それなら、さうとして置くがいいわよ。判つてるなら、何もあたしに聞かなくてもいいぢやありませんか？」
かう云つて紫は冷たい笑ひを浮かべた。秋葉は默つて女の顔を見詰めて居た。泪がハラハラ落ちた。
「俺はお前に迄さう云はれて仕舞へばもう生きて居る甲斐の無い人間なんだ、あらゆる物を失つて、あらゆる人に見離されて仕舞つたのだ——。縱ひ世界中の人に見離されやうが、俺はお前一人さへ自分の物にしてゐればそれで澤山だと思つてゐたんだ……」秋葉は昂奮の頂點に達してゐた。眼が眞赤に充血して、唇がパサパサ乾いてゐる。胸が激しく波うつ樣が、浴衣の上からもありあり認められた。「お前は意久地無しだと言つて笑ふかしらないが、自分でも解らない程お前といふものが大切なのだ。俺は今日こそ見えも外聞も捨てて頼む。どうか俺を救けて呉れ……」
「ぢやあ、あたしにどうしろとおつしやるの？」と、紫は持て餘ましたやうに云つた。
どうすることも出來ない——と秋葉は自分の心に答えた。愛情の醒め盡した女に對して、何を要求する物があらう——？
紫は、華車な指先きで後れ毛を掻き上げながら、肝癪持ちらしく口の脇の筋肉をピリピリ顫はせた。眼がふだんより

も吊り上がつて、劇しい憎惡の光が底の方に燃えてゐる。
「あたしはねえ、そんな女の腐つたやうな男は大嫌ひです」
から云つて紫はすつくり起ち上がつた。
「待て！」と、秋葉は鋭い調子で言つて女の袂を促へて引き据えた。
「何をするんです！」と、紫は甲走つた聲で叫んだ。
秋葉はいきなり左手で女の胸倉を取つた。右の手にはギラリと光る物が見えた。其の眼には野獸のやうな狂暴な光があつた。紫の顏は眞蒼になつた。
「あたしを殺すんですか――」
「さうだ――お前を殺して俺も死ぬんだ」
と、秋葉は絕望的に叫んだ。紫は後へ倒れさうになつた體を兩手で支えながら、じつと男の顏を眺めてゐた。
「貴郞に殺されるなら本望です。さあ、殺して下さい」紫は不思議な程平靜な調子に戾つてから云つた。
秋葉はドシンと何かにぶつかつたやうに感じた。女の言葉が强く胸に響いた。
「自分に油斷させやうとする遁げ口上なのか、それとも本心で言つて居るのだらうか――」
彼は紫を睨みつけながら咄嗟の間にから考へた。しかし、それは一番最後迄判斷のつかない疑惑であつた、彼は頭がグラグラして來た。
紫は動かなくなつて倒れてゐた。敷布が眞紅に染まつてゐる。白蠟のやうな顏に髮の毛が亂れ掛かつて、薄笑ひでも

してゐるやうに眼を細く開いてゐた。

秋葉は、これ程紫の顔を美しく感じたことは曾て無い。同時に、是れ程自由な氣持で紫を見ることもなかつた。總て自身の血と紫の血と一緒になつて溶け合ふことを想像すると、彼の胸は何んとも云へない温い幸福に觸れた。

秋葉は歡樂の世界を想像するやうな眼つきをして、血のりで染まつてゐる短刀を眺めた。(完)



梅雨のころ

正宗白鳥

二三日絶え間なき嘔氣に惱まされてゐた友江も、今朝は稍々惱みから免かれた。免かれたと云つても、それは昨日よりはいくらか凌ぎよくなつたといふだけであつた。手術前から數日間水一滴も喉を通すことの出來なかつた彼女は、激しい渇きを覺えながら、後の惱みを恐れて、一片の氷をも一匙の牛乳をも飲下すのを躊躇してゐた。冷いもので口の内を潤すだけが、たつた一つの慰藉であつた。

「もう少しづゝ召上つた方がよろしいんですよ」と、附添ひの看護婦に云はれると、

「どうも有難う。」と、友江は淋しい微笑を浮べて、「でも、も少し待つて、お乳か苺の汁でも頂くことにしませう。まだ胸が苦しいんですから」

霖雨が霽れて朝日の差込むのが彼女には煩しかつたので、窓掛を二重に引かせたが、強い初夏の光は何物をもつてしても遮りきれないやうに、病室の中に漲つて、壁をも扉をも寢臺をも天井をも鮮明に浮上らせてゐた。彼女にはさういふいろ／＼な物の形がすべて目障りであつた。苦しみを與へる種になつてゐた。免かれる方法

のない惱みに惱まされてゐた間に、をり〳〵「どうしてかう苦しいんでせう」と云ひ〳〵、救ひを求めるやうに握締めてゐた看護婦の柔かい手も、目に映ると煩しく見えた。廊下を搬運ばれてゐる食膳が目に見えるやうで、膳の上の味噌汁の匂ひが扉から洩れて、枕の側まで臭つて來るやうで、堪へがたいほど胸苦しかつた。彼女は氷袋を頭へ當てたり、腹に當てたりした。時々は指先で氷袋を搖動かして、その幽かな音によつて、故郷の谷川の流れを聯想したりした。

院長の執刀でスッと寸分の肉の裂かれたことが朧ろげに思出された。「私まだ生きてゐるんですのに、待つて下さい」と云はうとしながら、それきり谷の底へ落ちるやうに氣が遠くなつたことが思出された。

「手術してよかつた」「結果がよかつたのですから、御安心なさい」などゝ、醫師や看護婦長などが昨日今日慰めて吳れるのも、聞く時には、ふと地獄に佛のやうに悅しくなるのだつたが、後で思ふと何の足しにもならなかつた。十に二つの危險を冒して癌の手術をしたのが首尾よく成功して病根が絕たれたにしても、それが今の彼女には喜びとなつて念頭に浮んでは來なかつた。

ふと、コツ〳〵と扉を叩く音がした。友江は時刻から推して、夫の訪問だと氣付いたが、それを心賴みにもしなかつた。ソツと入つて來たのは、先日から何時も同じやうに冴えない顏した夫であつたが、その後からは意外にも愼ましやかな顏した夫の姉が入つて來た。友江は憔けた頰に微笑を浮べて迎へた。

「今日はいくらかいゝんだらうね」と、夫は何時ものやうに、看護婦と病人の何方へ向つて訊くともなく訊いた。

「えゝ、昨日よりはおよろしいやうです」と、看護婦は答へた。

「いゝ」とか「よくなつた」とかいふ言葉は、去年も、今年も、手術前も手術後も、昨日も今朝も、たゞ空虛な言葉として、彼女の耳に響くのであつた。意味のない譯の分らぬ言葉として聞かれるのであつたが、でも、彼女自身も、世

間並みに、

「お蔭樣でいくらかいゝやうですの」と云つて、義姉に向つて、「よく來て下すつたわね」と、横向きのまゝで云つた。

「でもよく思切つて手術しましたね。これからは一日々々といゝ方へ向くんですから樂みですよ。退院になつたら盛んにお祝ひして、この夏は皆んな連れで、十日か一週間でも温泉へ行かうぢやありませんか」

「えゝ。結構ですわね」

「貴女がよくおなんなすつたら、どんなお祝ひしてもいゝつて、昨日雪ちやんなんかとさう云つてゐたのよ」

「雪ちやんも……」と云ひかけて、友江は厭氣が差して話を止めた。

「雪ちやんはあの話が纏まらなかつたのを、ちつとも氣にしてやしないのよ。案外諦めがいゝの。……それについちやその間貴女にもよくお話しますよ」

「だけどね。雪ちやんの腹の中は雪ちやんの外には誰れにも分りやしませんわ」と云つて、友江はいら／＼した氣持で「諦めがいゝも惡いも。傍の者に分るものですか。……私つく／＼さう思つてゐますの。痛くつても痒くつても、自分の身で分つてるばかりで、傍の者にはちつとも感ぜられやしないのね」

「さうでせうとも」

義姉はたゞ同意した。そして、枕許へにじり寄つて、亂れた髮を撫付けてやつたり、肩をさすつてやつたりしながら、看護婦に向つてお愛想を云つてゐたが、長座を憚つて、間もなく自分だけ先へ暇を告げた。

「有難う御座んした。皆樣によろしくね」と、友江は扉の方へ上目を使つて云つてから、後に殘つてゐる夫の方へ目

た噂じたが、何となく重苦しくなつたので、直ぐに目蓋を閉ぢた。……周圍に人の息のしない、人の影もない所にゐたかつた。それに、言葉では云ひやうのない不快な氣持を湛はせてゐる自分の胸や腹をも何處かへやつてしまひたかつた。

「昨夕は眠れたかい」と、夫に訊かれると友江は微かに首を振つた。

「お前は我慢づよいんだから、もう一息だよ」と、夫に力をつけられても目を瞑つたまゝ默つてゐたが、すると、看護婦も、

「本當に、も少しの御辛抱ですよ。どなたでも三日や四日はお苦しみになるんですから」と、たび／＼云つてゐることを云つて、力を添へたが、友江は最早さういふ言葉によつて何の快い感じをも得られなくなつてゐた。他の患者が自分と同樣に苦しんでゐようとゐまいと、そんなことは氣休めとしても受入れられなかつた。

ふと、醤油くさい臭ひが鼻の先を掠めたので、薄目を開くと、先つきよりも座を進めてゐる夫の口からさうした惡臭が洩れてゐたのであつた。十年親しみを重ねて來た甲斐もなく、この時、人として男子としての夫を遠くへ押退けたいといふ思ひをどうすることも出來なかつた。

臭ひを嗅ぐまいと思つて口で呼吸をすると、息が一層苦しかつた。

「昨夕田村町へ行くと、お雪の奴湯上りにこつてりと白粉をつけてゐたよ。あの話が駄目になつてから、彼奴却つて粉飾に身を入れだしたから不思議だよ」と、夫の言葉は暫く寂としてゐた病室の空氣を破つて響いた。

「さう？」友江はまるい顔したお雪の顔をも聲をも無理にも思出されながら、「あの女は本當に諦めてゐるんですかね。一時はあの縁談には執心だつたらしいのに」

「腹の中はどうだか知らんが、上べは馬鹿に元氣がいゝよ。そして、お前にだけ相談したいことがあると云つて、退院を待つてゐるよ。重大なことを相談するんだなんて云つてゐたが、何の事だかな」

「私があの女の相談相手に見込まれたんですかね。變ですね」

「湯淺でも風間でも、外の家の者は、誰れでもあれの云ふことに反對しさうだが、お前なら大丈夫同意して吳れると手賴りにしてゐるのだらう」

「實際私なら同意するでせうからね」

「それだから入院の日から、お前の全快の願を掛けて、毎朝起きると直ぐに虎の門の金比羅樣へお詣りをしてるよ。彼奴の柄にないことだが、とに角心掛けだけは感心さ」

「へえ……」と、友江は無感興な返事をした。そんな愚かな信心三昧は止したらいゝのにと云はうとしたが、さう云つてしまふのはふと氣になつたので、口を噤んだ。

夫は時計を出して見て、それから友江の樣子に目を据ゑながら、彼女の求むるものゝ有無を訊いてから座を立つた。

「左樣なら」と、友江は上目で夫を見送つた。抛り出すやうに寢床の外へ手を出して見たが、さうしたゝめに何の心安さも得られなかつたので、抛出した手を他の手と胸の上で組合はせた。何かを禮拜するやうな合掌の形は、入院前から苦しいをり〳〵に自から彼女の現はす癖になつてゐるのだつたが、今日はお雪が願掛けしてゐるといふ金比羅樣が念頭に浮んで來たので、却つて詰らなくなつて組んだ手を離した。

「雪ちやんもおせつかいを止して吳れゝばいゝのに」と、胸の上にのし掛つて來さうなその重い神樣の力を自分の前から拂退けたかつた。

「お乳はよく冷えましたが、召上りませんですか」と、看護婦に云はれると、

「飲みたいことは飲みたいんですけれど」

「ためしに一口召上つて御覧なさいましな。もうおよろしいでせう」

「さうですね。ぢや、私冒險しますわ」

友江は色の褪せた唇を看護婦の差付けた吸口の方へ寄せた。怖々一口啜ると、乾き切つてゐた喉の潤ふ快さに、微笑を浮べて、「あゝお旨い」とさも悦しさうに云ふとゝもに、思はず兩手を合はせた。

案じたほどでもなく、牛乳が胃の腑へ落付くとゝもに氣持も稍々輕くなつて、看護婦に向つて二三言無駄口を利いたりした。そして、うと／＼としてゐたが、墻向ふの電車の軋る音が、腹部の切られた時の音のやうに腰耳に響いた。

拔糸が濟んで、食慾も出るし身動きも出來るやうになつてから、友江は入院の前後に心配を掛けたり世話になつたりした身内の誰れ彼れを思出した。窓掛の隙間から差込む初夏の冴えた光も稍々懷かしいものに見えだして、ペンキの剝げた扉も汚染のある天井も、彼女の心に痒みを與へなくなつた。

稼業の忙しい夫は、二三日顏を見せなかつたが、ある日の午後正體のない睡りから目醒めた友江は、ふと枕許の机の上に置かれた薔薇の花束を見つけて、草花などに趣味を持たぬ夫の所爲としては變だと思ひながら、看護婦に訊くと、

「先つき津村さんと仰有る若い女の方が入しつたんですの。お起し申しちや惡いから近所へ遊びに行つて、歸りにお寄んなさると仰有つてゞした」

「さう？。二十歳くらゐの顏のまるい奇麗な人でせう」

「え、」

看護婦の答へぶりは冴えなかつた。友江はひそかに笑つて、お華の粉飾した樣子を想像しながら待つてゐた。自分を信賴してゐるらしいお華の口から、その後の身內の人々の消息を聞かうと心構えしてゐた。看護婦の世間話や、他の患者との廊下での立話などには、さしたる興味がなくつて、知人の身の上の事を――それも夫の口から出ないやうな事を――聞きたかつた。平穩無事で皆んながそれ〴〵の日々の勤めをいそしんで日を送つてゐると云つてゐる夫の言葉が、何となく疑はれてゐたので、自分がこんなに永い――一日も一年のやうに永い――艱難苦痛を甞めてゐた間に、知人の上には何の煩ひも起らなかつたとは信ぜられなかつたのであつた。寢床に橫たはつて昨日までの事を顧みてゐても、廊下に立つて、密集してゐる人家を見渡したり、往來の人々や俥や自働車を見下したりしてゐても、それ等の者が平穩無事のいゝ事に向つて動いてゐようとはどうしても思はれないのに、自分の身內にかぎつて、いゝ日ばかり照つてゐよう筈はないと、友江は堅く信じてゐた。

「お前の病氣さへ治れば、おれの一家一族には言分はないのだ」と、夫が屢々云つてゐたことは一時の氣休めに過ぎないらしくて、しかもそんな言葉は彼女に取つては氣休めにすらならなかつた。

待つてゐたお華が、常に變らぬまる〴〵とした顏して入つて來たのは、電氣の點く頃であつた。友江はパッと電氣の光が赤く點くたびに不思議に感ずるのをこの頃の習慣としてゐた。

「よくおなんなすつたんですつてね」と、お華はさも懷つこさうに側へ寄つた。髮や顏は小ざつぱりと粧飾してゐたが、身裝は平生のやうに質素で、去年友江が見立てゝやつたセルの衣服を相變らず着けてゐた。

友江はすでにいく度も見舞人の前で繰返してゐる自分の入院後の經過を、同じやうに簡單に述べて、

「今何處へ行つていらしつたの？」と訊ねた。

「次手に加藤さんの家へ寄つて來ましたの。姉さんによろしくと云つてゐましたよ。その中お見舞に上りますつて」

「……お見舞はもう澤山よ」友江は同じことを聞かされたり云はされたりするのに飽々してゐたので眉を蹙めた。

「ぢや、私が此處へお見舞に來たのもいけなくつて？　加減の惡い時に傍で騷がれるのは煩いでせうからね」

「いゝえ、あなたにだけは會ひたくて、待焦れてゐたのよ」

「どうして？　私に何か御用があるんですか」と一時曇つたお雪の顏はまた晴々して來た。

「別段用事つてないんだけれど、あなたにいろ／＼聞きたいと思つてゐたのよ」

「私も姉さんが退院なすつたら、ゆつくりお話したいと思つてることがありますの。だから滋養物をどつさり召上つて、一日も早く丈夫になつて家へ歸るやうにして下さいね。お家では先日大掃除をして、姉さんが歸つて入らつしやるのを待つてゐるんですよ。お庭には紫陽花が咲きかけてゐますわ」

「あなたに聞きたいのは、そんなことぢやないのよ……此處へ來る人が皆んな私には隱してるんだけれど、私の家とかあなたの家とか、湯淺や鳳間の家とかに、何か異つた事が出來てゐるんぢやないの。あなたは怜悧だから氣がつかない筈はない。病人の私には秘密にして置けと云はれてるやうなことが何か出來てゐるんぢやないの。……是非それを聞かせて頂戴な。まだこんなに瘦せてゐるけれど、氣分はもう確りしてるのだから、どんな事にも決して驚ろきやしないわ。あなたが私に知らせたつてことも人に云やしないから、本當のところをよく聞かせて下さいな。……そんな目付して白ばくれてゐたつて駄目よ」

土色をしてゐる頬骨の尖つた病人にかう問詰められると、お雪は氣味惡く感じながら、つとめて目に笑ひを含ませ

て、

「私白ばくれてやしないことよ。……だけど、何にも知らないんですもの」

「私、牛込の姉さんの口うらで、雪ちゃんに人に云はれない苦勞のあることも察してゐるの」

「私に秘密の苦勞があるんですつて？ 牛込の姉さんがそんなことを云つてゐたの？ 嘘ですよ、そんなこと」お雪は緣談の破れたゝめに自分が失望してゐるやうに人に思はれてゐるのを、自分の估券が下つたやうに情けなく感じながら、

「私の心が分りもしないくせに、皆んなして陰でそんな事を云つてるのね。大きなお世話だわ。皆んな御自分の頭の蠅を追つてゐたらいゝでせうに」

「私なんぞ自分の頭の蠅を追ふ力さへないんだから」と、友江は笑ひ〳〵云つたが、さうすると、自分の頭の中にいくつもの蠅がブツ〳〵集つてゐるやうな氣がした。

「牛込の姉さんは餘計なおせつかいをする人だから。湯淺のおきしさんが大變憤慨してますわ。謝らなくつていゝところへ、あの姉さんが勝手におきしさんの名代になつて秘密で手を突いて謝つて來たりしたんですからね。いくら親切づくでも常識外れなことをされちや、有難迷惑だわ。貴女とこの兄さんも乾度さう思つてゐらつしやるに違ひないと私察してゐてよ」

「へえ？……ぢや、この頃私の家へ姉さんが來て、家の世話をして呉れてるのね」友江は夫からもそのことを聞かされてゐるのだが、今の場合お雪の口から事ありげに云はれるのを異樣に感じて、「たゞそれだけのこと？。……隱さないで云つてお呉れな。雪ちゃんも隨分水くさいのね。……兄さんが私に愛想を盡かして、若い主婦さん貰はうとしてゐたつて、私驚ろきやしないよ」

「そんなことが……」と、お雪は戯談として聞流して、「兄さんはあなたのことばかり案じてゐらつしやるのよ」

「だから、私はこんなに思つてばかりゐちや濟まないと思つてるの。私が死んぢまつたら、兄さんのためには幸福なんでせうけど」

「何故そんな詰らないことを思つてゐなさるの」

「私の邪推かも知れないけれどね。私が手術臺へ連れて行かれた時には、若しや私がお醫者さんの手違ひで死ぬるにしたところが、兄さんはじめ皆んなのために結句幸福なんだらうと、ふつとさう思つたのよ。厄介者でも、突いたり切つたりして勝手に殺すことは人情として出來ないでせうけれど、醫者の手でお腹を裂いて治療して、それでいけなければ壽命がないのだから仕方がないと、天下晴れて諦められるんでせうからね。……誰れもそんな薄情らしいことを思つてやしないと、貴女は云ふでせうね。それはさうかも知れないけど、當人の私だけはさう思つたのだから仕方がないの。現に手術臺で看護婦さんなんかに手取り足取りされて、目にも口にも蓋をされて、魔薬を嗅がされた時には、ひとりでにさう思はれたのだから、誰れが何と云つても降參出來ないわ。實際ですもの。醉興でも戯談でもない。私が生死の瀬戸際に實際にさう思つたんですもの。……私がこんな恐ろしいいやな思ひしてるのが、あの人にもこの人にも幸福になるんだつて。」

「でも、あの日は兄さんはじめ風間の叔母さんだつて、青い顔して騷いでゐらつしやつたのよ。そして當人のお腹ばかりぢやない、立會人の胸までも院長さんの刀で裂かれたやうな氣がしたつて云つてましたよ。」

「それとこれとは違ふわよ」

「でも、手術の結果がよかつたのだから、言分なしの幸福ぢやないの。姉さんもこれまでの埋合はせに、好きなこと

して遊びなさるといゝわ」

「この上自分の遊びにお金を使つてゐられるものですか。私の身體は一日生きてれば生きてるほど隨分なお金がかゝるんだから厄介ね。儉約しようと思へば、早く死ぬるに限るのよ」

「だつて姉さんのとこの身代は、兄さん一人の力で出來たんぢやないでせう。だから遠慮しないで御自分のためにお使ひなさいな。傍の者が彼此苦情を云へる筈はないと私は思つてゐてよ。姉さんが苦勞してつくつたものを他所の家の人にいゝやうにされちや詰らないぢやないの」

「牛込の姉さんが立入つたことをしてるんでせうね。……だけど、そんなことは私何とも思つてやしないわ」

悟つてゐるやうな友江の口吻が、お雪には不思議でもあり物足らなくも感ぜられたので、「立入ると云つても、生活の事ばかりぢやないんですからね。兄さんを唆かしてるんですもの……」

「私に子供の出來る望みがないものだから、貰ひ子をしろと云ふんでせう。以前ちよつとそんな話があつたの」

友江が案外動じないので、お雪は張合ひが拔けたが、「だけど、養子するもしないも、姉さんの量見が大事なんですからね。姉さんを差置いてそんな相談をするつて法はないと思つてよ」

「だつて子供のことなんかどうでもいゝぢやないの」友江は夫や姉が望むのなら、どんな貰ひ子でも、自分の方からは不服を唱へる氣にはなれなかつたので、「もつと變つたことがあるんでせう。次手に云つておしまひなさい」

「變つたことつて別にないわ」

貰ひ子の話にさへ冷然としてゐる友江に向つて、牛込の姉の仕打について何を云つたつて手應へがなさゝうなので、お雪はたゞの見舞客として、邪氣のない話をしだした。魚屋の亭主が毎日午過ぎになるとはじめる「玉三」の稽古や、

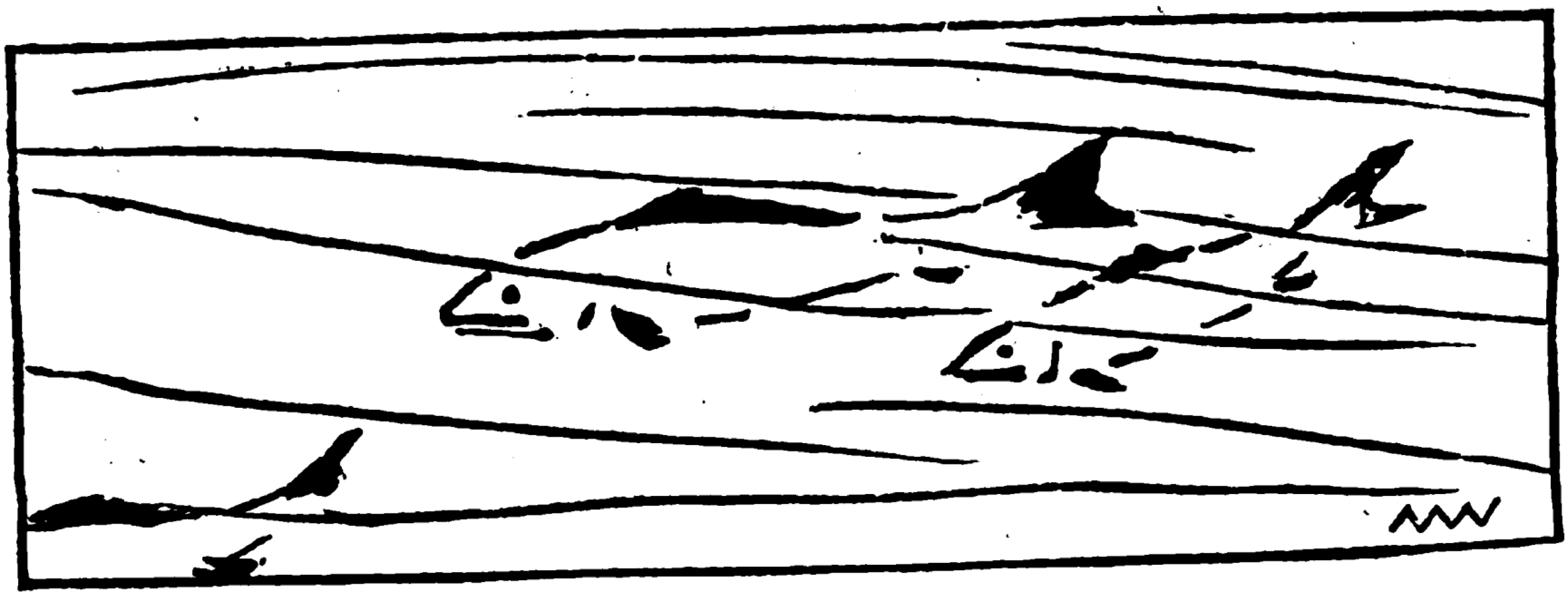
高島屋へ始終新柄を買ひに行つてゐる裏隣りの妻君の自慢さうな吹聴や、脳が悪くて坐ると直ぐに居睡りをはじめる下女の不作法など、友江はすでに夫から聞かされてゐる自分の家の内外の噂を、同じやうにお寺からも聞かせると、「私家で寝てゐた間に、玉三を聞覺えに大略覺えたのだけど、今度家へ歸つたら、またおんなじことを聞かされるのね。語り振りがちつとは上手になつたのか知らん。私にはあれが頭に響いて溜らなかつたのだけど、生きてゐればこそ、私もまた「玉三」が聽かせて貰へるんだわね。」

「この頃は暑くなつて、開けつ放しだから近所が賑かよ。病院は陰氣だから、入つて來たゞけでも、自分が病人臭くなつてよ。姉さんも退院したら世の中が變つたやうになるに極つてゐるわ」

「ぢや、それを樂みにしてゐようかね」

友江は話疲れて目を閉ぢた。待焦れてゐたお寺からも、何か知ら聞きたい〳〵と思つてゐたことの聞かれないのを歯痒く思つた友江は、自分一人で經驗して來た手術臺の上の悩みや感じを、尊いものとして染々と思出してゐた。他の患者は直ぐに忘れるか知らないけれど、自分だけはこれほどの思ひして得たものを忘れまいとしてゐた。そして暫くして、何時の間にか座を立つて窓際へ寄つて夜の市街を眺めてゐるお寺に向つて、

「寺ちやんは金比羅樣へお詣りして呉れたんですつてね」と、冷かすやうに云つた。



疑惑

芥川龍之介

今ではもう十年あまり以前になるが、或年の春私は實踐倫理學の講演を依頼されて、その間彼是一週間ばかり、岐阜縣下の大垣町へ滞在する事になつた。元來地方有志なるものの難有迷惑な厚遇に辟易してゐた私は、私を招待してくれた或教育家の團體へ豫め斷りの手紙を出して、送迎とか宴會とか或は又各所の案内とか、その外いろいろ講演に附隨する一切の無用な暇つぶしを拒絶したい旨希望して置いた。すると幸私の變人だと云ふ風評は夙にこの地方にも傳へられてゐたものと見えて、やがて私が向うへ行くと、その團體の會長たる大垣町長の斡旋によつて、萬事がこの我儘な希望通り取計らはれたばかりでなく、宿も特に普通の旅館を避けて、町内の素封家N氏の別莊とかになつてゐる閑靜な住居を周旋された。私がこれから話さうと思ふのは、その滞在中その別莊で偶然私が耳にした或悲慘な出來事の顚末である。

その住居のある所は、巨鹿城に近い廓町の最も俗塵に遠い一區劃だつた。殊に私の起臥してゐた書院造りの八疊は、日當りこそ惡い憾はあつたが、障子襖も程よく寂びのついた、如何にも落着きのある座敷だつた。私の世話を燒いてくれる別莊番の夫婦者は、格別

用のない限り、何時も勝手に下つてゐたから、このうす暗い八疊の間は大抵森閑として人氣がなかつた。それは御影の手水鉢の上に枝を延ばしてゐる木蓮が、時々白い花を落すのでさへ、明に聞き取れるやうな靜かさだつた。毎日午前だけ講演に行つた私は、午後と夜とをこの座敷で甚泰平に暮す事が出來た。が、同時に又、參考書と着換へとを入れた鞄の外に何一つない私自身を、春寒く思ふ事も度々あつた。

尤も午後は時折來る訪問客に氣が紛れて、さほど寂しいとは思はなかつた。が、やがて竹の筒を台にした古風なランプに火が燈ると、人間らしい氣息の通ふ世界は、忽ち其かすかな光に照される私の周圍だけに縮まつてしまつた。しかも私にはその周圍さへ、決して賴もしい氣は起させなかつた。私の後にある床の間には、花も活けてない靑銅の瓶が一つ、威かつくどつしりと、据えてあつた。さうしてその上には怪しげな楊柳觀音の軸が、煤けた錦襴の表裝の中に朦朧と墨色を辨じてゐた。私は折々書見の眼をあげて、この古ぼけた佛畫をふり返ると、必焚きもしない線香がどこかで匂つてゐるやうな心もちがした。それほど座敷の中には寺らしい閑寂の氣が罩つてゐた。だから私はよく早寢をした。が、床にはいつても、容易に眠くはならなかつた。雨戸の外では夜鳥の聲が、遠近を定めず私を驚かした。その聲はこの住居の上にある天主閣を心に描かせた。晝見ると何時も天主閣は、蓊鬱とした松の間に三層の白壁を疊みながら、その反り返つた家根の空へ無數の鴉をばら撒いてゐる。——私は何時からとろ／＼と淺い眠に沈みながら、それでもまだ腹の底には水のやうな春寒むが漂つてゐるのを意識した。

すると或夜の事——それは豫定の講演日數が將に終らうとしてゐる頃であつた。私は何時もの通りランプの前にあぐらをかいて、漫然と書見に耽つてゐると、突然次の間との境の襖が無氣味な程靜に明いた。その明いたのに氣がついた時、無意識にあの別莊番を豫期してゐた私は、折よく先刻書いて置いた端書の投函を賴まうと思つて、何氣なく其方を一

幹した。するとその枕側のうす暗がりには、私の全く見知らない四十恰好の男が一人、端然として坐つてゐた。實を云へばその瞬間、私は驚愕――と云ふよりも寧ろ迷信的な恐怖に近い一種の感情に脅された。又實際その男は、それだけのショックに價すべく、ぼんやりしたランプの光を浴びて、妙に幽靈じみた姿を具へてゐた。が、彼は私と顔を合はすと、昔風に兩肱を高く張つて恭しく頭を下げながら、思つたよりも若い聲で、殆機械的にこんな挨拶の言を述べた。

「夜中、殊に御忙しい所を御邪魔に上りまして、何とも申し譯の致しやうはございませんが、ちと折入つて先生に御願ひ申したい儀がございまして、失禮をも顧ず、參上致したやうな次第でございます。」

漸く最初のショックから恢復した私は、その男がかう辯じ立ててゐる間に、始めて落着いて相手を觀察した。彼は額の廣い、頬のこけた、年にも似合はず眼に働きのある、品の好い半白の人物だつた。それが紋附でこそなかつたが見苦しからぬ羽織袴で、しかも膝のあたりにはちやんと扇面を控へてゐた。唯、咄嗟の際にも私の神經を刺戟したのは、彼の左の手の指が一本欠けてゐる事だつた。私はふとそれに氣がつくと、我知らず眼をその手から外らさないではゐられなかつた。

「何か御用ですか。」

私は讀みかけた書物を閉しながら、無愛想にかう問ひかけた。云ふまでもなく私には、彼の唐突な訪問が意外であると共に腹立しかつた。と同時に又別莊番が一言もこの客來を取次がないのも不審だつた。しかしその男は私の冷淡な言葉にもめげないで、もう一度額を疊につけると、相不變朗讀でもしさうな調子で、

「申し遲れましたが、私は中村玄道と申しますもので、やはり毎日先生の御講演を伺ひに出て居りますが、勿論多數の中でございますから、御見覺えもございますまい。どうかこれを御縁にして、今後は又何分ともよろしく御指導の程

を御願ひ致します。」

私はここに至つて、漸くこの男の來意が呑みこめたやうな心もちがした。が、夜中書見の清興を破られた事は、依然として不快に違ひなかつた。

「すると――何か私の講演に質疑でもあると仰有るのですか。」

かう尋ねた私は内心ひそかに、「質疑なら明日講演場で伺ひませう」と云ふ體の善い撃退の文句を用意してゐた。しかし相手はやはり顏の筋肉一つ動かさないで、ぢつと袴の膝の上に視線を落しながら、

「いえ、質疑ではございません。ございませんが、實は私一身のふり方に就きまして、善惡とも先生の御意見を承りたいのでございます。と申しますのは、唯今からざつと二十年ばかり以前、私は或思ひもよらない出來事に出合ひまして、その結果とんと私にも私自身がわからなくなつてしまひました。就きましては、先生のやうな倫理學界の大家の御說を伺ひましたら、自然又分別もつからうと存じまして、今晩はわざわざ推參致したのでございます。如何でございませう。御退屈でも私の身の上話を一通り御聽き取り下さる譯には參りますまいか。」

私は答に躊躇した。成程專門の上から云へば倫理學者には相違ないが、さうかと云つて又私は、その專門の知識を運轉させてすぐに當面の實際問題へ靈活な解決を與へ得る程、融通の利く頭腦の持ち主だとは遺憾ながら己惚れる事が出來なかつた。すると彼は私の逡巡に早くも氣がついたと見えて、今まで袴の膝の上に伏せてゐた視線をあげると、半ば歎願するやうに、怯づ々々私の顏色を窺ひながら、前より稍自然な聲で、慇懃にかう言葉を繼いだ。

「いえ、それも勿論强ひて先生から、是非の御判斷を伺はなくてはならないと申す譯ではございません。唯、私がこの年になりますまで、始終頭を惱まさずにはゐられなかつた問題でございますから、せめてその間の苦しみだけでも先

生のやうな方の御耳に入れて、多少にもせよ私自身の心やりに致したいと思ふのでございます。」

から云はれて見ると私は、義理にもこの見知らない男の話を聞かないと云ふ譯には行かなかつた。が、同時に又不吉な豫感と茫漠とした一種の責任感とが、重苦しく私の心の上にのしかかつて來るやうな心もちもした。私はそれらの不安な感じを拂ひ除けたい一心から、わざと氣輕らしい態度を裝つて、うすぼんやりしたランプの向うに近々と相手を招じながら、

「では兎に角御話だけ伺ひませう。尤もそれを伺つたからと云つて、格別御參考になるやうな意見などは申し上げられるかどうかわかりませんが。」

「いえ、唯、御聞きになつてさへ下されば、それでもう私には本望すぎる位でございます。」

中村玄道と名のつた人物は、指の一本足りない手に疊の上の扇子をとり上げると、時々そつと眼をあげて私よりも寧ろ床の間の楊柳觀音を偸み見ながら、やはり抑揚に乏しい陰氣な調子で、とぎれ勝ちにかう話し始めた。

丁度明治二十四年の事でございます。御承知の通り二十四年と申しますと、あの濃尾の大地震がございました年で、あれ以來この大垣もがらりと容子が違つてしまひましたが、その頃町には小學校が丁度二つございまして、一つは藩侯の御建てになつたもの、一つは町方の建てたものと、かう分れて居つたものでございます。私はその藩侯の御建てになつたK小學校へ奉職して居りましたが、二三年前に縣の師範學校を首席で卒業致しましたのと、その後又引き續いて校長などの信用も相當にございましたのとで、年輩にしては高級な十五圓と云ふ月俸を頂戴致して居りました。唯今でこそ十五圓の月給取は露命も繋げない位でございませうが、何分二十年も以前の事で、十分とは參りませんまでも、暮し

に不自由はございませんでしたから、同僚の中でも私などは、どちらかと申すと羨望の的になつた程でございました。家族は天にも地にも妻一人で、それもまだ結婚してから、漸く二年ばかりしか經たない頃でございました。妻は校長の遠緣のもので、幼い時に兩親に別れてから私の所へ片づくまで、ずつと校長夫婦が娘のやうに面倒を見てくれた女でございます。名は小夜と申しまして、私の口から申し上げますのも、異なものでございますが、至つて素直な、はにかみ易い――その代り又無口過ぎて、どこか影の薄いやうな、寂しい生れつきでございました。が、私には似たもの夫婦で、たとひこれと申す程の花々しい樂しさはございませんでも、まづ安らかなその日その日を、送る事が出來たのでございます。

するとあの大地震で、――忘れも致しません十月の二十八日、彼是午前の七時頃でございませうか。私が井戸側で楊子を使つてゐると、妻は臺所で釜の飯を移してゐる。――その上へ家がつぶれました。それがほんの一二分の間の事で、まるで大風のやうな凄まじい地鳴りが襲ひかかつたと思ひますと、忽めきめきと家が傾いで、後は唯瓦の飛ぶのが見えたばかりでございます。私はあつと云ふ暇もなく、やにはに落ちて來た庇に敷かれて、暫くは無我夢中の儘、どこからともなく寄せて來る大震動の波に搖られて居りましたが、やつとその庇の下から土煙の中へ這ひ出して見ますと、目の前にあるのは私の家の屋根で、しかも瓦の間に草の生へたのが、そつくり地の上へひしやげて居りました。

その時の私の心もちは、驚いたと申しませうか。慌てたと申しませうか。まるで放心したのも同前で、べつたり其處へ腰を拔いたなり、丁度嵐の海のやうに右にも左にも屋根を落した家々の上へ眼をやつて、地鳴りの音、梁の落ちる音、樹木の折れる音、壁の崩れる音、それから幾千人の人々が逃げ惑ふのでございませう、聲とも音ともつかない響が騷然と煮えくり返るのをぼんやり聞いて居りました。が、それはほんの刹那の間で、やがて向うの庇の下に動いてゐる

ものを見つけますと、私は急に飛び上つて、凶い夢からでも覺めたやうに意味のない大聲を擧げながら、いきなり其處へ駈けつけました。庇の下には妻の小夜が、下半身を梁に壓されながら、悶え苦しんで居つたのでございます。

私は妻の手を執つて引張りました。妻の肩を押して起さうとしました。が、壓しにかかつた梁は、虫の這ひ出す程も動きません。私はうろたへながら、庇の板を一枚々々むしり取りました。取りながら、何度も妻に向つて「しつかりしろ」と喚きました。妻を？ いや或は私自身を勵ましてゐたのかも存じません。小夜は「苦しい」と申しました。「どうかして下さいまし」とも申しました。が、私に勵まされるまでもなく、別人のやうに血相を變へて、必死に梁を擡げようと致して居りましたから。私はその時妻の兩手が、爪も見えない程血にまみれて、まるで大きな蜘蛛のやうに梁をさぐつて居つたのが、今でもまざまざと苦しい記憶に殘つてゐるのでございます。

それが長い長い間の事でございました。――その内にふと氣がつきますと、どこからか濛々とした黑煙が一なだれに屋根を渡つて、むつと私の顔へ吹きつけました。と思ふと、その煙の向うにけたたましく何か爆ぜる音がして、金粉のやうな火粉がばらばらと疎らに空へ舞ひ上りました。私は氣の違つたやうに妻へ獅噛みつきました。さうしてもう一度無二無三に、妻の體を梁の下から引きずり出さうと致しました。が、やはり妻の下半身は一寸も動かす事は出來ません。私は又吹きつけて來る煙を浴びて、庇に片膝つきながら、噛みつくやうに妻へ申しました。何を？と御尋ねになるかも存じません、いや、必御尋ねになりませう。しかし私も何を申したか、とんと覺えてゐないのでございます。唯私はその時妻が、血にまみれた手で私の腕をつかみながら、「あなた」と一言申したのを覺えて居ります。私は妻の顔を見つめました。あらゆる表情を失つた、眼ばかり徒に大きく見開いてゐる、氣味の惡い顔でございます。すると今度は煙ばかりか、火の粉を煽つた一陣の火氣が、眼も眩む程私を襲つて來ました。私はもう駄目だと思ひました。妻は生きながら火

に燒かれて、死ぬのだと思ひました。生きながら？　私は血だらけな妻の手を握つた儘、又何か喚きました。と、妻も又繰返して、「あなた」と一言申しました。私はその時その「あなた」と云ふ言葉の中に、無數の意味、無數の感情を感じたのでございます。生きながら？　生きながら？私は三度何か叫びました。それは「死ね」と云つたやうにも覺えて居ります。「己も死ぬ」と云つたやうにも覺えて居ります。が、何と云つたかわからない內に、私は手當り次第、落ちてゐる瓦を取り上げて、續けさまに妻の頭へ打ち下しました。……………

　それから後の事は、先生の御察しにまかせる外はございません。私は獨り生き殘りました。殆町中を燒きつくした火と煙とに追はれながら、小山のやうに路を塞いだ家々の屋根の間をくぐつて、漸く危い一命を拾つたのでございます。幸か、それとも又不幸か、私には何にもわかりませんでした。唯その夜、まだ燃えてゐる火事の光を暗い空に望みながら、同僚の一人二人と一しよに、やはり一ひしぎにつぶされた學校の外の假小屋で、炊き出しの握り飯を手にとつた時とめどなく淚が流れた事は、未だにどうしても忘れられません。

　中村玄道は暫く言葉を切つて、臆病らしく眼を疊へ落した。突然こんな話を聞かされた私も、愈廣い座敷の春寒が襟元まで押寄せたやうな心もちがして、「成程」と云ふ元氣さへ起らなかつた。

　部屋の中には、唯、ランプの油を吸ひ上げる音がした。それから机の上に載せた私の懷中時計が、細かく時を刻む音がした。と思ふと又その中で、床の間の楊柳觀音が身動きをしたかと思ふ程、かすかな吐息をつく音がした。

　私は悸えた眼を擧げて、悄然と坐つてゐる相手の姿を見守つた。吐息をしたのは彼だらうか。それとも私自身だらうか。――が、その疑問が解けない內に、中村玄道はやはり低い聲で、徐に話を續け出した。

申すまでもなく私は、妻の最期を悲しみました。そればかりか、時としては、校長始め同僚から、親切な同情の言葉を受けて、人前も恥ぢず涙さへ流した事がございました。が、私があの地震の中で、妻を殺したと云ふ事だけは、妙に口へ出して云ふ事が出來なかつたのでございます。「生きながら火に燒かれるよりはと思つて、私が手にかけて殺して來ました。」――これだけの事を口外したからと云つて、何も私が監獄へ送られる次第でもございますまい。いや、寧ろその爲に世間は一層私に同情してくれたのに相違ございません。それがどう云ふものか、云はうとすると忽ち喉元にこびりついて、一言も舌が動かなくなつてしまふのでございます。

當時の私はその原因が、全く私の臆病に根ざしてゐるのだと思ひました。が實は單に臆病と云ふよりも、もつと深い所に潜んでゐる原因があつたのでございます。しかしその原因は、私に再婚の話が起つて、愈もう一度新生涯へはいらうと云ふ間際までは、私自身にもわかりませんでした。さうしてそれがわかつた時、私はもう二度と人並の生活を送る資格のない、憐むべき精神上の敗殘者になるより外はなかつたのでございます。

再婚の話を私に持ち出したのは、小夜の親許になつてゐた校長で、これが純粹に私の爲を計つた結果だと申す事は私にもよく呑み込めました。又實際その頃はもうあの大地震があつてから、彼是一年あまり經つた時分で、校長がこの問題を切り出した以前にも、内々同じやうな相談を持ちかけて私の口裏を引いて見るものが一度ならずあつたのでございます。所が校長の話を聞いて見ますと、意外な事にはその縁談の相手と云ふのが、唯今先生のいらつしやる、このN家の二番娘で、當時私が學校以外にも、時々出稽古の面倒を見てやつた尋常四年生の長男の姉だつたらうではございませんか。勿論私は一應辭退しました。第一教員の私と資産家のN家とでは格段に身分も違ひますし、家庭教師と云ふ關係

上、結婚までには何か曰くがあつたらうなどと、痛くない腹を探られるのも面白くないと思つたからでございます。同時に又私の進まなかつた理由の後には、去る者は日に疎しで、以前程悲しい記憶はなかつたまでも、私自身打ち殺した小夜の面影が、箒星の尾のやうにぼんやり纏はつてゐたのに相違ございません。

が、校長は十分私の心もちを汲んでくれた上で、私位の年齢の者が今後獨身生活を續けるのは困難だと云ふ事、しかも今度の縁談は先方から達つての所望だと云ふ事、校長自身が進んで媒酌の勞を執る以上、惡評などが立つ謂はれのないと云ふ事、その外日頃私の希望してゐる東京遊學の如きも、結婚した曉には大いに便宜があるだらうと云ふ事――さう事をいろいろ並べ立てて、根氣よく私を說きました。かう云はれて見ますと、私も無下には斷つてしまふ譯には參りません。そこへ相手の娘と申しますのは、評判の美人でございましたし、その上御恥しい次第ではございますが、N家の資産にも目がくれましたので、校長に勸められるのも度重なつて參りますと、何時か「熟考して見ませう」が「いづれ年でも變りましたら」などと、だんだん軟化致し始めました。さうしてその年の變つた明治二十六年の初夏には、愈秋になつたら式を擧げると云ふ運びさへついてしまつたのでございます

するとその話がきまつた頃から、妙に私は氣が鬱して、自分ながら不思議に思ふ程、何をするにも昔のやうな元氣がなくなつてしまひました。たとへば學校へ參りましても、教員室の机に倚り懸りながら、ぼんやり何かに思ひ耽つて、授業の開始を知らせる板木の音さへ、聞き落してしまふやうな事が度々あるのでございます。その癖何が氣になるのかと申しますと、それは私にもはつきりとは見極めをつける事が出來ません。唯、頭の中の歯車がどこかしつくり合はないやうな――しかもそのしつくり合はない向うには、私の自覺を超越した秘密が蟠つてゐるやうな、氣味の惡い心もちがするのでございます。

それがざつと二月ばかり、續いてからの事でございましたらう。丁度暑中休暇になつた當坐で、或夕方私が散歩旁、本願寺別院の裏手にある本屋の店先を覗いて見ますと、その頃評判の高かつた風俗畫報と申す雜誌が五六冊、夜窓鬼談や月耕漫畫などと一しよに、石版刷の表紙を並べて居りました。そこで店先に佇みながら、何氣なくその風俗畫報を一冊手にとつて見ますと、表紙に家が倒れたり火事が始つたりしてゐる畫があつて、そこへ「明治廿四年十一月三十日發行、十月廿八日震災記聞」と大きく刷つてあるのでございます。それを見た時、私は急に胸がはづみ出しました。私の耳もとでは誰かゞ嬉しさうに嘲笑ひながら、「それだ。それだ。」と囁くやうな心もちさへ致します。私はまだ火をともさない店先の薄明りで、慌しく表紙をはぐつて見ました。するとまつ先に一家の老若が、落ちて來た梁に打ちひしがれて慘死を遂げる畫が出て居ります。それから土地が二つに裂けて、足を過つた女小供を呑んでゐる畫が出て居ります。それから――一々數へ立てるまでもございませんが、その時その風俗畫報は、二年以前の大地震の光景を再私の眼の前へ展開してくれたのでございます。長良川鐵橋陷落の圖、尾張紡績會社破壞の圖、第三師團兵士屍體發掘の圖、愛知病院負傷者救護の圖――さう云ふ凄慘な畫は次から次と、あの呪はしい當時の記憶の中へ私を引きこんで參りました。私は眼がうるみました。體も震へ始めました。苦痛とも歡喜ともつかない感情は、用捨なく私の精神を攪亂させてしまひます。さうして最後の一枚の畫が私の眼の前に開かれた時――私は今でもその時の驚愕がありあり心に殘つて居ります。それは落ち來た梁に腰を打たれて、一人の女が無慘にも悶え苦しんでゐる畫でございました。その梁の横はつた向うには、黑煙が濛々と卷き上つて、朱を撥いた火の粉さへ亂れ飛んでゐるではございませんか。これが私の妻でなくて誰でせう。妻の最期でなくて何でせう。私は危く風俗畫報を手から落さうと致しました。危く聲を舉げて叫ばうと致しました。しかもその途端に一層私を悸えさせたのは、突然あたりが赤々と明くなつて火事を想はせるやうな煙の匂がぷ

んと鼻を打つた事でございます。私は強ひて心を押し鎭めながら、風俗畫報を下へ置いて、きよろきよろ店先を見廻しました。店先では丁度小僧が吊ランプへ火をとぼして、夕暗の流れてゐる往來へ、まだ煙の立つ燐寸殼を捨てゝゐる所だつたのでございます。

それ以來、私は、前よりも更に幽鬱な人間になつてしまひました。今まで私を脅したのは唯、何とも知れない不安な心もちだけでございましたが、その後は或疑惑が私の頭の中に蟠つて、日夜を問はず私を責め虐むのでございます。と申しますのは、あの大地震の時私が妻を殺したのは、果して已むを得なかつたのだらうか。――もう一層露骨に申しますと、私は妻を殺したのは、始から殺したい心があつて殺したのではなかつたらうか。大地震は唯私の爲に機會を與へたのではなかつたらうか、――かう云ふ疑惑でございました。私は勿論この疑惑の前に、何度思ひ切つて「否、否」と答へた事だかわかりません。が、本屋の店先で私の耳に「それだ。それだ。」と囁いた何物かは、その度に又嘲笑つて、「では何故お前は妻を殺した事を口外する事が出來なかつたのだ」と、問ひ詰るのでございます。私はその事實に思ひ當ると、必ぎくりと致しました。ああ、何故私は妻を殺したなら殺したと云ひ放てなかつたのでございませう。何故今日までひた隱しに、それ程の恐しい經驗を隱して居つたのでございませう。

しかもその際私の記憶へ鮮に生き返つて來たものは、當時の私が妻の小夜を內心憎んでゐたと云ふ、忌はしい事實でございます。これは恥を御話しなければ、ちと御會得が參らないかも存じませんが、妻は不幸にも肉體的に缺陷のある女でございました。(以下八十二行省略)………そこで私もその時までは、覺束ないながら私の道德感情が兎も角も勝利を博したものと信じて居つたのでございます。が、あの大地震のやうな凶變が起つて、一切の社會的束縛が地上から姿を隱した時、どうしてそれと共に私の道德感情も亀裂を生じなかつたと申せませう。どうして私の利己心も火の手を

揚げなかつたと申せませう。私は是に立ち至つて、やはり妻を殺したのは殺す爲に殺したのではなからうかと云ふ、疑惑を認めずには居られませんでした。私が愈幽鬱になつたのは、寧自然の數とでも申すべきものだつたのでございます。

しかしまだ私には、「あの場合妻を殺さなかつたにしても、妻は必火事の爲に燒け死んだのに相違ない。さうすれば何も妻を殺したのが、特に自分の罪惡だとは云はれない筈だ」と云ふ一條の血路がございました。所が或日、もう季節が眞夏から殘暑へ振り變つて、學校が始まつて居た頃でございますが、私ども敎員が一同敎員室の卓子を圍んで、番茶を飮みながら多愛もない雜談を交して居りますと、どう云ふ時の拍子だつたか、話題が又あの二年以前の大地震に落ちた事がございます。私はその時も獨り口を噤んだぎりで、同僚の話を聞くとなく聞き流して居りましたが、本願寺の別院の屋根が落ちた話、船町の堤防が崩れた話、俵町の往來の土が裂けた話――とそれからそれへ話がはづみましたが、やがて一人の敎員が申しますには中町とかの備後屋と云ふ酒屋の女房は、一旦梁の下敷になつて、身動も碌に出來なかつたのが、その內に火事が始まつて、梁も幸燒け折れたものだから、やつと命だけは拾つたと、かう云ふのでございます。私はそれを聞いた時に、俄に目の前が暗くなつて、その儘暫くは呼吸さへも止るやうな心地が致しました。又實際その間は、失心したも同樣な姿だつたのでございませう。漸く我に返つて見ますと、同僚は急に私の顏色が變つて、椅子ごと倒れさうになつたのに驚きながら、皆私のまはりへ集つて、水を飮ませるやら藥をくれるやら、大騷ぎを致して居りました。が、私はその同僚に禮を云ふ餘裕もない程、頭の中はあの恐ろしい疑惑の塊で一ぱいになつてゐたのでございます。私はやはり妻を殺す爲に殺したのではなかつたらうか。たとひ梁に壓されてゐても、萬一命が助かるのを恐れて、打ち殺したのではなかつたらうか。もしあの儘殺さないで置いたなら、今の備後屋の女房の話のやうに、私の妻もどんな機會で九死に一生を得たかも知れない。それを私は情無く、瓦の一擊で殺してしまつた――さう思つた

時の私の苦しさは、ひとへに先生の御推察を仰ぐ外はございません。私はその苦しみの中で、せめてはN家との縁談を斷つ　でも、幾分一身を潔くしようと決心したのでございます。

所が愈その運びをつけると云ふ段になりますと、折角の私の決心は未練にも又鈍り出しました。何しろ近々結婚式を擧げようと云ふ間際になつて、突然破談にしたいと申すのでございますから、あの大地震の時に私が妻を殺害した顛末は元より、これまでの私の苦しい心中も一切打ち明けなければなりますまい。それが小心な私には、いざと云ふ場合に立ち至ると、如何に自ら鞭撻しても、斷行する勇氣が出なかつたのでございます。私は何度となく腑甲斐ない私自身を責めました。が、徒に責めるばかりで、何一つ然るべき處置も取らない内に、殘暑は又朝寒に移り變つて、とうとう所謂華燭の典を擧げる日も、目前に迫つたではございませんか。

私はもうその頃には、何誰とも滅多に口を利かない程、沈み切つた人間になつて居りました。結婚を延期したらと注意した同僚も、一人や二人ではございません。醫者に見て貰つたらと云ふ忠告も、三度まで校長から受けました。が、當時の私にはさう云ふ親切な言葉の手前、外見だけでも健康を顧慮しようと云ふ氣力さへ旣になかつたのでございます。と同時に又その連中の心配を利用して、病氣を口實に結婚を延期するのも、今となつては意氣地のない姑息手段としか思はれませんでし。たしかも一方ではN家の主人などが、私の氣鬱の原因を獨身生活の影響だとでも感違ひをしたのでございませう、一日も早く結婚しろと頻に主張しますので、日こそ違ひますが二年前にあの大地震のあつた十月、愈私はN家の本邸で結婚式を擧げる事になりました。連日の心勞に憔悴し切つた私が、花婿らしい紋服を着用して、いかめしく金屛風を立てめぐらした廣間へ案内された時、どれ程私は今日の私を恥しく思つたでございませう。私はまるで人目を偸んで、大罪惡を働かうとしてゐる惡漢のやうな氣が致しました。いや、やうな氣ではございません。實際私は殺

人の罪惡をぬり隱して、N家の娘と資産とを一時盗まうと企ててゐる人非人なのでございます。私は顔が熱くなつて參りました。胸が苦しくなつて參りました。出來るならこの場で、私が妻を殺した一條を逐一白狀してしまひたい。——そんな氣がまるで嵐のやうに、烈しく私の頭の中を馳けめぐり始めました。するとその時、私の畏坐してゐる前の疊へ、夢のやうに白羽二重の足袋が現れました。續いて仄かな波の容に松と鶴とが霞んでゐる裾模樣が見えました。それから錦襴の帶、はこせこの銀鎖、白襟と順を追つて、鼈甲の櫛笄が重さうに光つてゐる高島田が眼にはいつた時、私は殆息がつまる程、絶體絶命な恐怖に壓倒されて、思はず兩手を疊へつくと、「私は人殺しです。極重惡の罪人です」と、必死な聲を擧げてしまひました。…………

中村玄道はかう語り終ると、暫くぢつと私の顏を見つめてゐたがやがて口もとに無理な微笑を浮べながら、

「その以後の事は申し上げるまでもございますまい。が、唯一つ御耳に入れて置きたいのは、當日限り私は狂人と云ふ名前を負はされて、憐むべき餘生を送らなければならなくなつた事でございます。果して私が狂人かどうか、そのやうな事は一切先生の御判斷に御任かせ致しませう。しかしたとひ狂人でございましても、私を狂人に致したものは、やはり我々人間の心の底に潜んでゐる怪物のせゐではいございますまいか。その怪物が居ります限り、今日私を狂人と嘲笑つてゐる連中でさへ、明日は又私と同樣な狂人にならないものでもございません。——とまあ私は考へて居るのでございますが、如何なものでございませう。」

ランプは相不變私とこの無氣味な客との間に、春寒い焔を動かしてゐた。私は楊柳觀音を後にした儘、相手の指の一本ないのさへ問ひ質して見る氣力もなく、默然と座つてゐるより外はなかつた。(八・六・二四)

ある醫師の良心

久米正雄

一

ある雨の降る五月の夜であつた。もう彼是十時は過ぎて、外來の患者の來さうもないので、H醫師は寢に就かうかと思つてゐた。すると突然玄關の戸が開いて、誰かゞ低く訪れる聲がした。H醫師はすぐにそれが、往診を乞ひに來た人か何かだと思つて、心持眉をひそめるやうにした。折角寢ようとしてゐた所を、此の雨の中へ引張り出されでもしては、いくら職業の繁昌を計らなくてはならぬとは云へ、鳥渡難有迷惑に感じたからである。けれどもまだ信用も確立しない若い醫師であつて見れば、かう云ふ所が大切だと思つて、吾から辛うじて額の皺を伸ばして、その客を待ち受ける事にした。

玄關では續いて二三度訪ふ聲がした。けれども取次に出る藥局生のEが、所在なさの居眠りでもしてゐるかして、それに應へる様子もないので、H醫師は自ら立上つて、玄關の方へ行つて見た。

見ると其處には、見知り越しのNと云ふ男が、しよんぼり濡れそぼちたやうな恰好で、うすら寒げに片隅に立つてゐた。

「あ、先生ですか。久濶でございます。」と、彼は幾らか慌て氣味に、陰氣な聲で挨拶した。

「やあ、君か。――まあ上り給へ。」

H醫師は思はずかう云つて、往診依賴の人でなかつた安易と共に、一種の氣落ちを感じて、まぢ〳〵とNの顏を見凝めた。その、悄氣たやうな、又うすら呆けたやうな顏付と、此頃伸しかけたと見えてまだ中途半端な、分け髮の不恰好さを見てゐると一時烏渡腹が立つやうな氣さへした。

「晩く上りまして濟みませんが、烏渡お願がありますので。……」

Nはかう云ひ乍らそゝくさと上つて來た。

「此方へ來給へ。」

どうせNの願と云ふからには、碌な事でなからうとH醫師は思つた。が、今更追ひ返すこともならないので、話を手早く切り上げる便宜上、每ものやうに奥へは通さずに、すぐ横手の診察室の方へ連れ込んだ。Nも其方が都合がいゝと思つたか、別に逡巡もせずに其方へ通つて行つた。

Nといふのは、H醫師と同鄕の若い男で、鄕里の中學を失敗ると、目的もなく上京して來て、烏渡の間だけれど此のH醫師の下で、藥局生の見習ひみたいなものをしてゐた事が在つた。が、其後自分の頭が餘りよくないので、かうした事に見込みがないのを自ら知つたためか、急にH醫師の許を去つて、淺草の方に洋服屋を出してゐる、叔父を賴つて小僧みたいなものに住み込んで了つた。それは今から二年ばかり前の事であつた。そして其後もちよい〳〵H醫師の所へ來て、商賣の模樣を話したり、ゆく〳〵裁縫師として立たうとする、自分の希望などを述べたりして、一二時間遊んで行く事があつた。――その男が夜の今時分に、何となく面はゆげな樣子で、願があると云つて來たのだから、いづれH

醫師に取つて、迷惑な事には相違あるまいが、又幾らか興味がなるまいでもなかつた。

「ほんとに early 上つて済みませんですが、實は内密なお願があるものですから。……」と、NはH醫師の指した倚子に腰を下し乍ら、再びから繰り返した。

「その話と云ふのは一體何だね。」

H醫師は平生から、Nの因循な態度に慊らなく思つてゐるので、わざと直入に促し乍ら、見据ゑるやうにしてNの話し出すのを待つた。

「實は、私の不心得から出た事で、甚だ話し悄いんですが、……」と、Nは憐みを乞ふ犬のやうな眼付で、しかもにやりとした狡猾な微笑を浮べ乍ら、奴隷根性を持つた世間師などが、自分の失策を詫びる時のやうに、頭を掻いて首をひいよこりと下げた。

「僕の前でそんな前置なんぞする必要はないよ。正直にどん〳〵云つて見給へ。」

H醫師はかう云ひ乍ら、ふと此の男の用向と云ふのは、何かこそ〳〵と隠れ遊びでもして悪い病氣にでも取りつかれ、秘密にその治療を賴みに來たのではあるまいかと思つた。そして烏渡口の端を歪めた。殆んど愚圖に近い目前の男が、そんな事をして秘密病にかゝつた時の周章さを、ちらと思ひ浮べて内心滑稽にさへ感じたのである。

併し、やうやくNが心を据ゑて、話し出したのを聞くと、話はもつと意外な、もつと複雑なものだつた。……………

Nの厄介になつてゐる叔父さんの洋服屋に、Nより三つばかり年下の、S子といふ從妹がゐた。S子とNとは昔幼染だつたが、Nが其家の厄介になつて以來、昔のやうに隔てなく口をきゝ合ふ仲になつてゐた。Nの云つた言葉によれば、S子はさう大して別嬪といふのではないが、眼鼻だちに何處となくあどけない所があつて、小さく締まつた身體つき

に、堪らなく可哀いゝ所があるさうである。この二人が何時の間にか、わりない關係を生じて了つた。而して此の二三月、S子はとう〳〵見えるものが見えない仕末になつて了つた。……それだけなら何でもない話だつた。併しS子には、半年許り前に婚約した男があつた。そして其男との婚禮は、もう一と月許りの間に迫つてゐた。兩親は少しもNとの關係を知らない。只S子の見えるものが見えないと云ふので、病氣だらうと思つて方々の醫者に見せてゐる。ある醫者はそれを單なる不順だと診斷した。が、自分らから見れば、どうしてもそれが姙娠に違ひない。で、一つその姙娠か否かをH醫師に確かめて貰つて、其上一生のお願ひには、姙娠だつたらその胎兒を、暗から暗へどうにかして貰ひ度いと云ふのである。……

一と通り話の荒筋を聞き終ると、H醫師は殆んど裁判官のやうな氣持になつて、詰るやうな質問を呈出した。彼は明にある不愉快と、興味とを同時に感じてゐたのである。

「では君は、今までの事をすつかり隱して、S子さんとやらをその婚約の男の方へ嫁づけるつもりなのだね。君だけいゝ、うまく抓み食ひをして、口を拭つてゐようと云ふのだね。」

「いえ、さう云ふ狡い了見ぢやないんですが、それが一番八方を無事に收める道だと思ふもんですから。」と彼はH醫師の思つたより峻嚴な態度に、尠なからずどぎまぎし乍らも、豫期してゐた非難だけに、割りに筋道だつた答辯をし出した。「第一に、此の事が叔父さんに知れでもしたら、大變な事になつて了ひます。叔父さんはあの通りな喧し屋の所へもつて來て、今度のその緣組と云ふのが、實は叔父さんの主人筋に當つてゐて、これが成就するとしないとは、大分家の經濟狀態にも關係しますし、若し此の緣が今になつて破れでもすると、先方に顏向けが出來ない仕末になりますから、どんなに私どもが怒られるか解りません。」

「と云つて無理に向うへ押つけるのは、猶更惡いだらうぢやないか。」
「それはさうでせうけれど、どう考へてみましても、さうするより外に仕方がないんです。」
「仕方がない事はあるまい。事情をすつかり打明けて、かうなつて了ひましたと云へば、いくら頑固な叔父さんだつて、許して呉れぬ筈はないだらう。そして向うの緣談を斷つて君とS子さんが夫婦になるのが、一番正當でもあり、一番無事な解決法ぢやないか。」
「さう考へるのが當り前ですけれど、それには今申す通り、色々混み入つた事情があつて、一概に無事に行きませんから、私がかうしてお願ひに上つたのです。——それに私たちが夫婦になるのは、第一S子さんが進まないのです。S子さんは寧ろ、向うに緣づきたいのです。そして實際その方が幸福なのは解り切つてるんです。其上私の方にしましても、此處で萬難を排してまで、S子さんと夫婦にならなければならない程、あの人を愛してる譯ぢやないんです。」
「ぢや君たち二人は、お互ひにさう深く愛し合つてゐた譯ぢやないのだね。」
「えゝ、まあさうなんです。S子さんなぞは向うの人に惚れてさへゐるんです。」Nは幾らか恨みがましく云つた。
「そんなら君たちは何だつて又そんな關係に陷つたのだね。」
「つい、何の氣もなくさうなつて了つたんです。或るごくつまらない機會で、——が、そんな耻は、私から玆で申上げたくありません。」
「それは僕も聞きたくない。」とH醫師は少し腹立だしげに云つて、「が、君たちはその緣談のある前にそんな事になつたのだらうね。まさか、それを知つてゐて、さうなつたのぢやあるまいね。」と改めて問ひ糺した。
Nはちらと赤い顏をして暫らくうつむいて默つてゐた。が、

「いゝえ、實は、私共はその話のあつた後に、さう云ふ事になつたんです。いや、その話があつたので、さうなつたのかも知れません。その時の私の心持にしてみますと、今迄誰のものともなく、たゞ自分にのみ親しくしてゐたS子さんが、外へ行くときまつてみると、何となく惜しいやうな氣になつたんでせう。又S子さんにしてみた所で、自分の處女時代の最後を飾るために、私との親しい間柄に、もう少し色をつけて見たかつたに相違ありません。そのお互ひの微細な心持が、とう〳〵こんな事になつて了つたんです。ですからどうぞ私たちの過失を深くお咎めなさらないで、茲で一つ私どもをお助けなすつて下さい。お願ひします。私の一生のお願ひです。」

かう云つてNは、眼に乞憐の涙を湛へ乍ら、幾度か幾度かお辭儀をした。

H醫師は鳥渡考へ込んで、すぐにはそれに對する返事をし得なかつた。彼はぢつと思ひ廻らした。Nがこれほどまで意を決して云ふからには、今、なまじひ口で云ひ聞せた所が、心を翻してやめる事はなからう。茲で自分が拒絶すれば、傳手を求めて、きつと何處か他の醫師へ持つて行くに違ひない。さうしてどこでも拒絶されたら、自分の手で決行もし兼ねない様子である。そんな事にでもなつては大變だ。それよりは一そ茲で彼を騙して、承知をしたやうに見せかけ、ひそかに親の方へ告げ知らせて、自分が仲に入つて、二人を夫婦にしてやらう。事態がこゝまで進んでゐる以上、彼等は夫婦になるのが當然の終局である。さうして圓滿に解決して了へば、自分は醫師としての良心にも背かないで濟む上、積極的に一つの善德を重ねることになるのだ。…………

かう咄嗟の間に考へたH醫師は、一つ大きく點頭いて、

「うむ。さう云ふ事情ならば、兎も角も僕が承知した。萬事は僕に委せて見給へ。きつといゝやうにしてあげるから。――では先づ明日にも、その女の人を連れて來給へ。眞個に妊娠だかどうか診てあげるから。」―

「さうですか。どうも難有う御座います。お蔭さまで二人は助かります。………」

Nはこんな事を繰り返し〴〵云ひ乍ら、又何度も何度も頭を下げた。

「いや。」H醫師はその狂喜に近いNの樣子を見乍ら、仕方がなしに曖昧な苦笑をしてゐた。彼は併し、Nに對しては裏切者の心苦しさを感じ乍らも、自分には何かしら偉大なる善事をなすやうな、心樂しさをぢつと抑へてゐるのだつた。

やがてNは安心して歸つて行つた。雨は又一と頻り音を増して降つた。H醫師はしばらくそれに聞き入つてゐた。

翌日、Nは約束通りS子を連れて來た。

彼等の來たのを、藥局生が奥へ知らせた時、H醫師は何となく胸の緊まるやうに覺えた。丁度誰も患者は來てゐなかつたので、すぐ二人を診察室に通さして置いて、自分も急いで白い診察衣を引懸けると、非常な興味を以てそこへ出て行つた。

S子は患者の座る椅子に腰をかけて、手帛を顏に當てゝ泣いてゐた。而して其傍にはNが、慰めるのに困つて了つたものか、たゞぼんやり突立つて、靜かにふるへるS子の首筋を眺めてゐた。

H醫師は入つて行つて、彼等と向ひ合つて腰を下ろした。

「この方が吾々の事を萬事お願した、H先生ですよ――これがS子です。どうぞ何分とも宜しく。」

Nがかう云つて彼女を引合せると、彼女はやうやく手帛を眼から離して、赤い瞼の間から、ちらと訴へるやうな眼ざしを走らせて、しとやかに長い一禮をした。

「委細はN君から聞きましたが、まあ、出來て了つた事は仕方がありません。萬事は私に委せて、御安心なすつていらつしやい。決して惡いやうにはしませんから。――」

H醫師はそんな事を云ひ乍ら、仔細にS子を觀察した。彼女は小作りな方であつた。而して成程身體つきは、お酌かなんぞのやうに、あどけない嬌羞を帶びてゐた。が、器量はH醫師の想像した以下に惡かつた。第一血色がよくなかつた。それも白く澄んでゐる方ではなくて、蒼く黑ずんでゐるやうな所があつた。造作は惡いと云ふのではないが、何處となく頰の感じがとげ〳〵してゐる上に、額が割りに狹いので、一目でヒステリイ性の顏立と見て取られた。其上泣いてゐたために、赤い瞼がいぢらしいのと對照に、眼の下の白粉が落ちて了つて、黑い暈を作つてゐるのも不快だつた。H醫師は何となく興ざめた。殆んどそれは落膽したと云つてもいゝ位だつた。もとよりNの言葉でも、さう美人だとは云つてなかつたが、事情が齎らす感じの上から、知らず〳〵彼女の顏に、もつとロマンテイツクな色彩を帶ばして考へてゐたのである。で、H醫師は彼女の顏を見終つた瞬間に、

「これであんな事をしでかした上、知らぬ顏をして他へ嫁入るとは不屆だ。」と云ふ風に獨りで考へさるを得なかつた。

「では兎に角、一と通り診察致しませう。」

H醫師はかう云つて、Nを向うの待合室へ追ひやつた。S子は助けを乞ふやうに、その後ろ姿を見てゐたが、やがて醫師に促されて、やうやく恥しげに衣類を寛ろげつゝ、寢臺の上に横たはつた。彼女はもう手巾は離してゐた。けれどもまだ嗚咽の名殘りで、肩を時々びくり〳〵としやくり上げた。

H醫師は胸部から初めて、すべて一通り叮嚀に診察した。どうも矢張り姙娠に違なかつた。他に何處も惡い所はなかつた。どこか一つでも惡い所があるか、心臟でも少し變調を來してゐる形跡があれば、それを何とか理由にして、彼等

の希望通りにしてやれぬ事もないと考へたが、これでは理由のつけやうもなかつた。彼は診察を終つて、暫らくぢつと彼女の顔を見てゐたが、やがて靜にかう云つた。

「矢つ張り姙娠らしいです。」

彼女はそれを聞くと、何と思つたか急に嗚咽を高めた。而して再び顔を蔽ふた。

H醫師は更に近く彼女の耳許に口を寄せて、

「貴女は姙娠と云ふことが、それほどまでに悲しいのですか。――腹の子は可愛ゆくはないんですか。貴方はこの腹の子のために、甘んじてNと一緒になる氣にはなれないのですか。私にはどうしても貴女がNと結婚するのが一番だと思はれるんですがねえ。」と事柔かに說き聞かせた。

けれどもS子は、それでは話が違ふと云ふやうに、ちらと手帛の中から醫師を見上げて、更に嗚咽の聲を高めるのみだつた。H醫師は其樣を見ても、別に動かされもせずに猶も追究した。

「どうしてもN君とは一緒になれないんですか。なりたくないんですか。」

すると彼女はやうやく低く籠つた聲で、「これが兩親に解りでもすると、私がどんな目に會ふか解りません。」と答へにならぬ答をした。そして益々激しく嗚咽して、それから先は何を云つても右の言葉を繰り返すに過ぎなかつた。

H醫師は殆んど手古摺つて了つた。そして內心腹が立つて來た。今となつてはもう、感情の上から云つても、彼等の不正な願望なぞは、到底遂げさせられるものではなかつた。

嗚咽の高まるのを聞いて、Nが心配げに戶を開けた。そして診察の濟んだのを見ると、中へ入つて醫師に近づいた。

「どうでした。」

「矢つ張りさうらしい。」

「では、いつ手術をして下さるんですか。」とNはH醫師を見、それからS子を意味を籠めて見やつた。

「まあもう二三日待ち給へ。」H醫師の聲は靜かだつた。

「でも、――」

「まあ僕に委せて置き給へ。」

「さう　すか。――私たちはほんとに貴方一人が頼みなんですから。……………」

H醫師は手を振つてNの言葉を止めた。

かうしてとう〳〵其日は、Nが泣き沈むS子をすかして、又家へ連れて歸ることになつたが、彼等が歸つて了ふや否や、H醫師は直ちにS子の父に手紙を書いて、用談があるから來て呉れるように云つてやつた。

其翌日、S子の父は早速やつて來た。二人は挨拶が濟むと、H醫師は早速用談を切り出した。彼は先づNが彼の家へ飛び込んで來た顚末から、彼等二人の間に起つた事情を知つてゐる限り打明け、而して其最後に、かうなつて了つた以上は、餘りに深く二人を咎めないで、夫婦にしてやつて呉れるやうに言葉を盡して述べ立てた。

それを聞いてゐたS子の父は、H醫師の思つたよりも驚かなかつた。怒氣をも現はさなかつた。只、「はあ、はあ、」と聞いてゐて、時々大きく點頭くのみだつた。而して彼の最後の忠告に對しては、何の責任ある返事もしなかつた。凡てを聞き終ると彼は、

「難有う御座います。ほんとに御迷惑をかけまして、申譯ございません。」と云つただけで、多くを云はずに歸つて行

つた。彼のH醫師の心に殘して行つた影は、ほんとによく秘術を洩らして與れたと云ふ感謝よりは、餘計な事を知らして與れたと云ふやうな、一種の不服めいた印象だつた。彼が言葉少なで歸つたのも、H醫師には氣味が惡かつた。歸つた後で何をするか解らないと思はれた。何だかH醫師の忠告などは、到底用ゐさうもなく考へられて來た。H醫師は彼等に對して、何だか却つて惡い事をしたやうに思はぬでもなかつた。が、すべては自分の良心の命令通りに、又彼らの爲を思つてやつたのだ、だから其結果がどうあらうと、それは彼の知つた事ではない、と心で思ひ込まうと努めた。彼は其夕、晩酌の量を少し多くした。而して彼らの健康と無事とを祈つて飮んだ。

其夜の九時頃の事であつた。ふと又玄關の開く音がした。藥局生が出て行つて、二三言何か應待してゐたが、やがて奥の間へ入つて來て、

「Nさんがおいでになつて、烏度玄關でお目にかゝりたいと云つて居ります。」と通じた時、H醫師は何だかどきりとするものを、胸の中で感ぜざるを得なかつた。彼は出て會ふのに氣がひけた。併し會はない譯には猶更行かなかつた。出てみると其處には、肩に小形な柳行李を背負ひ、手に青い風呂敷包をさげた、異形な扮裝のNが、默つて暗い顏をして立つてゐた。

「どうしたんだ。」H醫師は思はず聲高に訊ねて、Nの顏を透し見るやうにした。その顏は怒つてゐるのだか、泣いてゐるのだか解らなかつた。たゞある特殊な感情を湛へてゐる事だけが暗い玄關の電燈の及ぼす暈で分つた。

「最後のお暇乞ひに上りました。――S子との事件が、すつかり叔父さんに解つて了つて、今夜家を出されたんです。」とNは直ぐに答へ初めた。其聲は興奮を抑へてゐるらしく、顫へてゐ乍らに底力を帶びてゐた。

H醫師は烏渡の間目を睜つて驚いたが、幾らか豫期してゐないでもなかつたので、「矢つ張りさうだつたか」と呟くや

うに云つて、Nを眞面に見る勇氣もなく頭を伏せた。

Nは續けた。「思ひの外に怒られはしませんでしたが、かう云はれて追ひ出されました。今迄出來た事は仕方がないし、又S子と一緒にしてやらないでもないが、何分お前は一人だちの出來ない男だから、これから早速出て行つて、一人立ちが出來るやうになつたら戻つて來い。S子はそれまで預つて置くからつて。――私は今夜だけも泊めて呉れと云ひましたが、どうしてもすぐ出て行けつてきゝませんから、早速荷物を纏めて、かうして出て來て了ひました。」

「S子さんはどうんてゐるね。」H醫師は彼の言葉が終ると、かう訊ねずに居られなかつた。

「S子さんですか。――あの人は私が出て來る時、二階に泣いてゐるやうでした。それつきり會はずに來たから解りません。」

「で、君は是からどうする積りだね。」

「仕方がないから知人を尋ねて、大阪へでも行かうと思つてゐます。」

「それでは今夜は?――外に泊る所がないんなら、此處へ泊つて行つたらどうだね。」

「いゝえ、他所へ行つて泊ります。私はたゞお宅へ、お禮やらお暇乞ひやらを一言云ひに、寄つただけなんですから。」

H醫師は彼の此の言葉を、正面から受けるに堪へなかつた。

「左樣なら!」Nは突然さう云ふと、くるりと身を飜して出て行つた。

H醫師は、暗の中に消えて行つた、Nの滑稽な又皮肉な後ろ姿を、ぢつといつ迄も見凝めてゐた。

しかも一旦悪い方へ傾いた事件は、その翌日更に大きな破局を齎らした。

H醫師はその未明に、けたゝましい電話の鈴で起された。鳥渡H自身に出て呉れと云ふ取次に、彼は慌しく電話口に立つたが、彼はWといふ名を聞くや否や、ぞつと腋の下に汗の出るやうな思ひがした。氣を落ちつけて、受話器の中の疳走つた聲を聞くと、今朝になつてS子が、家出をしたのを發見したが、そつちへ行つてゐないか、どこか心當りはないかと云ふのである。H醫師は昨夜、Nだけが暇乞に來た事を話し、S子の事は少しも知らぬと答へたが、その知らぬ事が何となく申譯がないやうな氣がした。

H醫師は電話を切つて戻つて來たが、事がどうなり行くかと胸を痛めた。二人が出奔したとは思はれなかつた。きつとS子一人で、どこかを彷徨つてゐるのだらうと思つた。ひよつとするともう死んだかも知れない。いづれは小さい女氣から、父母に合せる顔がないと云ふので、死を決して出たに違ひないが、どうかそれが申譯の家出で、死に後れて戻つて來て呉れゝばいゝ。どうか無事であつて呉れ。無事で再び戻つて來て呉れゝば、改めて彼等の願を容れてやつてもいゝ。――H醫師はそんな風にまで考へた。

其午前を彼は焦燥の中に费した。彼自ら出掛けて行つて、彼女の行方を探したい氣がしたが、まさかにそれもなし兼ねた。されぱと云つて無關心でゐられない氣もした。彼はいら〳〵し乍ら、毎もの通り家で外來患者の診察に從事しなければならなかつた。

午後になつて又Wから電話がかゝつて來た。而して極く冷淡な事務的な調子で、S子の水死が報ぜられた。死體が千住附近で發見されたと云ふのである。彼はそれを聞いた時、胸がどきんとするのを覺えた、が、萬事は休したと思ふと、その後は思ひの外冷靜だつた。たゞ彼はその電話の調子に、萬事は彼の所爲だ、お蔭で娘は死んで了つた、いろいろ御世話になつて濟まなかつたと云ふやうな、一種の皮肉な意味があるやうに感じた。

ふと彼の眼の中に、S子の恨を含んだ死顔が浮んだ。それは昨日そこの診察床の上に、おづ〳〵と横たはつた彼女から連想された。薄暗い水の面に、くつきり浮び出てゐる小さな鼻や、尖つたやうな感じを與へる蒼ざめた頬や、涙で赤らんだ瞼を半ば開いて、ぢつと彼の方へ向けてゐる白眼――その死顔の凡てが、彼に恨を云ひ掛けてゐた。

H醫師はその幻影を打消すやうに、二三度強く頭を振つた。それからぢつと椅子に沈み込んでゐた。

而してとう〳〵彼の考へは、かう云ふ所に落ちて行つた。――

「かう云ふ悲劇になるのだつたら、あの時彼等の願ひ通りに、所置してやるのが本當ではなかつたか。自分のやくざな常習的な良心が、却つてより多くの人々に不幸を與へる原因となりはしなかつたか。」

二

それから半年とは經たぬ、秋の或る夜の事だつた。まだ八時少し過ぎだと云ふのに、診察室の中は夜更けのやうに靜かで、醫料器械を入れた箱の後ろに、蟋蟀らしい蟲が鳴いてゐた。H醫師は讀みさしの醫海時報を傍に置いて、此場の空氣を亂さぬ程度の欠伸を一つしたが、其儘呆やりと床を眺めて、聞き入るともなく、四邊の物音に聞入つてゐた。其時一つのゆつくりした、引擦るやうな下駄の音が、彼の家の方へ近づいて來るのを知つた。それはH醫師に取つて、馴染のある足音だつた。それにしても今時分その足音の主が、やつて來ると云ふからには、もう大分惡かつた其家の病人が、愈々重態にでも陷つたのだらう。…………

果して玄關の戸が開いた。早速出て應待してゐた藥局生が、軈て診察室の戸口に現れて、

「Tさんのお爺さんが、鳥渡お目にかゝり度いと申して居ります。」と告げた。

して見ると毎ものやうに息子が苦しんでゐるから、すぐ注射に來て呉れと云ふのではないらしい。で、早速診察室に

通すやうに命じた。

T老人は入つて來た。彼は白つぽい袷を素で着てゐた。年はもう七十に近いので、電燈に映えた頭髮は、七分通り白を交へて光つて見えた。而して其日は殊に、物悲しげな鹿爪らしい顔をしてゐた。H醫師は椅子を薦め乍ら、

「どうかなさいましたか、病人が？」と早速尋ねて見た。

老人は椅子の隅にちよこなんと腰を下して、徐ろに語り出した。

「はあ、病人の事で一つお願ひに上つたんですが、あれももうどうしても助からないのでございませうな。

「えゝ、是迄幾度も申上げたやうに、お氣の毒ですが駄目ですな。恐らくはもう十日位のものとお諦め下さい。——何しろ私が初めて拜見した時から、もう手遲れになつてゐたのですからな。」

とH醫師は靜かながら明に答へた。而してH醫師が初めて、その患者を診た頃の事を思ひ出した。

——それはもう半年ばかり前、六月の梅雨時分の事だつた。其時初めて迎へに來たのは、矢張り今のT老人だつた。息子が病氣だから、直ぐに來て診て呉れと云ふので、丁度手隙でもあつたし、早速往診を承知すると直ちにその爺さんに從いて、彼の家へ行つたのだつた。

道々聞いた所に依ると、此患者と云ふのは、老夫婦間の一人息子で、今年廿七になるH舘の製本職工であるが、去年の暮頃から腹膜炎で床につき、今までは親類の補助に依つて、神田のある醫師にかゝつてゐたけれども、近頃になつて到底患者が助かる見込のないのを知ると、無駄だと思つたものか、急に金を出して呉れなくなつて了つた。それで今迄その親類の緣でかゝつてゐた神田の醫師にも、かゝる事が出來なくなつて了つた。が、病人は其儘放つて置く譯には行かない。そこで今度は自分たちの僅かな金で、新らしく近所の醫師にかゝらねばならぬ事になつた。かうしてH醫師が

初めて、其選に上る事になつたのであつた。

行つて見ると家は、M坂の中途から右へ入る小さな路次の、二軒目にある矮屋だつた。附近は一帶に貧しい家並ではあるが、其家も僅か二間に足らぬ間口を仕切つて、煙草と駄菓子とを商つてゐた。見れば三尺の硝子戸棚の中に、淋しく並べた數種の煙草と、三つ四つの硝子筒に入れた飴菓子や煎餅と云つた類が、殆んど店の全部であつた。

H醫師は老人の導くまゝに、その店口から入ると、貧家に特有な濕つた臭氣と共に、病褥の臭ひがすぐ感ぜられて、薄暗い六疊一間の隅に、患者の苦しげに喘いでゐるさまが、直ちに彼の眼を打つた。

一人の、これも六十を越えたと思はれる老婆が、六疊にすぐ續いてゐるらしい臺所の方から出て來て、H醫師を直ちにその六疊へ迎へ上げた。見渡した所家族と云ふものは、此の老夫婦と病人の、三人だけだと云ふ事が直ちに解つた。

H醫師は充分叮嚀に挨拶した後、徐ろに病床の方に近よつて、いつものやうに診察を初めた。患者は二十六七の、働き盛りの若者だつた。もう四肢は見る影もなく衰へてゐるが、元氣はなか〳〵旺んであつた。が、病狀は紛ふ方もなく、結核性腹膜炎に違ひなかつた。腹部には見るからに浮腫が來てゐて、青白い太鼓の胴を見るやうに、氣味惡く膨れ上つてゐた。H醫師は一診して、直ちにそれが不治なのを知つたのだつた。

それは眞實に可哀さうな一家だつた。老夫婦が守る店の上り高は、如何に高く見積つても知れたものであつた。だから家の唯一の働き手である、息子にかうして寢つかれては、其日の暮らしにも差支へるのは知れ切つてゐた。しかも殆んどそれに治療の見込がないとは、天は又何といふ悲慘な境遇を與へたものであらう。若いH醫師は惻然として同情した。而して治癒の見込はないと知りつゝ、それ以來手を盡して、熱心にその療養にかゝつたのだつた。けれども病勢は益々進んで、昨今では既に、萬一の奇蹟的回復さへ望み得ぬ程になつて了つた。

加ふるに一家の乏しい貯金は、忽ちにして盡きて了つて、此の二ケ月程前からは、藥餌の料も拂ひ得なかつた。それ以來H醫師は、殆んど施療同然にして、死ぬべき命を出來るだけ伸ばすことに努めてゐるのだつた。――而して今は、その病人に就て、その父なる老爺から願ひがあると云ふのである。H醫師は其願ひと云ふのが、何であるか豫想がつかなかつた。

T老人は靜に云ひ初めた。

「それで實はお願するのでございますが、どうせ死ぬもので御座いましたら、一つあなた樣のお力で、早く樂に死なせてやつて下さる譯には參りませんでせうか。」

「えつ、死なせるのですつて?」――H醫師は事の意外に、思はずから反問せざるを得なかつた。

「親の口からそんな事を申すのは、ほんとに非道い奴だとお考へでせうが、それが當人に取りましても、又私たちに取りましても、一番幸福だと思はれるものですから。――實は私共にしましても、あゝして苦しがるのを傍で見て居るのが辛いばかりでなく、もう老人の手では、看護に餘る事があるのでございます。その上又あの家の大屋の方から、立退きの催促が、矢のやうに參るのでございます。と申しますのは、今までの持主があこそら邊の地所家屋を、ある成金に賣り渡しましたため、その成金が今までの長屋を潰して、新らしく立派な家を建てるのださうで、此の月末までには、是が非でも私どもを立退かせる約束だつたらしうございます。それを私どもだけが、一つは他に家が無かつたせいでもありますが、あゝ云ふ病人を抱へて居るために、今まで半月も伸ばしてゐたものですから、此頃は大屋の方から、毎日のやうに談判に來て、いくら重病人がゐると云つても、越せない筈はないと云つて聞かないのです。そして此頃では當てつけがましく近所の家の取拂ひをやり出しました。その音が病人の枕に響きますんで、私どもははら／＼してゐる仕末

なんでございます。で、こんな辛い思ひをし乍ら、諸方へ迷惑を掛けて居りますよりは、一そ一と思ひに眠らせて頂いた方が、どんなにいゝか知れないと、思はない譯には行かないんでございます。」かう云つてT老人は、しばらく言葉を途斷らした。彼の眼は泣いてゐるのではないが、妙に光りを帶びてゐた。

「それはさうかも知れませんが、」とH醫師は思ひ沈み乍ら云つた。「併し、醫術の上から云へば、死ぬ最後の瞬間まで、生命を伸さう〳〵と努めこそすれ、たとひ死ぬと解つてゐても、縮める譯には行きませんからねえ。」

「けれども當人がそれを望み、親たちがそれを望んで、しかもそれが何方にも幸福でしたなら、惡い事ではないではございませんか。それがほんとのお醫者さまの御慈悲でございます。どうかお願ひでございます。あの子を樂にあの世へ遣つて下さいまし。」

「それはどうも困りましたねえ。さう云ふ事は出來ない規則になつてゐるのですから。」

「そこをどうにかして頂けないでせうか。」

「どうも出來ません。」

H醫師は暫らく考へてゐたが、やがて斷然とさう答へた。而して其答は恰も叱るやうな鋭さを持つてゐたので、老人はもう二の句が次げなくなつて了つた。

「では仕方がございません。今迄通り死期を待つ事にしませう。」T老人はかう云つて、叮嚀に禮をして歸つて行つた。

H醫師はそれを玄關まで見送つて、

「兎に角、明日の晩伺つてみますからそんな考へを起さずにお大事に看護してお上げなさい。」と云つて別れを告げた。

彼はやがて診察室へ歸つて來たが、それから後永い間、ぢつと頰杖をついて考へてゐた。

明くる日の晩、H醫師は約束通り、M坂の病家を訪れる事にした。彼の鞄の中には、普通の鎭痛の注射藥と共に、一筒のモルヒネが、前から常に入れられてあつた。彼は家を出る前に、何故かその有無を確めて、それを取除けて行かうとしたが、長く躊躇をした後に、思ひ切つて又鞄の中へ入れて了つた。

毎もの通り、狹い店口から入ると、五燭の薄暗い電燈の下に、病人はうつすらと眼を開けてゐた。昨夜の事があつた後で、思ひ做しか老夫婦も、默り勝ちにH醫師を迎へた。

H醫師は早速病床に擦り寄つた。

「どうです、御容態は。少しは元氣が出ましたか。」彼は先づさりげなく、快活さうにかう云ひかけた。

病人は醫師の顏を見て、淋しい微笑を見せた。そしてかすれ沈んだ聲で、

「いゝえ、もう駄目です。私も覺悟しました。たゞ、どうせ助からないのなら、樂に死にたいと思ふばかりです。」と切れ〳〵に云つた。

H醫師は彼がもう親たちから、すつかり死期の近づいたのを打明けられて、却つて安らかな諦認に達してゐるのを察した。而してその立派な態度に對して、そんな一時の氣休めを云ふのは、内心耻しいとは感じ乍らも、かう云はざるを得なかつた。

「そんな事を考へるのはまだ早いですよ。そんなに性急になつちや困りますね。」

併し病人は、何でも知つてゐると云ふ風に、悲しげに口を歪めて微笑した。そして途切れ〳〵に喘ぎ乍ら、

「早いことがあるものですか。私はもうその用意はちやんとして了つたのです。ですからもういつでも死ねます。いつ死んでも心殘りはないんです。——あゝさう〳〵、いや、まだ一つ云ひ殘した事がありました。それはねえ先生、あなたには永らく非常な御世話になりましたので、何か志だけでも御禮の印をと思ひましたが、碌なものが私の所にあらう筈はございません。たゞ紅葉全集の中の金色夜叉の卷が、いつか一部製本所で餘つたのを、ばらの儘で持つて居ります。私の病氣が癒りましたなら、自分で立派に製本して、先生に差上げる積りでは居りましたが、もうかうなつては駄目ですから、昨日友人に頼んで、製本して貰ふ事に致しました。甚だつまらない物ですが、それをどうぞ私の片身だと思つて、先生の本箱へ入れて置いて下さい。甚だつまらない物ですが、……」とお終ひには涙をためて云つた。

「いや、難有うございます。喜んで頂戴致しませう。」

と、H醫師は感動せざるを得なかつた。而して改めて病人の身體を、憫れむやうにぢつと見た。病人は凡てを云つて了ふと、疲れて眼を閉ぢて了つて、たゞ空しく喘いでばかりゐた。浮腫は腹部をもう限度まで膨らしたと見えて、もう胸の方にまで押し寄せて來てゐた。肋膜の下部の方は、すつかり侵されて了つて、吐く息さへ苦しげに切迫してゐる。——實際もう生き伸びさせても、それは苦痛を伸べるものだつた。

H醫師は眉の間に皺を寄せて、まじ〳〵と病體を見やり乍ら、鳥渡の間深く考へてゐたが、やがてはつきりと重い聲で、

「では兎も角、大へんお苦しさうですから、鎭靜劑の注射をする事に致しませう。」と急に老夫婦の方を顧みて、「いいでせうな。」と意味深く念を押した。

老夫婦の同意を得ると、彼はすぐ注射に取かゝつた。鞄の中からは、兎に角一筒の注射藥が出された。彼はそれの或

る量を、――それは彼が衰弱し切つてゐるので、普通の量より少なくてよかつた。――注射針の中に吸ひ込ませて、電燈の光に透して見た。それから病人の顏を見直して、さて老人が差し寄せる電燈の下に、ぶつりと病人の右腕へつき立てた。そして心では眼を瞑つて、藥液を靜かに腕内へ送り込んだ。手は少しも顫へなかつた。萬事は滞りなく濟んだ。凡てが終つて了つた時、

「先生。今日のは今迄と同じ注射藥でございますか。」突然病人がかう訊ねた。

併しH醫師は驚かなかつた。そして靜な聲ですぐ答へた。

「えゝさうです。たゞ少し量を多くしましたから、いつもより効目が多いかも知れません。」

「さうですか。難有うございます。」

と病人は、凡てを知つてゐるかの如く頭を點(うな)かせて、ぢつとH醫師を見凝めてゐたが、その眼を更に親たちに向けて、それから又靜に閉ぢて了つた。苦惱は少しく鎭まつたが、彼はうつら〳〵眠に落つるやうに見えた。

H醫師は五六分の間、その樣子を注意深く見守つてゐたが、何となく見てゐるに堪えぬやうな氣がして、靜に鞄を片付けると、「ではお大事になさい、」と挨拶して、そつと戸外へ出た。

すると何と思つたか、老人が後からついて出て來た。而して戸口を出て了ふと小聲で、

「先生、如何でございませう。」と云つた。

「もう駄目ですね。恐らくは今夜きりでせう。」

かう云つてH醫師は、老人を其處に殘したまゝ、足早に其處を立去つた。

外(そと)はしめやかな秋の夜であつた。M坂は人通りもさうなかつた。而して行き交ふ人の凡てが、わざと靜な歩みを運ん

でゐるやうに思はれた。霽れた冷やかな空氣が、硝子のやうに天地に滿ちてゐた。蒼くしんとした夜闇の中に、濡れたやうな鮮さで輝く街の灯にも、騷がしい明るさはなかつた。H醫師は自分の足音を聞くやうにして歩いた。ふと坂の中途で、何氣なく空を見上げると、天の川が白くはつきりと橫はつてゐた。そして空一面に無數の縺星が、瞬き合ひ乍ら平衡を保つて、揺るゝともなく撒き散らされてあつた。

H醫師は深い呼吸を一つした。そして此上もなく澄み切つた、深く湛へた水のやうな氣持になつた。彼は空から眼を離して、靜な滿ち足りた思ひで歩みを移した。…………

翌朝H醫師は、Tの家から病人が死んだと云ふ報知を受取つた。老夫婦が殆ど知らぬ夜の間に、すーつと息を引取つたのだらうである。H醫師は早速行つてみたが、その頰の落ちた死顏には、非常に安らかな影があるやうに思つた。

約束の金色夜叉は、それから二十日ばかり經つて、T老人が持つて來て吳れた。それは今でもH醫師の書架の隅にある。彼は時々靜閑な夜などに、思ひ出しては取り出して讀むのである。而して少しも醫師としての良心に疚しい所なく、死んだTの魂に對する事が出來るのである。(八年六月)

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同　神田區裏神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　京橋區西紺屋町	良明堂
同　日本橋區本石町	至誠堂
同　本郷區本富士町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同　四條西洞院	前田大盛社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

○定價　金四拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金貳圓四拾錢	金貳圓八拾八錢
十二冊	金四圓八拾錢	金五圓七拾六錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、卽ち一ヶ年通計十七冊分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金六圓八拾錢外國は金八圓拾六錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし。

廣告取次所

博報堂、弘報堂、正路喜社、一星社
金蘭社、萬年社、電通社、信賴社
三誠社、東亞通信社

送金注意

一誌代郵稅　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金　**口座は東京三十四番なり**
一郵劵代用　は謝絕す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるゝを拒まず
一代金引替　小包の取扱は一切謝絕す
一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、**坐ながらにして誌代の拂込**をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌を發送せず

一金一圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
一金拾圓迄　金八錢

一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正八年六月三十日印刷納本
大正八年七月一日發行
（禁轉載）

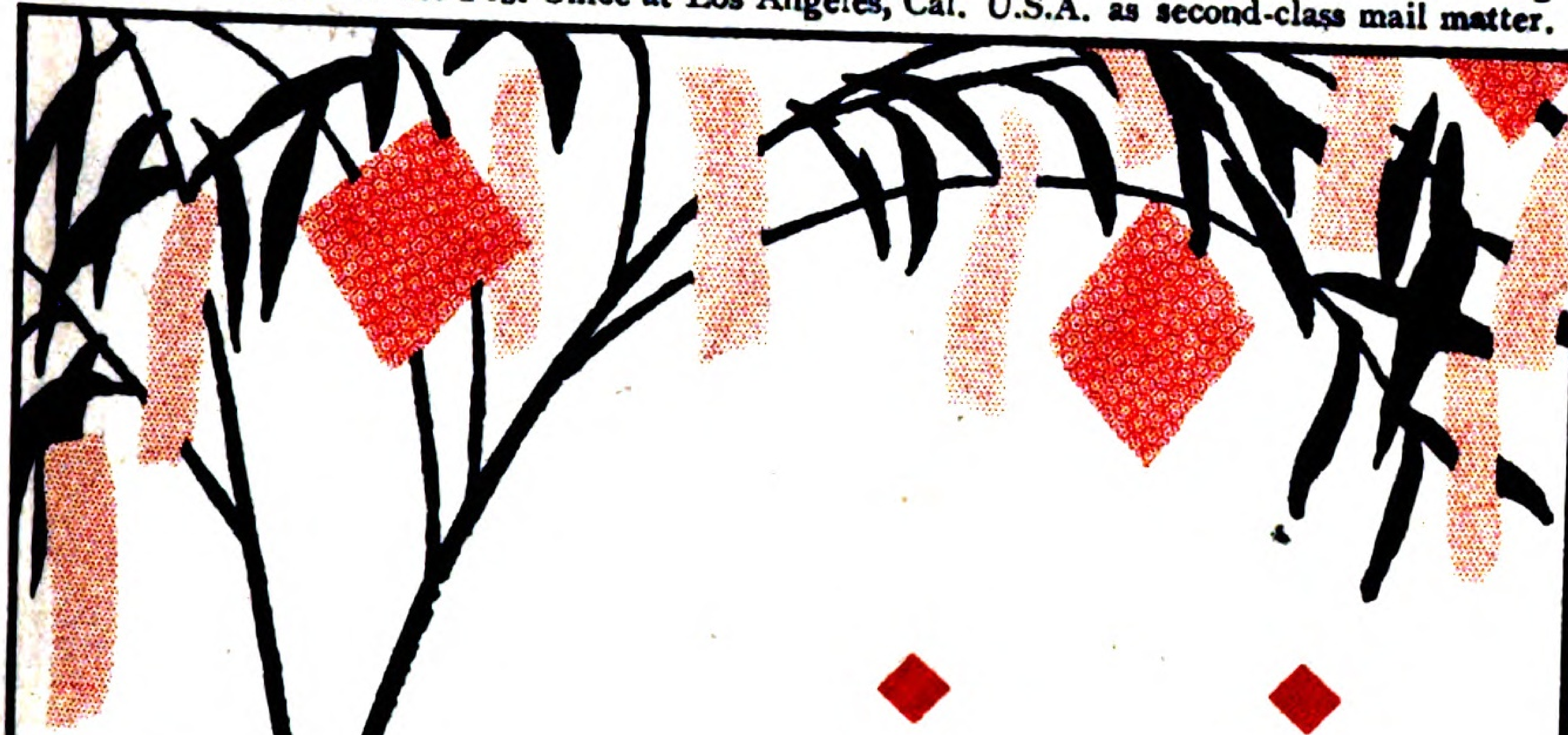
發行兼編輯人　菅谷憲治
印刷人　高木酉三

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地　中央公論社
電話（長小石川一四四〇／小石川三四二〇）
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す